

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第396集

沢田^{さわだ}2遺跡発掘調査報告書

一般県道釜石遠野線沢田地区緊急整備事業関連遺跡発掘調査

岩手県釜石地方振興局土木部

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

沢田^{さわだ} 2 遺跡発掘調査報告書

一般県道釜石遠野線沢田地区緊急整備事業関連発掘調査

序

豊かな自然に恵まれた岩手県には、縄文時代をはじめとする数多くの遺跡や重要な文化財が残されており、これら先人たちの創造してきた文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは県民に課せられた責務であります。

一方では、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な施策であります。開発によって遺跡が消滅することはまことに惜しいことではありますが、その反面、それまで闇に包まれていた先人の営みに光明が当たるのも事実であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、(財)岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘を行い、記録保存する処置をとってきました。

本書は、釜石市栗林町沢田地区の「主要地方道釜石遠野線緊急地方整備事業」の施行に伴い、平成11年度と13年度にかけて発掘調査を実施した沢田2遺跡の調査結果をまとめたものであります。

遺跡は、縄文時代の集落跡で、縄文時代前期前葉から中葉にかけての竪穴住居跡や土坑が検出されております。発掘調査例の少ない鶴住居川流域に広がる当遺跡は、釜石市内はもちろん、岩手県沿岸地域における縄文時代の人々の生活を解明する上で、貴重な資料となりうると確信しております。

本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに、埋蔵文化財に対する関心と理解を一層深めることに役立つことを願う次第であります。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にご協力と援助を賜りました釜石市教育委員会をはじめとする関係機関、屋外・室内作業員など関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成14年2月

財団法人岩手県文化振興事業団
理事長 村上 勝 治

例 言

1. 本書は、主要地方道釜石遠野線沢田地区緊急地方整備事業にかかる釜石市栗林町第11地割1番地1ほか所在する沢田2遺跡の発掘調査報告書である。本遺跡の岩手県道路台帳番号はMG31-2270で、略号はSD2-99・01となっている。
2. 発掘調査は平成11年8月16日から10月30日、平成13年8月6日から11月14日に実施され、室内整理は平成12年11月1日から3月31日、平成13年11月1日から3月31日まで行われた。調査面積は平成11年度が1,442㎡、平成13年度が2,112㎡である。
3. 今回の発掘調査による成果の一部は、平成11年度及び平成13年度の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第340集及び397集の「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」で公表済みまたは公表するが、本書を正式な報告書とする。
4. 発掘調査は平成11年度は鳥居達人・中田通、平成13年度は鳥居達人・亀大二郎が担当した。
5. 室内整理は鳥居達人・亀大二郎が担当した。
6. 執筆編集で、I 調査に至る経過は釜石地方振興局土木部、II 近世の遺構と遺物は亀大二郎が執筆し、ほかは鳥居が担当している。
7. 航空写真・基準点測量及び実測・鑑定業務は次の方々へ依頼した。

航空写真	東邦航空株式会社
基準点測量	釜石測量設計株式会社
石質鑑定	花崗岩研究所
石器実測	株式会社アルカ(代表 角張淳)
鉄製品保存処理	岩手県立博物館
8. 本報告書挿入中に使用した土色表記は、農林省農林水産技術会議事務局作成、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色貼」9版1989年によっている。
9. 本報告書の作成にあたり、次の方々に協力・ご指導いただいた。

岩手県教育委員会生涯学習文化課 小田野哲憲
宮城県教育長文化財保護課 相原淳
釜石市教育委員会社会教育課 中村公一 手塚新太 轟一欽
釜石市立郷土資料館 平田祐彌
遠野市教育委員会 小向祐明 長谷川浩
10. 発掘調査による出土遺物及び記録資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

[本文目次]

序

例言

目次

I	調査に至る経過	5
II	遺跡の立地と環境	5
III	調査と整理の方法	12
IV	検出された遺構と遺物	15
1	縄文時代の遺構と遺物	15
(1)	竪穴住居跡	15
(2)	土坑	45
(3)	遺物包含層	67
(4)	出土縄文土器	68
(5)	出土石器、石製品、土製品	76
(6)	小結	140
①	竪穴住居跡の変遷	140
②	まとめ	141
2	近代の遺構と遺物	143
(1)	鍛冶場跡	143
(2)	土坑	143
(3)	出土遺物	143
(4)	小結	144
3	時代不明の遺構	144
V	まとめと考察	149
1	遺物のまとめ	149
2	終わりに	150

[表目次]

表1	近隣の遺跡分布	10
表2	遺構名称変更表	14
表3	縄文時代の遺構一覧表	65
表3	遺物観察表 縄文土器	123
表4	遺物観察表 石器・石製品・土製品	135
表5	遺物観察表 近世の遺物 その他	148

[図 版 目 次]

第1図	岩手県全圖	1	第35図	遺構内出土土器 1	77
第2図	遺跡の位置図	2	第36図	遺構内出土土器 2	78
第3図	地形区分図と地質図	3	第37図	遺構内出土土器 3	79
第4図	周辺の地形と調査区	4	第38図	遺構内出土土器 4	80
第5図	周辺の遺跡図①②	8	第39図	遺構内出土土器 5	81
第6図	基本順序柱状図	11	第40図	遺構内出土土器 6	82
第7図	グリッド設定図	11	第41図	遺構内出土土器 7	83
第8図	遺構配置図	16	第42図	遺構内出土土器 8	84
第9図	R A 01・02 竪穴住居跡	18	第43図	遺構内出土土器 9	85
第10図	R A 03・05 竪穴住居跡	20	第44図	遺構内出土土器 10	86
第11図	R A 04・06 竪穴住居跡	21	第45図	遺構内出土土器 11	87
第12図	R A 07 竪穴住居跡	22	第46図	遺構内出土土器 12	88
第13図	R A 09 竪穴住居跡	24	第47図	遺構内出土土器 13	89
第14図	R A 08・10・11 竪穴住居跡	26	第48図	遺構内出土土器 14	90
第15図	R A 12・15 竪穴住居跡	28	第49図	遺構内出土土器 15	91
第16図	R A 13 竪穴住居跡	30	第50図	遺構外出土土器 1	92
第17図	R A 14 竪穴住居跡	31	第51図	遺構外出土土器 2	93
第18図	R A 16・17・18 竪穴住居跡	32	第52図	遺構外出土土器 3	94
第19図	R A 19・26 竪穴住居跡	36	第53図	遺構外出土土器 4	95
第20図	R A 20 竪穴住居跡	37	第54図	遺構外出土土器 5	96
第21図	R A 21・23 竪穴住居跡	38	第55図	遺構外出土土器 6	97
第22図	R A 22・24 竪穴住居跡	40	第56図	遺構外出土土器 7	98
第23図	R A 25・27 竪穴住居跡	42	第57図	遺構外出土土器 8	99
第24図	R D 01・02・04・06 土坑	44	第58図	遺構外出土土器 9	100
第25図	R D 07・08・10・13・22~27 土坑	47	第59図	遺構外出土土器 10	101
第26図	R D 15・16・21・28・30・31 土坑	49	第60図	遺構外出土土器 11	102
第27図	R D 14・17~20・29 土坑	55	第61図	遺構外出土土器 12	103
第28図	R D 32~37 土坑	56	第62図	遺構外出土土器 13	104
第29図	R D 38・39・46 土坑	58	第63図	遺構外出土土器 14	105
第30図	R D 40~45 土坑	60	第64図	遺構外出土土器 15	106
第31図	R D 47~50 土坑	62	第65図	遺構外出土土器 16	107
第32図	遺物包含層平面図	66	第66図	遺構外出土土器 17	108
第33図	遺物包含層断面図	69	第67図	出土石器 1	109
第34図	各区域土層図	70	第68図	出土石器 2	110

第69回	出土石器 3	111	第77回	出土石器11	119
第70回	出土石器 4	112	第78回	出土石器12	120
第71回	出土石器 5	113	第79回	出土石器13	121
第72回	出土石器 6	114	第80回	出土石器14	122
第73回	出土石器 7	115	第81回	近世の鍛冶炉跡	142
第74回	出土石器 8	116	第82回	近世の土坑	145
第75回	出土石器 9	117	第83回	時代不明の掘立柱建物跡	146
第76回	出土石器10	118	第84回	近世の出土遺物	147

[写真図版目次]

写真図版 1	航空写真	153	写真図版27	R D29~32土坑	179
写真図版 2	基本土層ほか	154	写真図版28	R D33~36土坑	180
写真図版 3	R A01竪穴住居跡	155	写真図版29	R D37~40土坑	181
写真図版 4	R A02 竪穴住居跡	156	写真図版30	R D41~44土坑	182
写真図版 5	R A03竪穴住居跡	157	写真図版31	R D45~50土坑	183
写真図版 6	R A04竪穴住居跡	158	写真図版32	遺物包含層 1	184
写真図版 7	R A05・06竪穴住居跡	159	写真図版33	遺物包含層 2	185
写真図版 8	R A07竪穴住居跡	160	写真図版34	近世の焼土	186
写真図版 9	R A07遺物出土状況	161	写真図版35	近世の土坑・不明の掘立柱建物跡	187
写真図版10	R A08・10竪穴住居跡	162	写真図版36	出土遺物(縄文土器 1)	188
写真図版11	R A09竪穴住居跡	163	写真図版37	出土遺物(縄文土器 2)	189
写真図版12	R A11・12竪穴住居跡	164	写真図版38	出土遺物(縄文土器 3)	190
写真図版13	R A13・14竪穴住居跡	165	写真図版39	出土遺物(縄文土器 4)	191
写真図版14	R A15・16竪穴住居跡	166	写真図版40	出土遺物(縄文土器 5)	192
写真図版15	R A17・18・19竪穴住居跡	167	写真図版41	出土遺物(縄文土器 6)	193
写真図版16	R A20竪穴住居跡	168	写真図版42	出土遺物(縄文土器 7)	194
写真図版17	R A21竪穴住居跡	169	写真図版43	出土遺物(縄文土器 8)	195
写真図版18	R A22・24竪穴住居跡	170	写真図版44	出土遺物(縄文土器 9)	196
写真図版19	R A23・25竪穴住居跡	171	写真図版45	出土遺物(縄文土器10)	197
写真図版20	R A26・27竪穴住居跡	172	写真図版46	出土遺物(縄文土器11)	198
写真図版21	R D01・02・04・06土坑	173	写真図版47	出土遺物(縄文土器12)	199
写真図版22	R D07・08・10土坑	174	写真図版48	出土遺物(縄文土器13)	200
写真図版23	R D13~16土坑	175	写真図版49	出土遺物(縄文土器14)	201
写真図版24	R D17~20土坑	176	写真図版50	出土遺物(縄文土器15)	202
写真図版25	R D21~24土坑	177	写真図版51	出土遺物(縄文土器16)	203
写真図版26	R D25~28土坑	178	写真図版52	出土遺物(縄文土器17)	204

写真図版53	出土遺物 (縄文土器18) ……………	205	写真図版63	出土遺物 (石器6) ……………	215
写真図版54	出土遺物 (縄文土器19) ……………	206	写真図版64	出土遺物 (石器7) ……………	216
写真図版55	出土遺物 (縄文土器20) ……………	207	写真図版65	出土遺物 (石器8) ……………	217
写真図版56	出土遺物 (縄文土器21) ……………	208	写真図版66	出土遺物 (石器9) ……………	218
写真図版57	出土遺物 (縄文土器22) ……………	209	写真図版67	出土遺物 (石器10・石製品・土製品) ……………	219
写真図版58	出土遺物 (縄文土器23・石器1) ……	210	写真図版68	出土遺物 (近世1) ……………	220
写真図版59	出土遺物 (石器2) ……………	211	写真図版69	出土遺物 (近世2) ……………	221
写真図版60	出土遺物 (石器3) ……………	212	写真図版70	出土遺物 (近世3) ……………	222
写真図版61	出土遺物 (石器4) ……………	213			
写真図版62	出土遺物 (石器5) ……………	214			



焼土



炭化物

----- 推定線

S

砂



礫

P

土器



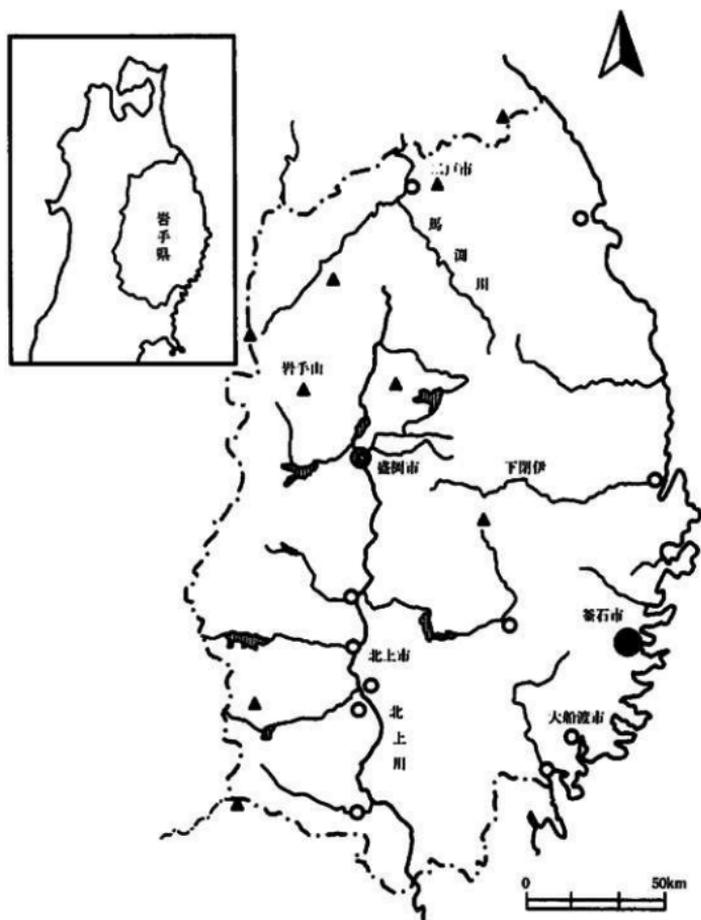
カクラン



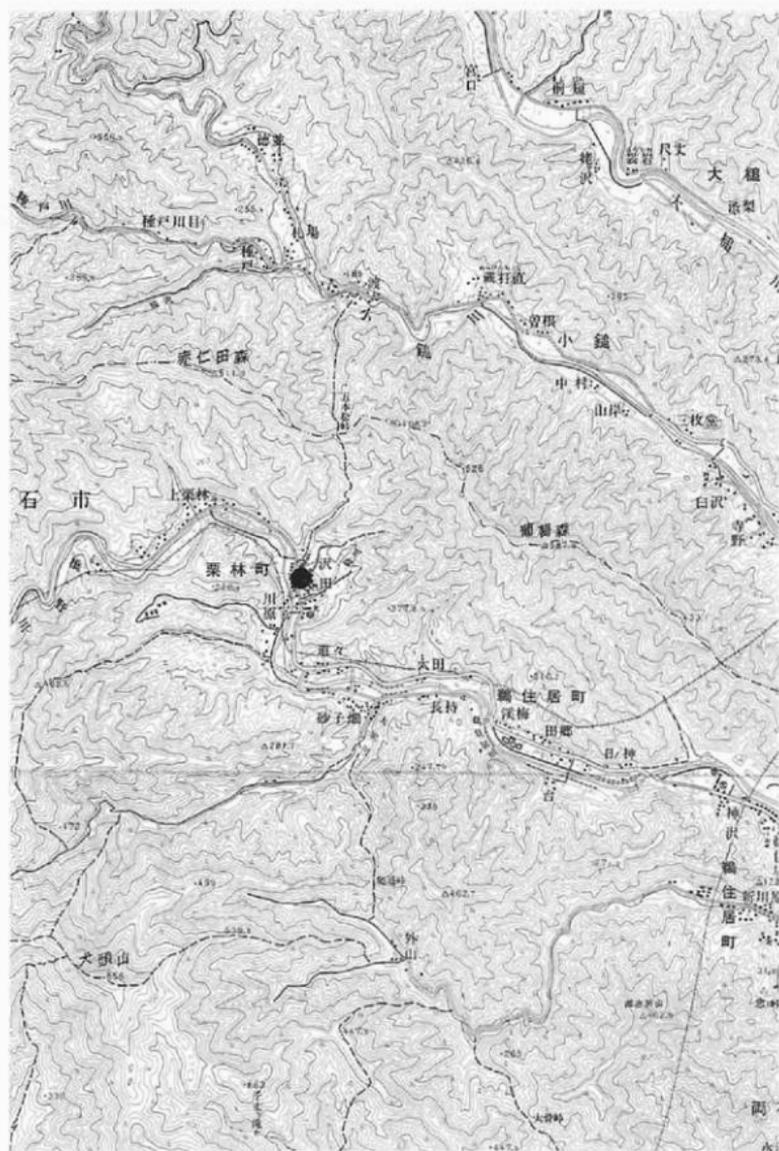
旧河道



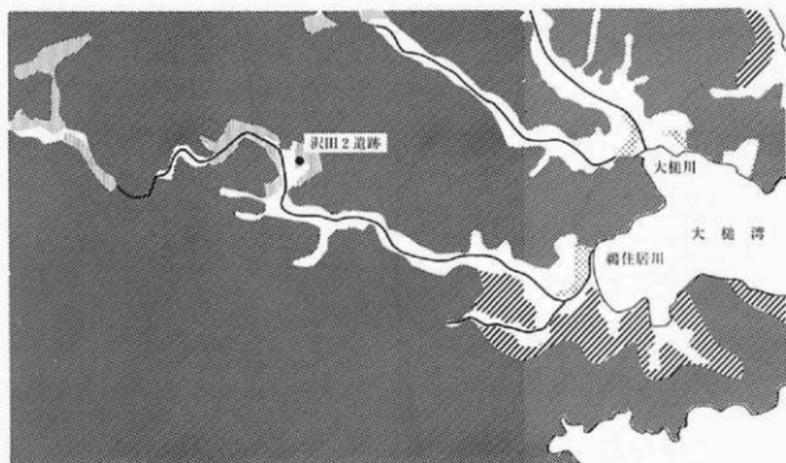
グリッド杭



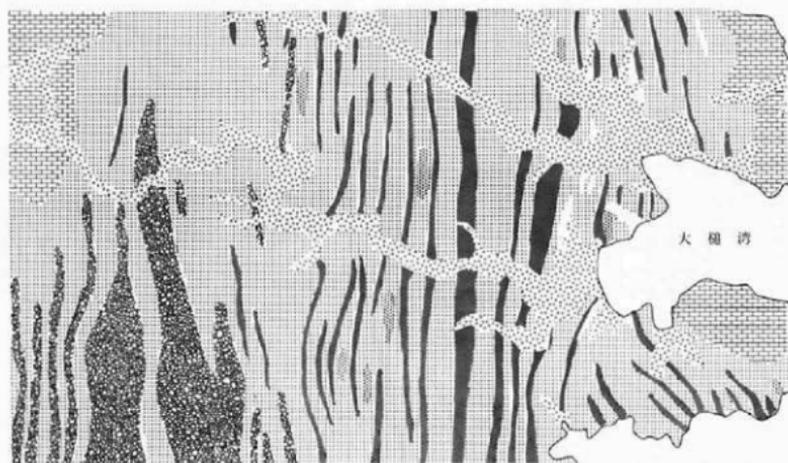
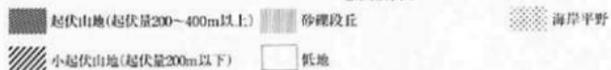
第1図 岩手県全図



第2図 遺跡の位置



地形区分图



地質分類图



第3图 地形区分图と地質图

I 調査に至る経緯

沢田2遺跡は「主要地方道釜石遠野線沢田地区緊急地方整備事業」の施行に伴って、その事業区域内に位置することから発掘調査することになったものである。

当事業は、主要地方道釜石遠野線沢田地区において、現況1車線の道路を、歩道付き2車線道路に拡幅改良する道路改築事業である。事業者である岩手県釜石地方振興局土木部では、事業実施に先立ち、岩手県教育委員会に対し、事業区域内における埋蔵文化財の分布調査を依頼した。依頼を受けた岩手県教育委員会では、現地踏査により埋蔵文化財の存在を確認し、平成10年9月10日・10月19日の延べ2日間、埋蔵文化財の内容把握のため試掘調査を実施した。試掘の結果、縄文時代に属する多量の土器片のほか住居跡等の遺構が発見されたことから、工事着手に先立ち記録保存を目的とした発掘調査が必要である旨、平成10年9月14日付け教文第636号及び平成10年10月22日付け教文第765号により釜石地方振興局土木部に通知した。

通知を受けた釜石地方振興局土木部では、岩手県教育委員会から平成11年度埋蔵文化財発掘調査にかかる事業集約の問い合わせに対し、調査を実施してほしい旨の回答をした。

回答を受けた岩手県教育委員会は、釜石地方振興局に対し、平成11年度3月2日付け教文第1251号「平成11年度埋蔵文化財発掘調査事業について」によって、平成11年度に発掘調査を実施する事とし、実際の調査は(財)岩手県文化振興事業団が担当する旨を通知した。

調査は一部区間の住居移転の関係で平成11年度と平成13年度に分けて行われた。

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置と地理的環境（第1～2図）

沢田2遺跡のある釜石市は、岩手県の太平洋岸やや南よりに位置し、東は御槍崎・尾崎・死骨崎などの諸岬が洋上に突きだし、大槌湾・阿石湾・釜石湾・唐丹湾を形成する。西端には五郎作山(927.2m)・大峰山(1147.5m)・愛染山(1228.5m)・五葉山(1341.3m)など北上高地が北から南に連なる。

世界屈指の好漁場を併せ持つ釜石市は古くから漁業が盛んで、また享保12年(1727)に大槌で初めて鉄鉱石が発見されてから近代製鉄業のメッカとしても発達してきた。しかし粗鋼・鋼材を生産していた釜石製鉄所は昭和60年に第二高炉が、平成元年には第一高炉が休止した。現在では陸中海岸国立公園に含まれる変化に富んだ海岸線や新鮮な魚貝類、美しい山岳地帯を中心とした観光開発にも力が注がれている。

沢田2遺跡は、その釜石市の中心部から北側の上閉伊郡大槌町との境界に近い釜石市栗林町内にある。JR東日本の鶴住居駅からは、西北西に約6.5km離れる。

2 地形と地質（第3図）

三方を起伏山地で囲まれている釜石市周辺は河川が多く発達している。鶴住居川・甲子川(大波川)・片岸川・熊野川などが北上高地を水源として東流し、太平洋に入る。それらは藩浜が大きく深く山を削って渓谷となる。これらの河川は海にいたり、小規模な平地を形成する。

第3図上は鶴住居川流域の地形区分図である。鶴住居川の河口には低地や砂浜が広がっており、海岸平野を形成しているのが見て取れる。また中流域には小規模の段丘がある。鶴住居川では沢田2遺跡のある栗林

町や橋野町付近、小鏡川では大槌町麻打直付近に広がるが、連続性に乏しい。これらの段丘は砂礫層を載せており上位ほど形成時期は古い。集落は砂礫段丘下位から谷底平野、氾濫平野に立地する。岡中であると大槌川・小鏡川・鶴住居川沿岸がそれにあたるが、海岸部では山麓及び緩斜面区域でも集落は存在する。

栗林町周辺の土地利用状況は、谷底平野部では水田や集落、段丘面では果樹園が多い。

次に地質をみてみる。(第3図下)

この区域の基盤層は地質時代で、「古生代二疊紀北上山地北部類古生層」に当たり、粘板岩や泥岩を主体としている。海岸部に近い起伏山地に珪質岩(チャート)が南北に幾筋にも連なる特色を持つ。また、同じ古生層の石灰岩層が海岸部に、輝緑凝灰岩層がレンズ状に南西部に広がる。

火山性岩石では花崗岩質岩石が岡中の北西部橋野町付近にある。花崗岩は風化してマサ土化し、崩れやすい。これらの砂は鶴住居川によって海に運ばれ砂嘴を形成した。また頁岩質のひん岩が古生層中に層状に貫入している箇所が岡中の中央部にみられる。この岩石は硬質である。

以上2つの資料から、沢田2遺跡は自然作用によって作られた段丘面に位置していることがわかり、鶴住居川に限らず、同じような段丘面に位置する区域でも縄文時代の遺跡が存在する可能性を指摘できる。また、沢田2遺跡で出土する石器や石製品には上記の石質を持った石材が使われており、その意味でも、縄文時代の人々の生活に密接な関連があると言える。

次に遺跡の分布をみてみよう。

3 周辺の遺跡(第5図①②・表1)

沢田2遺跡の存在する栗林町付近や鶴住居川上流の橋野町付近は遺跡が多い。ただし近代遺跡である橋野高炉跡・栗林銭座跡を除きすべてが未調査のものである。第5図 周辺の遺跡①は平成3年度に釜石市教育委員会がまとめた分布調査報告書から、縄文時代の遺跡を抜粋したものである(1~19)。

栗林町周辺では縄文時代中期から後期の土器散布地が点在する。その中で16の砂子畑第2遺跡では黒曜石の石器(掻器)が出土している。道路建設時の客土からの出土ではあるが、近隣には存在しない石材であることから注目される。

鶴住居川上流域になると、縄文時代早期から前期の土器片が出土する遺跡もある。8・9・10(10は一方向に約1km)は鶴住居川から枝分かれする沢田川の北側に存在し、特に10沢田大平遺跡からは尖底土器や大型の石槍が出土している。

第5図 周辺の遺跡②は比較的発掘例のある大槌湾沿岸の縄文時代の遺跡を取り上げた。発掘調査されているのは35・46・47・49の4遺跡である。35崎山弁天貝塚は、昭和46年度に大槌町教育委員会と岩手大学で共同発掘された縄文時代早期から晩期までの貝塚である。早期では尖底縄文が施された土器片が出土した。また前期の大木2 a・b式土器や晩期の大洞式土器などが出土し、特に早期から前期にかけての好資料が多い。46夏本遺跡は縄文時代中期末葉の壑穴住居跡が27棟検出されており、大槌湾周辺でもっとも大きな遺跡である。

大槌湾の南沿岸、釜石市箱崎町周辺には調査されていないが前期の土器片を採集できる遺跡が点在する。特に32の新箱崎大沢遺跡は前期から晩期の土器、県北の円筒下層式土器などが出土し、地形的にも前述した崎山弁天道跡に類似しており注目される。

その他では、気仙郡住田町(釜石市栗林町から南西に約30km)の縄文時代早期の遺跡である蛇王洞窟がある。岩手県では出土例が少ない縄文時代早期中葉の沈線文土器が出土しており、沢田2遺跡の性格を考え

る上で重要な遺跡である。

縄文時代についてまとめれば、釜石市を中心とした区域で早期から前期にかけての遺跡の報告は少ないと言える。よって沢田2遺跡の考古学的資料価値は大きい。

古代では大船町の46号本遺跡で奈良時代の住居跡5棟のほか、製鉄関連の遺構も検出され、古代の製鉄関連遺跡として注目される。鞠住居川沿線では古代の遺跡の報告はされていない。

中世では、栗林地区では沢田2遺跡を囲むかのよう5つの館跡(50~54)がある。ほかに55の横内館跡など点在するが、特に栗林にまとまることは中世の交通の要地として重要な地区であったと考えられる。

最後に近世から近代にかけて、栗林地区の主産業は鉄加工業で、鍛冶を生業とするものが多く、寛政7年(1795)には鍛冶屋が数十軒あったという記録がある。慶應3年(1867)には56の栗林鍛冶が設けられている。このように製鉄業を中心に栄えていた痕跡は、沢田2遺跡やその近隣の田畑から磁洋が多数出土していることから伺える。

4 遺跡の基本層序(第6図・34図)

遺跡は大きく分けると7つの土層で成り立っている。この区分は全体的な基本層であり、調査区域すべてにおいて同じではない。現状も田や住宅地、果樹園と様々で、それによって堆積している土層も異なる。ここでは大きく区分された土層が、どの区域にどのように広がっているかをみてみたい。

まずは最上位にあるものが表土・または耕作土(Ⅰ層)である。この層は水田の広がる南側で、下に固くしまった整地層(Ⅱb)を持つ。また、県道側には凹地を平坦にするために盛った粘土層(中樺火山灰を含むⅡc)がみられる。この粘土は調査区の東側から運ばれたものらしい。

その下にはやや細かい礫を含む黒色土がある(Ⅲ層)。この層は近代の製鉄関連の遺物を包含する層である。調査区南側の田の下や、調査区中央部の住宅地の付近に広がる。鉄製品や鉄滓、陶磁器とともに、縄文土器を包含する。土器は縄文時代前期の土器片のほか少量であるが中後期のものを含む。

Ⅳ・Ⅴ層は縄文時代前期中葉から後葉にかけての土器を包含する層である。Ⅳ層はやや礫を多く含む黒褐色土層、Ⅴ層は砂状の暗褐色土層である。これらの層は調査区最北部の果樹園や中央部の住宅跡にみられ、南側にも広がりを認めるが、最南部においては薄く堆積するのみである。

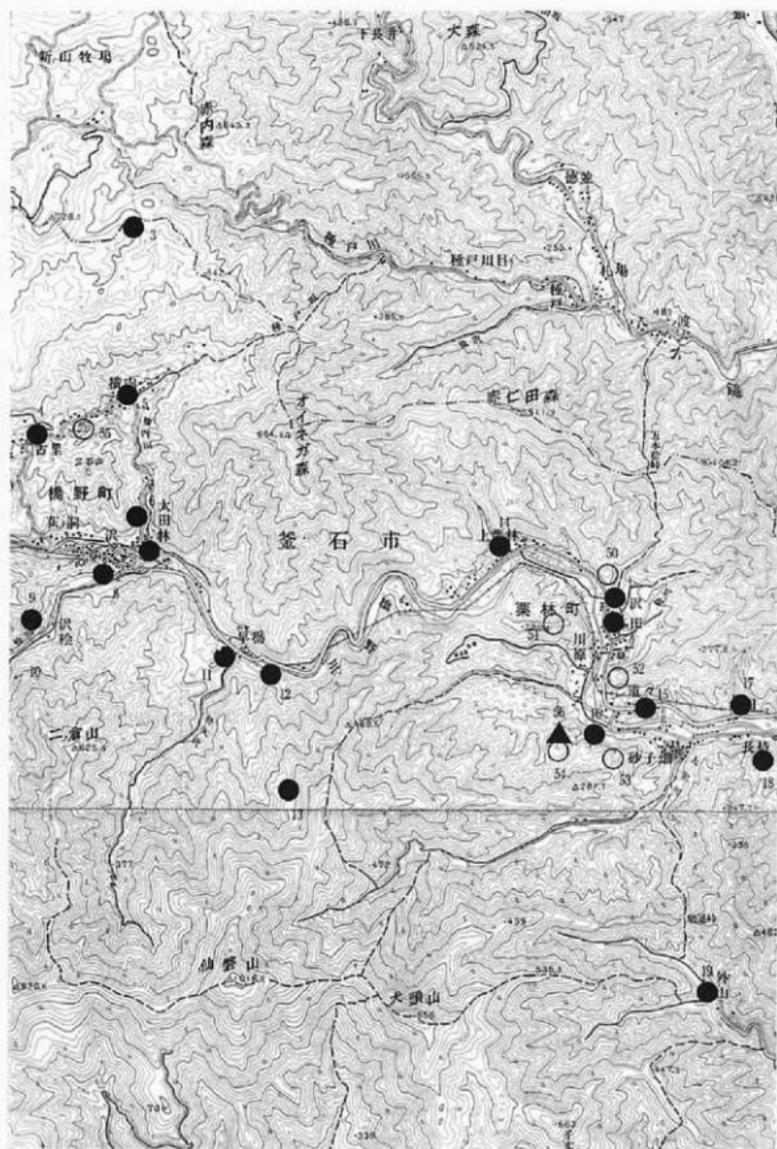
Ⅵ層は中樺火山灰らしき灰白色シルトである。このシルトは調査区北側において顕著にみられ、中央部においても一部遺構内の埋土に確認された。Ⅰ層の中に見える盛土から推測すれば、南側調査区外の東側にも堆積しているに違いない。

Ⅶ層は縄文時代前期前葉の遺物を包含する黒褐色土が堆積する。大型の礫が多量に混入することが多い。砂礫質の層である。調査区のはほぼ全域に広がる。

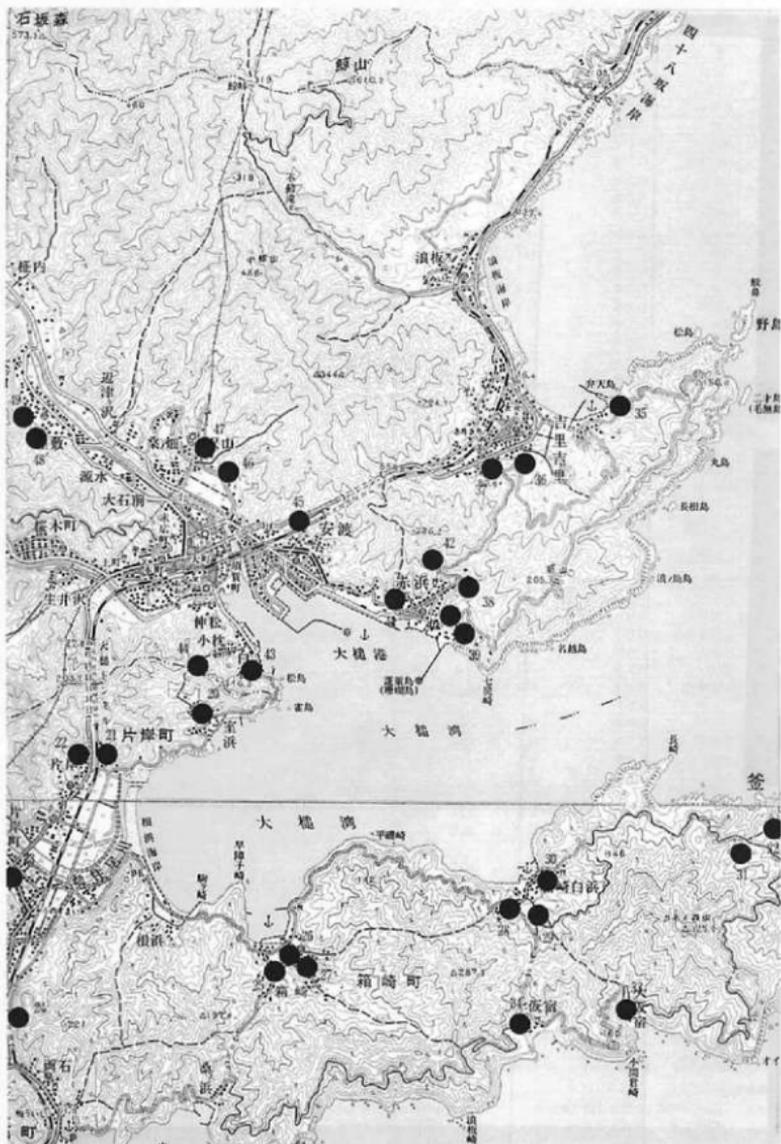
北側の遺物包含層下位には、少量の早期の土器を出土させた黄褐色の砂礫層(Ⅷ層)が堆積する。

Ⅷ層は河川氾濫を原因に持つ層で、この層は区域によって黄褐色土の砂と礫層に分かれる。礫層は調査区南側にみられ、大型の川原石が、北西から南東に幅約30mの範囲で調査区を横切る。また、最南部でも礫層が確認できた。それらの脇には砂が堆積される。この砂の面に遺構が検出されることが多い。

以上大観してきたが、調査区北側においては、各層とも細分できる。特に中樺火山灰を挟んで、上位や下位において確認できた。この事についてはⅣ1(3)の遺物包含層の項で触れたい。



第5図 周辺の道跡図①



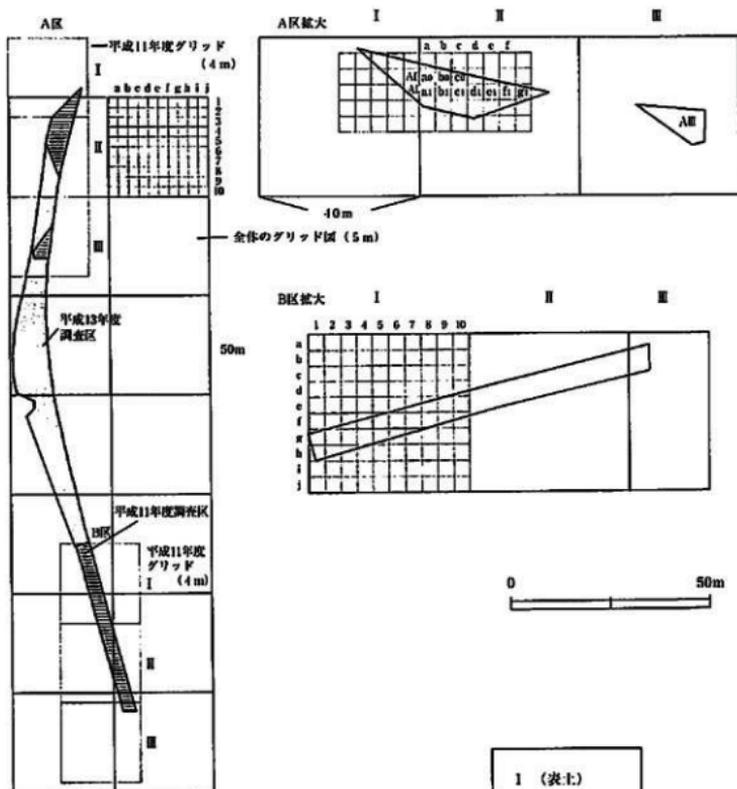
周辺の道路図 2

表1 周辺の遺跡

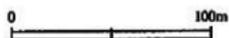
No	遺跡名	種別	出土遺物等	参考文献
1	沢田1	散布地	縄文土器片(中間)	A
2	沢田2	散布地	角錐銅斧	A
3	芳形	散布地	縄文土器片(中・後・晩期)晩期の粗製土器	A
4	古重	散布地	縄文土器片(中間?)	A
5	横内	散布地	縄文土器片(中間)石器(チャート製)	A
6	新太郎林	散布地	縄文土器片(中間・後期)	A
7	太郎林	散布地	縄文土器片(中間)	A
8	沢池	散布地	縄文土器片(前・中・後・晩期)	A
9	新沢池	散布地	縄文土器片(前・中間)	A
10	沢池大平	散布地	縄文尖底土器・陶磁土器・大型石槍(縄文時代早期)	A
11	早瀬	散布地	縄文土器片(中・後期)龍澤たたら跡?	A
12	寺地沢	散布地	縄文土器片(中間?)龍澤	A
13	寺地	散布地	縄文土器片(中間)龍澤たたら跡?	A
14	上栗林	散布地	縄文土器片(注・後期)石皿(馬蹄製)	A
15	道々	散布地	縄文土器片(中・後期)	A
16	砂子畑第1	散布地	石器(黒曜石)	A
17	太田	散布地	縄文土器片(後期)	A
18	長持	散布地	縄文土器片(中・後期)	A
19	外山	散布地	縄文土器片(中間)	A
20	栄浜	散布地	縄文土器片(中・後期?)	A
21	新汗草	散布地	縄文土器片(後・晩期)	A
22	片汗草	貝塚	縄文土器片(中間)	増城 A
23	磯住居	散布地	縄文土器片(中間)	A
24	恵ノ時	散布地	縄文土器片(中・後期)石器(フリント製)	A
25	上島棚	散布地	縄文土器片(中・後期)	増城 A
26	船崎前田	散布地	縄文土器片(後・晩期)大銅式注口土器など 土師器	A
27	中川原	散布地	縄文土器片(中間)	増城 A
28	新船崎白浜1	散布地	縄文土器片(中・後期)	A
29	水海2	散布地	縄文土器片(晩期)	増城 A
30	新船崎白浜2	散布地	縄文土器片(中・後期)	A
31	大沢貝塚	貝塚、散布地	縄文土器片(中間)	A
32	新船崎大沢	散布地	縄文土器片(前・中・後・晩期)円筒下層式土器片 土師器	A
33	大飯宿	散布地	縄文土器片(前期)	A
34	飯宿	散布地	縄文土器片(後・晩期)	B
35	崎山舟先	散布地	縄文土器(早・前・中・晩期) 須恵器	昭和46年度調査 B
36	田中館	城跡	平埴、菅葺	B
37	三日月	散布地	縄文土器 鉄滓	B
38	赤浜Ⅲ	散布地	縄文土器 鉄滓	B
39	赤浜Ⅰ	散布地	縄文土器(中間)石器	B
40	三日月	散布地	縄文土器	B
41	赤浜Ⅱ	散布地	縄文土器(前・中期中葉から末葉) 石槍	B
42	イエノ沢	散布地	縄文土器 鉄滓 銅口	B
43	白石	散布地	縄文土器(後期)	B
44	小沢	散布地	縄文土器	B
45	安寝	散布地	縄文土器 石器	B
46	夏本	墓跡跡、生産遺跡	縄文中期型穴居27種・発生型穴居1種・古代住居5種・大木8b~10式土器など	昭和61年度調査 B
47	戸山	散布地	縄文土器(中間)石器	平成6年度調査 B
48	樺沢Ⅰ	生産遺跡	縄文晩期 土師器 須恵器 鉄滓	B
49	樺沢Ⅱ	生産遺跡	縄文晩期 土師器 鉄滓 銅口 土城	平成9年度調査 B
50	館	館跡		A
51	三平館	館跡		A
52	館	館跡		A
53	明神館	館跡		A
54	館ヶ森	館跡		A
55	横内館	館跡		A
56	栗林館跡	館跡	昭和8年(1867)政費 その後洋式高炉も築かれたがすぐ廃止 財源定史跡	C

参考文献

- A 釜石市埋蔵文化財分布調査報告書 釜石市文化財調査報告書16編 平成3年3月 釜石市教育委員会
 B 樺沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書 大畑町文化財調査報告書9集 平成10年3月 大畑町教育委員会
 C 岩手県の地名 日本歴史地名体系3 1990年7月 平凡社



第7図グリッド配置図



I (表土)	
II (近世)	
III 縄文時代前期	
IV 縄文時代前期	V (中興火山灰)
V 縄文時代前期	
VI 縄文時代早期?	
VII 地山	

第6図基本層序柱状図

第6図 基本層序柱状図 第7図 グリッド設定図

Ⅲ 調査と整理の方法

1 野外調査の方法

(1) グリッドの設定 (第7図)

平成11年度調査においては、調査区域が北側と南側に離れ、また北側においては狭く急斜面のために大グリッドを組めなかった。グリッドに合わせて杭を打つことが調査に支障を来すと考えたからである。そこでX系に乗り、調査範囲を網羅するような点を探り、グリッドを設定する事にした。

まずは基準点を2点設置した。座標値・標高は以下の通りである。

基準点1 X = -71,720.000m Y = 85,916.000m 標高 50.671m

基準点2 X = -71,520.000m Y = 85,885.000m 標高 52.811m

2つの基準点を元に、北側調査区をA区・南側調査区をB区とし、北側からそれぞれ40mごとに、AⅠ・AⅡ・AⅢ、BⅠ・BⅡ・BⅢとした。そして中グリッド内を4mごとに10分割し、北側から西側にa～j、南側に1～10とした。よってB区北東側のグリッドの呼名はBⅠa1となる。

平成13年度調査では、調査区域が平坦でやや広く、見通しもよいことから、大グリッドを設定した。平成11年度調査区を囲むように、南北を50mずつⅠ～Ⅷの7つに分け、東西をA・Bの2つに分けた。その中グリッドを5mずつの小グリッドに分け、北西側から南に1から10、東にaからjに分けた。北西側のグリッドはⅠA1a、南東側のグリッドはⅧB10jと呼称することとした。

平成13年度の基準点の成果値は次の通りである。

基準点1 X = -71,630.000m Y = 85,880.000m 標高 51.067m

基準点2 X = -71,530.000m Y = 85,880.000m 標高 51.988m

平成11年度と13年度では小グリッドの区画幅や呼び方がそれぞれ異なり、その取り扱いについては、2整理の方法で項を設けて述べている。

(2) 粗掘りと精査

まずは土層と遺物の有無の確認のために、トレンチを入れた。その際、土器の出土状況を知るために、なるべくグリッドをはずさないように、(トレンチ位置が明確に把握できるように)心がけた。それに伴い無遺物層が確認された区域では重機による粗掘り、急斜面や狭い区域では手作業による検出を行った。

検出は、簡便で上面を丁寧に削ぎ、検出面からは移植ベラや両刃がまを使って行ったが、遺物包含層の北側では、重機を使用できなかったためにスコップ等を使用している。

精査は、基本的には墾住居跡は4分法、土坑等は2分法による覆土の観察を行ったが、広がりを持つ大型住居跡や重複関係にある遺構等は、適宜ベルトを設定した。土層断面及び平面を写真撮影と実測で記録しながら調査した。

遺物の取り上げについては、遺構内では出土層位を明記し、住居跡出土のものは、できるだけ平面図に載せるよう心がけた。遺構外出土のものは、グリッド単位で層位を記入したが、グリッド位置が明確でないものはその区域名(大グリッドのみ)となっているものもある。

(3) 遺構の記録

遺構番号は、遺構種別毎の検出順に連番としている。遺構の呼称は、平成11年度においては、墾住居跡がRA、土坑がRDを、柱穴状土坑がPPを略号として使用した。平成13年度は、墾住居跡・土坑ともに

検出順に1号・2号と命名した。精査の課程で欠番になったものは、本文に明記している。

それぞれの断面図の作成は、遺構の上面に水平の水糸を張り、基点を設定して行った。また、平面図では基本的に、地表面に直角座標系の軸線に合わせて基線とする測量法によって実測したが、広範囲な遺構に関しては併せて、平板測量を行った。縮尺については20分の1を原則にしたが、範囲に応じて対応した。

写真では、精査の段階において撮影をおこなった。使ったカメラは35mmモノクロ、35mmカラーリバーサル、6×7cm版モノクロの3器である。また、平成11年度調査終了時に空中写真撮影を行った。

2 整理の方法

(1) グリッドの変更

平成11年度と13年度におけるグリッドの相違は、本報告書においてはすべて、平成13年度のものに合わせている。ただし、平成11年度の実測原図や土器出土地点はそのままにしており、不掲載遺物においては旧グリッド名を参照していただきたい。

(2) 遺構名の変更

平成13年度では1号壘穴住居跡、1号土坑などと命名して精査を行っているが、平成11年度の略号に変更して報告している。平成13年度1号住居跡はR A06から、3号土坑はR D13から、それぞれ連番となるが、近世の遺構である平成13年度28号住居跡や1・2・31～59号土坑は、そのまま遺構名として報告している。また、精査の課程あるいは整理段階において欠番になったものは本文に示している。

表2に各遺構ごとの名称の変更を記した。

(3) 遺構図面

遺構図面は点検・修正の後、必要に応じて第2原図を作成した。挿入中の縮尺は50分の1を基本としているが、任意の縮尺についてはスケールを付してある。なお、使用したスクリーン・トーンは凡例の通りである。土層注記は基本層位にローマ数字を、遺構の埋土にはアラビア数字を用いた。

(4) 遺物の処理

出土した土器・石器などの遺物は、水洗い後に出土状況に合わせて仕分けをし、接合復元の作業を実施した。時間の制限から、土器片の記名は傾力厳選し、掲載土器のみとし、不掲載の土器には記名していない。そして写真撮影を行い、実測図・拓影図を作成し、トレースして掲載した。

遺物掲載に当たって、選定の基準は各項目で説明している。

(5) 遺物図版

遺構内出土遺物は遺構順に、遺構外出土遺物は種類別に掲載した。挿入中の縮尺は、3分の1を基本としているが、任意の縮尺についてはスケールを付している。

写真図版のみの掲載となっている遺物は、表中に明記しており、また実測図の表現方法と計測値の推定などの表示方法は、凡例の通りである。

(6) 写真図版

遺構写真は、各遺構の平面・断面を中心に、壘穴住居跡は地床や遺物出土状況も合わせて掲載した。

遺物写真は、立体土器は5分の1、土器破片は5分の2、石器、陶磁器や鉄器は2分の1を基本としているが、任意の縮尺については、個々に明記している。

表2 遺構名称変更

住居跡			土坑			土坑			土坑		
旧名	RA	備考	旧名	R D	備考	旧名	R D	備考	旧名	R D	備考
	1			1		25	34		61		欠番
	2			2		26	35		62		欠番
	3			3	抹消	27	36		63		欠番
	4			4		28	37		64		欠番
	5			5	抹消	29	38		65		欠番
RD09	6			6		30	39		66		欠番
1	7			7		31		近現代	67		欠番
2		RA07同		8		32		近現代	68		欠番
3		包含層		9	R D09	33		近現代	69		欠番
4	8			10		34		近現代	70	40	
5	9			11	抹消	35		近現代	71	41	
6	10			12	抹消	36		近現代	72	42	
7	11		1		近現代	37		近現代	73	43	
8		抹消	2		近現代	38		近現代	74	44	
9		抹消	3	13		39		近現代	RA20P12	45	
10	12		4	14		40		掘立柱建物	RA09F	46	
11		RA09同	5	15		41		掘立柱建物	RA07F	47	
12	13		6	16		42		掘立柱建物	RA07F	48	
13	14		7	17		43		掘立柱建物	RA07F	49	
14	15		8	18		44		掘立柱建物	RA07F	50	
15	16		9	19		45		掘立柱建物			
16	17		10	20		46		掘立柱建物			
17	18		11		抹消	47		掘立柱建物			
18	19		12	21		48		掘立柱建物			
19	20		13	22		49		掘立柱建物			
20	21		14	23		50		掘立柱建物			
21	22		15	24		51		掘立柱建物			
22		抹消	16	25		52		掘立柱建物			
23	23		17	26		53		掘立柱建物			
24	24		18	27		54		掘立柱建物			
25	25		19	28		55		掘立柱建物			
26	26		20	29		56		掘立柱建物			
27		抹消	21	30		57		近現代			
28		抹消	22	31		58		近現代			
29	27		23	32		59		近現代			
			24	33		60		近現代			

IV 検出された遺構と遺物

調査の概要 (第8図・表2)

発掘調査は平成11年と平成13年の2ヶ年にかけて行われた。その調査面積は例年記しているが、平成13年度の調査面積の方が広く、検出遺構も多い。

平成11年度調査では、縄文時代前期前葉の竪穴住居跡5棟、同時期と考えられる土坑6基と縄文時代早期中葉から前期後葉までの土器を出土させる包含層が検出された。土器の出土数は、遺物包含層を中心に大コンテナ12箱、石器大コンテナ1箱である。土器は縄文早期沈線文土器から前期大木6式土器までが出土し、そのうち大木3～5式土器を主体とする。

平成13年度では、縄文時代前期初頭から前期中葉にかけての竪穴住居跡が22棟、同時期と考えられる土坑が41基のほか、平成11年度に検出した遺物包含層に続く遺構が確認されている。縄文土器は大コンテナ16箱、石器は大コンテナ2箱が出土した。そのほかに近世の鍛冶関連の遺構も検出され、それに伴う遺物として釘を中心とした鉄製品や鍛冶滓、陶磁器片が出土している。

2度の発掘調査の結果、沢田2遺跡は縄文時代前期初頭から中葉にかけての集落跡であり、かつ近世の鍛冶を中心とした集落跡であることが確認された。以下に各遺構を見ていく。記述に当たっては、1で縄文時代の遺構と遺物、2で近世の遺構と遺物について説明し、各時代ごとのまとめを小結としている。

平成11年度調査において、欠番や変更になっているものは以下の通りである。

欠番 R D03 R D05 R D11 R D12 変更 R D09→R A06

平成13年度調査において、欠番となっているものは8・9・22・27・28号竪穴住居跡と11・57～69号土坑である。また、平成13年度検出の遺構については()内に旧名を付している。

1 縄文時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

縄文時代の竪穴住居跡は2年間の調査で27棟検出している。竪穴住居として認定できる定義(条件)はいくつか考えられるが、縄文時代前期前葉から中葉という時代背景から、地床炉(焼土遺構)がないものや、柱穴が判別できないもの(いわゆる竪穴状遺構)を含めている。

検出された27棟の内訳は、縄文時代初頭から前葉にかけてのものの中葉のものに大別できる。時期不明のもの(土器出土状況が不明確、床面の掘りすぎなどが原因)でも、埋土状況などから推定して本文中には明記している。平成13年検出の3号竪穴住居跡は、精査の結果、遺物包含層となり、除外している。

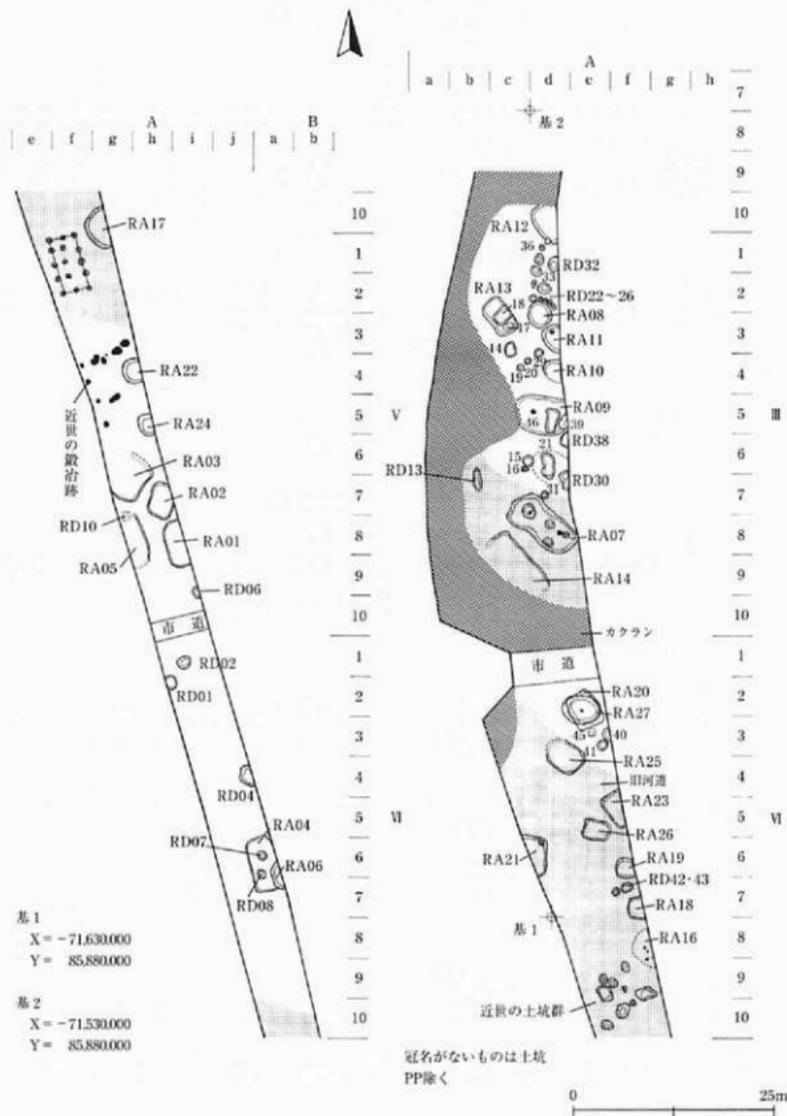
本文は、遺構検出順に述べているが、遺構図版は検出されたグリッド内にある同期の遺構をまとめるために、必ずしも順番とはなっていない。

R A01竪穴住居跡 第9図・35図 写真図版3・37

調査区南側グリッドVA8 iに位置する。検出面は暗褐色土層であるが、黒褐色土の面で確認できた。東側半分は調査区外にある。

平面形・規模は楕円形を呈し、長軸は5 m56cm、短軸は3 m50cm～4 m前後と推測される。主軸方位はほぼ南～北である。

埋土は20～30cm大の礫を多く含む。上位は固くしまった黒褐色シルトで、近代以降の整地跡と思われる。



第 8 図 遺構配置図

壁は、比較的残りのよい北側で、最大30cmを計るが、平均して20cm前後である。

床は礫に覆われ、貼り床などの施設も確認できず、炉跡（焼土）も検出できなかった。

柱状の土小坑が15基検出された。規模は表に記したが、そのうち壁際を削るものが噴柱穴、P14が主柱穴となる可能性が高い

出土遺物は少なく、土器は破片が激しい。4点を掲載した。すべての器種が深鉢で胎土中に繊維を含む。ループ文や羽状縄文が観察できる。

時期は、遺物出土状況などから縄文時代前期前葉に属すると考えられる。

R A02壑穴住居跡 第9図・35図・68図 写真図版4・36・58

調査区南側グリッドVA7hに位置する。検出面は暗褐色土層であるが、黒褐色土の面を慎重に下げ、床面と思われる面から壁を追いかけて確認した。

平面形・規模は隅丸の略長方形を呈し、長軸4m26cm、短軸3m08cmを計る。主軸方位は北-30°-西である。

埋土は、上位は固くしまった黒褐色土で、下位に暗褐色土層が自然堆積状に堆積する。

検出された壁高は北側で12~15cm、南側で25~35cm前後である。北側ではなだらかに立ち上がり、南側ではほぼ垂直に立ち上がる。東側壁は礫であるが、地山の礫が意図的に積まれたものなのか、調査区外にのびることから判断できない。

炉跡（焼土）はない。

床面には大小の柱状土坑が確認できる。北から西、そして南側にかけての壁際には径3~5cm、深さ5cm程度の小穴が通る。また、南壁から東壁にかけては、径12cm前後の土小坑がやや間隔を同じくして検出された。

遺物は少ないが、そのうち比較的判別できる縄文土器6点、石器1点を掲載した。繊維の混入はR A01と比べて少ない。5は前期初葉の土器片で流れ込みであろう。網目状燃り糸文を地文とするもの（6）や沈線が施文されている土器（10）も出土している。石器は576のみの出土である。

時期は、遺物出土状況から縄文時代前期前葉に属すると考えている。また埋土状況を含わせて考えると、R A01よりも新しい遺構と思われる。

R A03壑穴住居跡 第10図・35図・68図 写真図版5・36・58

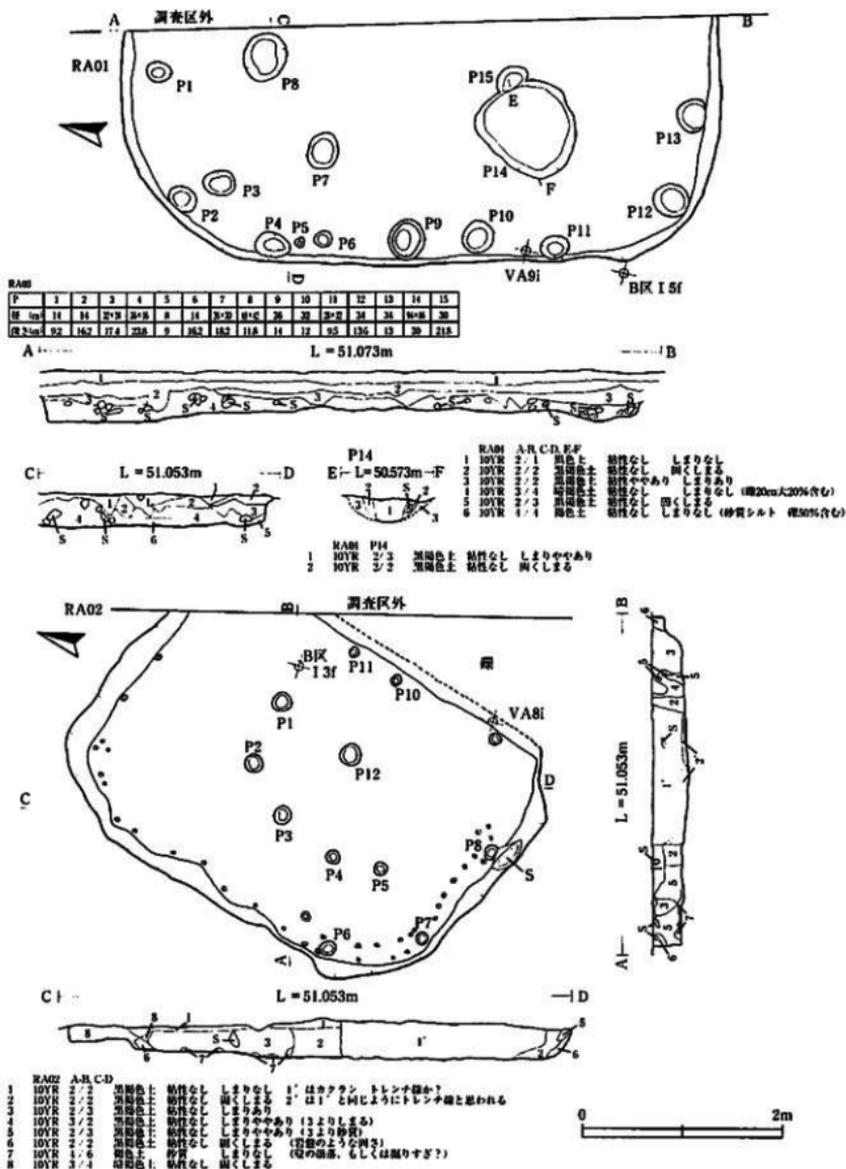
調査区南グリッドVA7g・hに位置する。平成11年度の調査で遺構の南半分を検出した遺構であり、平成13年度では北側半分の検出に努めたが、近代の鍛冶場跡等の施設によって失われたか、あるいは水田の築地の際に失われたかで確認できなかった。よって平成11年度の南半分のみを報告となる。検出面は褐色土層であるが、黒褐色土層の面でも確認できた。南東でR A02と隣接する。

平面形・規模は隅丸の略長方形を呈すと推測され、短軸は4m~4m10cmを計る。主軸方位は北-15°-東である。

埋土は上位に固くしまった黒褐色土、中位に暗褐色土、下位に砂質の黄褐色土を持つ。礫は少ない。

壁はほとんど残らず10cm程度である。

床は固くしまり、床面に柱状の土小坑が16基検出された。そのうちP1は大型の礫を伴う。各々の規模は表の通りであるが、P2・3・7・9・12・15に規則性があるように思われる。



第9図 RA01・02 竪穴住居跡

出土遺物は少なく、状態のよい縄文土器6点を掲載した。繊維が多く混入する羽状縄文の土器と、繊維の混入が認められない(微少)な撚糸土器が出土している。石器では無茎の石鏃(577)が出土した。

時期は遺物出土状況から縄文時代前期前葉に属するであろう。また、埋土状況からR A02より古く、R A01と同時期かやや新しい遺標と考えられる。

R A04壑穴住居跡 第11回・35回 写真図版6・36

調査区最南部グリッドVI B 6 aに位置する。検出状況はII層黒褐色土面で検出することが必要(黒褐色土を除くと遺構を失う可能性があるかと判断)と考え、トレンチを入れ慎重に掘り進めながら土層の観察を行った。結果、暗褐色土の小さな立ち上がりを確認し、床面に近い層まで掘り下げてから壁を追いかけた。よって一部トレンチに切られる。また、東側の一部は調査区外に広がる。

平面形・規模は隅丸の略長方形を呈し、確認された長軸は6 m90cm～7 m、短軸は3 m50cmで、調査区外に延びる短軸を推定すれば6 m前後であろう。主軸方位は北-15°-西である。

埋土は上位が固くしまった黒褐色土、中位が暗褐色土で下位に黄褐色土の砂質シルトが堆積する。

壁高は北側で12～13cm、西から南側で15cm前後。北側はなだらかに立ち上がり、南側はほぼ垂直気味になる。

炉跡(焼土)は確認できない。床面中央には煙が配されている。また壁際には径5 cm、深さ2～5 cmの小穴が通る。

3基の土坑を床面に検出した。これらは住居跡との間わりが不明であるために別に取り上げるが、R D07・08は住居跡の柱穴の可能性もある。またR D09は当遺構を切る前期前葉の壑穴住居跡と変更した。

遺物は少なく状況のよい縄文土器3点を掲載した。貝殻文に特色を持つ早期中葉の土器片と、不明であるが前期前葉以前の土器と考えているものが出土した。

時期は遺物の出土状況から、縄文時代早期中葉から前期初頭に属するであろう。

R A05壑穴住居跡 第10回・35回 写真図版7・36

調査区南部グリッドV A 7・8 hに位置する。検出の状況はR A04壑穴住居跡と同じで掘り下げてから壁を追いかける方法を行った。その結果、壁の立ち上がりと柱穴状の小土坑を検出したことから壑穴住居と登録した。西側で調査区外に延びる。

平面形・規模は北側と南側で壁が損失していることと、西側が攪乱を受けていることから不明であるが、東側壁の状況から長軸は6 m前後と予想される。ただし壁の形状から2つ住居が重複している可能性もある。

埋土は上位が固くしまった黒褐色土で、中位から下位にかけて暗褐色土が堆積する。

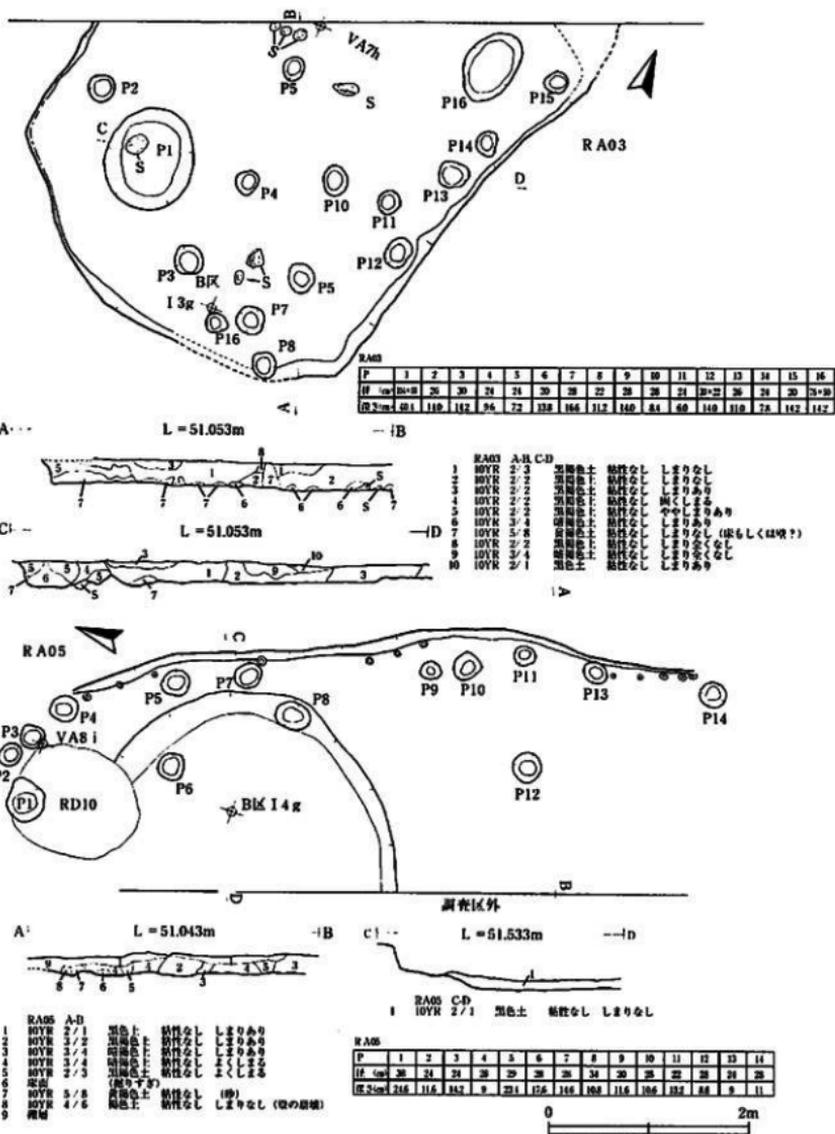
検出された壁高は東壁の北側で12cm、南側で15cm前後である。

炉跡(焼土)は確認できない。

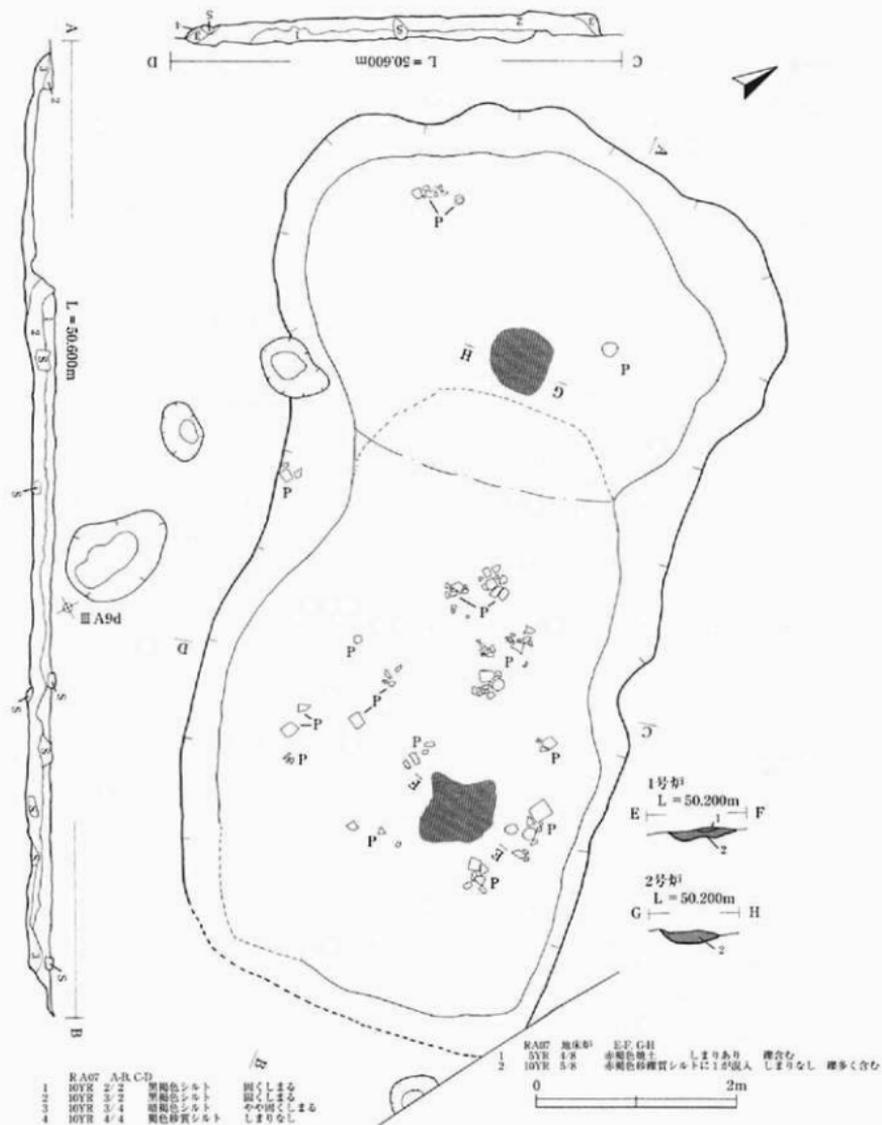
壁際に径5 cm、深さ2～5 cmほどの小穴が1基通る。また床面には14基の柱穴状の小土坑が検出された。規模は表の通りであるがP 1・P 5がやや深い。

出土遺物は少ない。20は表裏縄文の可能性が高い繊維を混入させる土器片。23は大本2 b式と考えられるものである。

時期は、遺物出土状況から縄文時代前期前葉に属するが、R A03と時代差については判別できない。



第10図 RA03・05 壁穴住居跡



R A06竪穴住居跡 (R D09から登録変更) 第11図 写真図版7

調査区南側グリッドVI B 6 bに位置する。検出面はR D07と同じR A04の床面である。当初R A04の付属施設か大型の土坑と判断し、R D09と登録した。しかし、規模や柱状穴の小穴が存在することから竪穴住居跡に変更した。位置はR A04の推定される東壁の南側に位置し、遺構の半分は調査区外に延びると推定する。

平面形・規模は不整な楕円形を呈すと考えられ、開口部径は長軸3 m54cm、底部径は3 m40cmで、短軸は不明である。深さは最大で30cmを計る。断面形は皿状で壁はなだらかに立ち上がる。

埋土は、黒褐色土を主体とする。中位に15cm大の礫を含む。

床面中央部に礫が配置されているかのように存在するが詳細は不明である。

壁の上部に径3～5 cm、深さ5 cmほどの小穴が7基ほど検出された。

出土遺物はない。

時期は、特定できないがR A04より新しい遺構で縄文時代前期に属する可能性が高い。

R A07竪穴住居跡 (平成13年度1・2号住居跡) 第12図・36～40図・68図 写真図版8・9・37・38・58・59

調査区中央部グリッドⅢ A 7・8 c・dに位置する。検出面はⅢ層で、大型の礫(川原石)が散乱する区域である。検出状況は表土(1層)を削いだ後、大型の礫の混入するプランを得て、当初は2つの住居跡が重複すると考え1・2号住居と登録したが、精査の結果2つの地床炉を備える住居跡とした。ただし、2つの住居跡の重複という考えも捨てきれずに、その推定線を破線で図中に入れていた。

南西側に2 mほど離れた位置に、主軸方位が同じR A13がある。

平面形は南東側の隅丸の略長方形を呈し、北側がややくびれる。

規模は長軸9 m～9 m20cm、短軸は南西側で4 m20cm、北東側で5 m10cmを計る。主軸方位はほぼ北西から南東に延びる。

埋土は固くしめる黒褐色シルト中心で、大型の礫(亜円礫)を多く含む。この層は基本層序のⅢ層にあたるものとする。礫の下位から土器片が多量に出土することから人為的堆積と考えられる。

検出された壁高は北西側で10cm前後、もっとも残存度のある北側壁で12 cm前後から最大23cmを計る。南東側は破壊され不明。北西壁や北壁はやや垂直に立ち上がるが、ほかはなだらかであり、特にくびれ部分で顕著で、立ち上がりがないに等しい。

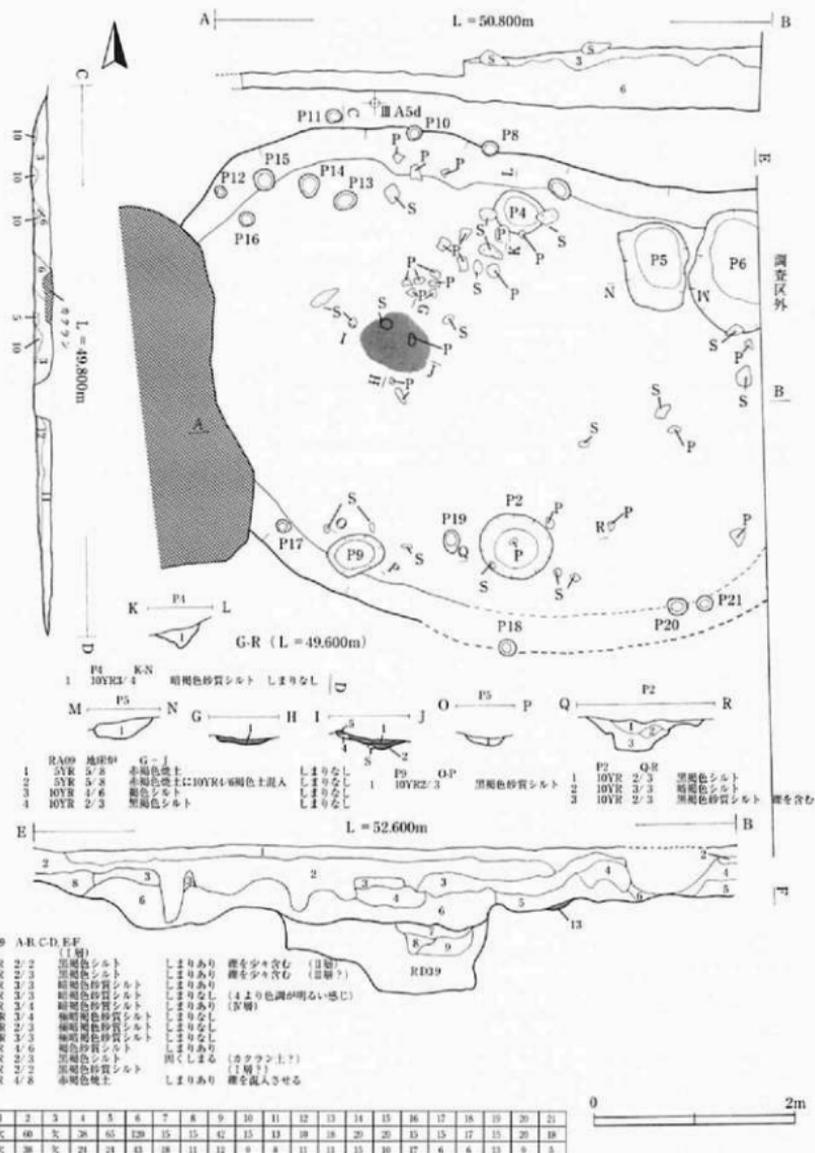
地床炉は2基検出した。1号炉は南西寄りに2号炉は北西寄りに位置する。規模は1号炉が90×80cm、2号炉が60×60cm前後で、焼成の深さは、どちらも10cm前後である。レベルは2号焼土面がやや低い。

床面は、やや小型の礫を含む暗褐色シルトで置かれる。大型の礫が露出している箇所が多く見られ、2号炉側の床面がやや低い以外は、多少うねりはあるものの平坦である。

柱穴や壁柱穴、周溝などの施設は確認できなかった。しかし、周囲(壁面)には40～60cm前後の土坑が5基、長軸1 mを計るR D31があり、関連するかもしれない。

出土遺物は多く、全体で大コンテナ2箱分の出土量となる。北側の擾乱を受けている区域を除き、土器には繊維の混入は認められない。完形に近い土器も多く出土している。大型の礫の下から出土することが多い。

概観すると1本沈線をも主体とする土器(24～27)、または半飛竹管による沈線文を施す土器片(28～30)は少ないが、波状やハート形などの粘土織(細い)を貼り付ける(30～36)やや外反する土器が多い。この粘土織貼付に太いものは少ない。その中で沈線を横く30と粘土貼付の35は同一個体の可能性がある。床面には多くの粗製土器が出土しているが、口唇部を篋状工具で刺突したり、指頭圧痕を施したりして、小波状や前



第13図 RA09 竪穴住居跡

後に波打たせる口縁を持つものが多数を占める。中には竹管を刺突しているものもある。

地文は単節の斜縄文のほかに、網目状器糸文のものや縦線文のものがある。底部には木葉痕などの施文は見られない。

石器は578の石鏃のほか579の石匙、581などのスクレーパー、585の磨石、586などの石製品が出土している。

時期は、縄文時代前期中葉に属する。土器片の出土状況や埋土状況から、後述するRA09よりもやや新しい時期に属すると考えている。

RA08竪穴住居跡（平成13年度 4号住居跡） 第14図・41図・68図 写真図版10・39・59

調査区中央区グリッドⅢA2・3dに位置する。検出面はⅧ層黄褐色砂礫面である。

南東側でRA11と隣接し、西側にはRA12がある。また、北側壁上面には小型の土坑RD22～26が並ぶ。そして北西壁の上位に集石遺構が立ち上がる。当遺構との関連については定かではない。

平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸3m16cm、短軸2m80cmを計る。主軸方位はほぼ北西から南東に延びる。

埋土は、砂質の黒褐色シルトを主体とする。

壁は全体的になだらかに立ち上がる。壁高は5cm～最大12cmである。

地床炉等は確認できず、また近隣に焼土遺構もない。

床面はやや固くしまる程度であるが平坦である。床面剛や梁の上部に径5cm、深さ5～10cmほどの小穴が12基。床面から壁際にかけて径18cm～30cm前後の柱穴状土坑が検出された。

遺物は、土器片と石器1点のみの出土で繊維の混入するものが多数をしめる。73・74は前期初頭の上川名Ⅱ式に比定される土器、75～77は大木Ⅰ式と考えられるものである。588のスクレーパーは削器で材質は頁岩である。

時期は、出土遺物や埋土状況から、縄文時代前期初頭から前葉に属すると考えられる。

RA09竪穴住居跡（平成13年度 5・11号住居跡） 第13図・41～43図・68図 写真図版11・39・40・59

調査区中央区グリッドⅢA4・5dに位置する。検出面はⅧ層であるが、Ⅷ層暗褐色土精査中でプランを得て、Ⅷ層面と確定した形となる。

検出状況は表土（I層）を削いだ後、黒褐色土のプランを得て、5号住居跡として精査を開始した。また、北西側の土器を出土させる暗褐色土の広がりや別の遺構（11号住居）とした。精査の結果、5号住居跡の黒褐色土は近代の鉄製品を含む層（Ⅱ層）であることが判明するとともに、Ⅱ層下に11号住居と同じ暗褐色土の広がりを確認したため、同一遺構と判断した。

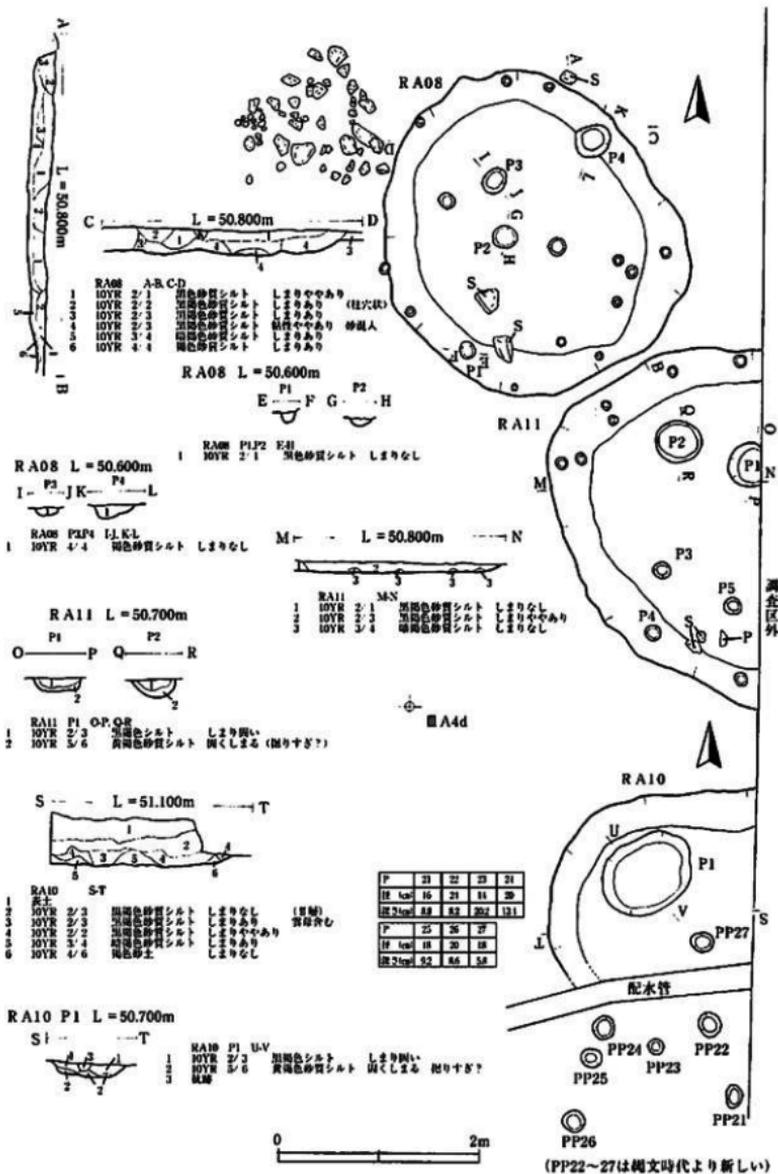
遺構の東側隅が調査区外に延び、西側で掘乱を受ける。近隣では南側でRD38と隣接し、南西に10m離れたところにRA07がある。また、RA07と当遺構の間には双方が重複している土坑が3基並ぶ。

平面形は、楕円形を呈すと推測されるが、詳細は不明。

規模は長軸6～7mを計ると推測される。短軸は4m～4m50cm。主軸方位は西から東に延びるが、やや北西方向に傾く。

埋土は、東側全体に、基本層Ⅳ層となる暗褐色シルトが覆う。ただし西側や南東側では掘乱を受けており、暗褐色土の堆積は薄いか、あるいは確認できない。

壁高は北側壁で最大12cmを計るほかは、すべて5～8cm前後。西壁や南壁は不明。形態はやや垂直気味に



第14図 RA08・10・11 壁穴住居跡

立ち上がる様子が見て取れる。

地床炉は1基検出した。やや西よりの床面中央部に位置する。規模は74×54cm、焼成の深さは、5cm～最大10cmを計り、固くしめる。地床炉上にある際は焼成を受けていない。また、南～北断面に確認された焼土遺構は、屋外炉とも考えられる。

床面は、西側でやや下がる傾向にある。この区域は床面下に、土坑を確認しており、精査の段階でやや掘りすぎている観があるが、それをふまえても若干低くなっていると考えている。

柱穴は押塚中のP1やP2は、床面ではわからなかったが、床面下の土坑精査中に検出したものである。これらの柱穴は、人為的に土坑を埋めた際に柱穴を作り上げたのではないかと推測している。(土層断面から判断した)この2基を含め、径40～60cmほどの柱穴状土坑を5基、隙間を隔る径10cmほどの小穴を13基検出した。P1・2・4・5・9が主柱穴として機能した可能性もある。

多くの遺物が出土しているが、南側の攪乱の土器片が入り込んでいる可能性もある。概観すると土器では器種はすべて漂鉢と考えられ、胎土にやや繊維が混入している？土器も若干数ある。羽状縄文や木目状・網目状隠糸文、縦線文が地文となるもの(78～85)が多く、中にはS字状通顔沈文のある土器片(86)も出土している。また一本沈線を主体とする土器(92～95)があるのはRA07と変わらないが、細いものが少なく太い粘土層を貼り付けている土器(98～101)が多いところが相違点である。突起においてはS字状(波状)のもの以外にボタン状のものがあるが、ドーナツ状などの大柄なものは出土していない。

石器は、他の住居跡と比較すれば出土量は多い。591などの石鎌はすべて黒黒のもの、石匙は5点、スクレーパーは、5点を掲載しているが、削器を合わせると20点ほどの出土となった。床面には磨石や礫石などの礫石器も多く出土し、それらは小型のものが多数を占める。

時期は、埋土状況や遺物出土状況などから、縄文時代前期中葉で、前述したRA07よりも古い時期に属すると考えている。

RA10壁穴住居跡(平成13年度6号住居跡)第14図 写真図版10・60

調査区中央区グリッドⅢA4dに位置する。検出面はⅣ層黄褐色土砂面である。

北西側でRA11と隣接する。遺構の南側で攪乱を受け、半分は調査区外に延びる。

平面形は不整な楕円形を呈すと考えられる。規模は長軸4m前後、短軸3m50cm前後と推定される。

埋土は、砂質の黒褐色シルトを主体とするが、下位に暗褐色土が堆積する。この層はⅣ層であるかどうかは判断できない。

壁はほとんど削平され、残らない。最大壁高は5cm不足である。

地床炉等は確認できず、また近隣に焼土遺構もない。

床面に柱穴状土坑が1基検出された。

出土土器は、調査員の不手際で遺構外として取り上げてしまったために掲載しないが、ⅢA4cグリッド検出面出土338は当遺構に関連する土器の可能性が高い。石器は石匙(610)が出土している。

時期は、出土遺物や埋土状況から縄文時代前期初頭から前葉に属すると考えられる。

RA11壁穴住居跡(平成13年度7号住居跡)第14図 写真図版12

調査区中央区グリッドⅢA3dに位置する。検出面はⅣ層黄褐色砂礫面である。

北西側でRA08と、南側でRA10と隣接し、遺構の半分は調査区外に延びる。

平面形は不整な楕円形を呈すと考えられる。規模は長軸4m前後、短軸3m50cm前後と推定される。主軸方位がほぼ北西から南東に延びるのは、R A08と似る。

埋土は、砂質の黒褐色シルトを主体とする。

壁は全体的になだらかに立ち上がる。壁高は5cm～最大10cmである。

地床伊等は確認できず、また近隣に焼土遺構もない。

床面はやや固くしまる程度であるが平坦である。床面隅や壁の上部に径5～15cm、深さ5～10cmほどの小穴が10基、床面から径30cm前後の柱穴状土坑が2基検出された。

出土遺物は、R A10同様、調査員の不手際で遺構外として取り上げてしまったために掲載しないが、Ⅲ A4cグリッド周辺では繊維の混入した土器片(303・313・327・331)が出土している。

時期は、出土遺物や埋土状況から、縄文時代前期初頭から前葉に属すると考えられる。

R A12壁穴住居跡(平成13年度10号住居跡)第15図・43図・44図 写真図版12・40

調査区中央区グリッドⅡ A10d～Ⅲ A1dに位置する。検出面はⅡ層階である。検出状況は、大木の根の除去中に土器片を包含する土層が確認され、住居跡と推定して登録後、検出した経緯があり、全体的に木根や梢査による破壊を受けている。

東側半分は調査区外に延び、北側はかく乱を受ける。また、南側の壁一部がR D37に切られる。

平面形は隅丸の長方形を呈すと推定する。規模は長軸5m～5m30cmを計り、短軸は不明である。主軸方位はほぼ北西から南東に延びると考えられる。

埋土は、上位に砂質の黒褐色シルト、下位に礫質の黒褐色土を載せる。一部に中掬火山灰らしき灰白色のシルトを確認した。

壁は全体的になだらかにあがる。唯一残る西壁で最大15cmを計る。

焼土遺構は確認されない。

床面は礫に覆われる。床面に柱穴状の土坑13基を検出したが、どれも浅く木板による自然のくぼみの可能性も考えられる。

出土遺物は9号袋2つ分の土器片が得られた。そのうち11点を掲載した。108・109の上川名Ⅱ式土器以外は前期前葉から中葉期の土器で繊維はほとんど確認できない。熱赤文や太い粘土紐を貼り付ける土器(117)、またS字状突起の出土は前述したR A12の出土状況に似る。

時期は、出土遺物から前期前葉から中葉に属し、R A12と同時期と考えられる。

R A13壁穴住居跡(平成13年度12号住居跡) P P01～18 第16図 写真図版13

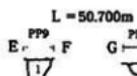
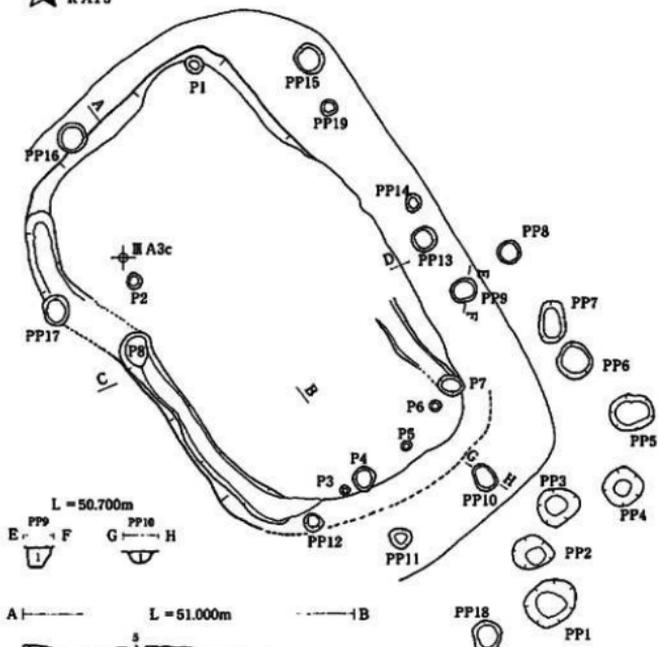
調査区中央区グリッドⅢ A3cに位置する。検出面は表土(Ⅰ層)直下のⅡ層黄褐色土砂面である。

検出状況は、パイプ跡や大木などの根茎を受け、表土直下ということもあり、検出しにくい区域であったが、丁寧に根を除去した結果、2つの土坑を検出した(R D17・18)。この2つの土坑の埋土精査と平面形をたどるうちに、周縁らしき遺構を検出したことから壁穴住居跡と登録して周辺に精査にあたっている。よって検出したのは周縁の一部と北側の壁のみである。

平面形は隅丸の長方形を呈すと推測される。規模は長軸5m前後、短軸3m～3m50cm前後。主軸方位はほぼ北西から南東に延びる可能性が高い。この方位はR A11と似る。

埋土は、砂質の黒褐色シルトを主体とするが、暗褐色系の土層も見られる。

▲ RA13



A----- L = 51.000m -----B



C----- L = 51.000m -----D



	RA13	A-H C-D			
1	MYR	2/1	褐色砂礫質シルト	しまり弱い	本層含む
2	MYR	2/3	褐色砂礫質シルト	しまりややあり	本層含む
3	MYR	2/2	褐色砂礫質シルト	しまりなし	本層含む
4	MYR	2/4	褐色砂礫質シルト	しまりややあり	
5	MYR	2/2	褐色砂礫質シルト	固くしまる	
6	MYR	2/2	褐色砂礫質シルト	しまりややあり	粘土質
7	4と同Cで(2)りしまりあり				腐植土ややあり
8	MYR	4/4	褐色細粒シルト	しまりなし	(厚層?)
9	MYR	2/2	褐色細粒シルト	しまりあり	
10	MYR	2/1	褐色細粒シルト	しまりなし	
11	MYR	4/3	灰い褐色細粒シルト	107層の褐色シルトを粒状に含む	固くしまる (107層?)
12	MYR	2/3	暗褐色シルト	固くしまる	(2と同C層小?)

1 RA13 PP9 E-F 暗褐色シルト 上位に中間状のシルト混入 しまりあり

1 RA13 PP10 C-H 褐色シルト しまりなし

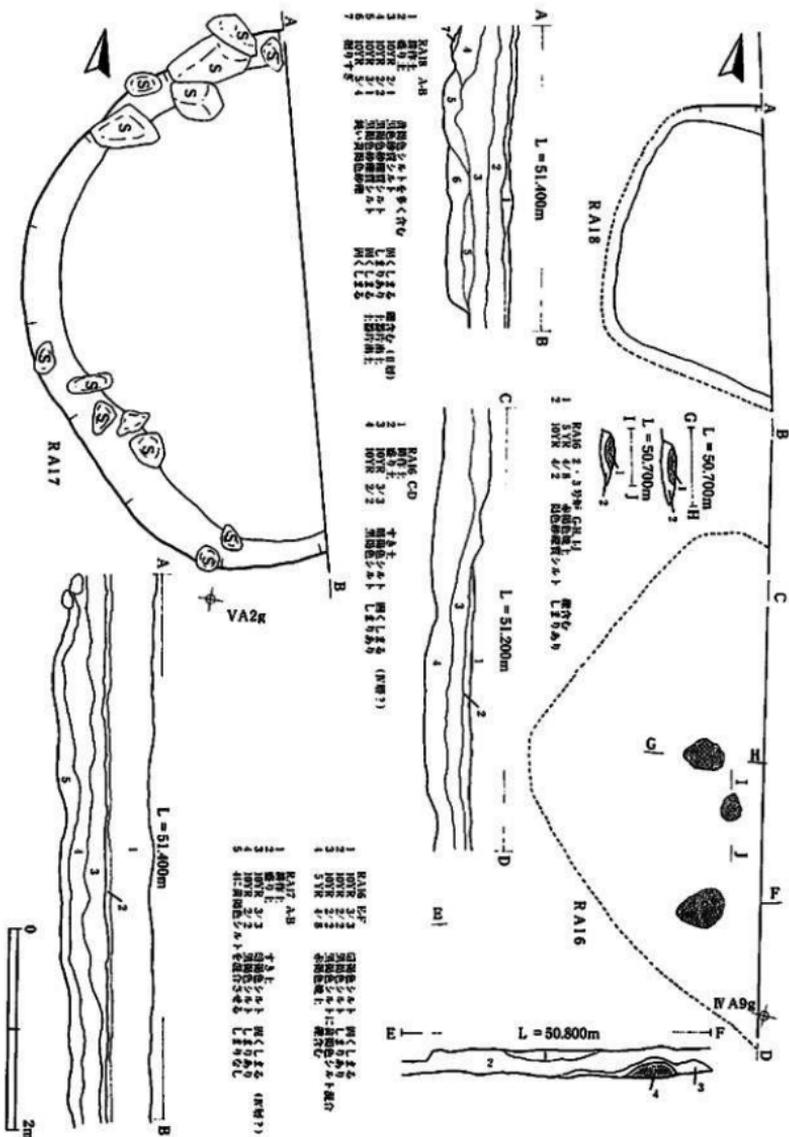
RA13

F	1	2	3	4	5	6	7	8
H (cm)	15	15	10	22	30	19	20	20
R (cm)	20	19	7	7	10	9	21	12

F	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
H (cm)	30	25	40	40	30	25	20	25	24	30	18	20	21	25	30	28	30	
R (cm)	21	7	12	16	11	21	16	23	20	12	10	11	9	12	20	16	24	15



第16図 RA13 竪穴住居跡



第18圖 RA 16・17・18 壁穴住居跡

残は、唯一残る北側壁高が10cmを計り、ほぼ垂直に立ち上がる。

地床炉等は確認できず、また近隣に焼土遺構もない。

床面は木炭の攪乱や、R D17・18を完掘したことから全体については不明であるが、北側半分を見た限りでは、平坦である。西壁際と東壁一部には、最大幅20cm、深さ10cmほどの周溝が通る。床面と思われる範囲内には径10～20cmの小穴7基（P1～7）が、周囲には径15cm～40cmの柱穴状土坑が17基（P1～17）検出された。これらのことから拡張された建て替えか、上面にもう1棟あった重櫓かもしれない。

出土遺物は登録していない。しかし床面で検出された土坑出土の土器片のうち223は、当遺構に属するものと考えられる。

時期は、縄文時代前期前期から中葉に属すると考えられる。

R A14 堅穴住居跡（平成13年度 13号住居跡）第17図・44図 写真図版13・41

調査区中央区グリッドⅢA 8・9 c・dに位置する。検出面はⅣ層で、R A07と同様の検出状況である。当初、土器は出土するが攪乱が激しく、礫も大きいことから堅穴住居とは判定しにくかった。しかし、土器の出土が同一の時代に限定されること、北側に壁の立ち上がりを確認できることから堅穴住居跡と認定している。

北東側でR A07と隣接する。遺構全体において攪乱が激しい。

平面形・規模及び主軸方位は不明であるが、R A07と同様の遺構であると推定する。

粗土は、礫質の黒褐色シルトの単層である。大型の礫を多量に含む。

壁は北東壁においては、ほぼ垂直に立ち上がる。最大壁高は10cm不足である。

地床炉等は確認できず、また近隣に焼土遺構もない。

床面はR A07よりも礫の露出が激しい。柱穴及びその他の施設は確認していない。

出土遺物は中コンテナで1つ分の土器片を得た。ただし西側半分が攪乱されており、当遺構の出土遺物ではない。しかし圧倒的に前期中葉期に属するものが多い。119は表裏に縄文を施しているが繊維の混入が認められず、断面も整形されているかのようで、土製品と思われる。一本沈線为主体とする土器(121)や半截竹管による沈線为主体とする土器(123)、太い粘土紐と細い粘土紐を貼り付ける土器(124)などが出土している。粗製土器では綾織り文の体部を持つ土器が目立つ。

時期は、出土遺物からR A07と同じ縄文時代前期中葉に属すると考えられる。

R A15 堅穴住居跡（平成13年度 14号住居跡）第15図 写真図版14

調査区中央区グリッドⅢA 6・7 dに位置する。検出面はⅣ層黄褐色砂礫面である。

北側でR A09と隣接し、南西側にはR A07がある。また、遺構内にはR D21・28・30がある。検出状況は、上記の土坑完掘後に、だめ押しを行った結果、一定範囲内に柱穴状の土坑が確認され、土坑の周囲から住居跡が検出される例が多いことから、住居跡と認定登録した。

平面形・規模は不整な楕円形を呈し、長軸4～5m、短軸3m50cmと推測される。主軸方位はほぼ北西から南東に延びるであろう。

粗土・壁ともに不明である。地床炉等は確認できず、また近隣に焼土遺構もない。

床面は、土坑完掘のために定かではない。遺構の決め手となった柱穴状土坑は12基検出されたが、径は8～27cmと様々である。深さは最大で32cmを計る。

土坑との関連は判別したいが、3基の土坑の掘土状況や、R D30の掘土上位から半円形の土器が出土していることから、R A09と同様に土坑を埋めた後に作られた住居跡ではないかと推測する。

出土遺物はない。ただし上記の半円形の土器(234)は当住居跡に関わるものと推定する。

時期は、縄文時代前期前葉から中葉に属すると考えられる。

R A16竪穴住居跡(平成13年度15号住居跡)第18図・45図 写真図版14・41・60

調査区中央区グリッドⅣA 8 fで検出した。検出面はⅡ層下である。北側にR A18がある。比較的多くの土器片が出土し、焼土遺構も検出した。しかし遺構の範囲はつかめず、礎を取り除いて壁状の小さな立ち上がりをも認める範囲を住居跡と推定した。東側半分は調査区外に延びる。

平面形・規模は楕円形もしくは隅丸の長方形を呈し、短軸は3m50cm前後と推定する。長軸は不明。

掘土は、大型の礎の混入する黒褐色土主体で、基本層のⅥ層に当たる可能性が高い。

本来あったであろう壁は検出できなかった。

床面と考えられる中央部とやや西側に礎を多く含む焼土遺構3基を検出している。地床がであろうか。

床面は本来、大型礎の上部の黒褐色土面であった可能性があるが、近世層Ⅱ層によって攪乱を受けている。

出土遺物は、Ⅱ層下位からの土器を含めているが、繊維の混入する土器片がほとんどである。上川名Ⅱ式に比定される土器(131・132)や大木1式と考えられるもの(133~135)ほかが出土している。また、石器もⅡ層下から出土した可能性があるが、石匙4点が出土した。

時期は、Ⅱ層による攪乱を受けていることから判然としませんが、前期前葉に属する遺構と捉えている。

R A17竪穴住居跡(平成13年度16号住居跡)第18図・45図 写真図版15・41

調査区南区グリッドⅤA 1 f・gで検出した。検出面はⅡ層下である。釘や鉄滓の出土するⅡ層を上から徐々に下げたところ、比較的大きな土器片の出土する範囲を検出し、住居跡と登録した。遺構の一部は東側に延びる。

平面形・規模は楕円形もしくは隅丸の長方形を呈し、長軸は5m前後と推測する。短軸は不明だが4m前後と考える。主軸方位はほぼ北西から南東に延びることが考えられる。

掘土は、基本層のⅥ層に当たる可能性のある黒褐色シルトの単層で、下位には褐色礫質シルトがあるが、この層が本来の床面と考えている。

壁は北側断面に20cmほどの緩やかな立ち上がりを確認できる程度で、ほかの壁高は5cmほどである。

地床等はない。

床は、遺構中央部に大型の礎が散在するために確認できなかった。

出土遺物は、繊維の混入の認められない無糸土器が出土しており、142はS字状連続沈文の土器片である。また、143は押し引き文を施す土器でやや繊維が混入しているかのようである。

時期は、遺物の出土状況から前期前葉から中葉に属すると考えており、遺構の規模や土器からR A12に近い時期段が与えられる。

R A18竪穴住居跡(平成13年度17号住居跡)第18図 写真図版15

調査区中央区グリッドⅣA 7 fで検出された。検出面はⅡ層下で地山面に近い。南側にR A16がある。東側半分が調査区外に延びる。検出状況はⅡ層を取り除いたときに、南-北断面に壁状の立ち上りを確認し

たことから小型の住居跡と認定し登録した。よって遺構の西側や南側は推定線となっている。

平面形・規模は、楕円形もしくは方形と推測され、北壁から南壁推定線までは2m60cmを計る。

埋土は、Ⅴ層と考えられる砂礫質の黒褐色土主体で、南側に黄褐色の砂礫が覆う。

壁は唯一検出された北側壁で10cmを計り、なだらかに立ち上がる。

地床炉等はない。

床面は砂礫で覆われる。R A 16・17に見られる大型の礫はない。

出土遺物はない。しかし、近隣からは繊維を混入させる土器片(311など)が出土している。

時期は、埋土や周辺の土器出土状況から前期初頭から前葉に属すると推測する。

R A 19型穴住居跡(平成13年度18号住居跡)第19図・45図・69図 写真図版15・42・60

調査区中央区グリッドⅣA 6 fに位置する。検出面はⅤ層黄褐色土砂面である。検出状況は、グリッド周辺で土器を多く出土させていたが、礫が多く検出は困難を極めた。そこで礫を取り除いて調査を継続した結果、検出されたものである。北側にR A 22・26がある。西側半分が調査区外に延びる。

平面形・規模は隅丸の長方形を呈し、規模は長軸3m、短軸2m50cm程度と推測される。主軸方位はほぼ西から東に延びるが、やや北よりに傾く。

埋土は、大型の礫が多く混入する黒褐色シルトで、基本層序のⅥにあたと推測する。南-北断面の4と5の境に焼土が検出された。当遺構は2つの住居跡が重複している可能性がある。この2つの層のうち4層が比較的土器片の出土は多いが、若干Ⅴ層の遺物(釘や鉄滓など)が入り込むことから、この焼土を持つ遺構が縄文時代とは言い切れない。以下は5層を埋土とする遺構の説明とする。

壁は北側において、ほぼ垂直に20cm立ち上がることが確認できた。ほかの壁はなだらかである。

地床炉等は確認できず、また近隣に焼土遺構もない。

床面は礫に覆われるが、大型の礫の露出は少ない。床面隅や壁際に2基の柱穴状土坑が検出された。どちらも浅い。

出土遺物は袋1つ分の土器を得た。そのうち7点掲載している。144を除きすべて繊維を含むものである。145・146は上川名Ⅱ式に比定される土器、147～150は大本1式と考えられる土器片であるが、150は2b式に属する可能性もある。石器は614・615の石鏃、616～618の3点の石匙、頂部に敷き板のある罎(619)が出土している。

時期は、出土遺物や埋土状況から、縄文時代前期初頭から前葉に属すると考えられる。埋土に焼土を備える上面の遺構は縄文時代前期中葉から近世にかけての遺構で幅は広がるが、近世の鍛冶炉に関連する遺構の可能性が高いと見ている。

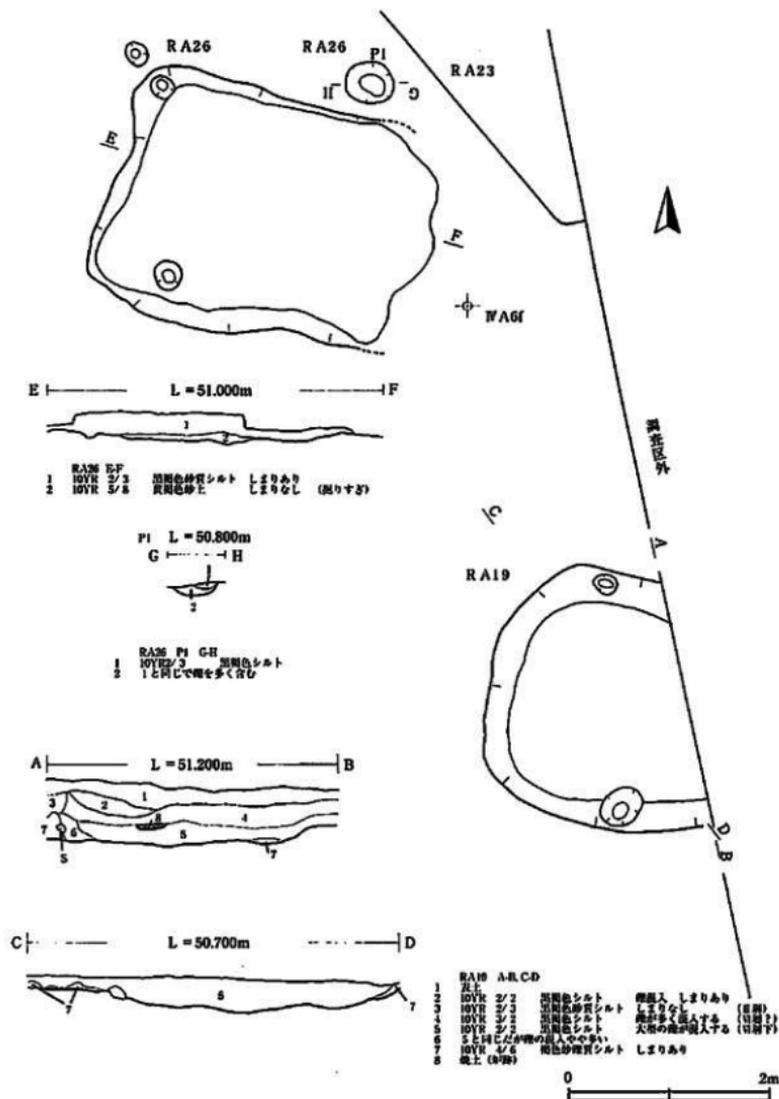
R A 20型穴住居跡(平成13年度19号住居跡)第20図・46図・69・70図 写真図版16・42・60

調査区中央区グリッドⅣA 2・3 dに位置する。検出面はⅤ層黄褐色土砂面である。

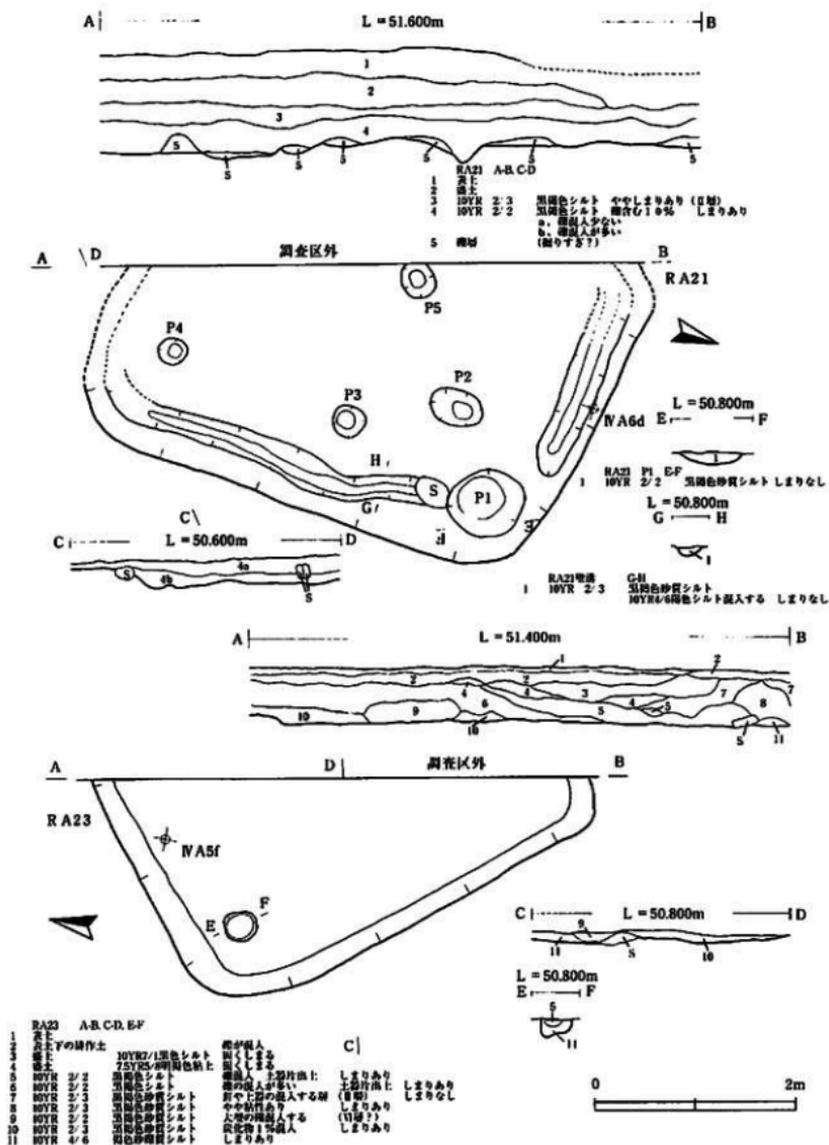
北東側でR A 26と隣接し、床面下にはR A 27がある。そして南壁の上位に集石土坑(R D 45)があるが、当遺構よりやや古い遺構として位置づけられている。

平面形は隅丸の略長方形を呈し、規模は長軸4m64cm、短軸3m92cmを計る。主軸方位はほぼ北西から南東に延びる。

埋土は、礫を含む砂質の黒褐色砂質シルトを主体とし、下位(床面上部)に中礫火山灰を含む暗褐色シル



第19図 RA 19・26 竪穴住居跡



第21圖 RA 21・23 竈穴住居跡

トを載せる。部分的に柱穴状小土坑の断面が観察できるが、近世以降の遺構である可能性が高い。

壁は北側と東側がやや垂直気味に、西壁と南壁がなだらかに立ち上がる特色を持つ。壁高は北側で12～22cm、東側が6cm前後、西側比高は13～15cmを計り、南壁は長さ50cmのみ確認され、3cmほどの高低差でしかない。

地床炉1基を検出した。床面中央部のやや西よりに位置する。焼成の規模は46×36cmで、深さは最大で6cm、ややしる。大きさ10～15cmの礫が周囲に配されているかのようにあるが、焼成を受けていない。

床面はやや固くしる程度であるが平坦である。南西隅や北側に大型の礫が露出する。周溝は検出できなかった。

床面や壁沿いに合計19基の柱穴状小土坑を検出した。径は20～30cmである。径や深さにやや規則性のあるP10・13・15・18が主柱穴(壁上位)になるであろうか。そうするとP3・6・17や16も関連してくると考えられる。

出土遺物は、RA07・09について多い。土器は繊維を含むものがほとんどで、早期に属する土器片もある。151・152は早期中葉の貝殻文を施す土器、153～155は表裏縄文を施す土器であるが繊維が混入しない。155の断面観察からすべて円盤形土製品の可能性もある。またこの表裏縄文土器は、当遺構南側に位置する集石土坑(RD45)の埋土上位からも出土するが、その流れ込みの可能性もある。156は上川名Ⅱ式に比定される土器で、157～164まではループ文や羽状縄文に代表される大木1式の土器と考えられる。165は大木2a式か？石器は620～622の石鎌、623～625の石匙のほかスクレーパーが出土している。スクレーパーに関しては掲載は4点のみであるが、実際の出土量は多く、他の住居跡にみられない特色といえる。多くの剥片石器を出土させる例に、礫石器の出土がないことも指摘できる。

時期は、出土土器片のうち、早期中葉の土器片を流れ込みと判断し、出土遺物や埋土状況から縄文時代早期末葉から前期初頭に属すると考えられる。

RA21型穴住居跡(平成13年度20号住居跡)第21回・46回 写真図版17・42

調査区中央区グリッドⅣA6c・dに位置する。検出面は冒険跡面である。

西側半分が調査区外に延びるが、渠道が縦走しており、破壊されている可能性が高い。

平面形・規模は隅丸の長方形を呈し、規模は長軸5m前後と推測される。短軸は不明。主軸方位はほぼ北から南に延びる。

埋土は、礫を多く含む黒褐色シルトを主体とし、基本層Ⅵ層に当たるのではないかと考えている。

壁は、削平され検出できなかったが、南～北断面では南側でやや垂直気味に立ち上がることが見える。

地床炉等は確認できず、また近隣に焼土遺構もない。

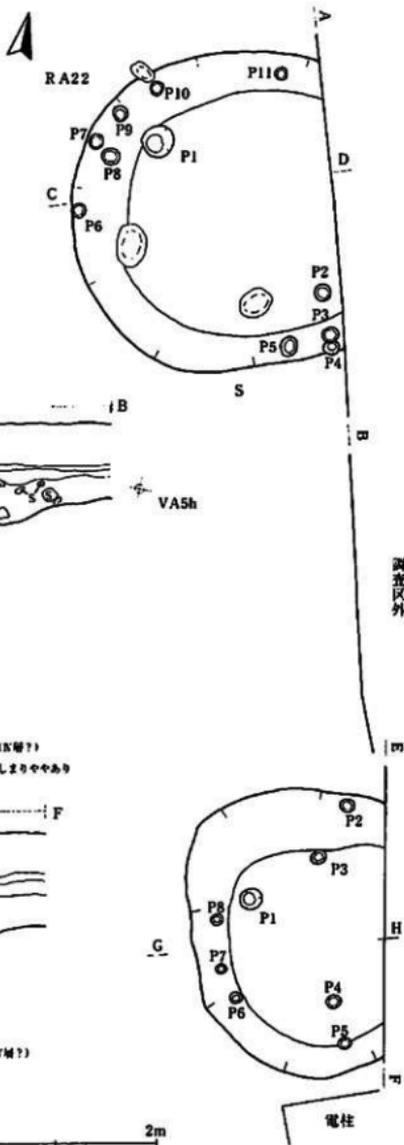
床面は下げすぎているが、大型の礫の露出が甚だしい。遺構の認定の根拠となった周溝が、北・東壁際で検出された。また5基の柱穴状小土坑が検出されたが、詳細は不明である。

出土遺物は、繊維を含む土器片と含まないものと約半ずつの出土で、大型の破片には繊維を含まないようである。しかし出土状況は、埋土上層に攪乱層Ⅱ層が厚く堆積することから、時期の特定をする決定打とはならない。

時期は、上記の理由から、縄文時代前期初頭から中葉にかけての遺構と考えている。

R A22											
F	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
径 4m	20	18	14	11	10	12	14	16	15	12	12
径 2m	13	19	5	9	4	25	19	11	12	8	7

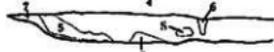
R A24								
F	1	2	3	4	5	6	7	8
径 4m	20	12	12	11	10	11	10	20
径 2m	11	17	10	7	4	3	7	4



A ——— L = 51.400m ——— B

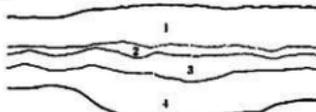


C ——— L = 50.800m ——— D

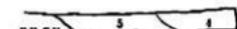


R A22 A-B-C-D
 1 腐植土
 2 灰土上
 3 HOYR シ/2 凝褐色シルト 固くしまる 火山灰含む1% (灰層?)
 4 HOYR シ/2 凝褐色シルト 固くしまる
 5 HOYR シ/2 凝褐色シルトに10YR5-6黄褐色砂土混入 (10%) しまりややあり

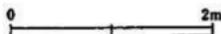
E ——— L = 51.400m ——— F



G ——— L = 50.600m ——— H



R A24 E-F-G-H
 1 腐植土
 2 灰土上
 3 HOYR シ/3 凝褐色シルト 固くしまる 火山灰含む1% (灰層?)
 4 HOYR シ/2 凝褐色シルト 固くしまる
 5 HOYR シ/2 凝褐色シルトに炭化物7%含む しまりあり
 6 HOYR シ/2 凝褐色シルトに砂向含む10% 固くしまる
 7 不明



第22図 R A 22・24 壁穴住居跡

R A 22 壘穴住居跡（平成 13 年度 21 号住居跡）第 22 図・46 図・70 図 写真図版 18・42・60

調査区南側グリッド V A 4 h に位置する。検出面はⅥ層黄褐色砂面である。

南東側に同時代と考えている R A 23 があり、西側には一連の近世焼土遺構が広がる。東側の一部が調査区外に延びる。

平面形・規模は不整な円形を呈し、径 3 m 10cm～3 m 20cm を計ると推測される。

埋土は、砂質の黒褐色シルトを主体とする。

壁は全体的になだらかにあがる。北側で壁高 20cm を計る。

地床が等は確認できず、床面は固くしめるが、ややお椀形に中央部が沈む。床面隅や壁の上部に径 5 cm、深さ 5～10cm ほどの小穴が多数検出されているが、図内には径 10cm 以上のものを組み入れた。

遺物は、9 号袋 2 つ分の土器片と石器 1 点を得た。繊維を混入させる土器が多い。174～176 は上川名Ⅱ式に比定される土器、177～179 は大木 1 式に比定される土器である。

時期は、出土遺物や遺構の規模などから、縄文時代前期初頭から前葉に属すると考えられる。

R A 23 壘穴住居跡（平成 13 年度 23 号住居跡）第 21 図・46 図 写真図版 19・43

調査区中央区グリッド V A 3・4 f に位置する。検出面はⅥ層礫層面である。

北側に R D 40・41・45 があり、土坑を挟む形で R A 18 がある。東側半分が調査区外に広がる。

平面形・規模は隅丸の長方形を呈し、長軸 4 m 50cm を計る。短軸は不明であるが 3 m～3 m 50cm を計る。主軸方位はほぼ北西から南東に延び、長軸線は R A 18 とほぼ同一となる。

埋土は、礫の混入する黒褐色シルトを主体とし、基本層Ⅵに当たると考えている。

壁は全体的に削平され（掘りすぎを含めて）、定かではないが、南～北断面から、壁高は 5 cm 程度の立ち上がりが見られる。

地床が等は確認できず、また近隣に焼土遺構もない。

床面は礫に覆われる。床面北東隅に柱穴状土坑が 1 基検出された。

遺物は、12 号袋半分の土器片が出土している。繊維を含む土器片が多い。180 は上川名Ⅱ式に比定される土器、181～185 は大木 1 式に比定される土器である。186 は大木 2 b 式の土器と考えている。

時期は、出土遺物や埋土状況から、縄文時代前期初頭～前葉に属すると考えられる。

R A 24 壘穴住居跡（平成 13 年度 24 号住居跡）第 22 図・47 図・70 図 写真図版 18・43・60

調査区南側グリッド V A 5 h に位置する。検出面はⅥ層黄褐色砂礫面である。

南東側に同時代と考えている R A 21、南側に R A 02 がある。東側の一部が調査区外に延びる。

平面形・規模は不整な円形を呈し、径 2 m 90cm 前後を計ると推測される。

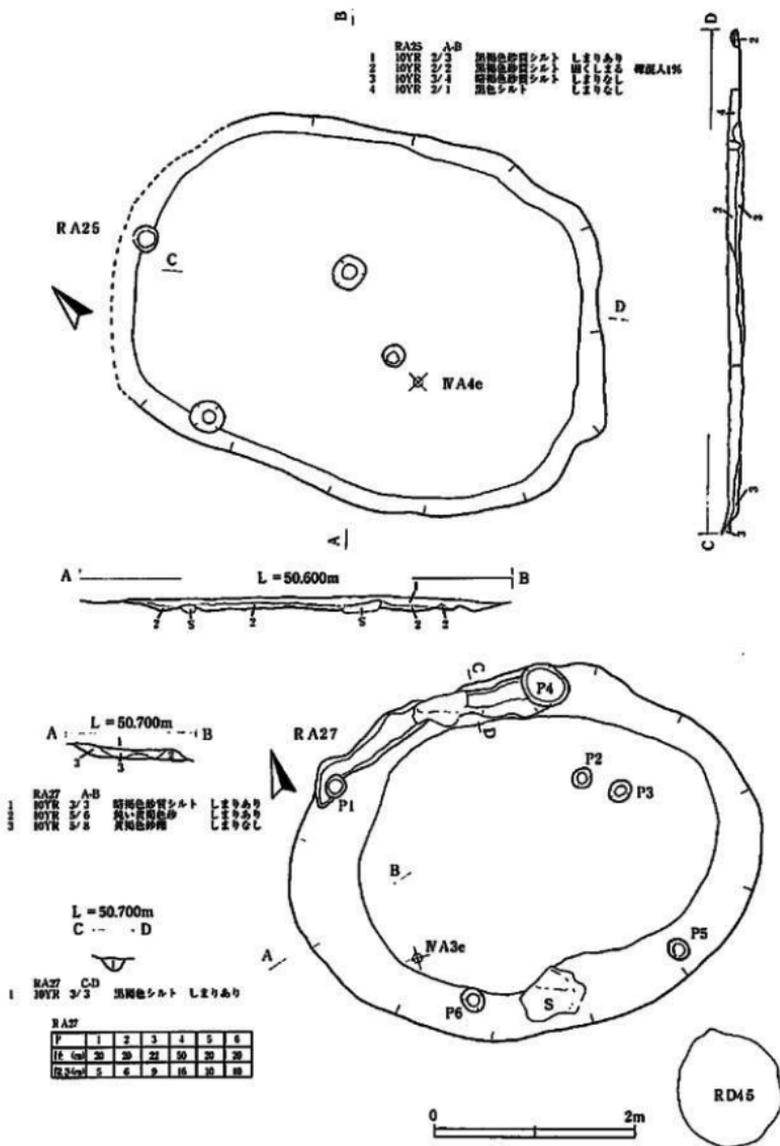
埋土は、砂質の黒褐色シルトを主体とする。

壁は全体的になだらかに立ち上がる。南側で壁高 15cm を計る。

地床が等は確認できず、床面は固くしめる。床面隅や壁の上部に径 5 cm、深さ 5～10cm ほどの小穴が多数検出されているが、図内には径 10cm 以上のものを組み入れた。

出土遺物は少なく、187～189 の斜縄文は大木 1 式と考えている。石器では 631 の石匙が出土した。

時期は、出土遺物や埋土状況また遺構の形状から、縄文時代前期初頭から前葉に属すると考えられる。



第23図 RA25・27 竪穴住居跡

RA25壁穴住居跡（平成13年度25号住居跡）第23図 写真図版19・43

調査区中央区グリッドⅣA4・5d・eに位置する。検出面はⅤ層際層面である。

平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸4m92cm、短軸3m94cmを計る。主軸方位はほぼ北西から南東に延びる。

埋土は、礫を含む黒褐色シルトを主体とする。下位に暗褐色シルトが載るが、中層火山灰は確認できなかつた。

壁は、ほとんど削平されている。南・西壁に長さ5cmほど残る痕は、なだらかに立ち上がる。

地床等とは確認できない。ただ東壁から1m程離れたところに薄い焼土を検出している。（断面図参照）床面は礫に覆われる。床面隅や壁の上部に4基の柱穴状土坑を検出した。

遺物は、9号袋半分出土土器を得た。そのうち4点を掲載した。190は表裏縄文を施す土器片で、このグリッドからは遺構外でも比較的多く表裏縄文を出土させる特色がある。191は大木1か2式土器、192は早期末葉の土器と考えられる。

時期は、出土遺物状況が曖昧で時代は不明であるが、早期末葉～前期初頭に属する可能性が高い。

RA26壁穴住居跡（平成13年度26号住居跡）第19図・47図・70図 写真図版20・43・60

調査区中央区グリッドⅣA5eに位置する。検出面はⅤ層際層面である。東側でRA22と隣接し、南東に3m離れてRA17がある。

平面形は隅丸の長方形を呈し、規模は南側が削平されており、推定で長軸3m50cm前後を計る。短軸2m40cm。主軸方位はほぼ西から東に延びるが、やや北側に傾く。

埋土は、礫を含む黒褐色シルトを主体とする。Ⅴ層であるかどうかは判断できない。

壁は、ほとんど削平されている。残る壁高は5cm程度であり、形状は判別できない。

地床等とは確認できない。床面は礫に覆われる。床面隅や壁の上部に4基の柱穴状土坑を検出した。

出土遺物は少ない。繊維の混入する羽状縄文土器（194）や繊維の混入しない土器が混在する。石器では632の石匙のみの出土である。

時期は、出土遺物状況や埋土状況が曖昧で判別しがたく、前期初頭から中葉に属する可能性が高い。

RA27壁穴住居跡（平成13年度29号住居跡）第23図 写真図版20

調査区中央区グリッドⅣA2・3eに位置し、RA18の床面下からの検出である。

北側でRA26と隣接する。また南にはRD45があり、RA18よりは当遺構の方が関連性が高いと考えられる。

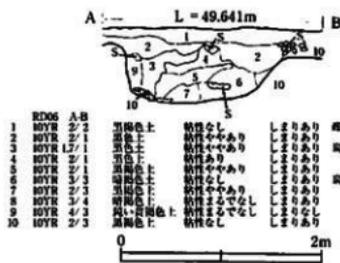
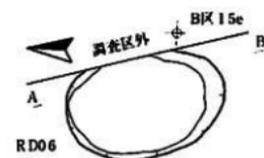
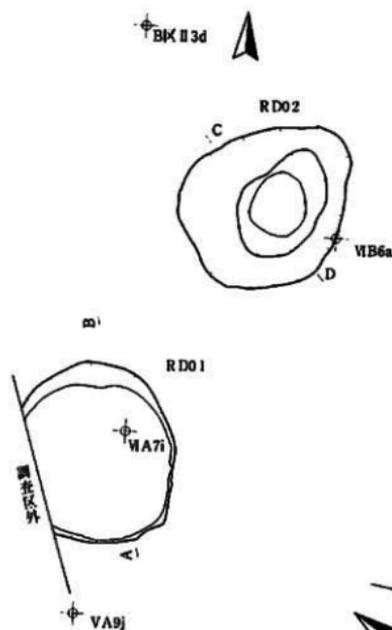
平面形は楕円形を呈し、規模は長軸4m62cm、短軸3m50cmを計る。主軸方位はほぼ西から東に延びる。

埋土は、褐色砂のほぼ単層である。

壁は全体的になだらかに立ち上がる。壁高は3～5cm足らずである。

地床等とは確認できず、また近隣に焼土遺構もない。

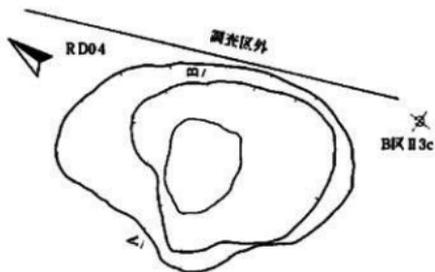
床面は礫層に覆われ、巨岩が露出する。北側壁際に幅30～40cm、深さ最大14cmの壁溝状の溝跡を検出した。また、柱穴状の小土坑が6基確認できるが、RA18に関わるもの可能性もある。



RD01
A— L = 50.667m —B



RD02
C— L = 50.500m —D



A— L = 50.200m —B



第24図 RD01・02・04・06 土坑

出土遺物はない。

時期は、堀土状況から、R A 18より古い縄文時代早期の遺構と考えられる。

(2) 土坑

2年間の調査で検出された縄文時代の土坑は45基である。中には遺物が出土していないものも含まれるが、堀土状況などから判断した。また、大きさや機能における分類はしていないが、その特色については各遺構で考察している。

本文では検出順に述べている。しかし、図版では必ずしも検出順となっておらず、区域ごとの土坑を一括して載せている。それは、土坑の特色を明示するためであり、特に住居跡の周辺ごとにまとめることを心がけた。

R D 01土坑 第24図 写真図版21・43

調査区南側グリッドV A 2 hに位置する。検出面は褐色土層面である。西側を築道に切られる。

平面形・規模は不整な真円形を呈し、開口部径は1 m 80cm、底部径は1 m 30cmである。深さは北壁高27.6cm、南壁高60.8cmで、断面形は逆台形状である。

堀土は、しまりのない黒褐色シルト（V層?）のほぼ単層で、中位と下位に30cm大の川原石を含む。下位のは人為的に置かれた説がある。

遺物は、堀土の黒褐色シルト中から繊維が多く混入する羽状縄文土器が2点出土している。

時期は、堀土等の状況から縄文時代前期前期に属する可能性が高い。

R D 02土坑 第24図 写真図版21

調査区南側グリッドV A 1 iに位置する。検出面は暗褐色土層面である。南にR D 01がある。

平面形・規模は不整な楕円形を呈し、開口部径は1 m 84cm × 1 m 54cm、底部径は50～60cmである。深さは南西壁高55.6cmが最大である。断面形は逆三角形である。

堀土は、しまりのない黒褐色シルトを主体とするが、下位で砂質の黄褐色土が入り込む。

出土遺物はない。

時期は、堀土等の状況から縄文時代前期前期に属する可能性が高い。

R D 04土坑 第24図 写真図版21

調査区南側グリッドV B 4 aで検出された。検出面は褐色土層面である。

平面形・規模は、不整な楕円形を呈し、開口部径は2 m 94cm × 1 m 74cm、底部径は2 m 04cm × 1 m 54cmである。深さは最深部で60.8cmを計り、断面形は逆台形状である。

堀土は、しまりのある黒褐色シルトがレンズ状に入る自然堆積で、堀土下位に砂質シルトを含む。

出土遺物はない。

時期は、堀土等の状況からR D 01と同時期の、前期前期に属する可能性が高い。

R D 06土坑 第24図 写真図版21

調査区南側グリッドV A 9 iに位置する。検出面は褐色土層面である。東側の一部が調査区外に延びる。

平面形・規模は不整な楕円形を呈し、開口部径は1 m58cm×1 m前後、底部径は1 m36cm×98cmである。深さは北側で最大52cm、西側壁高で28～32cmを計り、断面形は皿状である。

埋土は、黒褐色土を上位に、下位に暗褐色土を持つ。一部炭化物や焼土を含む層があり、その層には20cm大の礫を含む。R D01と同様に、底部の礫は人為的に置かれたか上位にあったものが落ちた殻がある。

出土遺物はない。

時期は、埋土等の状況から、R D01と同時代の、前期前葉に属する可能性が高い。

R D07土坑 第25図 写真図版22

調査区南側グリッドV B 6 aに位置する。検出面は褐色土層面で、R A04の床面でもある。R A04の西壁から2 m50cm、推定の東壁から、約1 mの位置にある。

平面形・規模は真円形を呈し、開口部径は1 m20cm、底部径は58cm、深さは東壁高43.5cmである。断面形はピーカー状を呈す。

埋土は、黒褐色土を上位に、下位に暗褐色土を持つ。上位の黒褐色土中央部に30cm大の礫を含む。その礫と南壁上部にある礫は自然状態にはみられず、なんらかの意図があって配置された可能性がある。

出土遺物はない。

時期は、特定できないがR A04との関わりがあると考えられる。しかしその根拠はなく、ここでは縄文時代前期の遺構としておく。

R D08土坑 第25図 写真図版22

調査区南側グリッドV B 6 aに位置する。検出面はR D07と同じR A04の床面である。R A04の西壁から約1 m、南壁から2 m40cmの位置にあり、R D07の南西に位置する。

平面形・規模は不整な楕円形を呈し、開口部径は1 m24cm×1 m、底部径は30cm前後、深さは最大で30cmを計る。断面形は皿状を呈す。

埋土は、砂質の暗褐色土を主体とする。上位にR D07同様の30cm大の礫を含む。

出土遺物はない。

時期は、特定できないがR A04との関わりがあると考えられる。しかしその根拠はなく、ここでは縄文時代前期の遺構としておく。

R D10土坑 第25図・47図 写真図版22・43

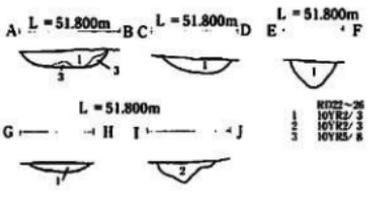
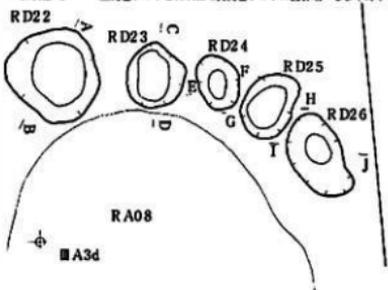
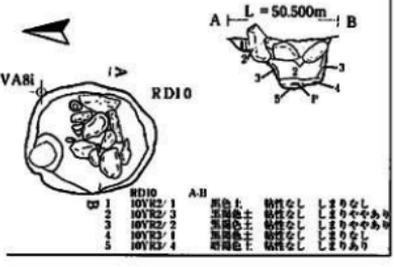
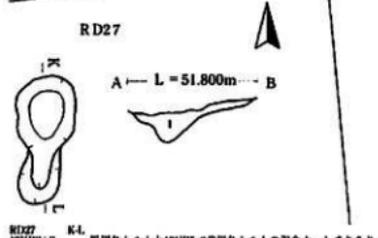
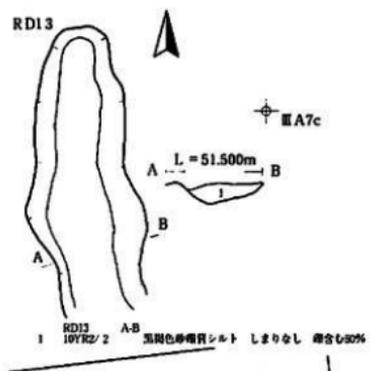
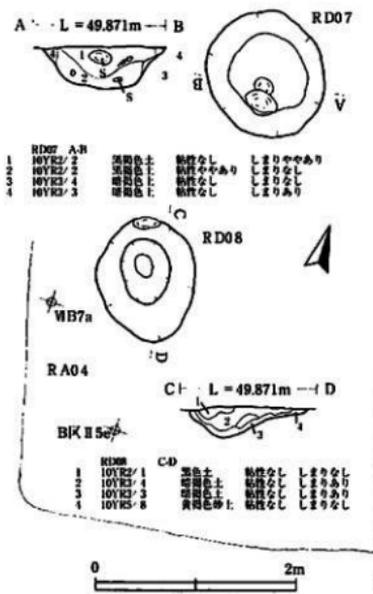
調査区南側グリッドV A 7 hに位置する。検出面は褐色土層面である。R A03の南壁から約1 m離れる。また、R A05の壁際を巡る小穴内にあり、当遺構が住居跡に伴うとも考えられるが、定かでない。

平面形・規模は不整な長円形を呈し、開口部径は1 m08cm～1 m20cmで、礫が配置される中段の底部径は98cm～1 m、最底部は40cm前後である。深さは50cm前後を計る。

断面形は、配石部までは皿状、その下位はピーカー状を呈す。

埋土は、礫の下部は黒褐色土が覆う人為的堆積である。礫は40cm大の礫をコの字型に配置し、その中に包むように10～20cm大の礫を設置している。

床面上では200の深鉢が、埋土の黒褐色土中から201の深鉢が出土している。そのうち200の土器片はサイドを笠形しているかのように切れ口が平らで、R A03出土の土器片と接合している。意図的に200の土器片を破



第25図 RD07・08・10・13・22~27 土坑

壊し埋め、その上に201を埋めていると推定する。

時期は、出土土器から、R A03と同時期の縄文時代前期前葉に属する。

R D13土坑（平成13年度 3号土坑）第25図・47図 写真図版23・43

調査区中央区グリッドⅢA7bに位置する。検出面は層層礫面である。

平面形・規模は溝形を呈し、溝幅は上場最大1m20cm、下場最大62cmを計る。深さは最大で30cm。断面形は皿形である。

埋土は、礫を含む黒褐色シルトの単層で、一部に中礫火山灰らしき灰白色のシルトを確認した。

遺物は、上川名Ⅱ式に比定される土器の体部（202）が出土している。

時期は、埋土等の状況から縄文時代前期前葉に属する可能性が高い。このような溝状土坑が周囲にあり（実測していない）住居跡の一部である可能性も考えられる。

R D14土坑（平成13年度 4号土坑）第26図・47図 写真図版23・43・60

調査区中央区グリッドⅢA3・4c・dに跨って位置する。検出面は層層黄褐色砂面である。北に2m離れてR A12がある。

平面形・規模は不整な楕円形を呈し、開口部径は2m02cm×1m34cm、底部径は1m60cm×1m10cmである。深さは北壁高24.7cm、西壁高20.6cmで、ほかは10cm程度。断面形は皿形である。

埋土は、黒褐色シルトを主体とし、雲母を含む。

出土遺物は、少量の土器片と633の石製品が出土した。上川名Ⅱ式土器の体部である203を除き、横線を含まない204～206は判別できない。

時期は、埋土等の状況から縄文時代前期前葉から中葉に属すると考えられる。

R D15土坑（平成13年度 5号土坑）第26図・47図 写真図版23・44

調査区中央区グリッドⅢA6cに位置する。検出面は層層礫面である。南側でR D16と隣接し、東側には約1m離れてR D21・28が、北には2m離れてR A09がある。

平面形・規模は不整な円形を呈し、開口部径は1m36cm、底部径は1mである。深さは北壁高42.2cm、東壁高52.3cmで、R D15に接続する南側は28cmと浅い。断面形は逆台形状である。

埋土は、礫の混入する黒褐色シルトを主体とし、暗褐色土の粘土がやや入り込む。

遺物は、12号袋約半分の土器片が出土した。すべてに横線を混入させる。そのうち状態のよい4点を掲載した。207・208は上川名Ⅱ式に比定される土器、ほかは大木1式と考えられる。

時期は、土器出土状況や埋土状況から縄文時代前期初葉から前葉に属する可能性が高い。

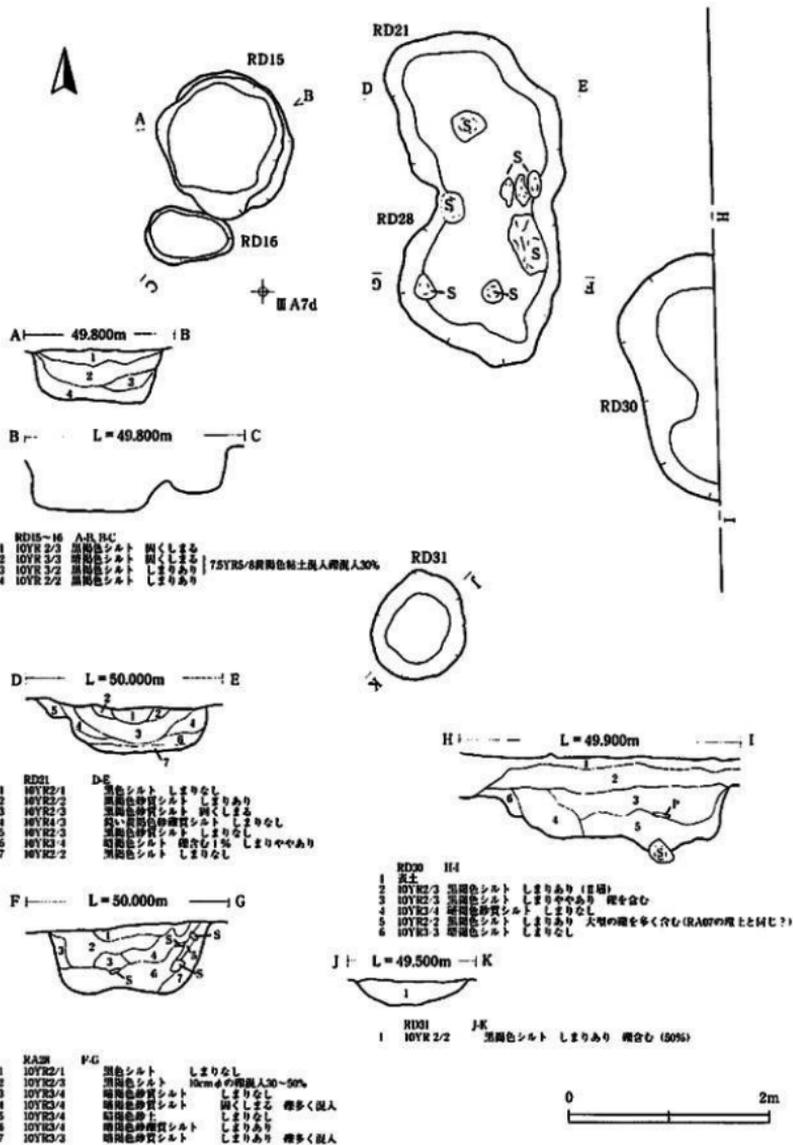
R D16土坑（平成13年度 6号土坑）第27図・70図 写真図版23・60

調査区中央区グリッドⅢA6cに位置する。R D15土坑（平成13年度 5号土坑）の南で検出した。

平面形・規模は不整な楕円形を呈し、開口部径は88×50cm、底部径は80×42cmである。深さはR D14と接する北壁高8cm、南壁高33.6cmで、断面形はピーカー形である。

埋土は、実測図はないがR D15の埋土上位と同じであることを確認している。

出土遺物は無茎の石鏃1点（634）のみである。



第26図 RD15・16・21・28・30・31土坑

埋土等の状況からRD15と同時期の遺構と考えられる。

RD17土坑（平成13年度 7号土坑） 第27図・48図 写真図版24・44・60・61

調査区中央グリッドⅢA3cに位置する。検出面はⅧ層黄褐色砂面である。上位にRA13があったと推測する。北側にRD18が隣接する。

平面形・規模は不整な楕円形を呈し、開口部径は1m46cm×98cm、底部径は1m28cm×64cmである。深さは南壁高54.8cm、RD18寄りの北壁高27.8cmで、断面形は南-北はピーカー形状、西-東は逆台形状となる。

埋土は、礫を含む暗褐色シルトの単層で一部炭化物が混入する、人為的堆積と考えられる。

底部には礫（亜角礫）が確認できるが、人為的かどうかは判別しない。

遺物は、9号袋2つ分の土器片と石器5点を得た。211と212以外は繊維の混入については微妙なものが多。214は大木2b式、216と217は大木3式土器と捉えている。215や218は前述したRA09に出土する土器に多い特色を持つ。石器では石鏃2点（635・636）のほか大型の尖頭器が出土している（637・638）。また、埋土から出土した礫石器（639）は、RA13に関わる遺物の可能性もある。

時期は、埋土等の状況から縄文時代前期前葉から中葉に属する可能性が高い。

RD18土坑（平成13年度 8号土坑） 第27図・48図 写真図版24・44

調査区中央区グリッドⅢA3cに位置する。RD17の北側に検出した。

平面形・規模は隅丸の長方形を呈し、長軸は2m30cm、短軸は1m68cmを計る。深さは西壁高が最大で43.4cm、ほかは20～25cmを計る。断面形は圓形で、壁はやや外傾して立ち上がる。

埋土は、下位に褐色のシルトを載せる。人為的堆積の可能性が高い。

その形状から小型の住居跡の可能性も指摘できるが、判然としない。

遺物は、埋土の褐色シルト中から出土した土器のうち5点を掲載した。埋土の下位からは繊維の混入する土器片（220）上位からは繊維の混入しない土器が出土する。223の土器片は埋土中位（RA13の床面同レベル）に出土したもので、RA13に関わる遺物と考えられる。

時期は、埋土等の状況から縄文時代前期前葉に属する可能性が高い。

RD19土坑（平成13年度 9号土坑） 第27図 写真図版24

調査区中央区グリッドⅢA4cに位置する。検出面はⅦ層黄褐色砂面である。

平面形・規模は不整な円形を呈し、開口部径は72cm、底部径は40cmである。深さは西壁高が最大で120cmを計り、断面形は圓形である。

埋土は、暗褐色のシルトの単層。中樞火山灰は確認できない。

出土遺物はない。

時期は、埋土等の状況から縄文時代前期に属する可能性が高い。

RD20土坑（平成13年度 10号土坑） 第27図 写真図版24

調査区中央区グリッドⅢA3cに位置する。RD19の北西で検出した。

平面形・規模は不整な円形を呈し、開口部径は70～80cm、底部径は50cmである。深さは西壁高が最大で

11.4cm、断面形は皿形である。

埋土は、暗褐色のシルトの単層。中礫火山灰は確認できない。

出土遺物はない。

時期は、埋土等の状況から縄文時代前期に属する可能性が高い。

R D21土坑（平成13年度 12号土坑）第26図・48図・70図 写真図版25・44・61

調査区中央区グリッドⅢA 6 dに位置する。検出面は黄褐色砂層面である。南側でR D28と重複する。上位には、R A14があったと考えており、当遺構は、その住居跡を切っている可能性が高い。近隣には西に1 m離れてR D14が、東に同じく1 m離れた位置にR D30がある。また北側にはR A09が横たわる。

平面形・規模は不整な楕円形を呈し、長軸は2 m前後と推定する。短軸は1 m42cmを計る。深さは北壁高41.0cm、東壁高35.4cmで、断面形は逆台形状である。

埋土は、礫を含む黒褐色シルトを主体とし、下位に暗褐色シルトが覆う。

出土遺物は、繊維を含む縄文土器の破片を5点と石匙1点（B59）を得た。そのうち2点（225・226）を掲載したが、どちらも大木1式に比定できる土器片である。

時期は、埋土状況や出土遺物から、縄文時代前期前葉に属する可能性が高い。

R D22土坑（平成13年度 13号土坑）第25図・48図 写真図版25・44

調査区中央区グリッドⅢA 2 dに位置する。検出面は切層黄褐色砂面である。R A08の北側壁上部にある。東側でR D23と隣接する。以下R D26までR A08の北側壁に沿って、ほぼ等間隔で連なる。

平面形・規模は不整な円形を呈し、開口部径は98cm、底部径は52cmである。深さは、東壁高が最大で11.6cmを計り、断面形は皿形である。

埋土は、黒褐色シルトと暗褐色シルトが混合する。

遺物は、土器片6点を得た。掲載した227を含め、すべて繊維を混入させる土器片である。

時期は、R D26の次に一括で述べる。

R D23土坑（平成13年度 14号土坑）第25図 写真図版25

調査区中央区グリッドⅢA 2 dに位置する。検出面は切層黄褐色砂面である。R A08の北側壁上部にある。平面形・規模は不整な円形を呈し、開口部径は56cm、底部径は30cmである。深さは、北壁高が最大で11.8cmを計り、断面形は皿形である。

埋土は、黒褐色シルトと暗褐色シルトが混合する。

出土遺物はない。

R D24土坑（平成13年度 15号土坑）第25図 写真図版24

調査区中央区グリッドⅢA 2 dに位置する。検出面は切層黄褐色砂面である。R A08の北側壁上部にある。平面形・規模は不整な円形を呈し、開口部径は54cm、底部径は28cmである。深さは、最深部から南壁までの比高で17.8cmを計り、断面形は皿形である。

埋土は、黒褐色シルトと暗褐色シルトが混合する。

出土遺物はない。

R D25土坑（平成13年度 16号土坑）第25図 写真図版26・61

調査区中央区グリッドⅢA 2 d に位置する。検出面はⅢ層黄褐色砂面である。R A08の北側壁上部にある。平面形・規模は不整な楕円形を呈し、主軸の開口部径は68cm、底部径は44cmである。深さは、4～5cm程度で、断面形は皿形である。

埋土は、黒褐色シルトと暗褐色シルトが混合する。

遺物は641の石楕が出土している。材質は北海道赤井川産の黒曜石と判明した。

R D26土坑（平成13年度 17号土坑）第25図・48図 写真図版26・44

調査区中央区グリッドⅢA 2 d に位置する。検出面はⅢ層黄褐色砂面である。R A08の北側壁上部にある。平面形・規模は不整な楕円形を呈し、主軸の開口部径は84cm、底部径は30cmである。深さは、南壁高が最大で24.0cmを計り、断面形は皿形である。

埋土は、黒褐色シルトと暗褐色シルトが混合する。

出土遺物は、20点ほどの土器片を得たが、ほとんどが小破片で判別しがたい。そのうちの2点は前期中葉の土器の様相を呈す。

上記のR D22～26の時期は、埋土等の状況から縄文時代前期前葉から中葉に属すると推定する。またR A08との関わりについては、壁際を囲むように配置されていることから、壁柱穴状の遺構の可能性もある。また、R A08の検出以前に上面に少量の土器片が出土している（遺構外出土土器として登録）ことから、削平された住居跡の名残なのかもしれない。

R D27土坑（平成13年度 18号土坑）第25図 写真図版26

調査区中央区グリッドⅢA 2 d に位置する。検出面はⅢ層黄褐色砂面である。平面形・規模は不整な楕円形を呈し、主軸の開口部径は1 m22cm、短軸の底部径は30cmである。深さは、最深部から南壁の比高が最大で33.8cmを計る。断面形は長軸側は皿状であるが、短軸側は柱穴状である。

埋土は、黒褐色シルトと暗褐色シルトが混合する。

出土遺物はない。

時期は、埋土等の状況から前期前葉から中葉に属すると推定する。

R D28土坑（平成13年度 19号土坑）第26図 写真図版26

調査区中央区グリッドⅢA 6・7 d に位置する。検出面は黄褐色砂層面である。北側でR D21と重複する。近隣の遺構などについては、R D21と同様である。

平面形・規模は不整な円形を呈し、開口部径は1 m54cm、底部径は1 m10cmを計る。深さは北東・北西壁高22～45cm、南壁高では最大で92cmを計る。

埋土は、上位の黒褐色土と下位から壁際を覆う暗褐色土とに大分される。人為的堆積の可能性が高い。

出土遺物はない。

時期は、埋土状況や周辺の出土遺物から、前期前葉から中葉に属する可能性が高い。

R D29土坑（平成13年度 20号土坑）第27図 写真図版27

調査区中央区グリッドⅢ A 3・4 d に跨って位置する。検出面はⅤ層黄褐色砂面である。北東側で R A11、南東側で R A10 と隣接する。また、南西側では R D20、R D19 がほぼ等間隔に並ぶ。

平面形・規模は不整な円形を呈し、開口部径は 1 m ～ 1 m 20 cm、底部径は 90 cm × 1 m である。深さは、西壁高が最大で 16.6 cm を計り、ほかは 10 cm 程度。断面形は皿形である。

埋土は、黒褐色シルトを主体とし、下位に砂層が堆積する。

出土遺物はない。

時期は、埋土等の状況から前期前葉から中葉に属する可能性が高い。

R D30土坑（平成13年度 21号土坑）第26図・48図 写真図版27・44

調査区中央区グリッドⅢ A 7 d に位置する。検出面はⅤ層礫面である。北西側に 1 m 離れた位置に R D28 がある。東側半分が調査区外に延びる。

平面形は、不整な楕円形を呈すと推測される。長軸の開口部径は 2 m 30 ～ 40 cm、底部径は 1 m 90 cm 前後と推定される。短軸は不明である。底部は中央部でややくびれる。深さは北壁高 38.9 cm、南壁高 59.4 cm である。断面形は逆台形状である。

埋土は、礫の混入する黒褐色シルトを主体とし、北壁際に暗褐色シルトが入り込む。一部人為的堆積の可能性がある。

遺物は、埋土中からの上位からほぼ完形の土器（234）が出土している。232・233 を含め遺構の上位にあったと想定している R A15 に関わるものと考えている。繊維を含む 230・231 が当遺構に関わる土器片の可能性はあるが、判別できない。

時期は、土器出土状況や埋土状況から縄文時代前期前葉から中葉に属するが、前葉期の可能性が高い。

R D31土坑（平成13年度 22号土坑）第25図・48図 写真図版27・44

調査区中央区グリッドⅢ A 7 d に位置する。検出面はⅤ層礫面である。南側で R A07 と隣接する。

平面形・規模は、不整な円形を呈し、開口部径は 1 m 12 cm、底部径は 54 cm を計る。深さは北壁高 34.2 cm、南壁高 25.0 cm である。断面形は皿形である。

埋土は、礫の混入する黒褐色シルトを主体とし、R A07 の下位の土坑群と同様の特色を示す。

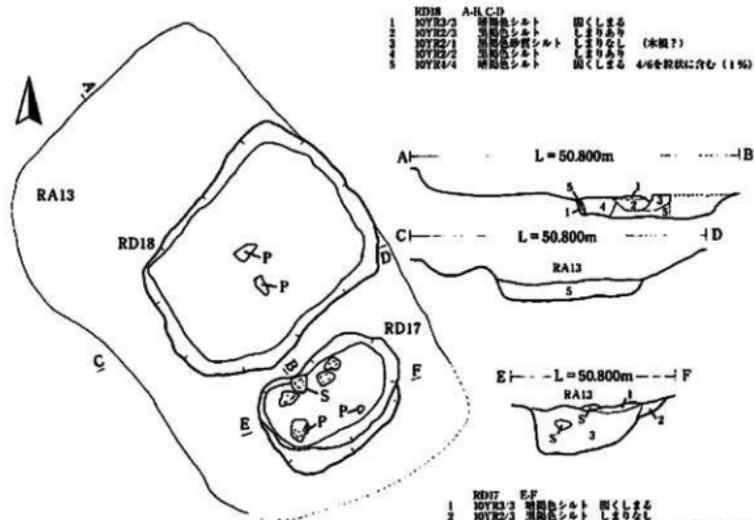
遺物は、破片の土器を得た。すべて繊維を含まない土器で、燃糸文や斜縄文を地文とする。R A07 に見られるような粘土紐貼付痕や突起などは見られない。

時期は、土器出土状況や埋土状況から縄文時代前期前葉に属する可能性が高い。

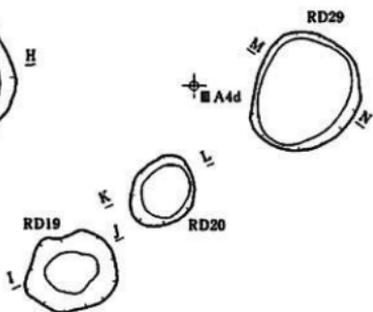
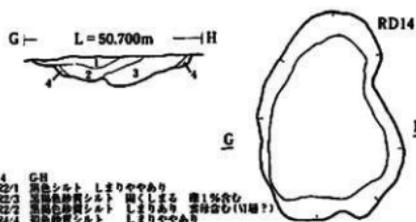
R D32土坑（平成13年度 23号土坑）第28図・48図 写真図版27・45

調査区中央区グリッドⅢ A 1 d に位置する。西側には R D33～37 が当遺構を囲むように弧状に連なる。東側一部は調査区外に延びる。

平面形・規模は不整な円形を呈し、開口部径は 2 m 前後と推定する。なだらかに下り、中程から急に落ち込む。半ばの径は 1 m 10 cm、底部径は 76 cm である。深さは、南壁では底部から半ばまでが 23.9 cm で、開口部までは 43.4 cm を計る。断面形は逆台形状である。



RD17 E-F
 1 10YR3/3 暗褐色シロト 固くしまる
 2 10YR2/3 暗褐色シロト しまりなし
 3 10YR3/4 暗褐色シロト 10YR2/6をブロック状に含む (1%)



第27図 RD14・17・18・19・20・29土坑

埋土は、中央部に褐色のシルト、下に黒褐色の混合土などが覆う。壁際にある暗褐色土からは、中塚火山灰と考えられる灰白色シルトが確認され、また最下部の褐色シルトは非常に固くしめる。人為的堆積の可能性が高いが、一部においては自然的とも考えられる。

出土遺物は、縄文土器の破片で、繊維が混入するのがほとんどである。最下層から出土した掲載2点(239・240)は混入繊維が多い。どちらも大木1式に比定される土器である。

時期は、埋土や土器出土状況から、縄文時代前期前葉に属する可能性が高い。

R D33土坑(平成13年度 24号土坑) 第28図・49図 写真図版28・45

調査区中央区グリッドⅢA2dに位置する。検出面はⅧ層黄褐色砂面である。北西側でR D34と隣接し、以下R D34～37までが弧状に、ほぼ等間隔で連なる。

平面形・規模は不整な円形を呈し、開口部径は1m42cm、底部径は90cmである。深さは、西壁高が最大で16.5cmを計り、断面形は皿形である。

埋土は、上位に黒褐色シルト、下に土器片を出土させる暗褐色土が堆積する。

出土遺物は、12点の土器片を得たが、すべてに繊維を混入させる。掲載は4点。上川名Ⅱ式土器(241)や大木1式に比定される土器(242・243)と大木2式と考えられる土器片である。

時期は、土器出土の状況から縄文時代前期前葉に属すると推定する。

R D34土坑(平成13年度 25号土坑) 第28図・49図 写真図版28・45

調査区中央区グリッドⅢA2dに位置する。検出面はⅧ層黄褐色砂面である。

平面形・規模は不整な楕円形を呈し、主軸の開口部径は1m54cm、底部径は1m02cmである。深さは、西壁高が最大で16.7cmを計り、断面形は皿形である。

埋土は、上位に黒褐色シルト、下に土器片を出土させる暗褐色土を持つ。

出土遺物は、土器の小破片5点で、繊維を混入させる。掲載は1点のみで新縄文を地文(245)とする。

時期は、出土土器から縄文時代前期前葉に属すると推定する。

R D35土坑(平成13年度 26号土坑) 第28図 写真図版28

調査区中央区グリッドⅢA1dに位置する。検出面はⅧ層黄褐色砂面である。

平面形・規模は不整な楕円形を呈し、主軸の開口部径は1m40cm、底部径は92cmである。深さは、西壁高が最大で9.8cmを計り、断面形は皿形である。

埋土は、黒褐色シルトの単層。

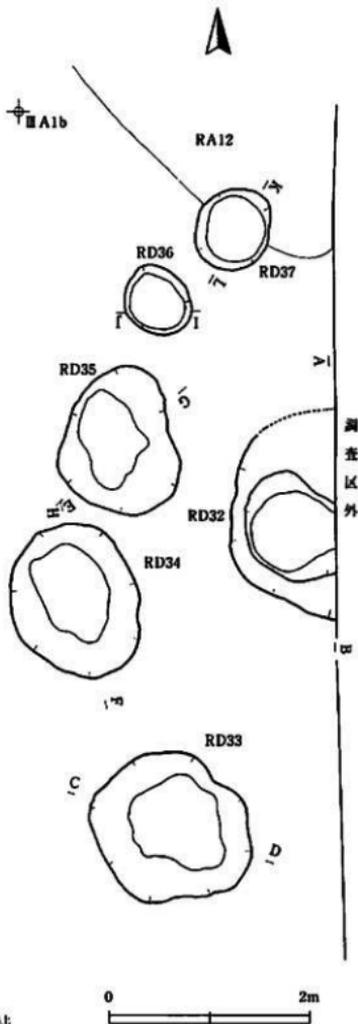
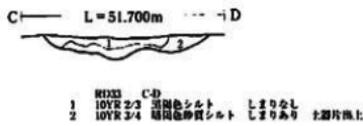
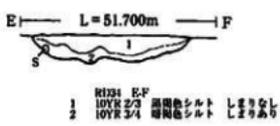
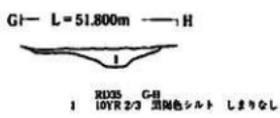
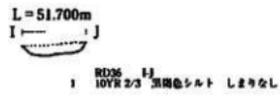
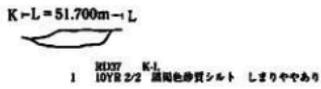
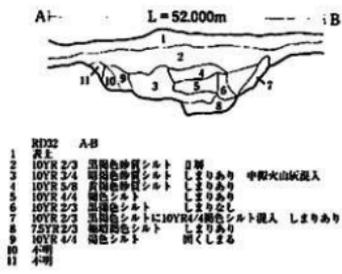
出土遺物はない。

時期は、埋土等の状況から縄文時代前期前葉に属すると推定する。

R D36土坑(平成13年度 27号土坑) 第28図 写真図版28

調査区中央区グリッドⅢA1dに位置する。検出面はⅧ層黄褐色砂面である。

平面形・規模は円形を呈し、開口部径は70cm、底部径は58cmである。深さは、5～7cmを計り、断面形は皿形である。



第28図 RD32~37土坑

埋土は、黒褐色シルトの単層で、しまりはない。

出土遺物はない。

時期は、縄文時代の前期前葉と推定する。

R D37土坑（平成13年度 28号土坑）第28図 写真図版29

調査区中央区グリッドⅢ A 1 d に位置する。検出面は層黄褐色砂面である。R A12の南壁と重複する。その新旧関係は定かではない。

平面形・規模は真円形を呈し、開口部径は76cm、底部径は64cmである。深さは、13～16cmを計り、断面形は皿形である。

埋土は、黒褐色シルトの単層で、ややしまる。

出土遺物はない。

時期は、縄文時代の前期前葉と推定する。

R D32を中心として、弧状に並ぶ R D33～37について補足する。これらの土坑の検出前にはこの区域は、住居跡と想定して精査した経緯がある。その際には壁の立ち上がりや壁柱穴など確認できなかったために、出土土器は遺構外出土土器として取り上げている。R D32が人的堆積の特色を持っていることから考え、これらの土坑群は住居跡に伴うものとも考えられる。時期は、R A08・10・11と同時期であろう。

R D38土坑（平成13年度 29号土坑）第29図 写真図版29

調査区中央区グリッドⅢ A 6 d に位置する。検出面はR A09の床面である。R A09南壁付近は攪乱を受け、R A09の範囲を識別困難にした。そこで南～北の埋土断面から、範囲を考えることとした。当遺構が住居跡の中に組み込まれるか否かの判断であるが、結論は、R A09の下位にある土坑であると、登録している。周囲にはR A09の床面下に広がるR D39・46がある。また、東側半分が調査区外に延びる。

平面形・規模は、不整な円形を呈し、開口部径は2 m10～20cm、底部径は1 m60cm前後と推定される。深さは、最大高で南壁6.2cmである。断面形は皿状である。

埋土は、礫の混入する暗褐色シルトを主体する。

遺物はない。

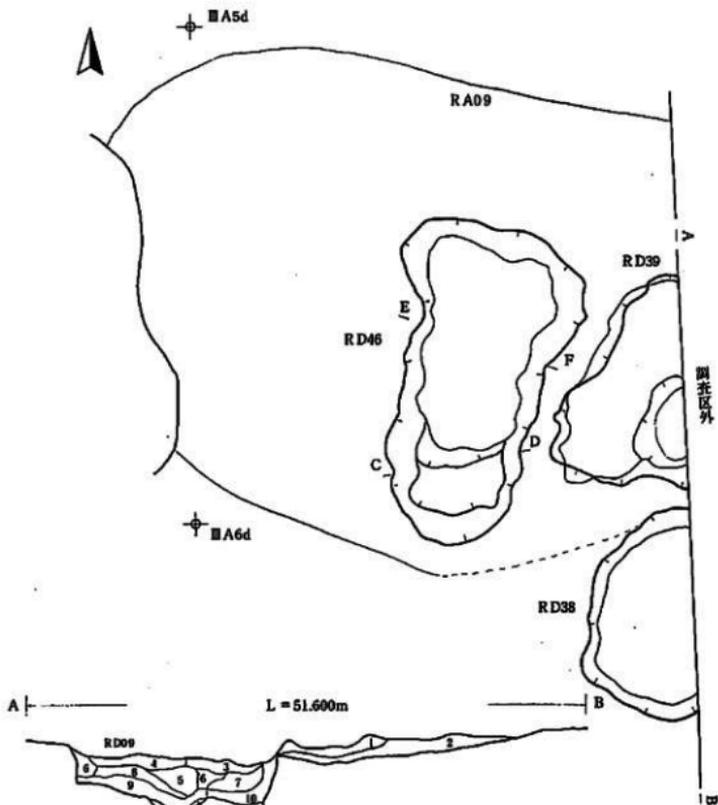
時期は、埋土状況からR A09より古い遺構と考えている。

R D39土坑（平成13年度 30号土坑）第29図・49図 写真図版29・45

調査区中央区グリッドⅢ A 5 d に位置する。検出面はR A09の床面である。東側一部が調査区外に延びる。

平面形・規模は、不整な楕円形を呈し、長軸の開口部径は2 m10～20cm、底部径は2 m前後と推定される。深さは、南壁が最大で72.5cmを計り、北壁は、40cm前後落ち込み、なだらかに下りさらに30cmほど落ち込む。断面形は逆台形状である。

埋土は、R A09の埋土断面で観察した。床面下には、暗褐色から褐色のやや濁りのあるシルトが堆積して



RD46D C-D		
1	80YK2/3 黒褐色シルト	上層部
2	80YK2/3 黒褐色シルト	上層部
3	80YK2/3 黒褐色砂質シルト	上層部
4	80YK2/3 黒褐色シルト	上層部
5	75YK2/3 黒褐色砂質シルト	下層部 (1.95)
		上層部

RD38-39 A-B		
1	70YK2/4 黒褐色砂質シルト	上層部
2	80YK2/4 黒褐色砂質シルト	上層部
3	75YK4/3 黒褐色砂質シルト	上層部
4	75YK4/4 黒褐色シルト	上層部
5	75YK4/4 黒褐色砂質シルト	上層部
6	75YK2/3 黒褐色砂質シルト	上層部
7	75YK2/3 黒褐色シルト	上層部
8	75YK4/3 黒褐色砂質シルト	上層部
9	75YK2/3 黒褐色シルト	上層部
10	75YK2/3 黒褐色砂質シルト	上層部
11	75YK4/6 黒褐色シルト	上層部
12	75YK2/2 黒褐色砂質シルト	上層部

RD46D E-F		
1	80YK2/3 黒褐色シルト	上層部
2	80YK2/3 黒褐色シルト	上層部
3	75YK2/8 黒褐色砂質シルト	上層部



第29図 RD38・39・46 土坑

いる。これらは基本層にはなく、また、住居跡や他の土坑の埋土にも見られない。最下層には、しまりの全くない礫質の黒褐色土が覆う。これらのことから、R A09構築時に人為的に埋めたものと判断した。

出土遺物は多い。埋土上位で一括で出土した253はR A09に作うものと考えられる。埋土下位で出土した土器片では木目状澁糸文や縦線文のもの(246~248)、斜縄文の土器(249~251)とR A09出土土器と大差がない。しかしS字状突起(251)はあるが、一本沈線を描くものや太い粘土紐を貼り付けるものは出土していない。

時期は、埋土状況から縄文時代前期前葉から中葉に属し、R A09よりは古いが、大きく隔たれないと考えられる。

R D40土坑(平成13年度70号土坑)第30図 写真図版29

調査区中央区グリッドⅣA3eに位置する。検出面はⅧ層黄褐色砂面である。南西でR D41と隣接する。北西1m離れてR A20が、南西1m離れてR A23がある。東側半分は調査区外に延びる。

平面形・規模は不整な円形を呈し、開口部径2m20cm前後と推定する。底部径は78cmを計る。深さは、なだらかに落ち込む北側壁での比高は21cm、西壁と最深部との比高は18cmである。断面形は皿形である。

埋土は、黒褐色シルト中心で、下位に土器片の出土する暗褐色シルトが堆積する。

出土遺物は、下位から縄文土器の1個体と思われる土器(深鉢)を得ている。非常に摩耗が激しく、取り上げ時に細分化した。断面観察でも、繊維の混入する土器かどうか判断できなかった。

時期は、埋土状況や周辺の遺物から縄文時代前期前葉に属することが考えられる。

R D41土坑(平成13年度71号土坑)第30図・49図 写真図版30・45

調査区中央区グリッドⅣA3eに位置する。検出面はⅧ層黄褐色砂面である。隣接関係は、R D40と同様である。

平面形・規模は不整な円形を呈し、開口部径1m32cm、底部径は88cmを計る。深さは、北壁高47.8cm、南壁高30.4cmを計る。断面形は逆台形状である。

埋土は、礫の混入する黒褐色シルト(基本層Ⅵ)を主体とする。壁際に暗褐色シルトが堆積する。

出土遺物は、繊維を含む土器片7点を得た。そのうち3点を掲載している。254は炭灰縄文土器であるが繊維が混入しない。255・256は炭灰が激しく判別できない。

時期は、埋土状況や周辺の遺物から縄文時代前期前葉に属することが考えられる。

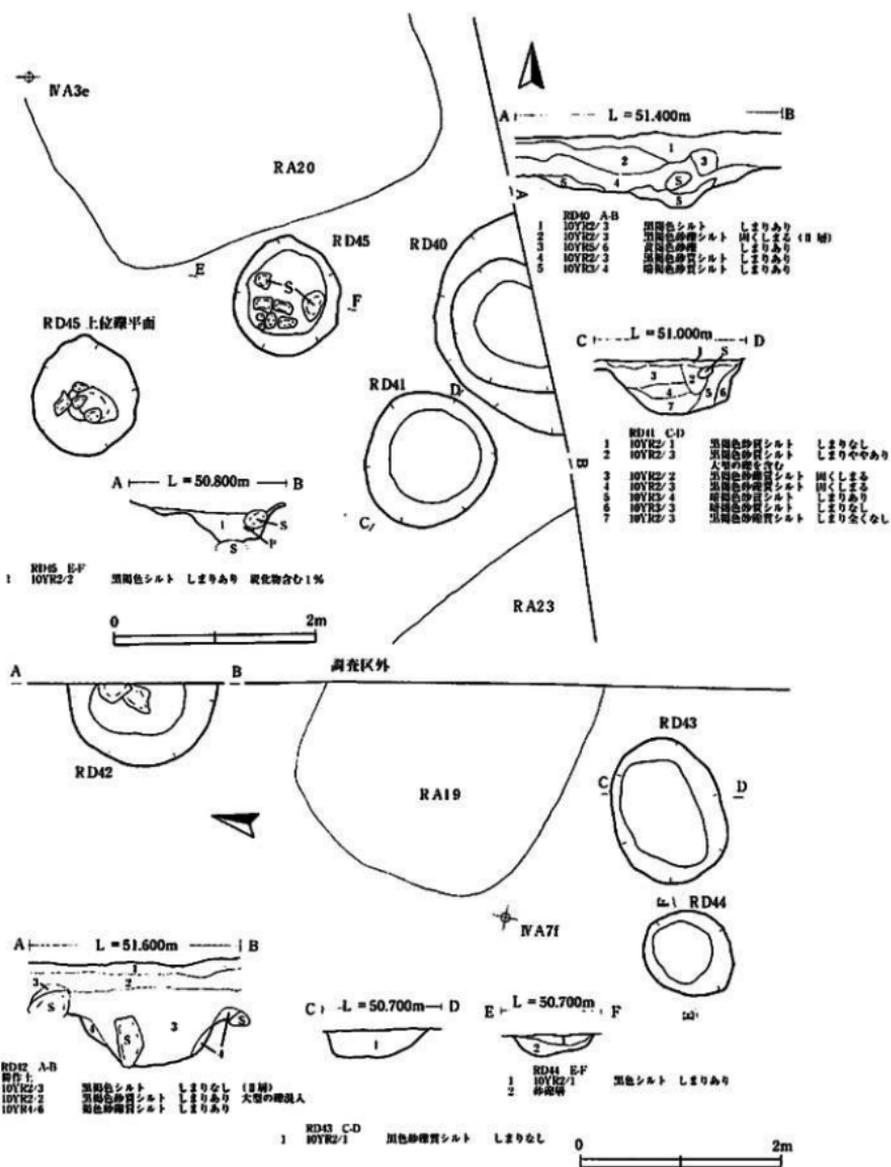
R D42土坑(平成13年度72号土坑)第30図・49図 写真図版30・45

調査区中央区グリッドⅣA6fに位置する。検出面はⅧ層礫面である。南側に1m離れてR A19がある。東側半分は調査区外に延びる。

平面形は不整な円形を呈すと推定される。規模は、開口部径1m42cm、底部径は96cmを計る。深さは、北壁高48.3cm、西壁高42.8cmを計る。断面形は皿状である。

埋土は、礫の混入する黒褐色シルト(基本層Ⅵ)の単層で、人為的堆積と思われる。

底面に大型の礫が検出された。これらの礫は周囲にも点在する。



第30図 RD40~45 土坑

出土遺物は257の1点のみで、繊維の混入する羽状縄文の破片である。

時期は、埋土状況や周辺の遺物から縄文時代前期前葉に属することが考えられる。

R D43土坑（平成13年度 73号土坑）第30図 写真図版30

調査区中央区グリッドⅣA 7 f に位置する。検出面はⅢ層礫面である。北側でR A19と西側でR D74と隣接する。

平面形・規模は不整な楕円形を呈し、開口部径1 m44cm×1 m12cm、底部径は1 m10cm×68cmを計る。深さは北壁高29.0cm。断面形は逆台形状である。

埋土は、礫の混入する黒褐色シルト（基本層Ⅵ?）の単層である。

出土遺物はない。

時期は、埋土状況や周辺の遺物から縄文時代前期前葉に属することが考えられる。

R D44土坑（平成13年度 74号土坑）第30図 写真図版30

調査区中央区グリッドⅣA 3 e に位置する。検出面はⅢ層黄褐色砂面である。

平面形・規模は不整な円形を呈し、開口部径90cm、底部径は58cm、深さ北壁高32.4cmを計る。断面形は風状である。

埋土は、黒褐色シルトと黄褐色砂礫が覆う。

出土遺物はない。

時期は、埋土状況や周辺の遺物から縄文時代前期前葉に属することが考えられる。

R D45土坑（平成13年度 19号住居跡P12）第30図・49図 写真図版31・45

調査区中央区グリッドⅣA 3 e に位置する。検出面はⅢ層黄褐色砂面である。北側でR A20・27と隣接し南側にはR D40・41がある。検出状況は、R A20精査の際、なだらかにあがる南壁上に土坑状のプランを得てP12としたが、住居跡精査の結果、壁からややはずれることが判明し、土坑と登録を変更した。

平面形は真円形を呈す。埋土上位から5～30cmの大きさの壘門礫または角礫が、配置されているかのように検出された。それらの礫は底部まで及ぶ。礫を取り除いた規模は開口部径1 m10cm、底部径は40cmを計る。深さは、東壁高36cm、西壁上から最深部の比高は40cmを計る。断面形は逆台形状である。

埋土は、炭化物を含む黒褐色土の単層である。埋土中からは人骨などは確認できなかった。

その形態から、墓坑である可能性が高い。

出土遺物は、埋土の上位から2点の表裏縄文土器片（257・258）を得ている。これらの表裏縄文はR A20や27の埋土から出土しており、これら繊維が混入しない土器片は、すべて円盤状土製品の可能性もある。また配している礫は自然石で加工は観察できない。

時期は、埋土状況や周辺の遺物から縄文時代早期末葉から前期初頭に属することが考えられ、R A20との関連性もあると思われるが、自信がない。

R D46土坑（平成13年度 5号壘穴住居跡のP1・P2のだめ押し土坑）第29図 写真図版31

調査区中央区グリッドⅢA5dに位置する。検出面はRA09の床面である。東側でRD39と隣接する。

検出状況は、RA09P1・P2の精査終了後にRD39の埋土と同様の土層を確認し、床下に広がる土坑として登録した。

平面形は不整な楕円形を呈し、開口部径3m20cm×1m40cm、底部径は1m96cm×1m04cmを計る。深さは、北壁高47.4cm、西東壁高50～54cmを計る。断面形は短軸ラインが幅の広いピーカー状、長軸ラインは逆台形状である。

埋土は、礫質の暗褐色のシルトの単層で、人為的堆積と考えられる。

出土遺物はない。

時期は、埋土状況からRA09より古い遺構で縄文時代前期前葉に属すると考えている。

R D47土坑（平成13年度 1・2号壘穴住居跡P1）第31図・49図 写真図版31・45

調査区中央区グリッドⅣA7・8cに位置する。検出面はRA07の床面である。検出状況は、当初は住居跡の付属施設として捉えて精査をしていたが、埋土の上位（床面）から2号地床炉を検出し、床面下に広がる、古い時期の土坑として登録した。以下RD48～50も同様の理由による登録となる。

平面形・規模は不整な楕円形を呈し、開口部径1m76cm×1m20cm、底部径は1m14cm×50cmを計る。深さは、南壁高53.1cm、東壁高45.54cmを計る。断面形は逆台形状である。

埋土は、礫の混入する黒褐色シルトの単層。

出土土器は4点。上位のRA07出土土器と大差はないが、やや古い様相を呈する。

時期は、埋土状況や出土遺物から縄文時代前期前葉から中葉に属すると考えられる。

R D48土坑（平成13年度 1・2号壘穴住居跡の床面下土坑）第31図・49図 写真図版31・45

調査区中央区グリッドⅢA8dに位置する。

平面形・規模は不整な円形を呈し、開口部径1m10cm、底部径は60cmを計る。深さは、西壁高が最大で40cmを計る。断面形は扇形である。

埋土は、RD47と同層であることを確認した。

出土土器は2点。RD47と同様である。

時期は、RD47と同時期の縄文時代前期前葉から中葉に属すると考えられる。

R D49土坑（平成13年度 1・2号壘穴住居跡の床面下土坑）第31図 写真図版31

調査区中央区グリッドⅢA8dに位置する。

平面形・規模は不整な楕円形を呈し、開口部径1m50cm×1m18cm、底部径は96cm×68cmを計る。深さは、西壁高が最大で34.0cmを計る。断面形は逆台形状である。

埋土は、RD47と同層であることを確認した。

出土遺物はない。

時期は、RD47と同時期の縄文時代前期前葉から中葉に属すると考えられる。

R D50土坑（平成13年度 1・2号壘穴住居跡の床面下土坑）第31図 写真図版31

調査区中央区グリッドⅢA 8 dに位置する。

平面形・規模は不整な円形を呈し、開口部径68cm、底部径は42cmを計る。深さは、西壁高が最大で21.5cmを計る。断面形は逆台形状である。

層土は、R D47と同層であることを確認した。

出土遺物はない。

時期は、R D47と同時期の縄文時代前期前葉から中葉に属すると考えられる。

表3 縄文時代遺構一覧表

RA	平面形	長軸M	幅	早期	早末～ 前期初	前期初 ～前葉	前期前葉	前期中葉	前期中 ～後葉	不明
1	長方形	5.64					○			
2	長方形	4.26					○			
3	長方形?	4.00?					○			
4	長方形	7.00?		○						
5	不明	6.00?					○			
6	楕円形	3.54				x				
7	長方形	9.2	2						○	
8	楕円形	3.16				○				
9	楕円形?	6.50?	1					○		
10	楕円形?	4.00?				x				
11	楕円形?	4.00?				x				
12	長方形?	5.30?						○		
13	長方形?	5.00?					x	x		
14	不明	9.00?							○	
15	楕円形	5.00?					x	x		
16	長方形?	3.50?					○			
17	楕円形?	5.00?						○		
18	楕円形?	2.60?				x				
19	長方形	3.00?				○				
20	長方形	4.64			○					
21	長方形	5.00?					○	○		
22	楕円形	3.2				○				
23	長方形	4.5				○				
24	楕円形	2.9				○				
25	楕円形	4.92			○					
26	長方形	3.50?					○	○		
27	楕円形	4.62		x						
土 坑 (RD)					45○	2 × 4 × 6 × 13△ 15○ 16△ 32○ 33○ 34△ 35 × 36 × 37 ×	1○ 14△ 18○ 22○ 24 × 26○ 28 × 30○ 39○ 41△ 43 × 46 ×	10○ 17○ 21○ 23 × 25 × 27 × 29 × 38△ 40△ 42△ 44 ×	31○ 47△ 48△ 49 × 50 ×	7 × 8 × 19 × 20 ×

○ 同時期と思われる土器を出土させる

○ 土器の出土はあるが時期差があり、形状や重複関係などで判断したもの

△ 土器の出土が希少なものを

× 出土遺物がなく埋土等で判断したもの

(3) 遺物包含層 第32図～34図 写真図版32・33

位置・検出状況

調査区北部グリッド I A 4～10 d～f と II A 1～3 d～e に広がる。最北部 I A 1～3 の区域は、岩盤が露出しており、遺構・遺物ともに確認できなかった。地山面での標高は、もっとも高い C 2 杭で、55.982m を計り、県道沿いになだらかに下る。もっとも低い補助 3 近辺では、50m前後を計る。

平成11年度においては調査区域が急斜面のために、遺構は希薄であると考えていた。しかし、試掘段階で相当量の土器が出土することが判明しており、とりあえず遺構の有無を確認すべく、上面から少しずつ下げていった。その際、土器の出土状況を知るために、土層観察ベルトを残した。精査中に中礫火山灰を検出し、その堆積範囲を遺構と考えたが、登録にはいわず、当区域がなんらかの形で遺物を多く出土させる、いわゆる遺物包含層であるとして精査を継続した。

平成13年度は、前回精査した区域の南西側での調査となったが、傾斜部（いわゆる法面）は削平され、平成11年度から続く遺物包含層は失われている。そこで、Ⅱ層最終面まで盛土を重機で下げ、精査を行った結果、最深部で楕円形のプランを確認した。その形状から大型の竪穴住居跡（平成13年度 3号住居跡）として精査を開始している。しかし、土器出土状況や壁・柱穴の有無など熟考した結果、住居跡としての登録を抹消し遺物包含層とした。

なお、13年度調査区域範囲内に11年度調査区域の境において未調査の部分がある。県道沿いに掘り進めることが危険と判断した区域である。断面観察のみとなったが、I層表土（盛り土）が厚く堆積し、平成11年度土層断面から推測すれば、土器片の出土する層は県道下に深く入り込んでいると予測される。

遺物の取り上げ方法

平成11年度調査においては、急斜面を形成する層を5つと捉えた。また、13年度調査区では3号住居埋土とし4層を確認している。ここで、2つの層と基本層序の関係を記す。平成11年度精査の基本層と13年度の層とは違うが、混乱を避けるために基本層序に修正し報告する。変更は以下の通りである。

11年度包含層	13年度 3号住居跡	基本層序	
I	1	I	両年度とも、基本的には層位ごとに土器を取り上げている。（曖昧なものはⅡ～Ⅲ層という表記）。中礫火山灰の上下においては、中礫火山灰上、中礫火山灰下などの表現で取り上げている。また、平成11年度において中礫火山灰上で住居跡と想定して取り上げた土器は、AⅡ b c 住居跡床面としている。これらは基本層序のⅢ層下層と同層となる。位置は、平成11年度においては、AⅡの a～e 0～2 の15区分（グリッド配置図参照）、平成13年度においては北1・2・南1・2の4区分して取り上げた。11年度においては土器の出土の多い面を写真撮影して記録したが、平面実測はしていない。
Ⅱ	2	Ⅲ	
Ⅲ	2	Ⅲの下層	
	3	Ⅳ	
中礫火山灰		Ⅴ	
Ⅳ	4	Ⅵ	
Ⅴ		Ⅶ	

遺物出土状況

平成11年度調査区では、縄文時代早期中葉から縄文時代前期末葉までの土器片と石鉄・石匙・石製の裝飾品が出土した。縄文土器はⅢ層からの出土がもっとも多く、特に中礫火山灰上（住居跡床面と登録）Ⅲ層下

からの出土が卓越する。完形気味の土器が比較的多い特色があり、またこの面において石匙が多く出土する。中樞火山灰下位Ⅵ層は、調査区が急斜面であることや、上位と土質がほぼ同じであることから、Ⅰ・Ⅲ層の遺物も含まれている可能性もあり、信憑性に欠ける。Ⅳ層出土土器は少量である。

平成13年度調査区では、Ⅰ層は無遺物層、中樞火山灰上位のⅢ層上位は、前期前葉の土器が混在しており、流れ込みによる堆積が伺える。Ⅲ層下位から平成11年度調査区にはない褐色土のⅣ層が、もともと遺物が多く、完形に近い土器もある。中樞火山灰と考えられる灰白色の粘土は、平成11年度検出粘土と色調等が異なり、2次堆積的な要素が指摘できる。中樞火山灰層の下位は、ほとんど遺物は存在しない。

包含層の性格

2つの遺物包含層の性格をまとめる。

北側急斜面においては、中樞火山灰下位においては、恒常的に堆積した層、中樞火山灰上位は、捨て場としての機能があったのではないかと推測される。捨て場としての時期は縄文時代前期中葉から後葉にかけてであり、前期末葉から中期にかけて徐々に土器が少なくなっていることから、この時期に集落の中心が変わったのではないかと考える。捨て場は、平成13年度調査区にも広がっていたことが予想されるが、攪乱を受けており、指円形の凹地にわずかに残る。この凹地は、中樞火山灰降下後の前期中葉期には、すでにならかの形で形成されていたと思われる。遺物は意図的に投げ込まれたのか、上位から流れ込んだのかは判断としない。

遺物の特色について概観すれば、平成11年度調査区Ⅱ・Ⅲ層、平成13年度調査区2・3層では、大木3式から4式の土器が出土する。上位には5式から中期初頭の7a式の土器が若干混入するようである。中樞火山灰直上では、大木3式土器が多い。

異系統土器では、中樞火山灰直上で、諸磯式の緑孔土器の破片が出土している。

2層に区分した中樞火山灰下位では、上川Ⅲ式土器や、大木1から2式土器が出土するが、3式土器類似の土器もやや含まれる。また、早期中葉の沈線文土器や貝殻沈線文土器、早期後葉の表裏縄文土器が出土するが、その上下関係については明確にできなかった。土器についての詳細は次項に述べる。

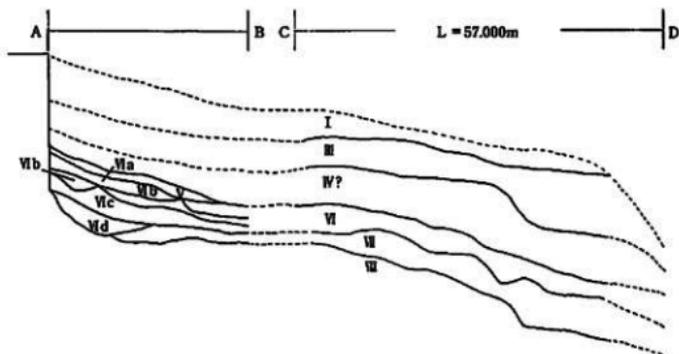
石器は、石鏃は中樞火山灰下から柳葉形のものが出土しているほかはすべてが無茎のものに限られる。石匙は縦形のものが多く、中樞上(Ⅲ層下)からの出土が顕著である。縦形の両面剥離している断面形が菱形となるものも同様の出土状況を見る。磨製石斧の出土は少ないが、Ⅲ～Ⅵ層において出土するのに対して礫石器は中樞面上のみの出土となる。石製品では、中樞面下(Ⅵ層)から扶杖耳飾りが出土した。

これら出土遺物は、包含層が2つに分離されていることや層位的な裏付けが不十分などの理由から、すべて遺構外として掲載する。表中で遺物の出土地点は平成11年度出土は包含層1、平成13年度出土は包含層2としている。出土層位で、中樞火山灰上下出土についてはそのまま明記している。

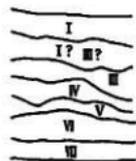
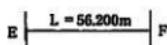
(4) 出土縄文土器 第35図～67図 写真図版36～58

2年間の発掘調査で、火コンテナ35箱の縄文土器が出土している。出土状況は圧倒的に遺物包含層出土の土器が多い。時期は早期中葉から前期後葉を主体とするが、そのうち前期前葉から中葉の土器が卓越する。また中期の土器、後期と思われる土器も若干数出土している。ここでは遺構外出土(包含層出土)土器を中心に紹介する。記述に至っては以下の通り分類する。

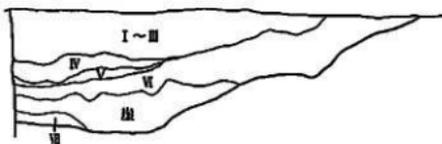
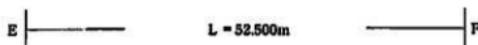
包含層1 A-D 断面



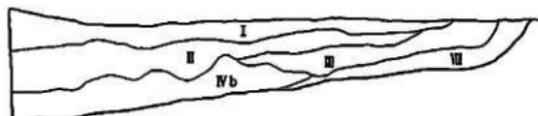
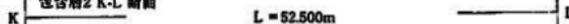
包含層1 E-F 断面



包含層2 I-J 断面



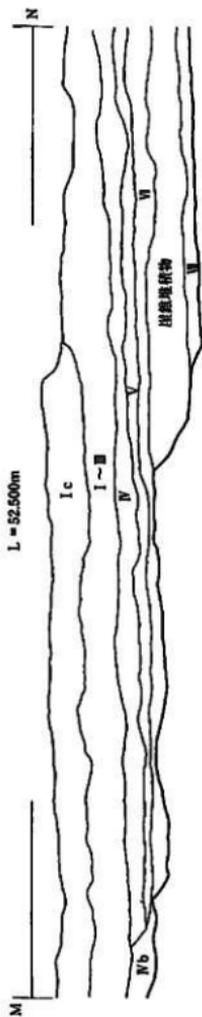
包含層2 K-L 断面



- I 黄土-耕作土 (居住地の高層部)
 a 黄土 (下記に示す下の粘土【土中】を持つ箇所有り)
 b 耕作土
 c 粘土
- II 10YR2/3 黒褐色土 砂を含む (近代-近代の鉄製品、灰汁が出土する層) 時に土器を出土させる
- III 10YR2/2 黒褐色砂質シルト 大層 (5-10cm) の層を多く含む 前期中層-後期の土器片を出土させる
- IV 10YR3/4-3/3 暗褐色砂質シルト 前期中層の土器を出土させる (b: 層質で土器を出土させない層)
- V 中層火山灰層 (下記に粘土を持つ)
- VI 10YR3/2-3/4 黒-暗褐色砂質シルト 細分される 前期初期-前期の土器を出土させる
 a 灰の混入が少くない
 b 灰が多量を含む砂質シルト
 c 大層の層 (10cm以上) が多数に混入する
 d 砂質で暗褐色シルトが混入する
- VII 10YR7/6 明るい黄褐色砂質シルト 少減ながら前期中層の土器を出現させる
- VIII 明層

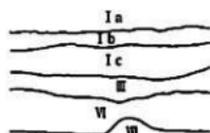
第33図 遺跡包含層断面図①

包含層2 M-N 断面



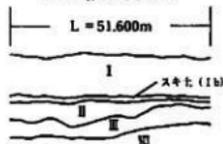
平成11年度 AⅢ区 Q-R 断面

Q L = 54,000m R



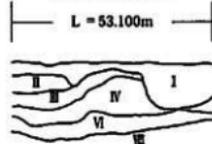
ⅣA10R 西向き断面

L = 51,600m



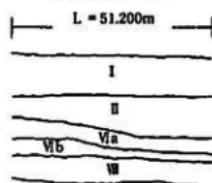
ⅣA6d 西向き断面

L = 53,100m



ⅥA11 西向き断面

L = 51,200m



第34图 各区域土層图

第Ⅰ群 早期の土器

第Ⅱ群 前期初頭の土器

第Ⅲ群 前期前葉の土器群

第Ⅳ群 前期中葉から後葉の土器

第Ⅴ群 前期後葉から中期初頭の土器

第Ⅵ群 異系統土器群

第Ⅶ群 中期中葉から後期の土器

第Ⅷ群 時期の曖昧な土器

第Ⅸ群 底部資料

分類した土器のうち特徴的なものについて記述しており、個々の特色については表を参照していただきたい。群内の掲載については、必ずしも時期順となっていない事を明記しておく。

● 第Ⅰ群 早期の土器 (265～297)

○1類 沈線文を主体とする土器 (265～271)

Aは盛岡市大新町遺跡や住田町姥王河洞窟出土類似の土器である。265は尖底土器で口縁部は欠損するが266・267にみられるようなV字型の帯状格子目沈線が展開すると考える。体上部は横位の多条の細沈線で埋められ、非常に厚手で焼成もよい。266は格子目文の上部の口縁部に細沈線が埋められる。269は口縁部に爪形状刺突を施し、下位に横位の短沈線とV字型の沈線が施文される。

Bは沈線文や押し引き文を施す破片。非常に焼成よく胎土もAに似ている。270は沈線間に横位の連続押し文を施す。271は胎土が270とよく似ており当類に入れた。

○2類 貝殻沈線文を主体とする土器 (272～281)

Aは貝殻復線文によって文線が構成されるものである。272は山形口縁（突起）、273は波状口縁を成す。どちらも貝殻復線文の刺突あるいは沈線で文線を構成する。274は縦位の、275は小さい横位の復線正痕文276は貝殻文と沈線で文線を構成する。

Bは貝殻羽状復線正痕文を施す土器で278は体上部のみの構成で、下部は無文となるであろう。

Cは貝殻雁行文を施す土器。そのうち281は外そぎされた口唇部と爪状（塊状？）の刺突内に連続の雁行文を充填する。ほかの貝殻沈線文土器に比較して焼成が弱く、3類に近い印象を受ける土器である。

○3類 貝殻条痕文を施す土器 (282・283・292?)

282は縦位の条痕文がみられるもの、283は表裏条痕文を施すもので2類と較べてもろい。

○4類 表裏縄文を施す土器 (284～291)

遺構内外から多くの破片を出土させた。繊維が多く混入するものには厚めの土器が多い。284～288は平口縁となる。そのうち284・285・288のように口唇部まで施文するものと、286・287のように大柄な縄文を施すものがある。289は表面が羽状縄文となり厚手である。

○5類 その他不明の土器 (292～297)

胎土等から早期に属すると考える土器片を集めた。櫛目状の条痕文を施す292は281と同一個体で3類に属する破片とも考えられる。293は表面に押し型文状の施文が見えるが弱く判然せず、3類の可能性が高い。294は横位の沈線文と斜位の竹管？による円文が観察でき、爪形状の刺突らしき痕跡も伺える。1類のBに属するか。295は細沈線かもしくは条痕文の破片でAからCに属し、296は大型の体部でAに属するであろう。

● 第Ⅱ群 前期初頭の土器 (298～317)

ここで掲載する前期初頭の土器は上川名Ⅱ式のうち原体正痕を施文する土器であり、上川名Ⅲ式や室浜式に相当する土器の一部はⅢ群もしくはⅣ群にもある。また、時期が狭いので類は設けなかった。

A 斜位の沈線による施文 (298)

当土器群が斜位の短沈線と原体側面正痕で構成されることが多い中で唯一、渦巻正痕以外を沈線のみで施

文する破片である。波状口縁でややキャリパー風に内湾する。

B 原体側面圧痕による施文 (299~309)

短沈線と原体側面圧痕で文様を構成する土器がAである。299は口唇部内そぎのもの、300は口唇部を内外ともに削ぎ、鋭角的になる。301は比較的薄手で繊維混入が多い。302~305は丸みを持つ口唇部となる。これらすべて、少し内湾する特色がある。

上記のうち、原体圧痕の渦巻文様の周囲が隆起状になるものをイとした。同じようにやや内湾する。306は隆体上に原体の圧痕を施すかあるいは側面圧痕が残ったもの。また渦巻圧痕上に×型の沈線が施される。

ウは施文すべてが原体圧痕となるもので2点のみ (309・310) の出土である。309は渦巻圧痕は観察できないが310は蹠手状圧痕文となる。

C Bのうち蹠手状圧痕状となるもの (310~313)

原体側面圧痕と渦巻文が一体となるものである。310は内そぎされた波状口縁の破片で、施文はBウの特色を示す。渦巻圧痕周辺に原体圧痕された粘土粒を貼り付ける。渦巻周囲が隆起状になるBイの発展したものであろうか。312は他ではみられない平行な側面圧痕を最初に施文する。これらの土器の大きな共通点は粘土がやや灰色がかった感じで、砂を多く含む繊維が少ないということである。

D 体部 (314~317)

遺構内に多くの羽状縄文土器を出土させているが、節の大きいもしくは0段多条の結束のない羽状縄文はすべて上川名Ⅱ式に比定されると考える。ただし315は結束のある羽状縄文でⅢ型に属するかもしれない。

● 第Ⅲ群 前期前葉の土器群 (318~389)

第Ⅳ群に次いで出土数が多い。繊維が混入する土器 (1類) と混入させない土器 (2類) に分かれる。混入の割合は、高い順から (繊維多い 繊維混入・含む 繊維少 繊維? 繊維無?) とした。

○1類 粘土中に繊維を混入させる土器 (318~343)

A 口縁部に燃糸文を施す土器 (318~320)

318・319は不整の燃糸文の施文幅が狭いもので、燃糸文下は羽状縄文と推測する。320は燃糸の施文幅が体上部に広がり、燃糸もやや正整化する。

B ループ文 (321~323)

いわゆる原体末端圧痕の土器である。321は燃糸文の可能性もある。322は大柄な圧痕の例。323は横位に連続する。これらの土器は遺構内でもみられるが、323のような明確な末端圧痕は少ない。

C 羽状縄文 (324~331)

羽状縄文の土器片の中で、Ⅲ群のE以外の繊維を含む土器はすべてこの項に入れている。324は結束2種? 羽状縄文で薄手である。325・326は結束1種で口唇部に爪形の刺突が観察される。327はやや内湾するもの。328は大柄な破片で結束1種の羽状縄文が2段以上施文される (以上A)。

Cの中で菱形状の文様が観察されるものをイとした。329や331は羽状縄文の結束部を中心にして菱形状の文様となる。原体は小さい。330は大柄な菱形文様に発展しそうである。

D 斜縄文 (332~343)

斜縄文を地文とするものをまとめた。A:ピッチリ縄文もしくは類するもの、イ:複雑の斜縄文、ウ:その他の斜縄文、エ:ウのうち粗紐縄文となるものに小分類できる。

目のつまった単節斜縄文 (ピッチリ縄文) は、遺構外では332の大形の土器のみで直線的に外傾する深鉢と考えられる。333~337は複雑の斜縄文を施文するものでL-R-Lの横回転となり、口唇部に原体圧痕などが施さ

れる。338～342はア・イの特色を持たないもので、343は組紐回転文の施文する土器である。

○2類 胎土中に繊維を混入させない土器 (344～389)

前期前葉に属する土器の中で繊維を混入しない土器をまとめた。前期前葉の後半期の土器であり、施文の特色からA：不整あるいは正整の襷糸文を施す土器、B：網目状あるいは木目状襷糸文、縦綫文を施す土器、C：燃りのない縦綫文いわゆるS字状連続沈文を施す土器 D：その他の口縁部に分かれる。

A 不整あるいは正整の襷糸文を施す土器 (344～356)

形状から波状口縁(ア)山形口縁(イ)平口縁(ウ)とに分かれる。344は緩やかな小波状の口縁となる土器である。口縁部下に小さな孔がある。345～350は山形口縁(山形状の突起)となるものである。345は口唇部が平らで、348と同様の器形と推測する。346は口唇部を篋状工具によって削ぎ、山形突起の頂部をへこませている。347と349・350は山形口縁で口唇部に斜位の沈線による刻みを施すものである。352は345と同期の土器か。355は幅のある正整な襷糸文でS字状連続沈文状である。356は緒糸帯による施文の体部としたが、斜縄文の破片かもしれない。

B Aのうち ア網目状 イ縦綫文 ウ木目状を施す土器 (357～375)

357～362は網目状襷糸文を体部全体に施すもの(ア)である。357は、波状口縁となるが、その他はやや外反する平口縁となる。361は口縁部下に刻みのある太い粘土紐を貼り付ける。362は口唇部に刻みを施す。これら網目状襷糸文の土器は、頸部でややくびれ、長筒形となるようである。

363～371は縦綫文が観察できるもの(イ)である。363は体部があまり張らないが、364は大きく外反し体上部がやや膨らむ壺形の器形となる。どちらも縦綫文が間隔を同じくして体部全体に施文される。365は山形口縁で、斜位の連続沈線と突起頂部の刻みはAの349に似る。366はIV群に属するか。369は縦位の縦綫文でV群に属すると思われる。371は横位の網目状襷糸の可能性もある。

372～374は木目状の襷糸文(ウ)を施す。372は羽状かもしれない。375は丹瓦状襷糸文である。

C S字状連続沈文を施す (377)

1点のみの掲載で、遺構内でも明確な燃りのない縦綫文はない。

D その他 (378～389)

378～380は波状口縁や指頭圧痕による小波状口縁となるもの(ア)で、380は指頭圧痕、イは平口縁で382は篋状工具による刺突を施す。384はやや外傾し、一部縄巻縄文状の施文が見える。385は口縁部が直線的にあり、繊維の混入するⅢ群1類332と同じ様相を示す。体部破片のうち386はI類に属する可能性も考えられる。389は波状の突起と細い粘土紐結合痕、体部羽状縄文の菱形文縁とⅢ群とⅣ群の特色を併せ持つ土器である。繊維は混入しない。体部だけから判断してⅢ群としたが、口縁部形状はⅣ群に属する。粘土紐が刻みを持つのであればⅢ群からⅣ群にかけての土器、刻みがなければⅣ群の土器であろう。

● 第Ⅳ群 前期中葉から後葉の土器 (390～517)

最も出土量の多い土器群である。特に包含層1での出土が目立つ。分類は主要な文様により5つに大別した。粗製土器は6類、底部は7類として掲載している。これらの土器のうち前期末葉から中期初頭に位置づけられるものを含んでおり、後に考察でまとめた。

○1類 一本沈線による施文を主体とする土器 (390～401)

円形を描くもの(A：390～394)、縦位の短沈線を描くもの(B：394～396)、屈折直線文となるもの(C)山形(鋸歯状)沈線となるもの(D：398～401)に分かれる。

390は屈折直線文に円形の沈線が描かれる平口縁の深鉢で、393は小型でやや内湾する浅鉢と考えられる。

394は円形の竹管による刺突の下位に縦位の短沈線が描かれる。395はやや外反する土器で次の形式につながるものか。396は刺突状の沈線が連続する。398～400は口縁部下位に山形の沈線が通る例。401は施状工具による浅い横沈線と山形沈線が描かれる。

○2類 竹管による刺突文と押し引き文を主体とする土器

竹管の先端で刺突されるもの（A：402～412）、竹管以外の刺突が施されるもの（B：413・414）と半炭竹管などで押し引きされるもの（C：415～418・420・421）と、その他（D：419・422）を当類とした。

402～405は輪切りにした竹の先端を刺突している。そのうち402は縦位の沈線で接続される。406は口唇部を連続刺突している。408はやや斜位からの連続刺突で沈線を作る。409と410・412は半炭した竹管を連続刺突している。そのうち409は半炭竹管の背面沈線が引かれる。412は爪状の刺突にも似る。415はくぼみを持つ平口縁で、半炭された竹管で方形の文様を描き、中に縦位の波状沈線を2単位以上充填する。416は外反する口縁の頸部に横位に施文する。418は押し引きにより円形文様を描く。420は縦位の押し引き文で、421は420と同類の土器で、422は刺突状だが断面斥痕かもしれない？

○3類 半炭竹管による沈線文を主体とする土器（423～436）

Aは波状沈線となるものである。423は縦位の波状沈線と縦沈線が引かれる。425は横位の波状沈線と縦位の沈線が交わる。Bは山形沈線となるもの。427は鋸歯状沈線の頂部を押し引きして刺突状の文様を作り上げる。429・430は山形沈線で430は波状沈線が途中から山形沈線に変わる。Cはその他の沈線文で431～433は変形や円形の文様を筆背きで垂下している。435は縦位と横位の直線沈線が交わる。

○4類 粘土紐貼付を主体とする土器（437～492）

A：刻みまたは刺突のある細い粘土紐を貼り付けるもの（437～445）

437は小型の深鉢で弱い半炭竹管による沈線下に口縁を通る粘土紐が貼り付けられ、一部円形に枝分かれする。438は内湾する浅鉢？の口縁部で細い粘土紐を折り曲げて、S字状の文様を連続させる。439は沈線の下に折り曲げた粘土紐を貼り付ける。441は沈線の施された粘土紐の周りに貼る例。442～445は口唇部を細い粘土紐が通るもので、その下に442は半炭竹管によるX字状の沈線、443は山形沈線、444は刺突風の短沈線、445は横位の押し引き沈線が施されている。刻みはすべて粘土紐に対して直角に刻まれる。

B：刻みのない細い粘土紐を貼り付けるもの（446～466）

446～452は外反する口縁部の内側と外の体上部に粘土紐を貼り付けるものである。すべて小型の深鉢と推測され、粘土紐は波状もしくはハート形などを基調とする。446はちぎって貼り付けたような鋸歯状、447は波状、448は太い粘土紐と細い粘土紐が一体化する。449は口唇部裏に幾何学的な文様を織りなす。450は口唇部裏が鋸歯状、体上部が波状、451と452はハート形をそれぞれ貼り付ける。453～460は表のみの貼付。453は外傾するが外反しないもので波状、454は3段の鋸歯状の粘土紐が通るもので、大型の（粘土貼付としては）深鉢である。455は内湾する浅鉢か？457は交点にボタン状の粘土紐がみられる。

461～464ははしご状や格子目状の粘土紐を貼り付けるもの。461は浅鉢の可能性ある。462は波状口縁、463ははしご状とX状で構成される突起を持ったもの、464は3～4単位の突起を伴った波状口縁ではしご状を基調として様々な文様が施文される。465や466はハート形を基調としたものである。

C：粘土紐貼付と巻き貝による刺突が作ったもの（467・468）

D：刻みや刺突のあるやや太い粘土紐を貼り付けるもの（469～483） -いわゆる階帯-

469～471は円形の刺突文（竹管？）、472～475は施状工具もしくは爪状の刺突文、476は口縁すぐ下の隆体に斜位の刻みが入る。477は指頭斥痕、478・479は縦位の粘土紐がほぼ垂直に削まれる。480は連続押し引き文、

481・482は棒状工具による深い刺突文が施される。483は竹管文に指頭圧痕が伴うもの。

E 刻みのない太い粘土紐を貼り付けるもの(484~489)

484は波状を呈するものでハート形の貼付、485は渦巻状に貼り付ける。487はアーチ状の突手と突起の付いた球胴の鉢で、菱形に貼り付ける。488と489は渦巻やS字の粘土紐内を沈線施文する。

F 縄文の充填された太い粘土紐やその他(490~492)

490は突起から垂下するS字状の粘土紐に縄文を充填する。491は方形となる。492は刺突のある粘土紐で隆帯から垂下する。

○5類 突起もしくはアクセント状の粘土紐貼付類(493~512)

口唇部に突起を施すもの(ア)や粘土貼付の中でアクセント風なもの(イ)をまとめた。493・494は刺突のあるドーナツ状、495~497は渦巻状となる。498~500は刺突や沈線を施したS字・ハート型突起である。501は正面を向いた2つの菱形渦巻状突起が体部でX字に交差するのではないかと思われるもの、502はボタン状の突起で、503~506は羊頭状や波状の粘土紐貼付が大きく単一となるものである。そのうち504は巻き貝による刺突が観察される。507~512にアクセント風に装飾体を貼り付けるものをまとめた。508は突手状になるが、装飾体とはいええないかもしれない。512は2つの瘤が特徴的な波状口縁となる小型の土器である。

○6類 粗製土器(513~517)

出土層位や器形あるいは文様から前期中葉から後葉に比定されると判断した土器である。

○7類 底部資料(遺構内のみ)

●第V群 前期後葉から中期初頭に属するであろう土器群(518~536)

大木6式や7a式に比定できるものをまとめた。IV群の中にも一部含まれている可能性が高い。

○1類 口縁部を肥厚するもの(518・519・521~524)

ボタン状貼付の518や刻み目を施す太い隆帯を持つ519・522や太い隆帯と沈線文の521・523は、大木6式に比定できるものである。ただし524においては定かではない。

○2類 その他の沈線文の土器(520・525~536)

沈線文や粘土貼付を施す520や平行沈線や縦あるいは横位の鋸歯状沈線を施す526~532、竹管刺突の533・534、縦位逆線沈線の536までは大木6式に比定できる。525・535は大木7a式と考えられる。

●第VI群 異系統土器群(537~540)

○1類 前期前葉の土器(537・538)

円筒下層式土器に類似し、繊維の混入することから円筒下層a式土器と捉えた。

○2類 前期中葉の土器(539・540)

539は諸磯b式の線孔土器の破片で、11線部に浮き線文が観察できる。540は福島県制取貝塚の資料から諸磯式の土器と捉えた。

●第VII群 中期から後期の土器(541~547)

541~545は中期中葉から後葉にかけて、546・547は後期中葉から後葉の土器である。

●第VIII群 時期の曖昧な土器(548~559)

548・549は同一個体と思われる。非常に薄い焼成はよく早期の可能性が高い。550・551は前期初頭か。552~558は不明だが、前期中葉の可能性が高い。559は繊維が多く混入する内河の浅鉢で、底部まで施文が現る。口縁部は結節文と細い粘土紐貼付である。前期初頭か前期中葉のどちらかに属する土器である。

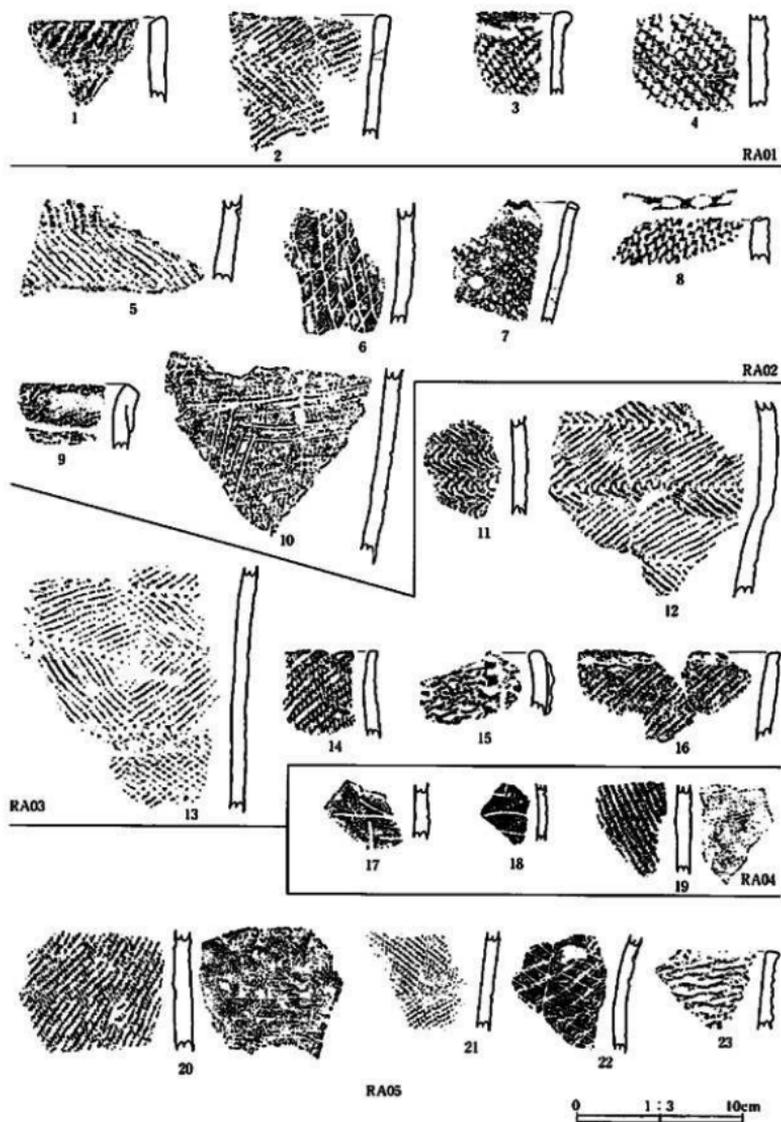
●第Ⅸ群 底部資料 (560～575)

Aは底部施文のないもの(560～566)、Bは底部施文がみられるもの(567～571)、Cは尖底(572～575)となる。561は前期後葉に属するか。562は大きく膨らむもので球胴深鉢の底部かもしれない。571～575は早期後葉から前期前葉にかけてのもので572は乳頭状に膨らむ。

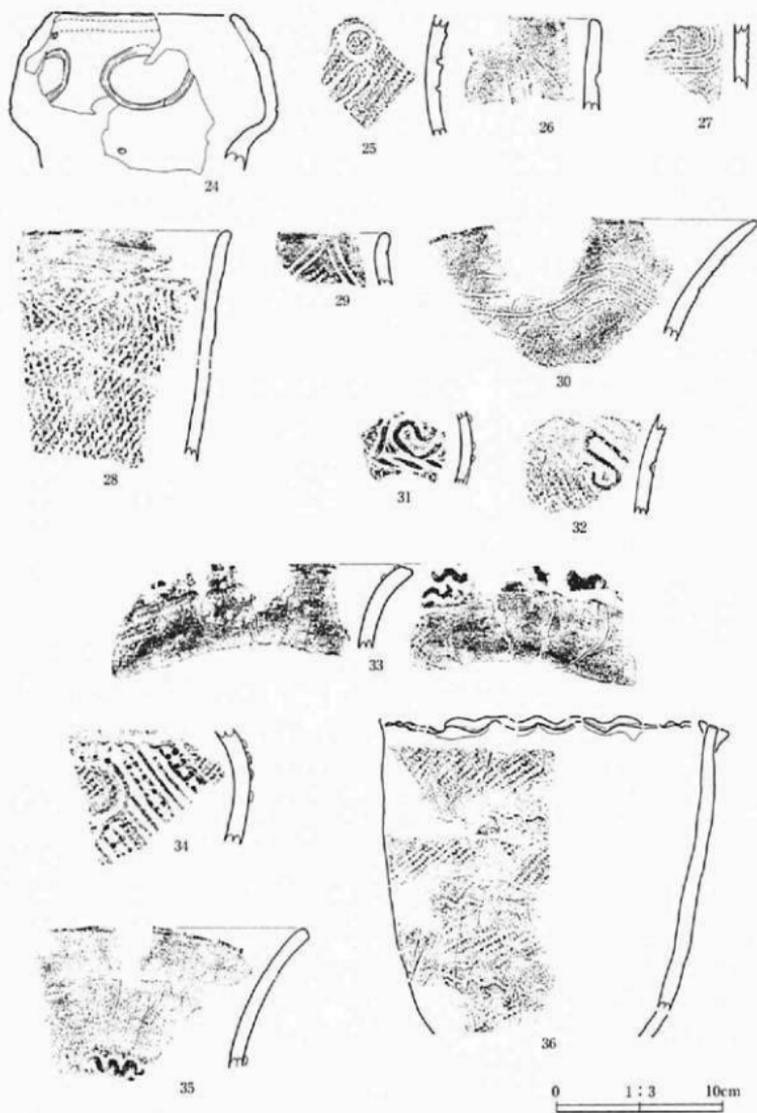
(5) 出土石器・石製品・土製品 第68図～80図 写真図版58～67

2年間の調査で、大コンテナ1箱の石器・石製品が出土している。遺構外の石器を中心に紹介する。

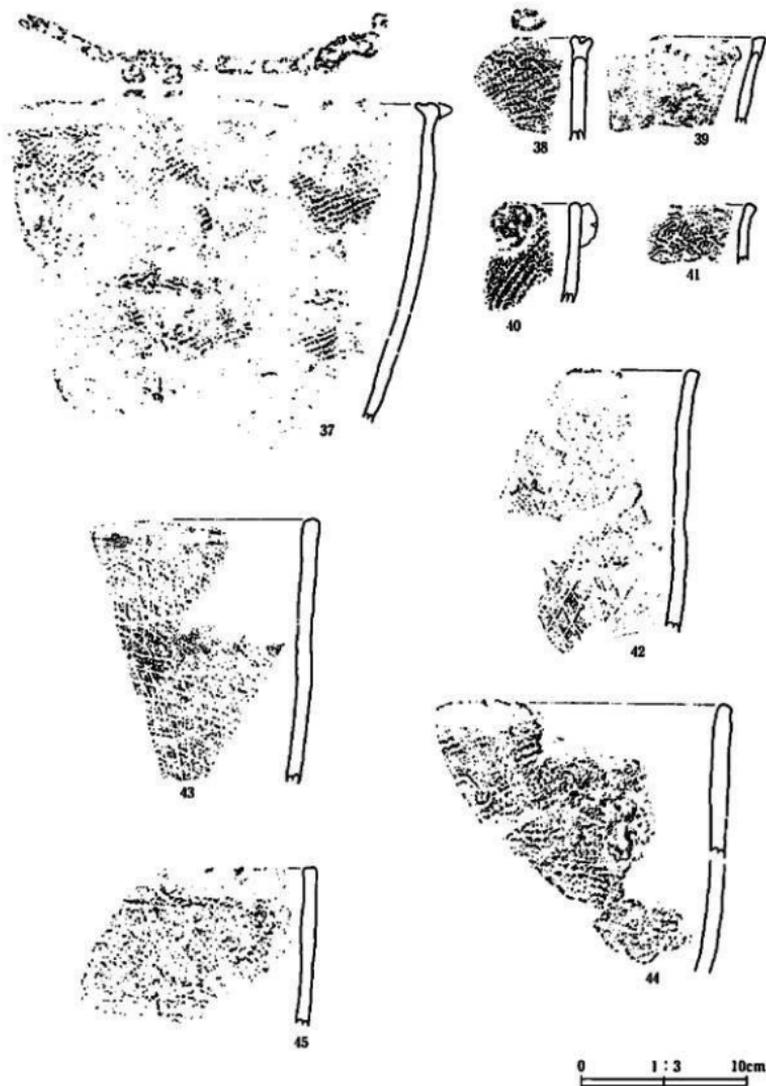
- ① 石鏃(642～658)：37点の出土のうち、31点掲載した。柳葉形は642の1点のみ。654・655が基部形状が平基となり、ほかは少なからず抉りを有するが644のように深いものは少ない。産地は遺構内の641が北海道赤井川産である他はすべて北上山地産で、石材は大部分が頁岩であるが、一部凝灰岩や砂岩がある。
- ② 石匙(659～708?)：出土は65点で掲載は59点。包含層1での出土が多い。すべてが北上山地産の頁岩である。縦形のもの(659～681・683～687)と横形(682・688～697)、また縦形で断面形が楕円形状のもの(698～708)の大きく3種類に分かれる。縦形では平面形が左右違うものが多いが、小型の665や678は左右同じで、「切る」よりは「突き刺す」用途を想定できる。また686は石鏃の可能性もある。687は釣針?。横形は682を除き大きさがそろっている個がある。断面形楕円形状のものにはつまみ部が大きい698のようなものと、小さい706のような2種類があり、用途の違いが考えられる。
- ③ 石匙(709～713?・714)：筈状石器は出土すべて掲載した。そのうち712は石鏃の未製品、713は尖頭器かもしれない。石匙の欠損品か。
- ④ 尖頭器(715～718)：出土品すべて掲載。716は基部がなかご状に作られており、基部の縁辺に装着痕と見られる不規則な溝離が観察できる。
- ⑤ スクレーパー(719～762)：116点出土した。遺構内外で比較的溝離調整の明確な58点を登録し、うち42点を図化(16点は写真掲載のみ)した。石材はほとんどが地元産の頁岩である。736・746・761は石匙の可能性が。719～722は比較的大きく丁寧な溝離調整を施す。
- ⑥ 磨製石斧(763～767)：5点出土ですべて掲載。4点が基部のみ、1点が刃部のみで出土で完形品はない。766は断面形に厚みがあり大形になりそう。767は使用痕が認められる。
- ⑦ 礫石器(768～786)：R A09と包含層1上位に出土が多い。遺構内外合わせて凹石2点、敲石12点、磨石13点の掲載である。敲石には小型のものが多い。781の磨石は円形に整形しており石製品かもしれない。782の磨石は近世の産業に伴う可能性がある。
- ⑧ 石核? (787) 黒曜石と見られた787は、分析の結果カルシウムを50%含むガラス質のもので、製鉄などに伴って生成するスラグの類であることが判明した。よって縄文時代ではなく近世の遺物となる。
- ⑨ 礫器(788・789)：788は礫石斧と考えられ、刃部の先端が細くなる。使用痕が認められる。799は片刃の打製石斧で基部がややへこむ。788は斧のような役割、789は鈍のような役割を想定する。
- ⑩ 石製品(790～797)：790・791は抉状耳飾りで欠損が見られる。792は穴のあいた石刺風のアクセサリーで不明の石核(793～795)も同類か。796は環状石斧状で抉状耳飾りの未製品かもしれない。797は軽石製で、頂部に3つの穴があいており人顔にも見える。アクセサリーの一種か、それとも石偶か、不明である。
- ⑪ 土製品(798～800)：798は小型ミニチュア土器の破片。799は線絡文の800は表裏縄文の円盤状土製品で、時期は799が前期前葉、800が前期初頭と考えられる。



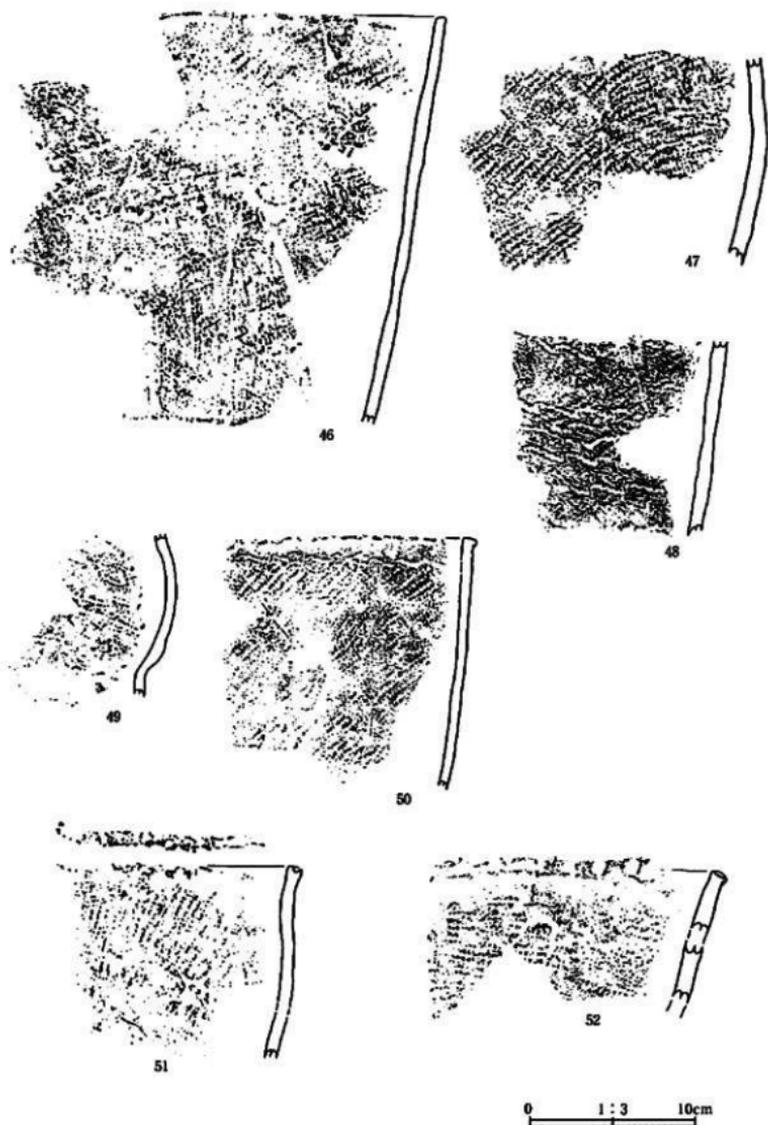
第35图 遼陽内出土土器1 (RA01~04)



第36圖 遺構内出土土器2 (RA07)



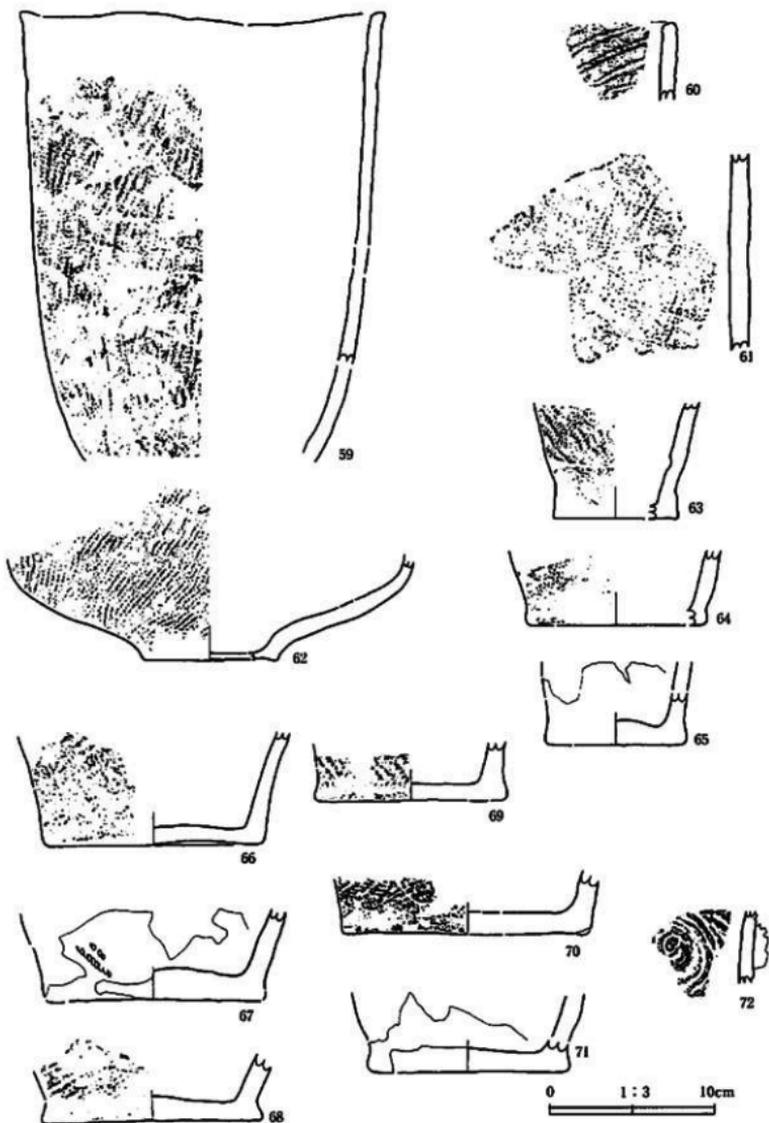
第37回 遺構内出土土器3 (RA07)



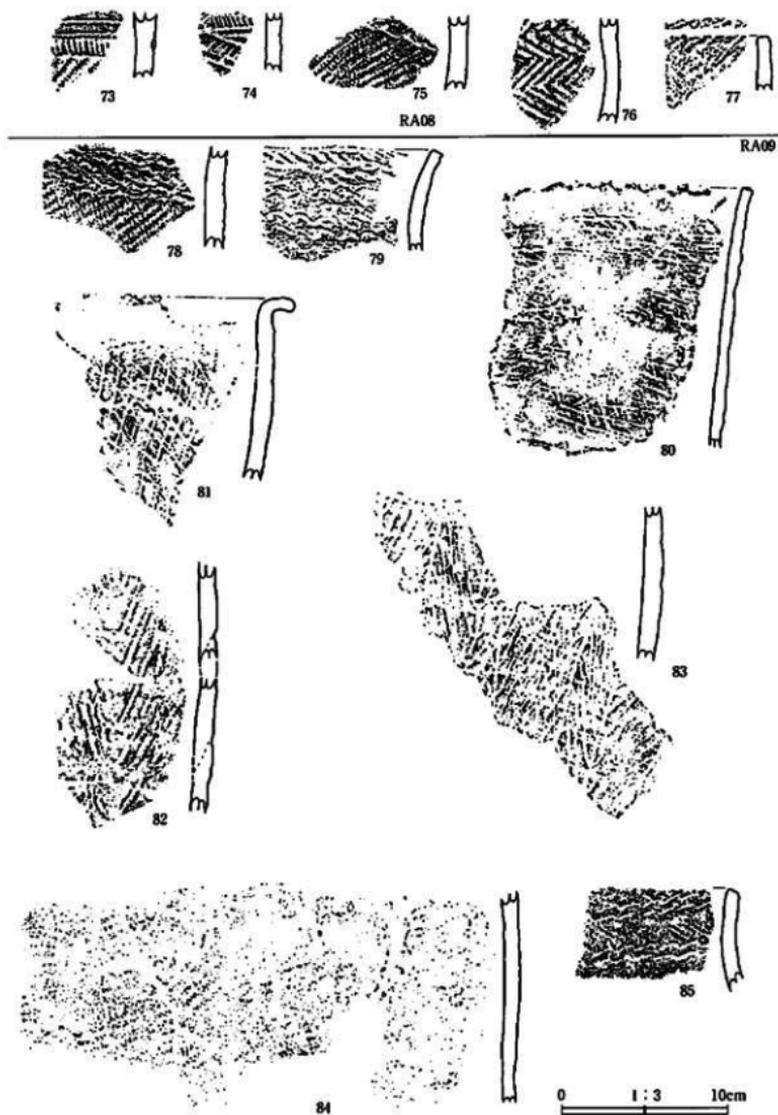
第38圖 遺構内出土土器4 (RA07)



第39図 遺構内出土土器5 (RA07)



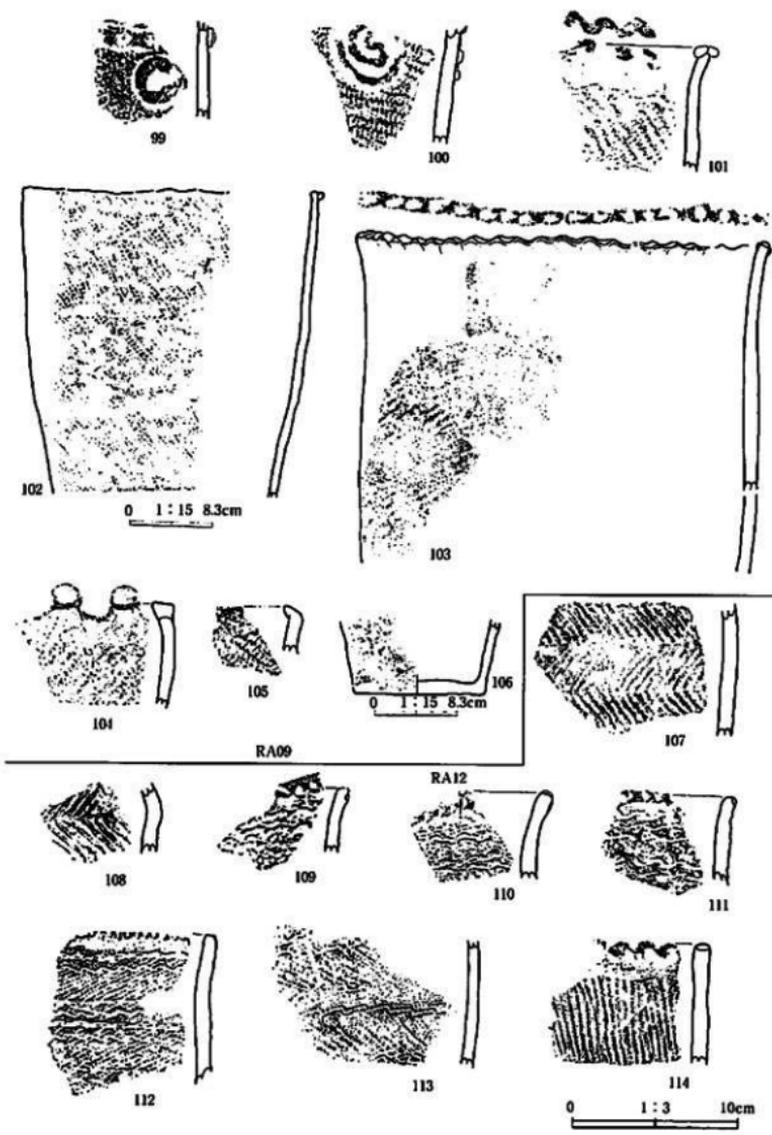
第40图 濠沟内出土土器6 (RA07)



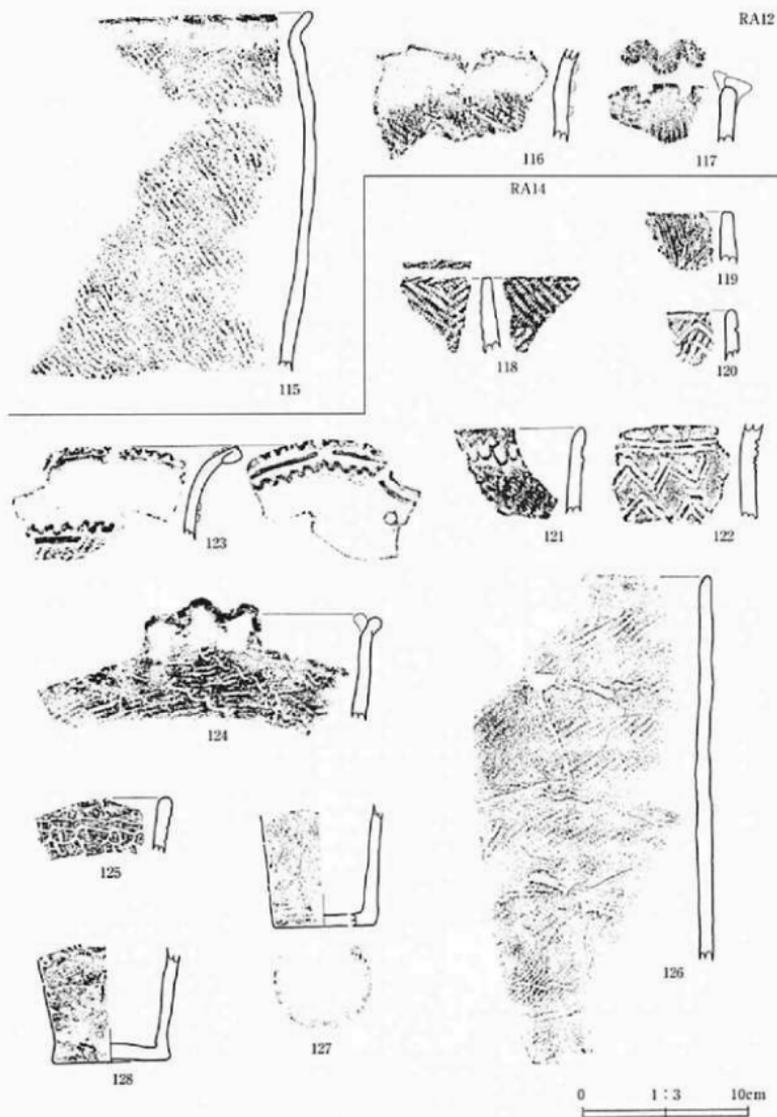
第41圖 遺構内出土土器7 (RA08・09)



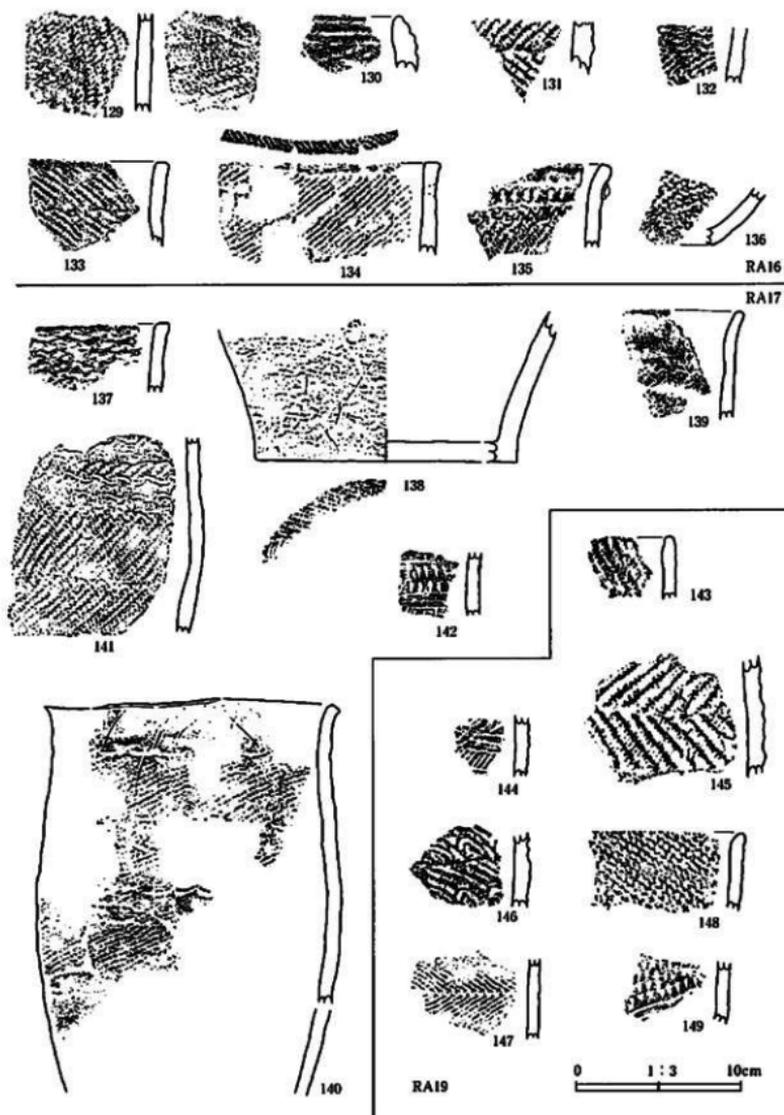
第42図 遺構内出土土器8 (RA09)



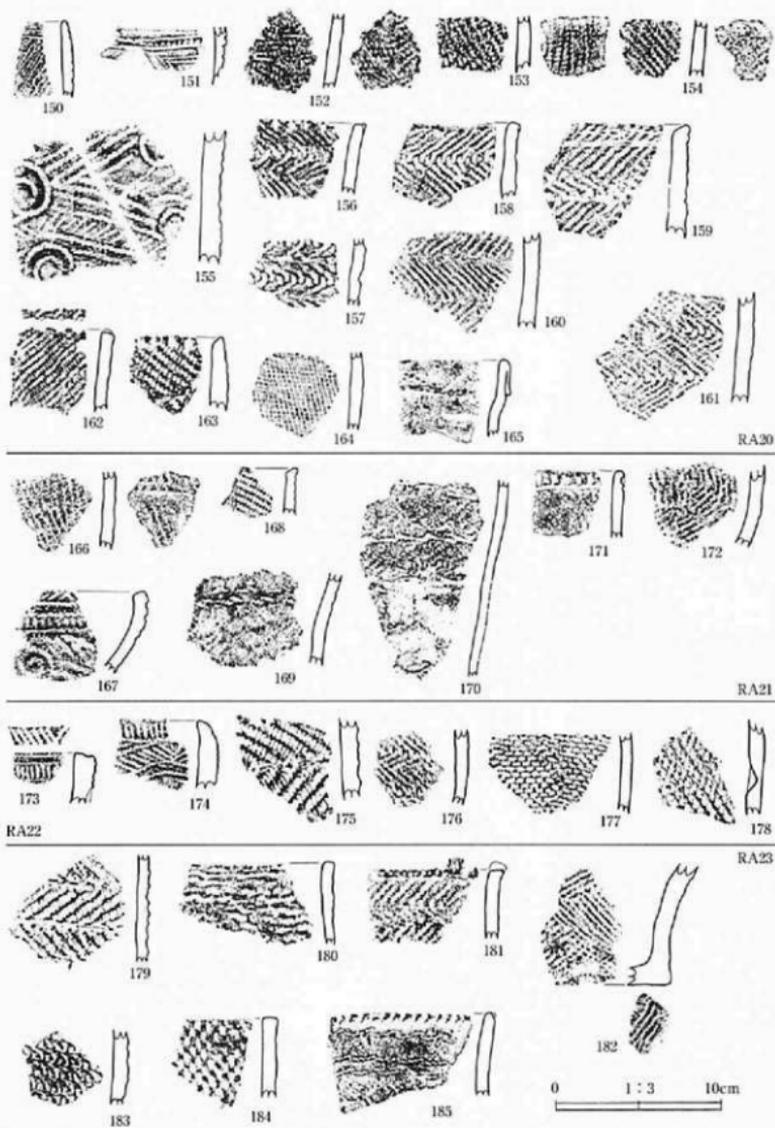
第43圖 遺構内出土土器9 (RA09・12)



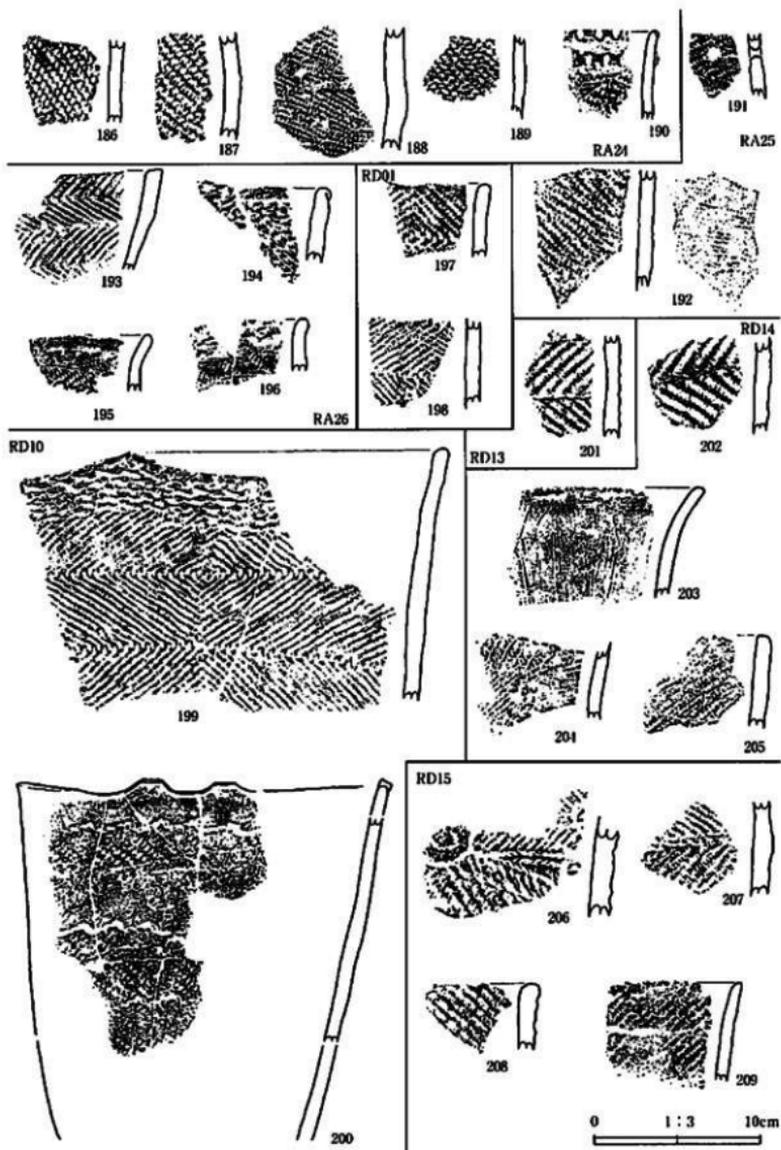
第44圖 遺構内出土土器10 (RA12・14)



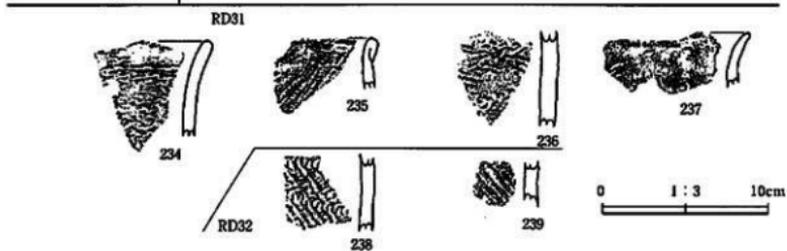
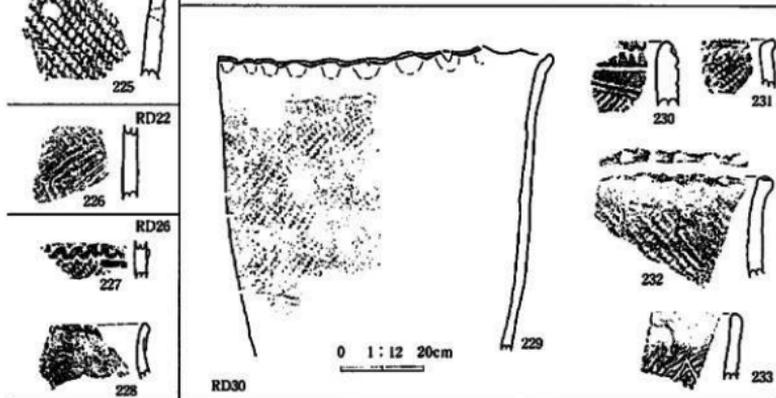
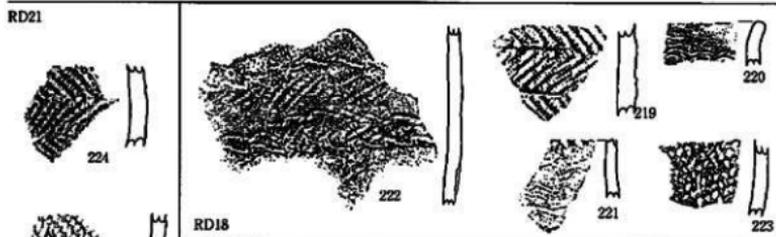
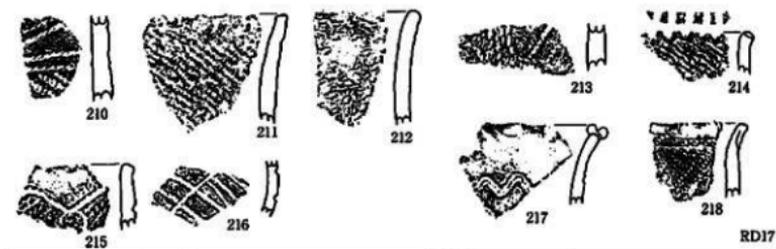
第45图 遼南出土土器11 (RA16·17·19)



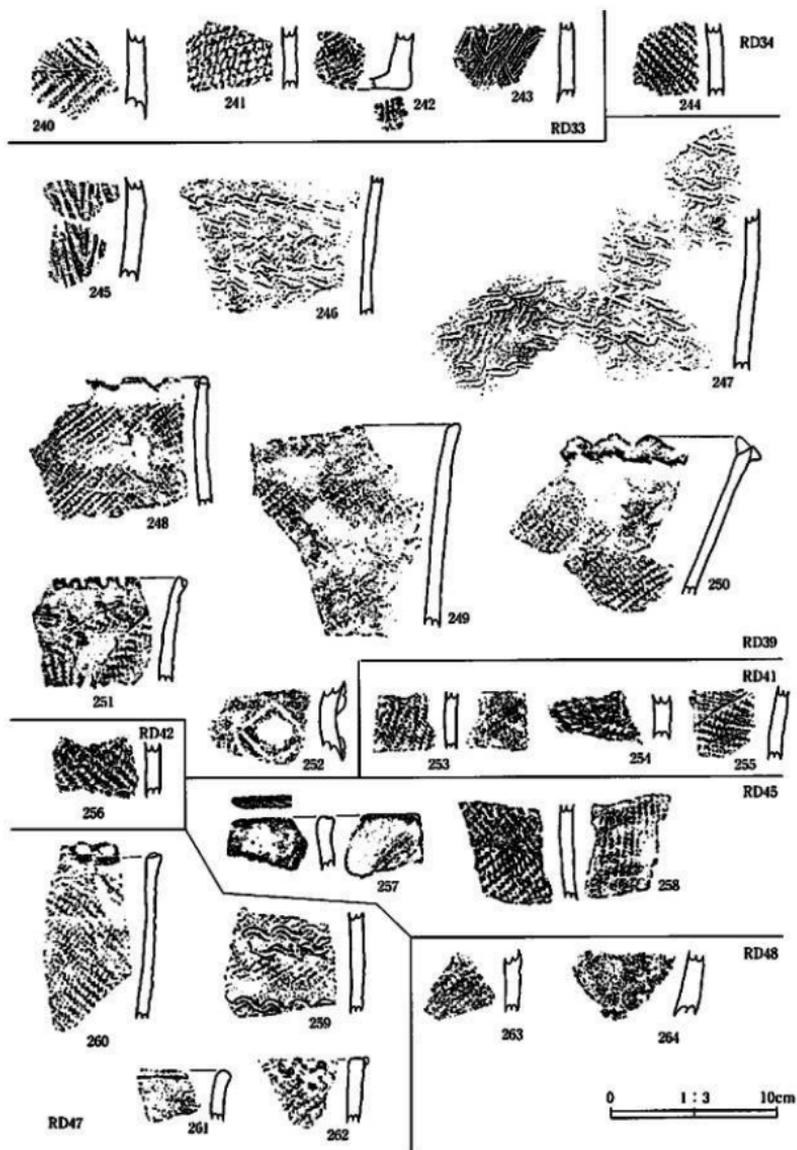
第46図 遺構内出土土器12 (RA20~23)



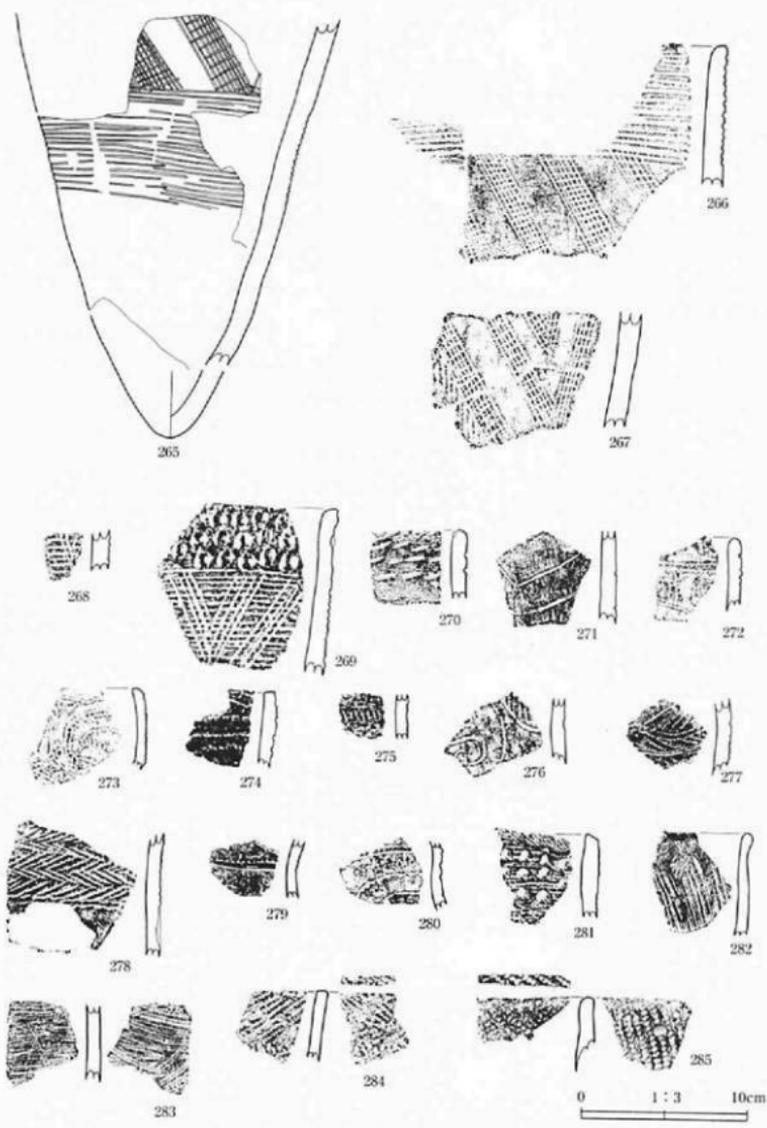
第47图 温網内出土土器13 (RA24~26 RD01・10・13・14・15)



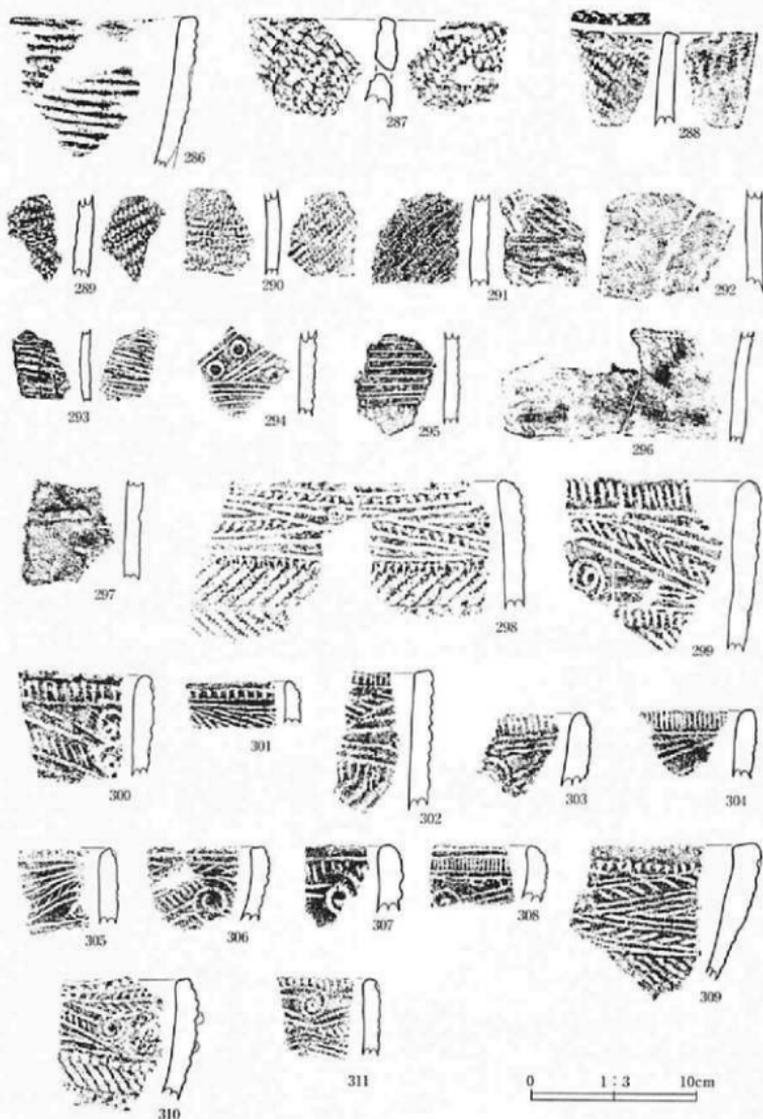
第48圖 遺構内出土土器14 (RD17・18・21・22・26・30・32)



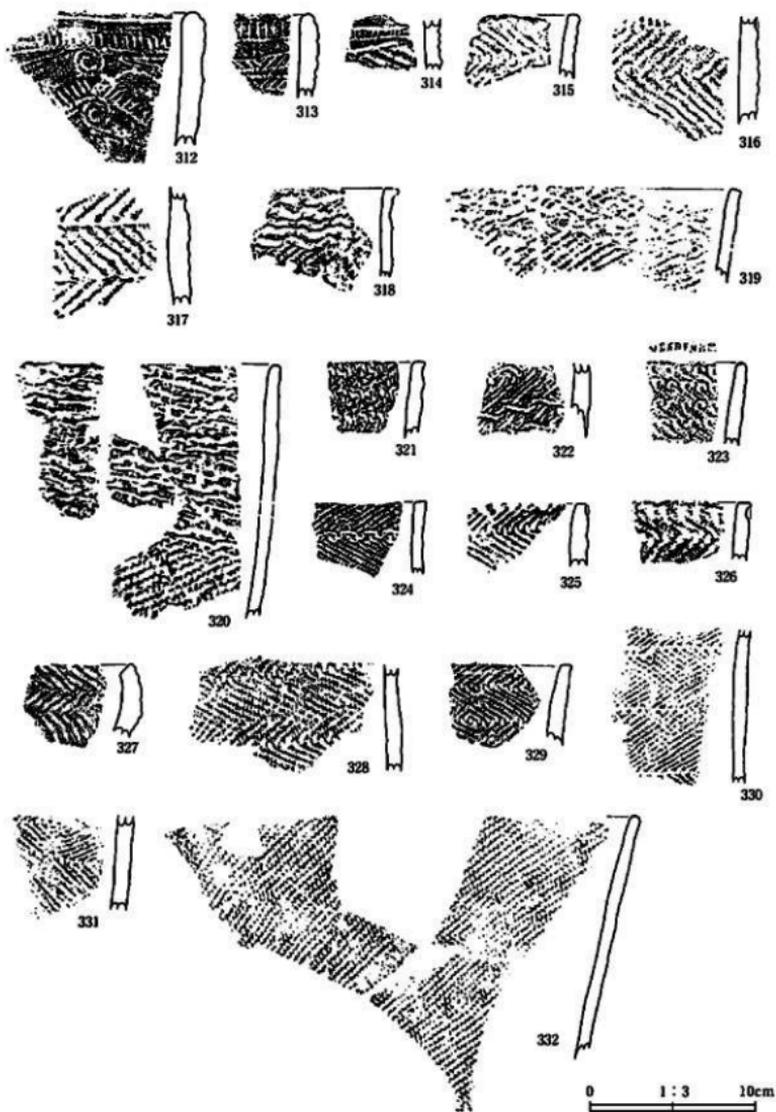
第49圖 遺構内出土土器15 (RD33・34・39・41・42・45・47・48)



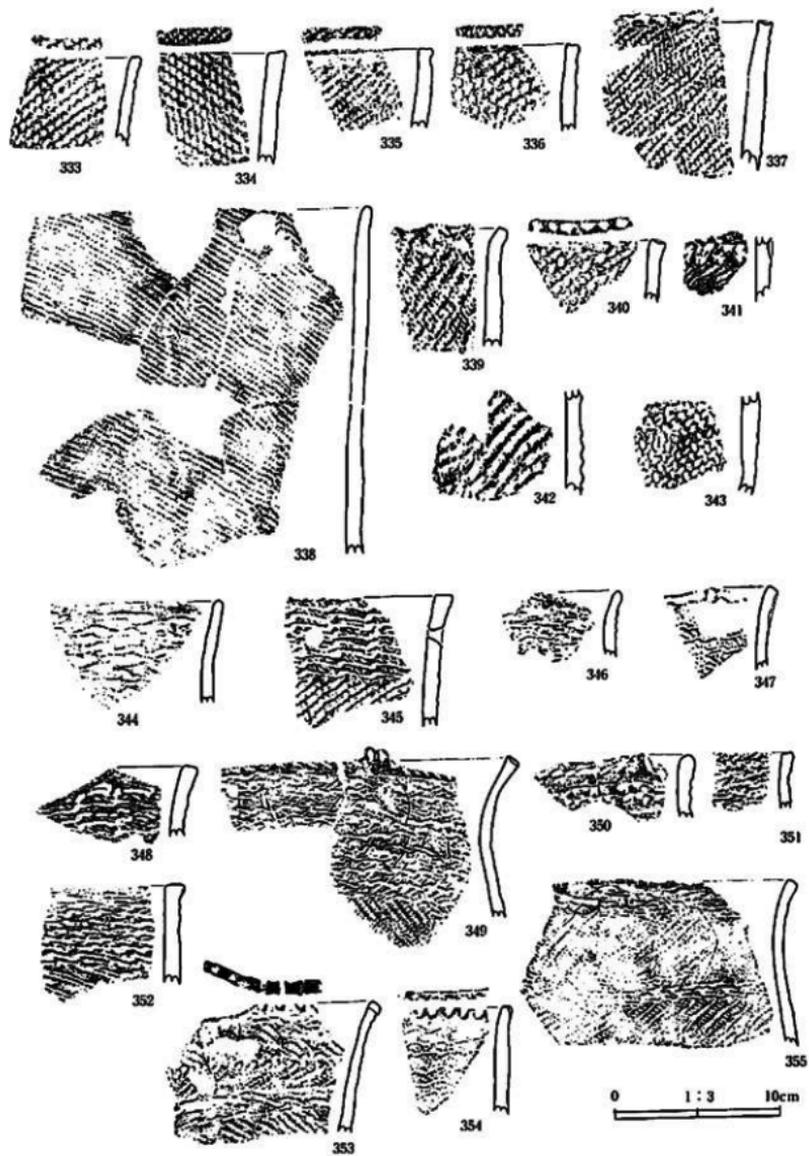
第50图 遺構外出土土器



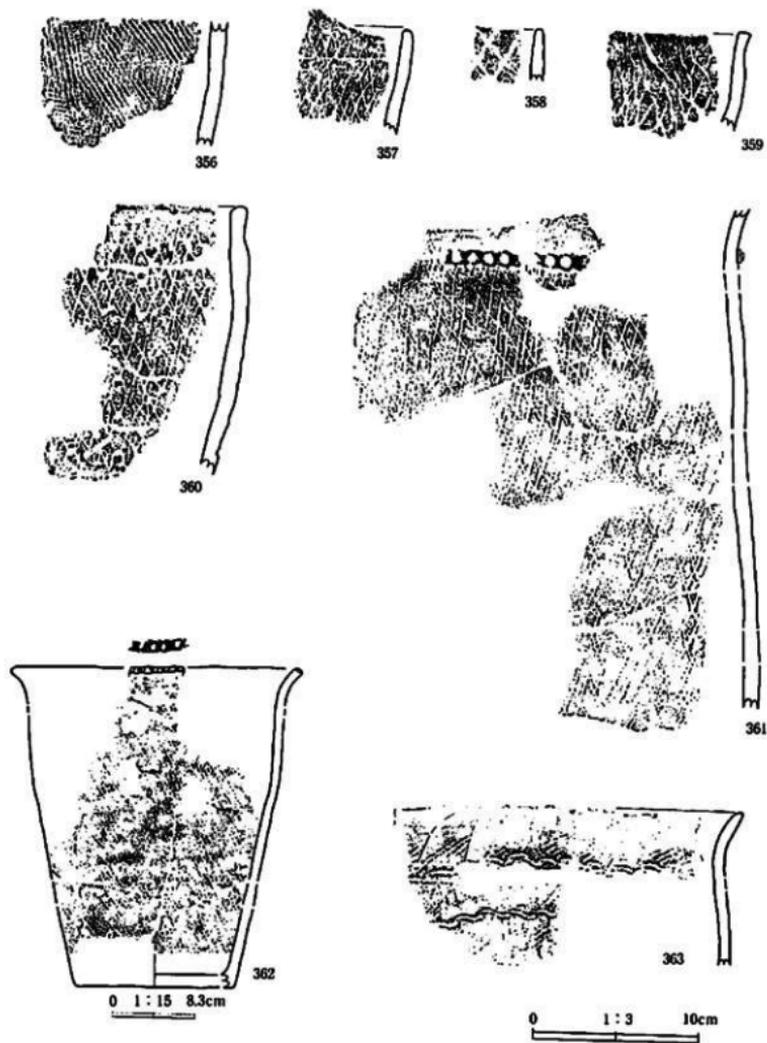
第51回 遺構外出土土器 2



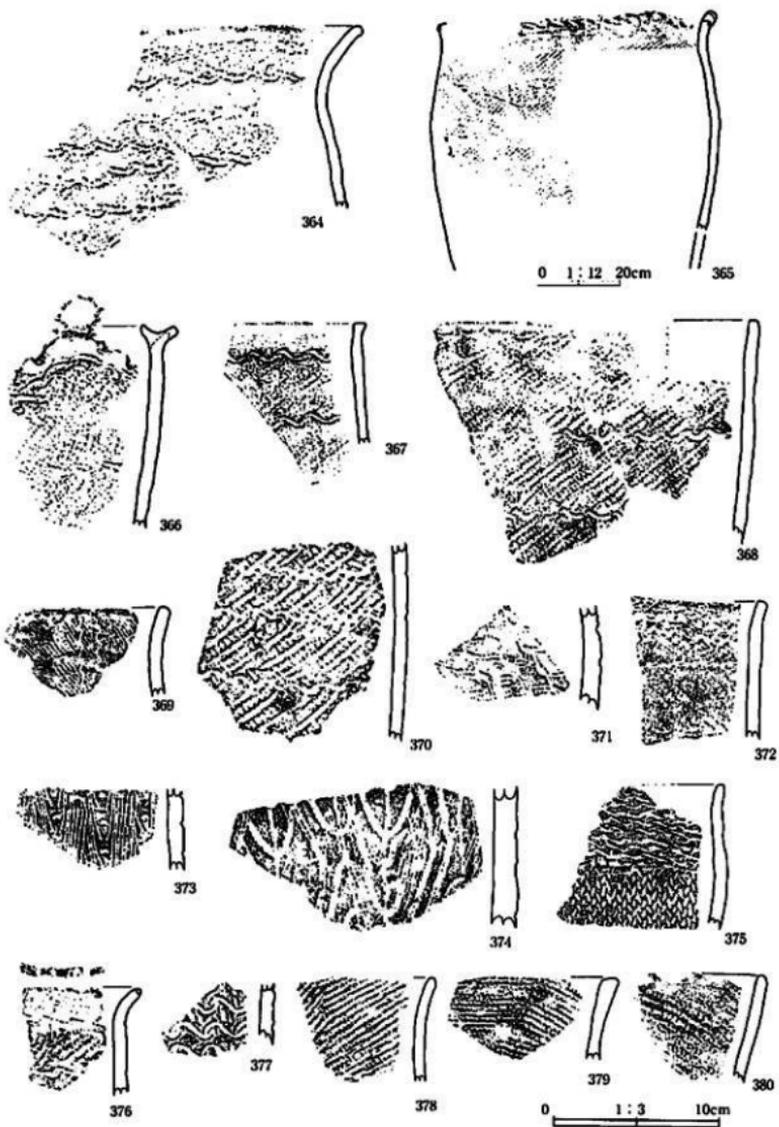
第52圖 遺銅外出土器 3



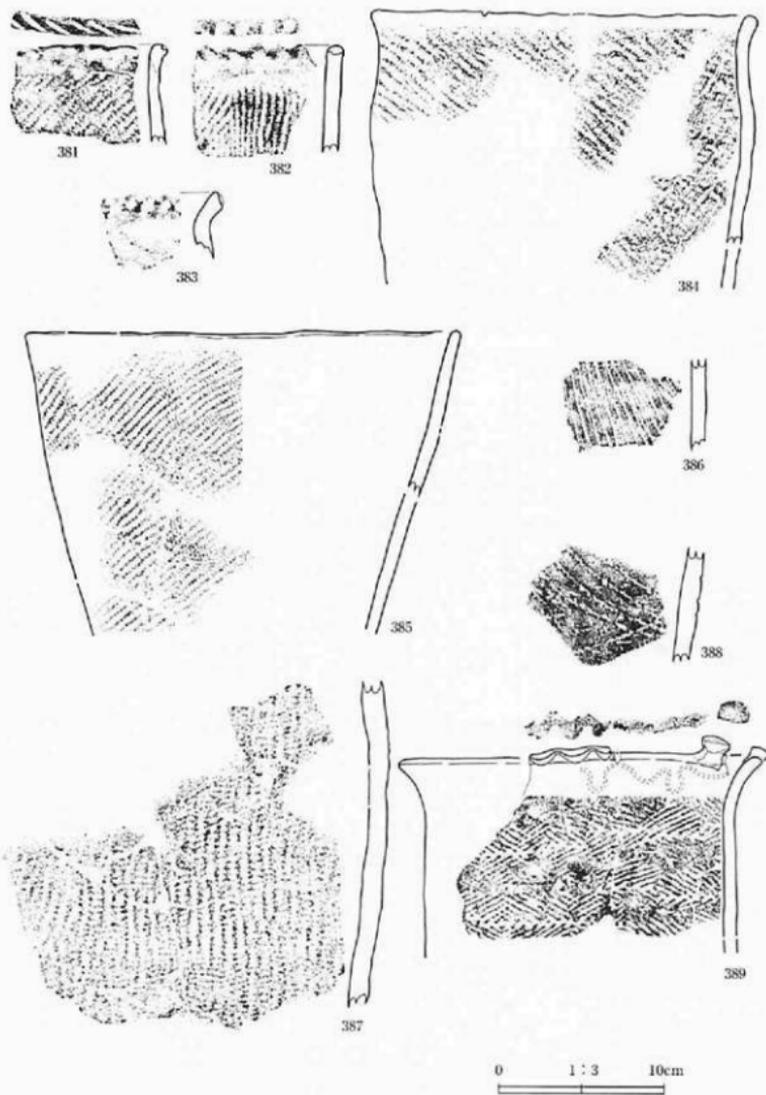
第53圖 遺構外出土土器 4



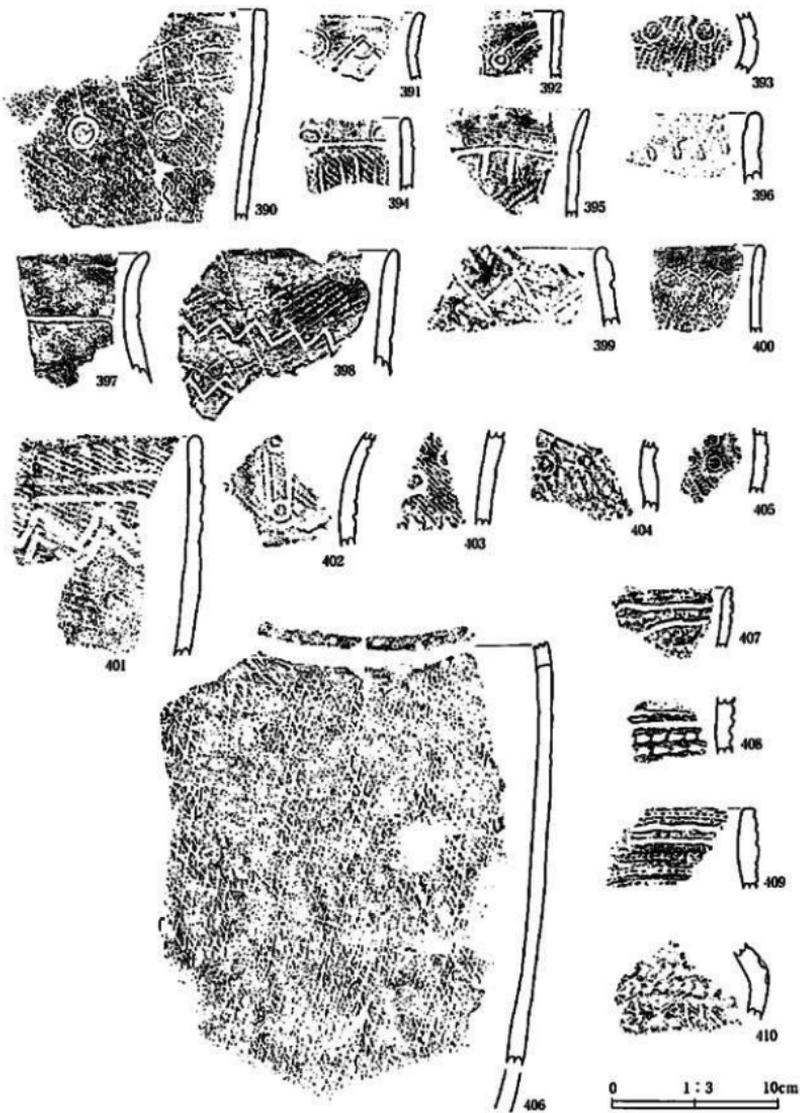
第54图 道桐外出土土器 5



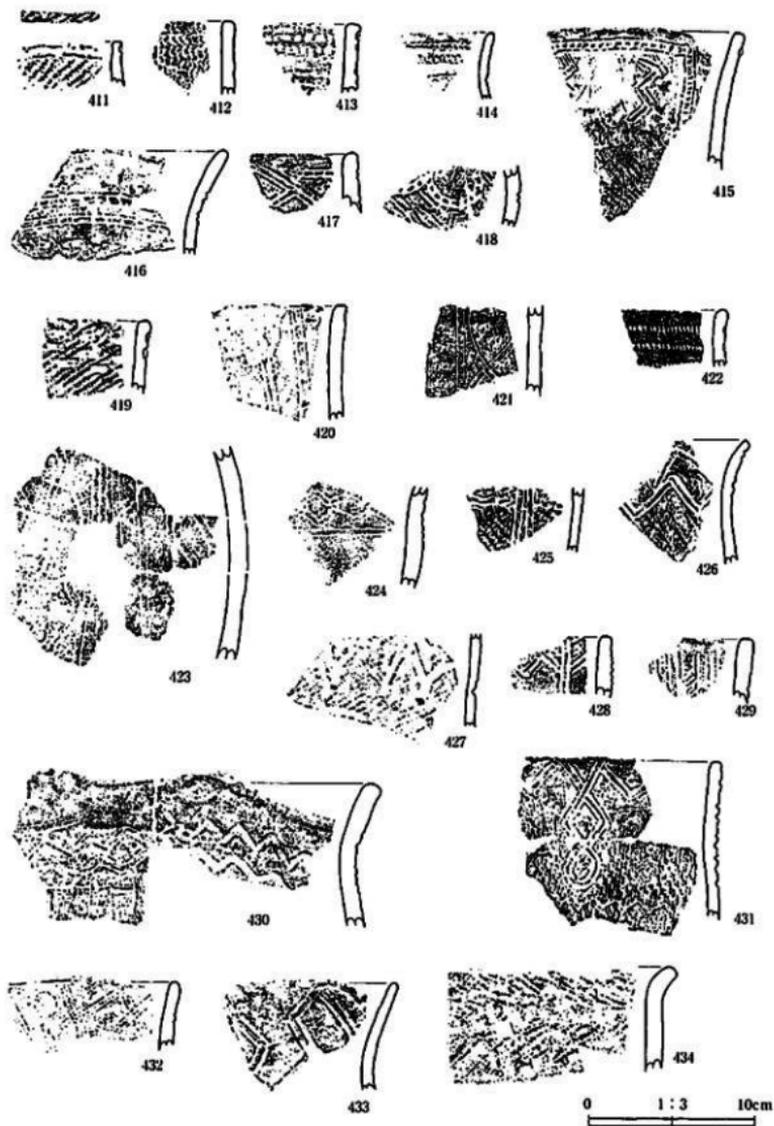
第55圖 遼河外出土土器 6



第56图 遺構外出土土器 7



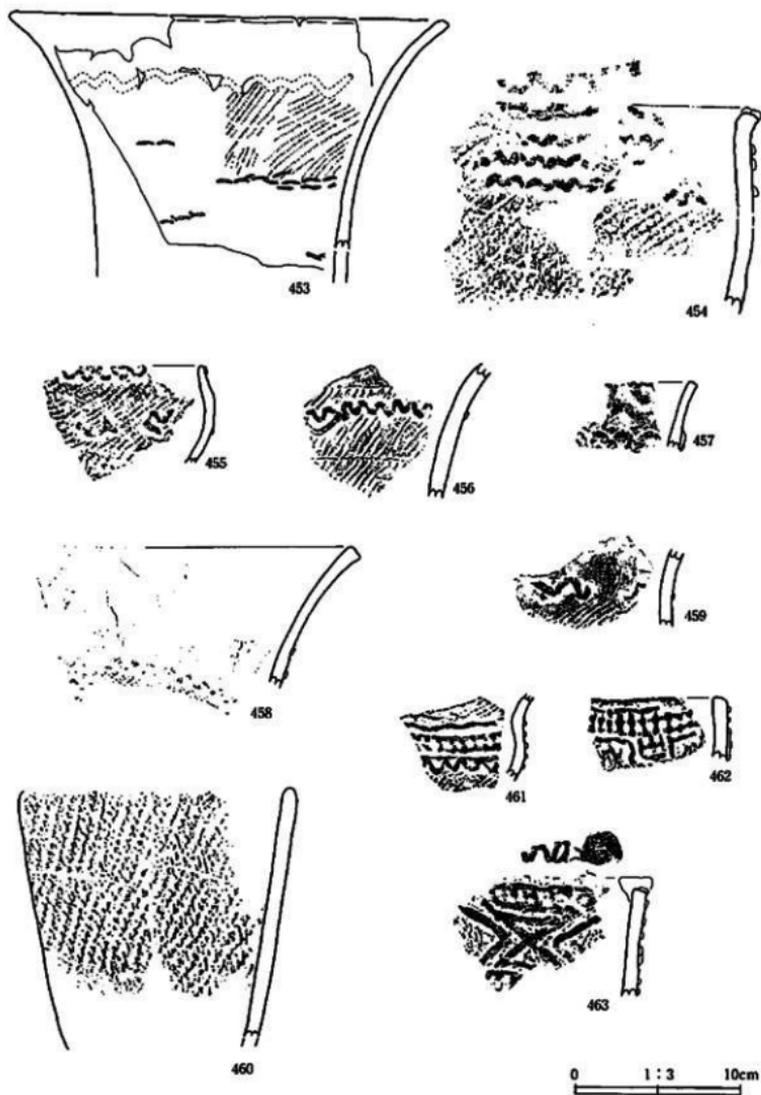
第57图 淩桥外出土土器 8



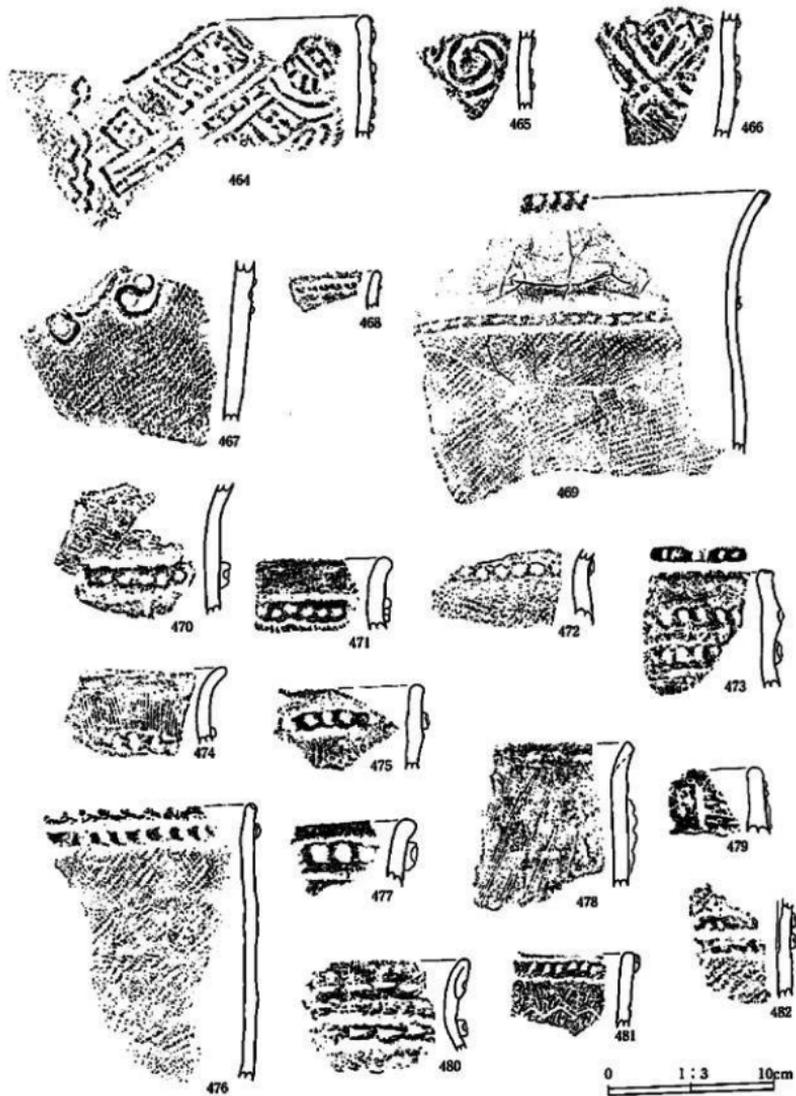
第58圖 遺構外出土土器 9



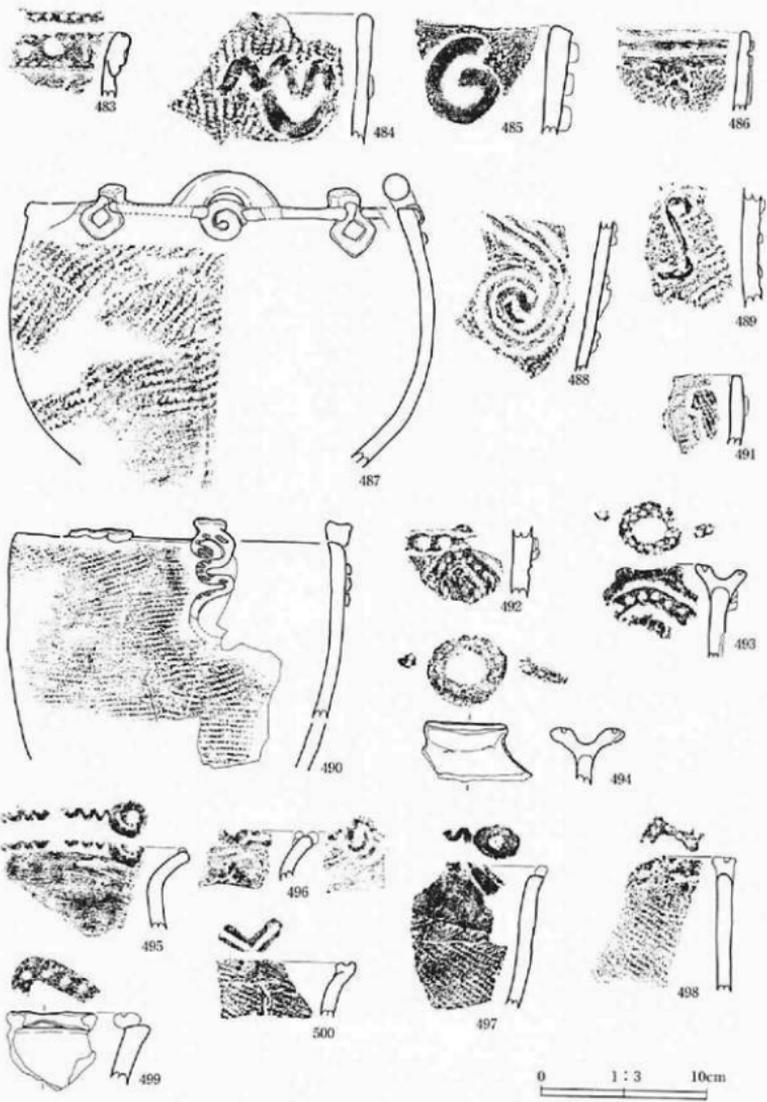
第59回 遺構外出土土器 10



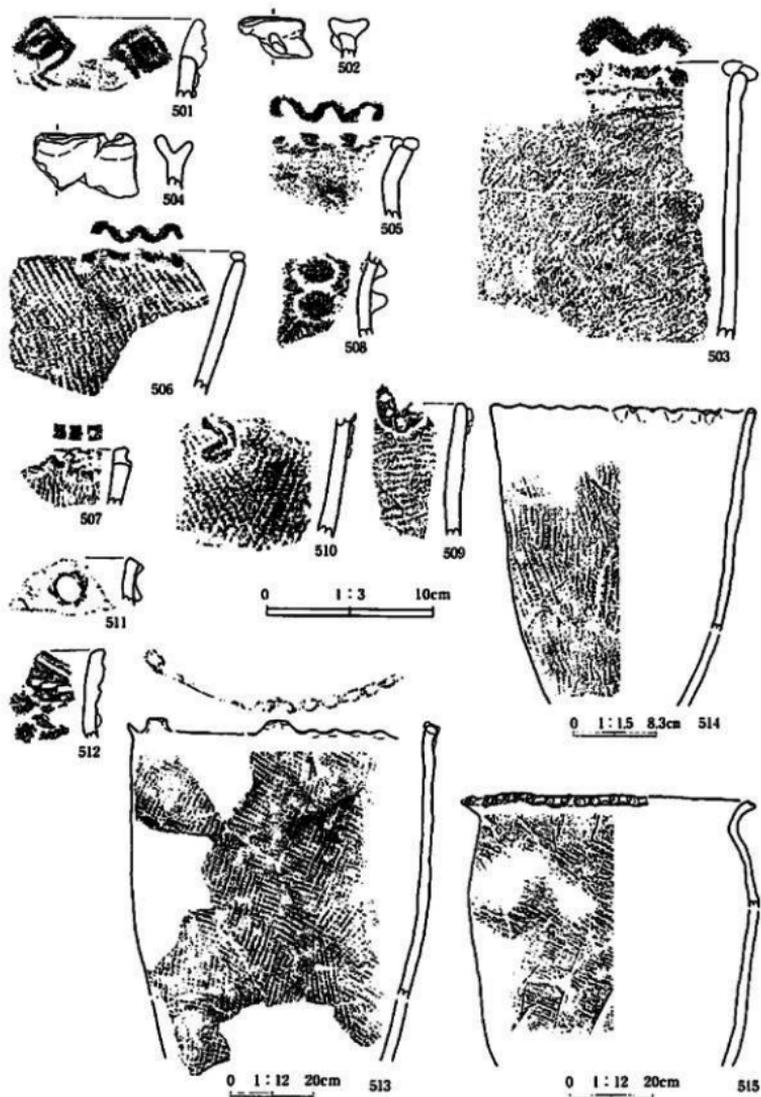
第60圖 遼東外出土土器 11



第61图 董家庄出土铜器 12



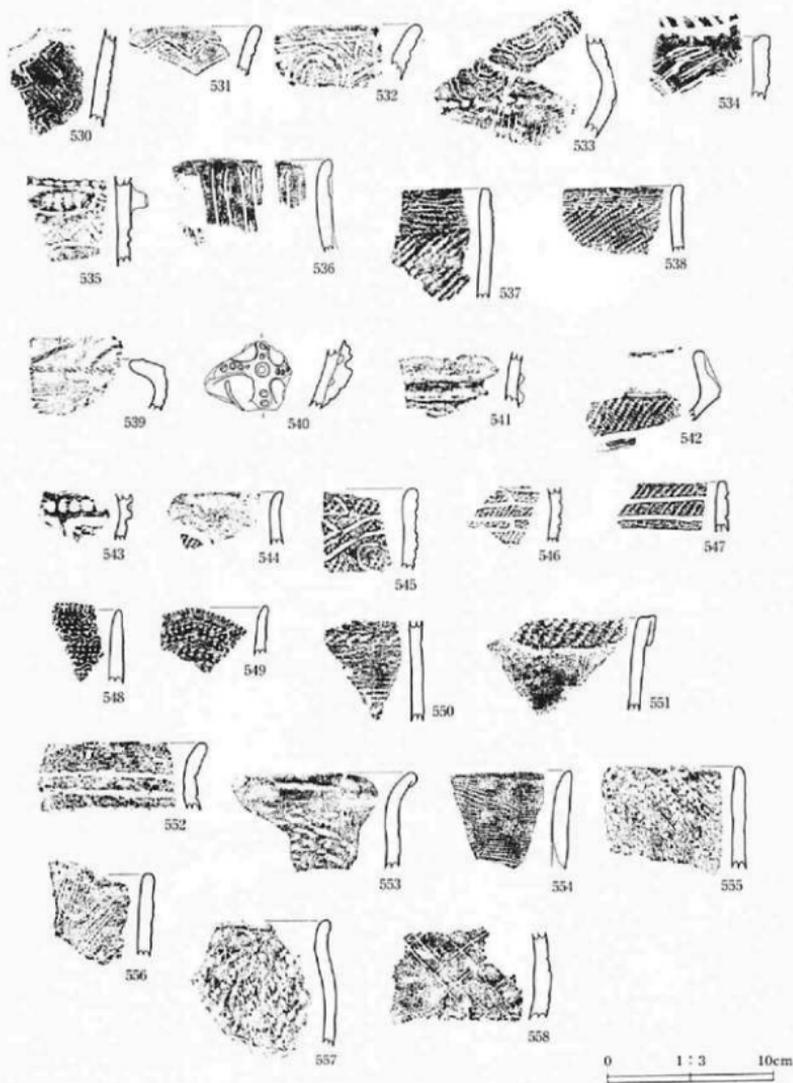
第62図 遺構外出土土器 13



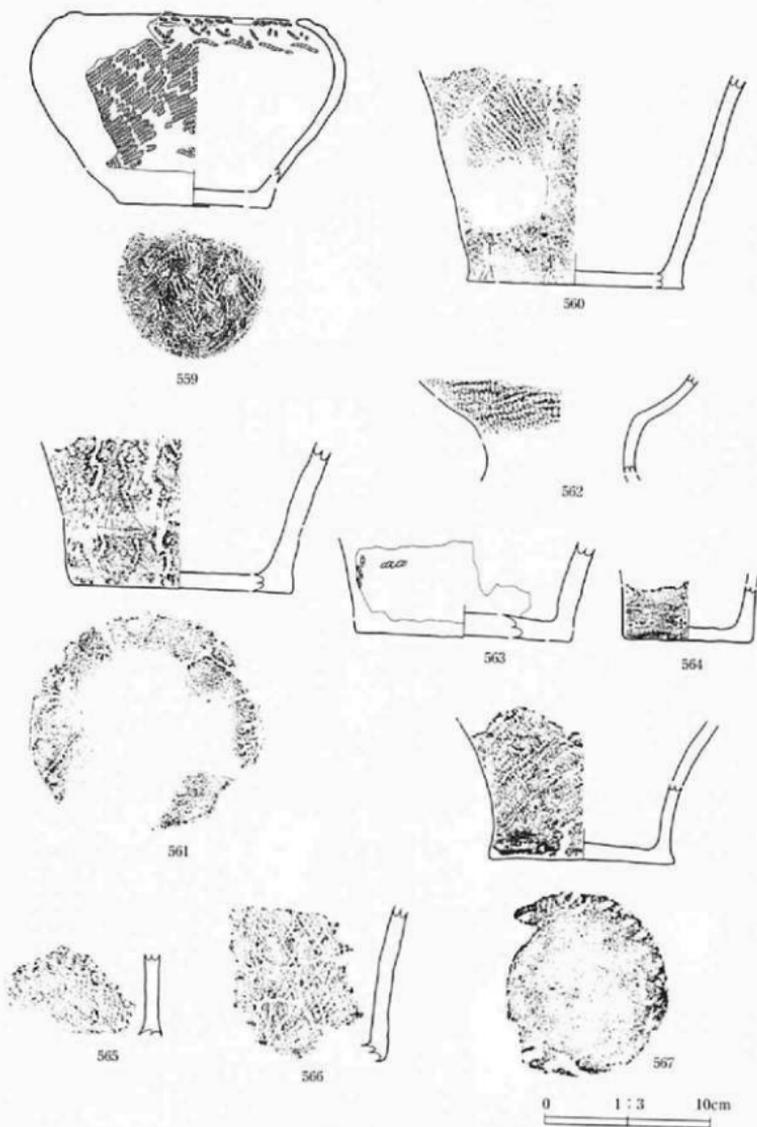
第63圖 遼南外出土土器 14



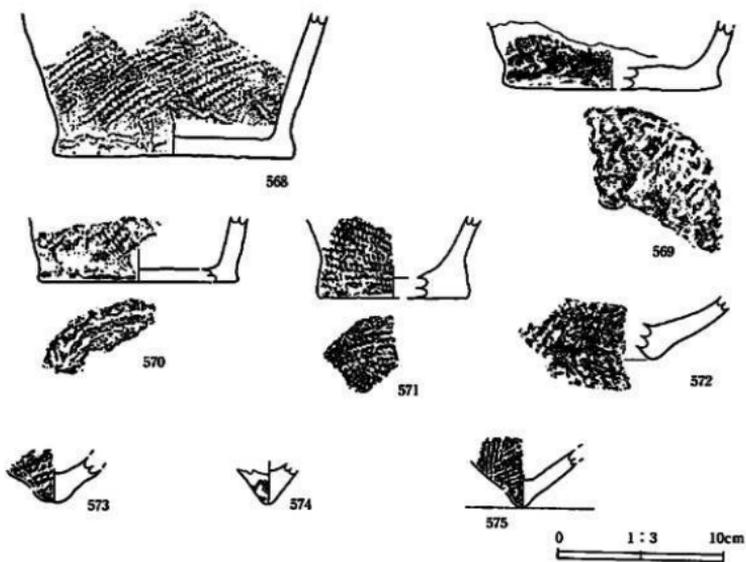
第64圖 遺構外出土土器 15



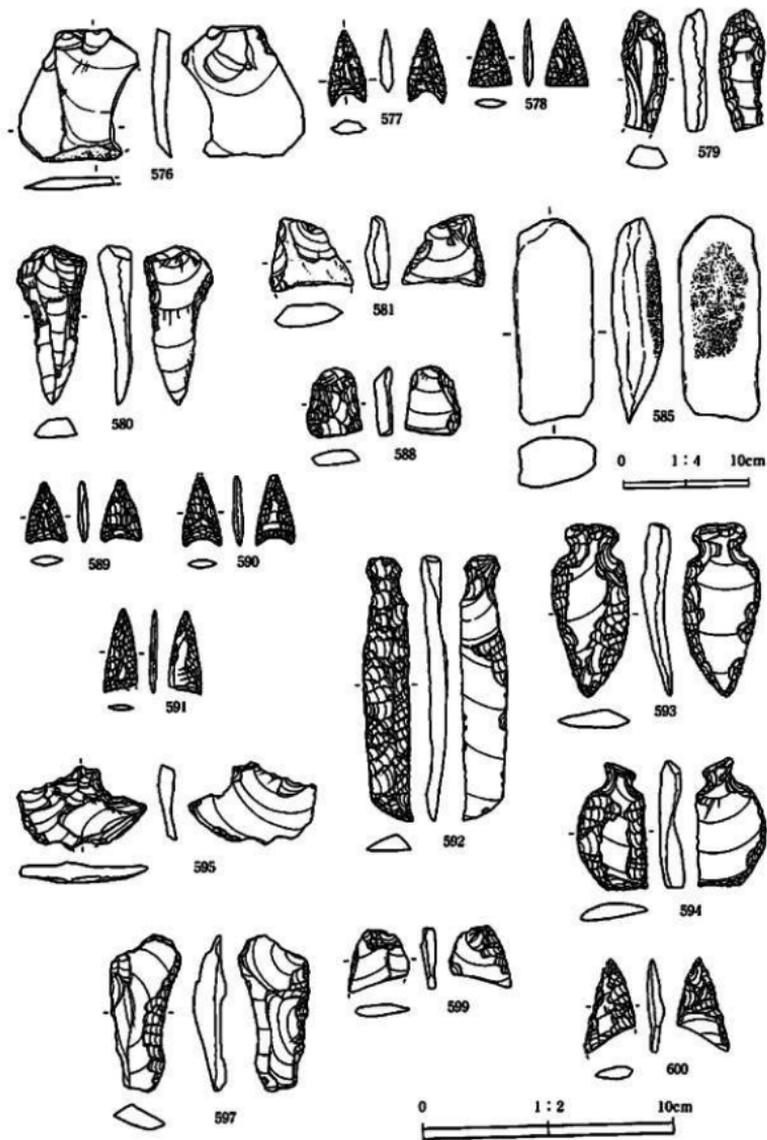
第65圖 遺構外出土土器 16



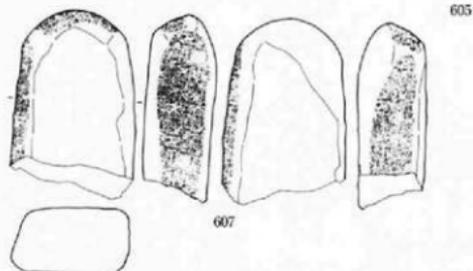
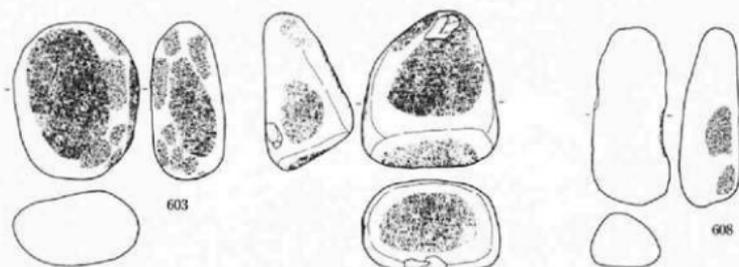
第66圖 遺構外出土土器 17



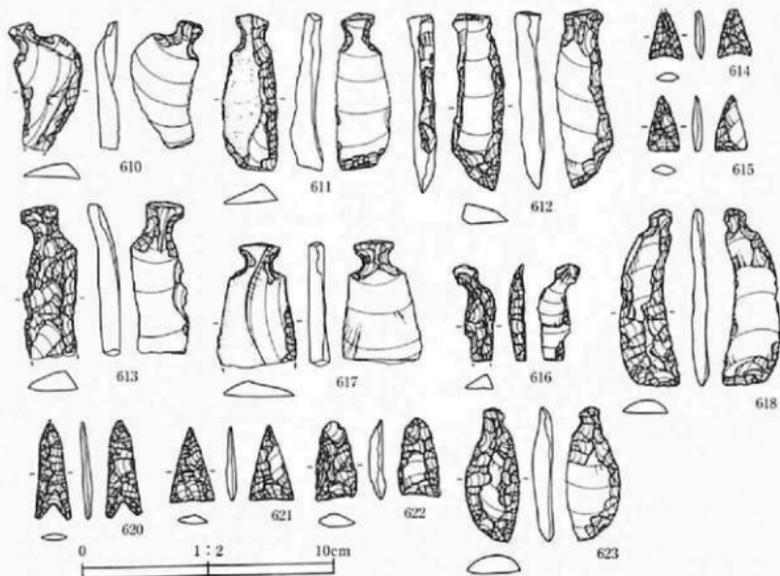
第67回 遺構外出土土器 18



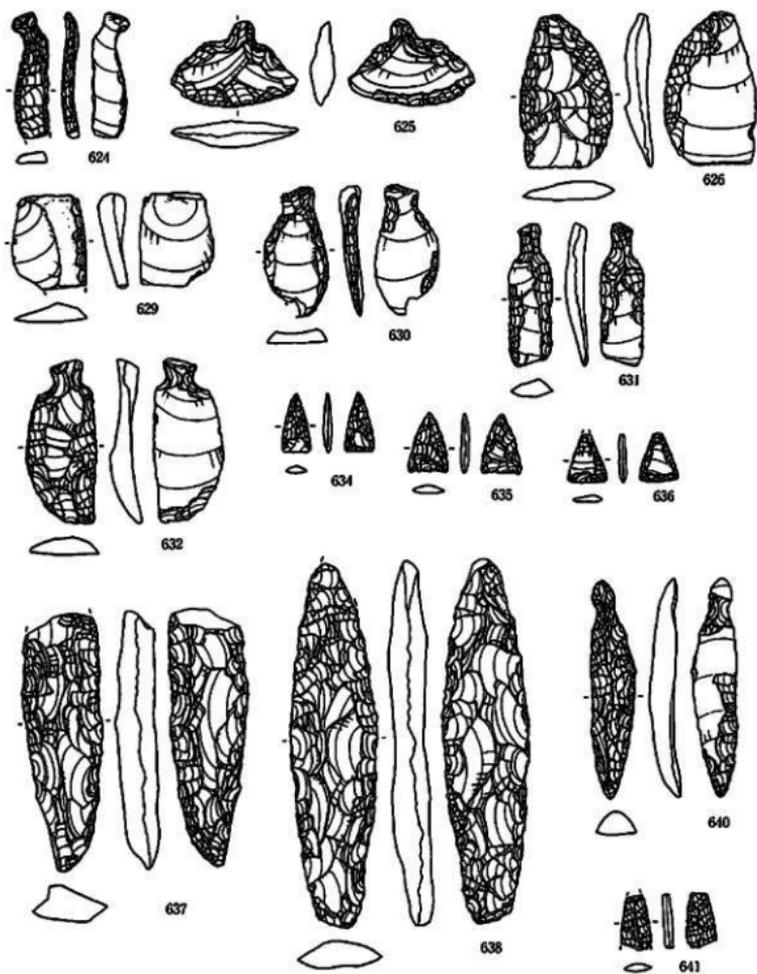
第68圖 出土石器 1



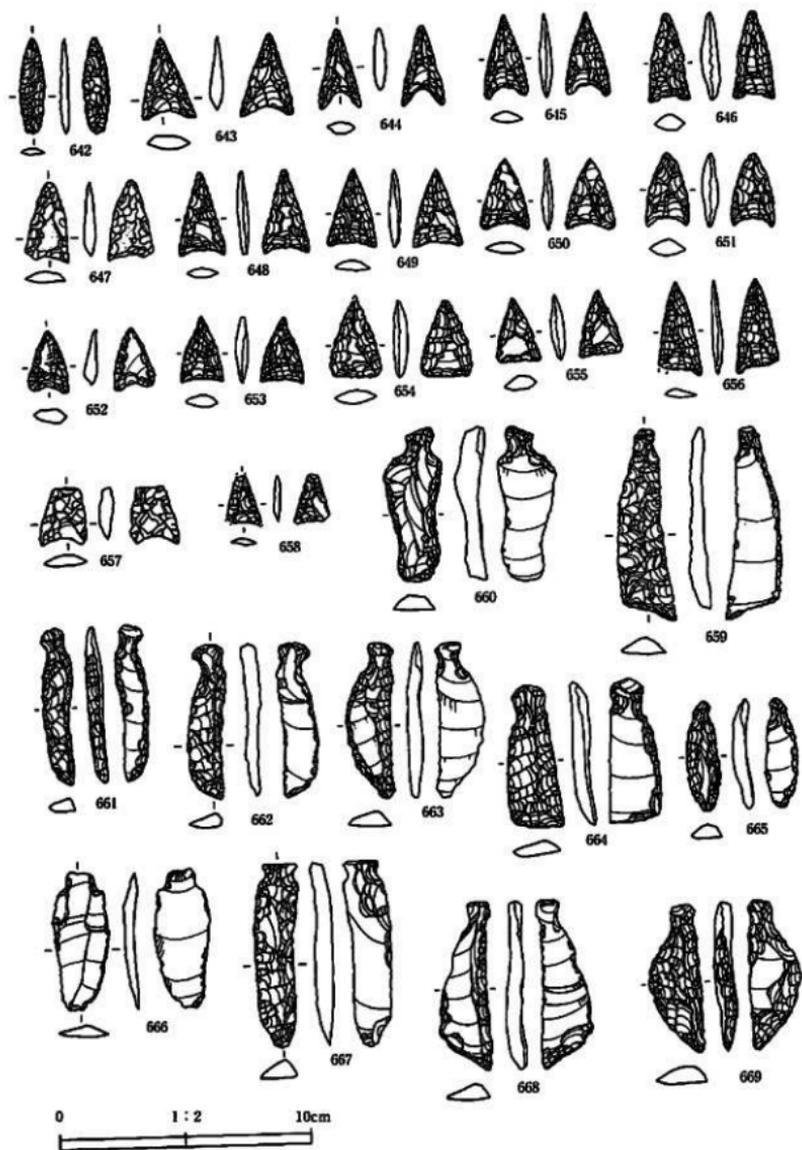
0 1:3 10cm



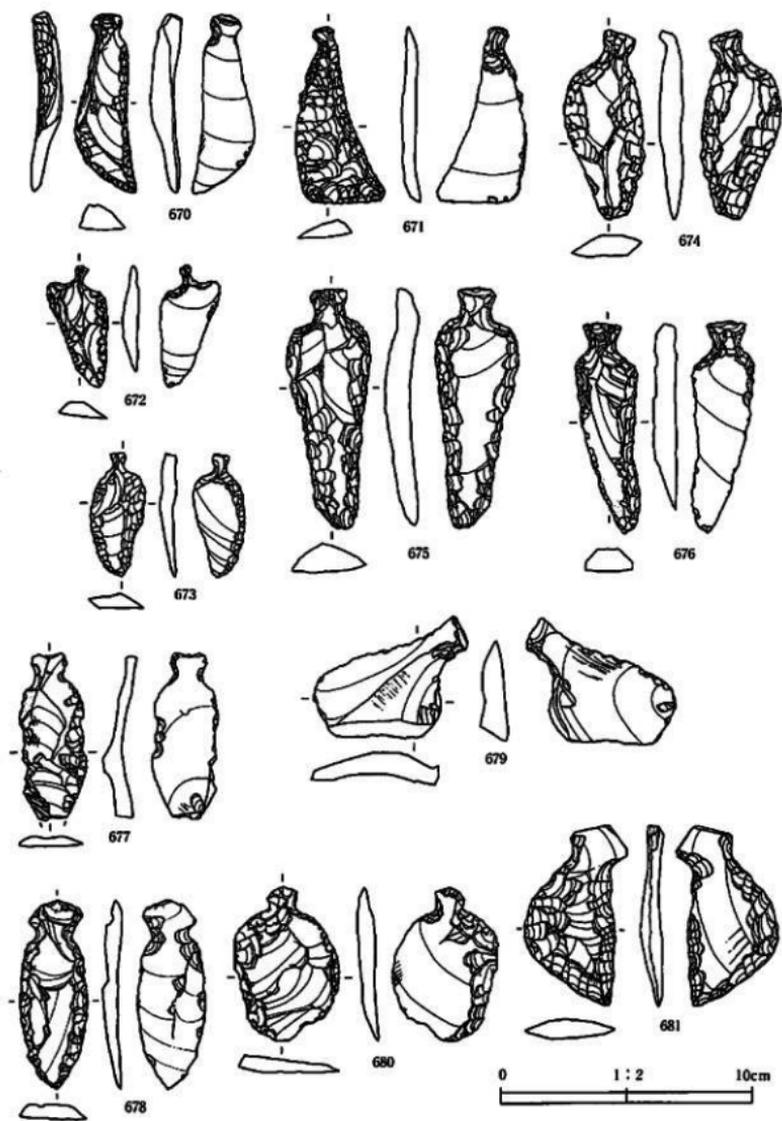
第69图 出土石器 2



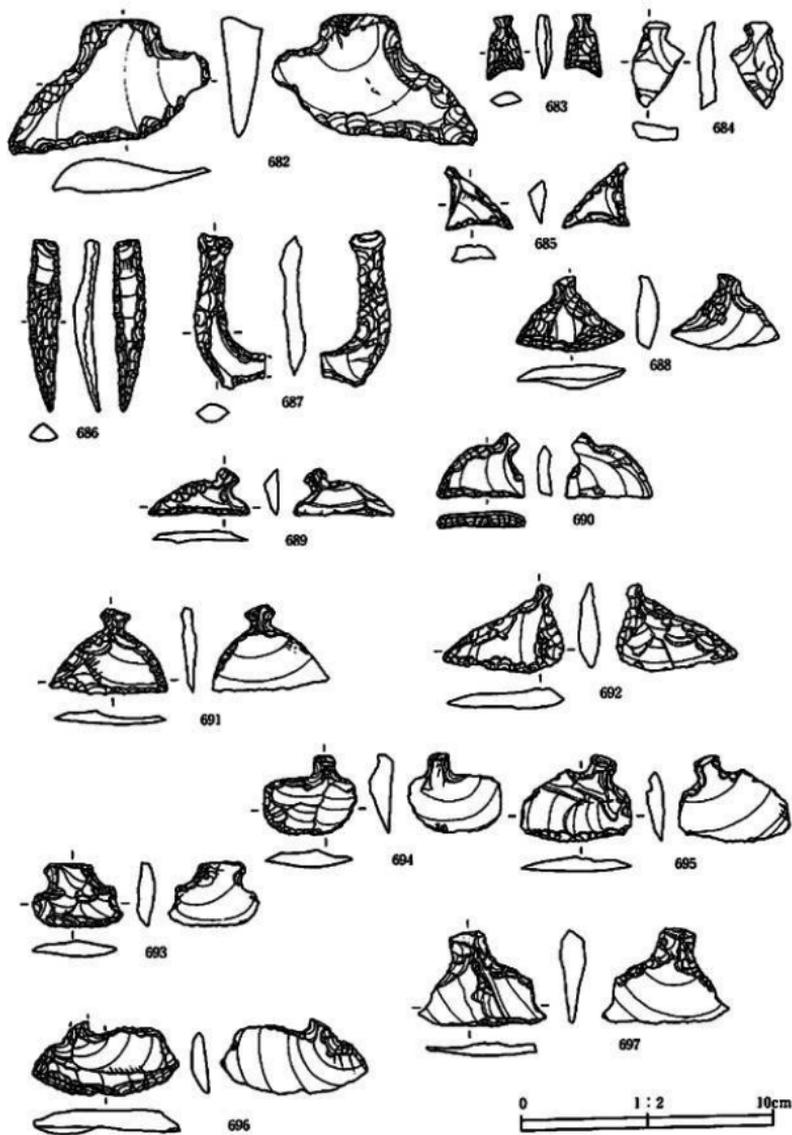
第70圖 出土石器 3



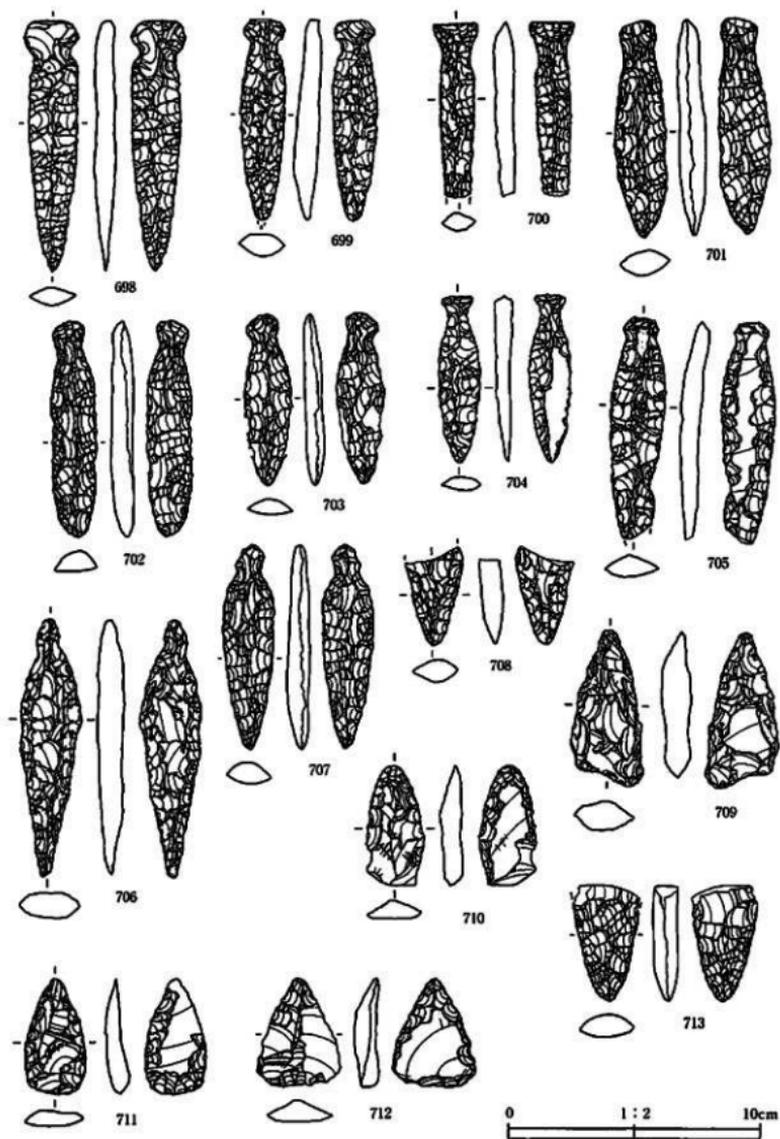
第71图 出土石器 4



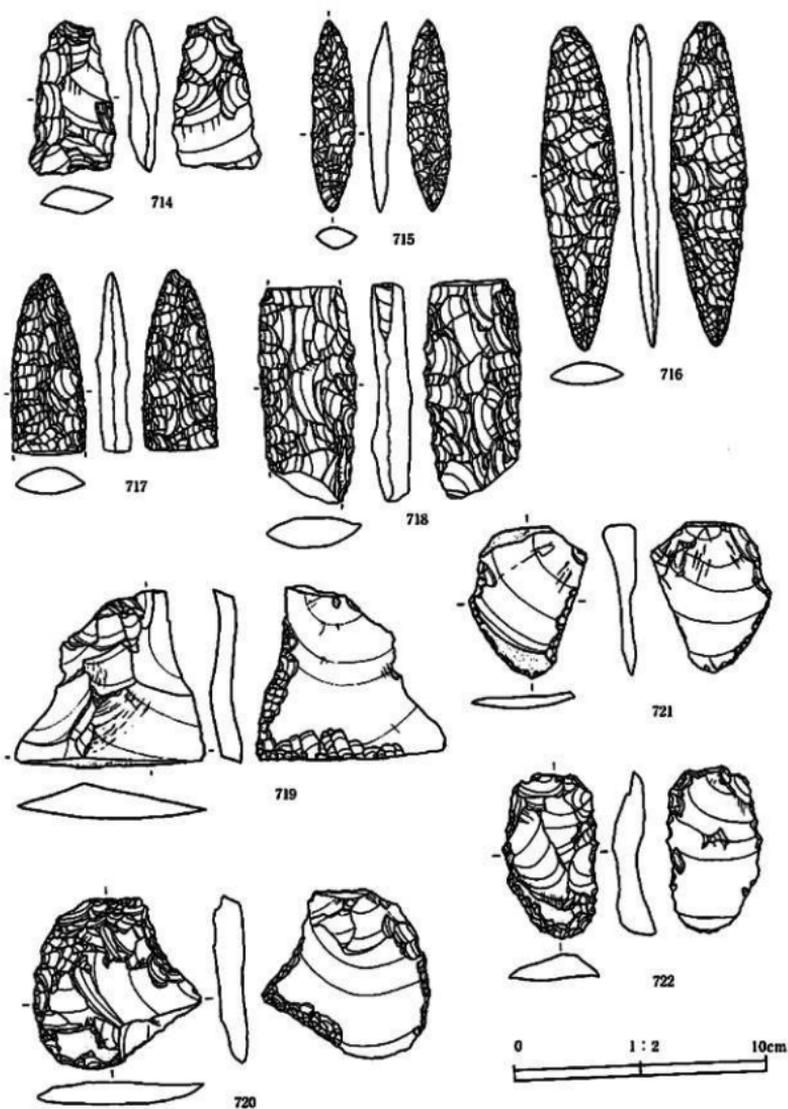
第72圖 出土石器 5



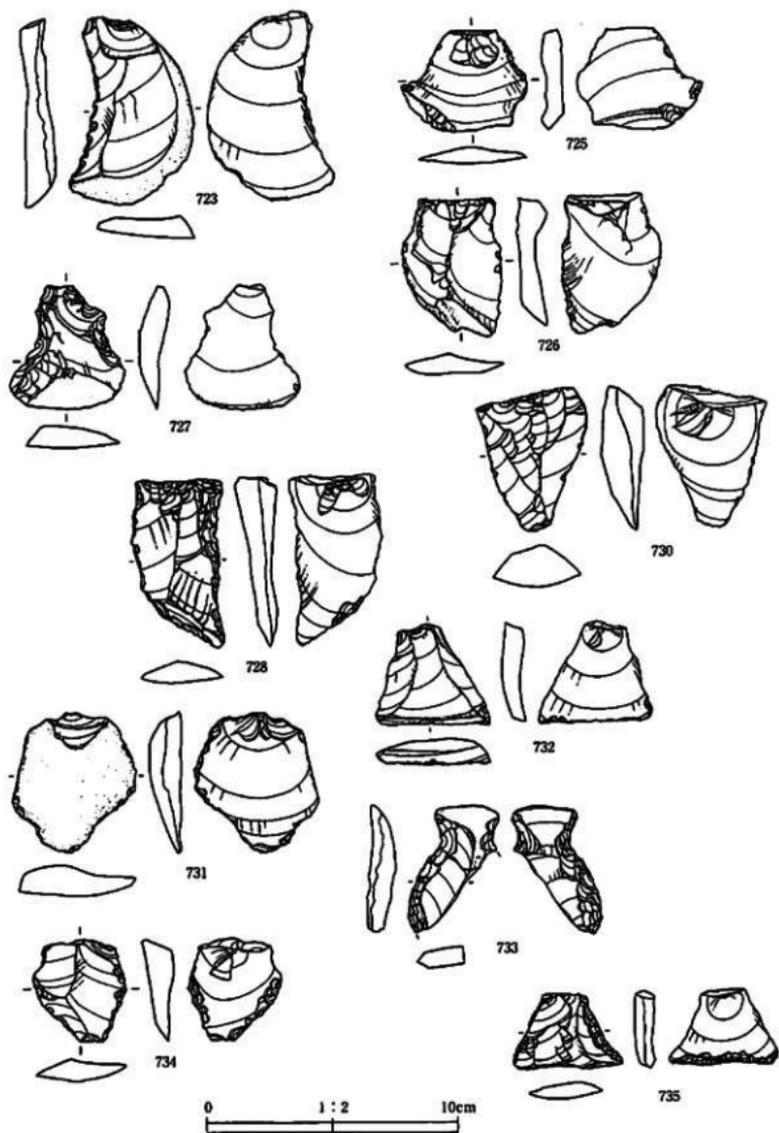
第73图 出土石器 6



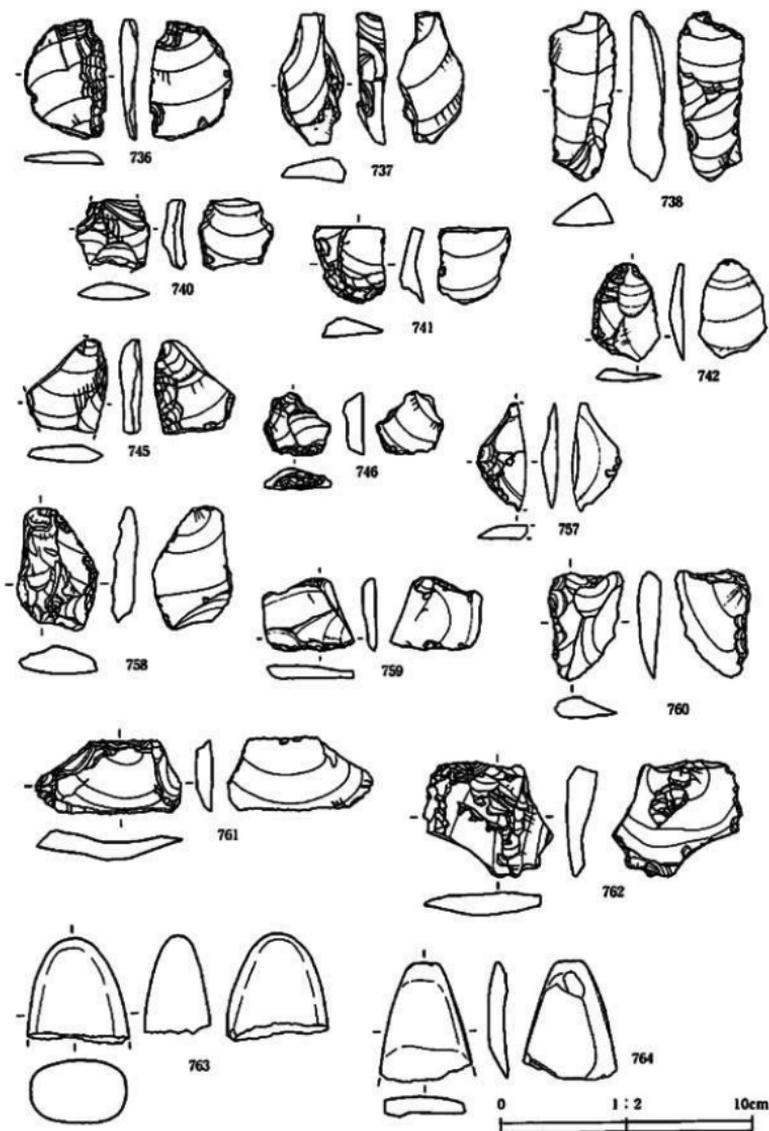
第74图 出土石器 7



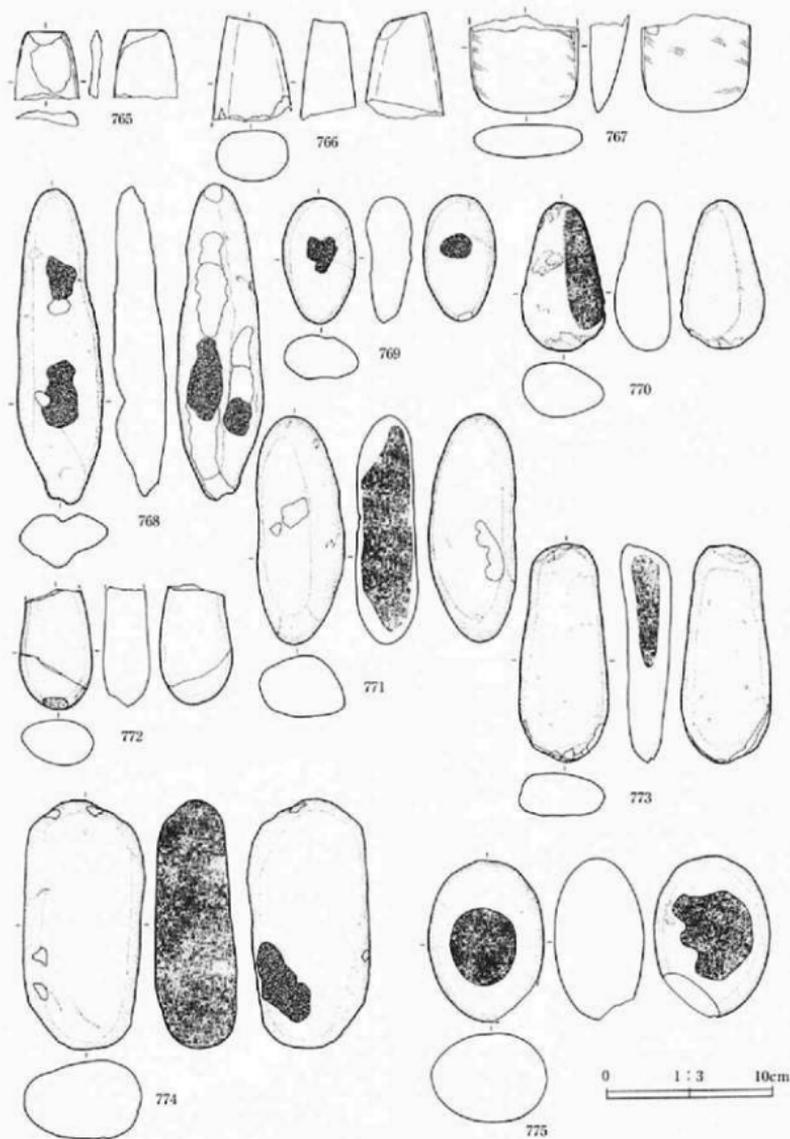
第75圖 出土石器 8



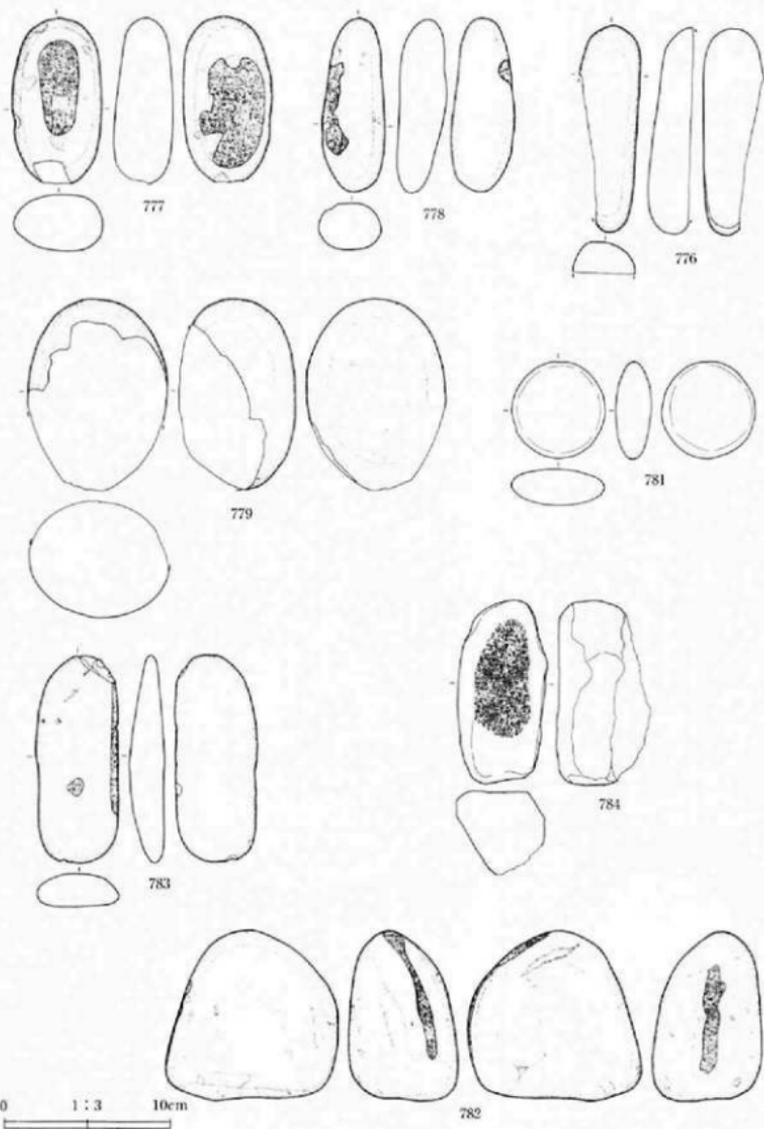
第76圖 出土石器 9



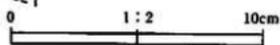
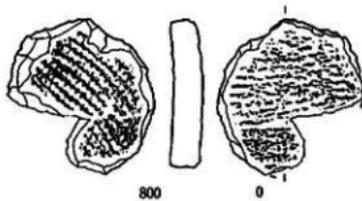
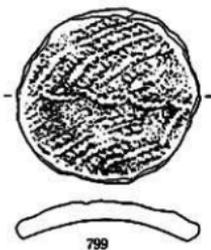
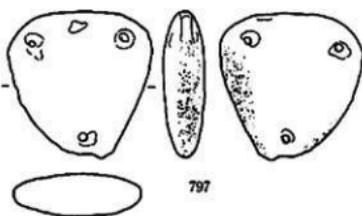
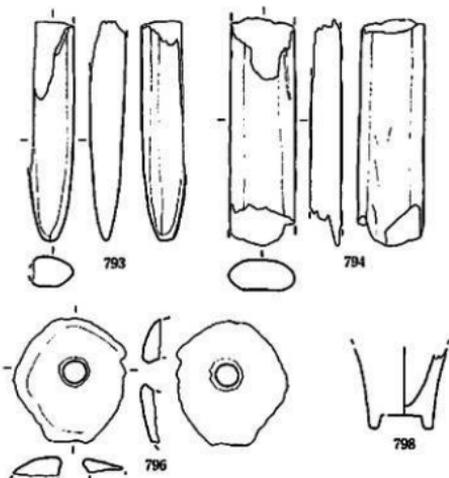
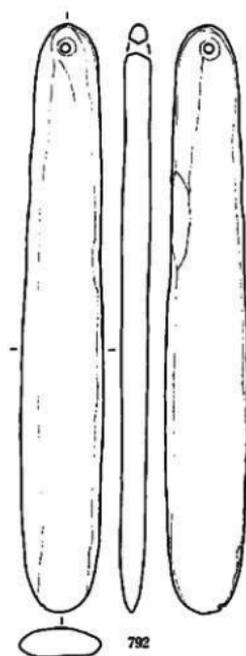
第77图 出土石器 10



第78图 出土石器 11



第79圖 出土石器 12



第80圖 出土石器 13 石製品 土製品

表4 縄文土器観察表1

番号	採集地点	器種	部位	観察	胎土	分類	備考
1	2 RA01	埴土中	深弁 口縁	うちそぎ ループ文? L-R	繊維少	Ⅲ1B	
2	3 RA01	埴土中	深弁 口縁	小波状形? 径5cmほどの孔 羽状横文	繊維多い	Ⅲ1C-I	
3	1 RA01	埴土黒色土	深弁 口縁	折返し状に肥厚させている口唇部 L-R	繊維少	Ⅲ1D	
4	4 RA01	埴土中	深弁 唇部	指節筋横文 L-R-L	繊維少	Ⅲ1D	
5	10 RA02	埴土中	深弁 唇部	唇状工具で押し引き(造紐) 羽状横文	繊維少量	ⅢD	
6	30 RA02	埴土中	深弁 唇部	割目状横文 内面にスス		Ⅲ2B	
7	6 RA02	埴土中	深弁 口縁	口唇部 指節筋直による窪み 孔		Ⅲ2Dア	
8	7 RA02	埴土中	深弁 口縁	口唇部 連続した指節筋直 横位R-L	繊維少	Ⅲ2Dア	
9	5 RA02	埴土中	深弁 口縁	折返し状に肥厚させている 横文を完現 磨り消し	繊維多	Ⅲ2Dウ	
10	11 RA02	埴土中	深弁 唇部	手袋? 竹管による沈積模様 三角形状か		Ⅲ2Dウ	
11	16 RA03	埴土下	深弁 唇部	結束羽状横文もしくはループ文?		Ⅲ1B	
12	18 RA03	埴土下	深弁 唇部	結束羽状横文 作中央部に張り出しを持つ器形か	繊維多い	Ⅲ1Cア	
13	19 RA03	埴土下	深弁 唇部	結束の羽状横文で、裏形の文様を作り出す	繊維多い	Ⅲ1C-I	
14	14 RA03	埴土中	深弁 口縁	少し外傾する(小型器形か?) L-R斜位	繊維少量	Ⅲ1Dウ	
15	15 RA03	埴土中	深弁 口縁	小波状(山形)口縁 横文 縦位 胎土粗粒り付け 磨み		Ⅲ2Aア	
16	34 RA03	埴土	深弁 口縁	やや内そぎの口唇部 口唇部にL-Rの直横文(横糸) L-R		Ⅲ2Aア	
17	21 RA04	埴土下	深弁 唇部	貝殻沈線文	小石混入	12A	
18	37 RA04	埴土下	深弁 唇部	貝殻沈線文	小石混入	12A	
19	36 RA04	埴土下位	深弁 唇部	R-L斜位 内面に条痕?	繊維?	15	
20	25 RA05	埴土中	深弁 唇部	L-R 内面に横文?	繊維多い	14	
21	26 RA05	埴土中	深弁 唇部	羽状横文 ②段多量 L-R FR II	繊維?	Ⅲ1Cア	
22	24 RA05	埴土	深弁 唇部	S字状連続横文 もしくは割目状横文		Ⅲ2C	
23	22 RA05	埴土	深弁 口縁	小さく外反する 不整横文	繊維?	Ⅲ1A	
24	833 RA07	埴土下位	浅弁 平定形	太い紐状筋付板 一本沈線による円形の筋文 孔 小型の蓋?		N1A	器の形?
25	368 RA07	床面	深弁 唇部	やや外反 指節筋の波状文(X字状?) 円形の沈線 L-R		N1A	
26	370 RA07	埴土	深弁 口縁	平行な斜位の短沈線		N1B	
27	368 RA07	床面-床下	深弁 唇部	一本沈線による方形?の文様		N1C	
28	388 RA07	床(一括)	深弁 口縁	折り返し口縁 頸部状沈線?		N3A	
29	384 RA07	埴土	深弁 口縁	手袋竹管による沈線(X字)		N3C	
30	394 RA07	埴土下位	深弁 口縁	外反 直線な沈線文		N3C	
31	366 RA07	床面上	深弁 唇部	ややキャリバー 磨みのある埴土粗粒付 ハート形の筋付が一件となる		N4A	
32	367 RA07	床面上	深弁 唇部	外反? S字状の埴土粗粒付 山形沈線 割突文		N4B	
33	386 RA07	床土	深弁 口縁	大きく外反する 口唇部太い埴土粗 裏面細い埴土粗粒付 口縁筋直文		N4B	
34	378 RA07	埴土下	深弁 唇部	キャリバー 埴土粗粒付(はご状 円形 波形) L-R	小石多い	N4B	
35	393 RA07	埴土	深弁 口縁	大きく外傾し外反 波型の細い埴土粗粒付		N4B	
36	746 RA07	床面	深弁 口縁-唇部	波状の突起 口唇部指節筋直 縦が統一された横線文		N4B	
37	796 RA07	床面	深弁 口縁-唇部	円形のあるハート形の突起 口唇部連続の刺突 縦線文?	厚沈線多い	N4B	
38	395 RA07	床(一括)	深弁 口縁	ドーナツ状の筋付体 口唇部に連続の竹管文 厚作直筋		N5A	
39	708 RA07	床面-床下	深弁 口縁	2対の凸状突起 懸垂?		N5C	
40	387 RA07	埴土	深弁 口縁	刺突を施したギョウ状突起		N5D	
41	377 RA07	埴土	深弁 口縁	山形口縁 割目状横文		N6A	
42	749 RA07	床面	深弁 口縁	やや外反する 割目状横文		N6A	
43	831 RA07	埴土	深弁 口縁	小波状? 割目状横文		N6A	
44	733 RA07	床面	深弁 口縁	斜位の指節筋横文と横線文		N6B	
45	736 RA07	埴土下位	深弁 口縁	磨み消された横線文 L-R 内面ケズリ調整		N6B	
46	765 RA07	床面	深弁 唇部	唇上部がやや張る器形? 横線文 縦な斜線文		N6B	
47	757 RA07	床面	深弁 唇部	733と同一器形		N6B	
48	782 RA07	埴土下位	深弁 唇・底部	横線文 内縦		N6B	
49	760 RA07	埴土下位	深弁 底部	横線文 曲線的に立ち上がる 小形の蓋の可能性もある		N6B	
50	770 RA07	床面	深弁 口縁	小形の深弁 口縁部横線文 唇部 両の空いた斜線文 L-R		N6D	

縄文土器観察表 2

番号	長径	出土地点	層位	器種	部位	観察	出土	分類	備考
31	751	RA07	床面	深鉢	口縁	やや外反する口縁 口唇部凹形窪 (4単位) 体上部がややゆるむ L-R斜位		Ⅱ 6 C	
32	752	RA07	埋土	深鉢	口縁	口唇部 指頭圧痕による小波状の口縁		Ⅱ 6 C	
33	754	RA07	床面	深鉢	口縁	底部で絞り込みが大きい。8? 単位の突起状の指頭圧痕 縦な縄文		Ⅱ 6 C	
34	748	RA07	埋土	深鉢	口縁	口唇部 窪状工具による押し引き 小波状口縁		Ⅱ 6 C	
35	383	RA07	床面	深鉢	口縁	口唇部崩み 磨研 粘土結晶付着	小石多い	Ⅱ 6 C	
36	735	RA07	埋土下位	深鉢	口縁	小波状 L-R 体上部で最大径となる器形か? 内腹付着		Ⅱ 6 C	
37	747	RA07	床面	深鉢	口縁-体部	小型 やや波打つ口縁 L-R斜位		Ⅱ 6 C	
38	768	RA07	床面	深鉢	口縁-体部	やや外反する 2個1対のS字状突起が4単位か 口縁下の磨研		Ⅱ 6 D	
39	767	RA07	床面	深鉢	不定形	ほぼ直立的にある 小波状 L-R斜位 1層部下磨研 底部でやや丸みを付つ		Ⅱ 6 D	
60	379	RA07	埋土	深鉢	口縁	やや内さきの口縁 原形圧痕		Ⅱ 6 D	
61	759	RA07	床面	深鉢	体部-底部	L-R 内面ややふよふよした感じのする体部 SSとは一脈の可能性が大きい		Ⅱ 6 D	
62	776	RA07	床面	浅鉢?	体部-底部	ややキャリバーする器形か 0段多糸と早輪の斜縄文		Ⅱ 7	図609参照!
63	773	RA07	埋土下位	深鉢	体部-底部	張り出し大きい やや内磨して立ち上がる 底部縄文なし		Ⅱ 7	
64	764	RA07	埋土下位	深鉢	底部	やや張り出す 上部で丸みを付つ 50の底部の可能性ある。		Ⅱ 7	
65	774	RA07	床面	深鉢	底部	ゆるく張り出しほぼ垂直に立ち上がる 筋文もしくは磨研		Ⅱ 7	
66	775	RA07	床面	深鉢	底部	張り出し無く緩やかに立ち上がる やや上げ感風		Ⅱ 7	
67	777	RA07	床面	深鉢	底部	やや張り出し少し外反して立ち上がる 筋文		Ⅱ 7	
68	778	RA07	床面	深鉢	底部	大きく張り出す 大きく外反して立ち上がる 50の底部?		Ⅱ 7	写真なし
69	783	RA07	床面	深鉢	底部	ゆるく張り出しほぼ垂直に立ち上がる 筋文もしくは磨研		Ⅱ 7	
70	784	RA07	床面	深鉢	底部	張り出し無く緩やかに立ち上がる L-R		Ⅱ 7	
71	785	RA07	床面	深鉢	底部	底に磨らしき痕跡 筋文		Ⅱ 7	
72	375	RA07	埋土	深鉢	口縁	渦巻状の沈線文と突起		Ⅱ D	
73	428	RA08	埋土	深鉢	体部	原形面凹圧痕 押し引き文 斜縄文	縦線?	Ⅱ D A	
74	429	RA08	埋土	深鉢	体部	原形面凹圧痕 押し引き文 斜縄文	縦線?	Ⅱ D A	
75	425	RA08	埋土	深鉢	体部	器糸文 L-R	縦線親人	Ⅱ 1 A	
76	426	RA08	埋土	深鉢	体部	結束のない羽状縄文	縦線親人	Ⅱ 1 A	
77	431	RA08	埋土	深鉢	口縁	口唇部原形圧痕	縦線?	Ⅱ 1 D a	
78	403	RA09	埋土下位	深鉢	口縁	器糸文と羽状縄文?	縦線?	Ⅱ 2 A a	
79	671	RA09	1層	深鉢	口縁	やや外反 口唇部斜位の連続沈線 不整器糸文		Ⅱ 2 A a	
80	723	RA09	2-3層	深鉢	口縁	口唇部指頭圧痕 器糸文		Ⅱ 2 A a	
81	719	RA09	2-3層	深鉢	口縁	ほぼ垂直に外磨(外反)する。斜目状器糸文	縦線?	Ⅱ 2 B	
82	718	RA09	床面	深鉢	体部	原形の大きい木目状器糸文	縦線?	Ⅱ 2 B	
83	730	RA09	床面	深鉢	体部	木目状器糸文		Ⅱ 2 B	
84	818	RA09	床面	深鉢	体部	斜位の縦線文? もしくは結節部を残すもの		Ⅱ 2 B	
85	413	RA09	埋土1層-6層	深鉢	口縁	2条ずつのS字状連続沈文		Ⅱ 2 C	
86	722	RA09	床面	深鉢	口縁	山形口縁 口唇部竹管による刺突文 沈線 渦巻縄文		Ⅱ 2 D A	
87	811	RA09	床面	深鉢	口縁-体部	小波状口縁 山形突起と竹管による刺突 口唇部窪状工具での刺突 L-R	縦線?	Ⅱ 2 D I	
88	401	RA09	埋土1層	深鉢	口縁	3連続の押し引き口縁?		Ⅱ 2 D a	
89	717	RA09	床面	深鉢	口縁	やや外反 斜縄文L-R		Ⅱ 2 D a	
90	410	RA09	床面	深鉢	体部	結束のない羽状縄文		Ⅱ 2 D	
91	810	RA09	床面	深鉢	口縁	やや外傾 波状口縁 指頭圧痕 一本沈線による大柄交文様		Ⅱ 1 A	
92	405	RA09	埋土2層	深鉢	体上部	一本沈線による扇曲状(山形?)の文様		Ⅱ 1 B	
93	411	RA09	埋土2層	深鉢	口縁	斜位の一本沈線		Ⅱ 1 C	
94	406	RA09	埋土2層	深鉢	口縁	一本沈線による階段状の文様		Ⅱ 1 C	
95	400	RA09	埋土下位	深鉢	体部	平直竹管による連続押し引き文		Ⅱ 2 C	950の図?
96	418	RA09	埋土2層	深鉢	体部	細い粘土結晶付着 はしご状?		Ⅱ 4 B	
97	412	RA09	埋土下位-1層	深鉢	口縁	やや内さきの口縁 指頭圧痕された太い粘土結晶付着		Ⅱ 4 C	
98	818	RA09	2-3層	深鉢	体部	刺突の磨された太い粘土結晶付着 ひし形文様?		Ⅱ 4 C	
99	409	RA09	埋土下位	深鉢	体部	指頭圧痕された太い粘土結晶を横置にされない粘土結晶を円形に磨り付ける		Ⅱ 4 D	
100	423	RA09	埋土下位	深鉢	体部	太い粘土結晶を渦巻状に磨り付ける L-R斜位		Ⅱ 4 D	

縄文土器観察表 3

番号	報告	出土地点	層位	器種	部位	観察	胎土	分類	備考
101	417	RA09	埋土2層	深鉢	口縁	S字状突起 絞絡文		Ⅱ 5 A	
102	815	RA09	床面	深鉢	平底形	S字状突起(何突) 合い摺り R-L		Ⅱ 5 A	
103	812	RA09	床面	深鉢	口縁-体部	折損位置による小波状の口縁		Ⅱ 5 C	
104	421	RA09	埋土2層	深鉢	口縁	2坪のボタン状突起 内縁 L-R		Ⅱ 5 C	
105	416	RA09	埋土2層	深鉢	口縁	ほぼ垂直に内湾する R-L		Ⅱ 5 D	
106	819	RA09	床面	深鉢	底部	100の底部の可能性が高い		Ⅱ 6	
107	433	RA12	埋土	深鉢	体部	結束のない羽状縄文	横組混入	Ⅱ D	
108	431	RA12	埋土	深鉢	体部	結束のない羽状縄文でくの字状に屈曲する体部	横組混入	Ⅱ D	
109	659	RA12	埋土下位	深鉢	口縁	液状 惣糸文 棒・縄状工具での何突文	横組?	Ⅲ 2 A	
110	673	RA12	埋土下位	深鉢	口縁	山形口縁の頂部何突 口唇部斜位の連続爪形状何突 惣糸文		Ⅲ 2 A イ	
111	725	RA12	床面	深鉢	口縁	口縁部最上部に爪状何突 惣糸文		Ⅲ 2 A ウ	
112	432	RA12	埋土下位	深鉢	口縁	正整な惣糸文 口唇部磨み		Ⅲ 2 A ウ	
113	588	RA12	埋土下位	深鉢	体部	正整化された絞絡文		Ⅲ 2 B	
114	727	RA12	埋土下位	深鉢	口縁	口唇部隆起工具押し引きで小波状を成す L-R斜位?		Ⅲ 2 D ア	
115	820	RA12	埋土下位	深鉢	口縁-体部	厚く外反する 層位の結節文	小石混入	Ⅲ 2 D	
116	724	RA12	下位	深鉢	体上部	巻帯状に太い粘土線を飾り付けた若縁を持つ		Ⅱ 4 D	
117	681	RA12	埋土下位	深鉢	口縁	S字状突起		Ⅱ 5 A	
118	543	RA14	埋土	深鉢	体部	表裏縄文 表 縦 裏層位の羽状縄文(土製品?)		I 5	
119	544	RA14	埋土	深鉢	口縁	小波状? 本目状摺り糸文		Ⅲ 2 B	
120	441	RA14	埋土	深鉢	口縁	一本沈線による山形沈線文		Ⅱ 1 D	
121	545	RA14	埋土	深鉢	口縁	竹管での斜位の連続押し引き文		Ⅱ 2 C	
122	537	RA14	埋土	深鉢	体上部	平直竹管による横沈線と山形沈線		Ⅱ 3 B	
123	542	RA14	埋土	深鉢	口縁	外反して外反 液状 太い粘土線貼付 表面細い粘土線貼付		Ⅱ 4 B	
124	821	RA14	埋土	深鉢	口縁	台状に突出する口縁上部にS字状突起 斜位の絞絡文もしくは結節状		Ⅱ 5 A	
125	538	RA14	埋土	深鉢	口縁	液状口縁 傾の広い絞絡文		Ⅱ 6 B	
126	823	RA14	埋土	深鉢	口縁-体部	胴縁が統一された絞絡文 R-L		Ⅱ 6 B	
127	824	RA14	埋土	深鉢	底部	小形深鉢 もしくは大きく花弁状に開く器形の底部		Ⅱ 7	
128	541	RA14	床面	深鉢	底部	断面 ほぼ垂直にゆるやかに立ち上がる		Ⅱ 7	
129	851	RA16	埋土	深鉢	体部	表裏縄文 表裏 L-R斜位		I 4	
130	420	RA16	埋土	深鉢	口縁	原体断面E直 摩滅激しい	横組混入	Ⅱ B ア	
131	443	RA16	埋土1層	深鉢	体部	羽状縄文	横組混入	Ⅱ D	
132	437	RA16	埋土	深鉢	口縁	口縁部不正惣糸文 羽状縄文?	横組混入	Ⅲ 1 A	
133	444	RA16	埋土	深鉢	口縁	斜縄文 R-L	横組多い	Ⅲ 1 D ウ	
134	662	RA16	埋土	深鉢	口縁	口唇部原体E直 斜縄文L-R 孔	横組多い	Ⅲ 1 D ウ	
135	442	RA16	埋土	深鉢	口縁	刻みのある太い粘土線貼付 L-R		Ⅱ 4 C	
136	436	RA16	埋土	深鉢	底部	尖底	横組混入	Ⅱ C	
137	446	RA17	埋土1層	深鉢	口縁	不正惣糸文	横組混入	Ⅲ 1 A	
138	826	RA17	埋土	深鉢	底部	惣糸文 直線的に斜めに立ち上がる	Ⅲ 2 A		
139	450	RA17	埋土3層	深鉢	口縁	やや外反 絞絡文 L-R	Ⅲ 2 B		
140	825	RA17	4層	深鉢	口縁-体部	液状口縁 口縁部磨削 胴縁の均等化した絞絡文(結節文)	Ⅲ 2 B		
141	449	RA17	埋土4層	深鉢	体部	R-L縦回転の地文の上位を衝削 正整な惣糸文	Ⅲ 2 B		
142	447	RA17	埋土3層	深鉢	体部	斜位の短い連続押し引き文 沈線文	横組?	Ⅱ 2 D?	
143	457	RA19	埋土2層	深鉢	口縁	表裏縄文?	I 4		
144	462	RA19	埋土1層	深鉢	体部	原体断面E直	横組混入	Ⅱ B	
145	454	RA19	埋土1層	深鉢	体部	非結束の羽状縄文	横組少	Ⅱ D	
146	455	RA19	埋土1層	深鉢	体部	ループ文	横組多い	Ⅲ 1 B	
147	453	RA19	埋土	深鉢	体部	結束のある羽状縄文	横組多い	Ⅲ 1 C ア	
148	452	RA19	埋土	深鉢	口縁	やや内さざ ビッチリ縄文? R-L	横組多い	Ⅲ 1 D ア	
149	459	RA19	埋土2層	深鉢	体部	液状工具での斜位の連続押し引き文	横組多い	Ⅲ 1 D エ	
150	521	RA20	埋土2層-床面	深鉢	口縁	平行沈線 貝紋押し文	用砂	I 2 C	

縄文土器観察表 4

番号	図号	出土地点	層位	器種	部位	観察	胎土	分類	備考
151	734	RA20	1層	深鉢	底部	日流沈縄文 物見台式?	磁砂	I 2 A	
152	533	RA20	埋土1層	深鉢	底部	表裏縄文	磁粗無?	I 4	
153	534	RA20	埋土層~扉面	深鉢	底部	表裏縄文 表 R-L筋位 裏 斜位	磁粗無?	I 4	
154	535	RA20	埋土層~扉面	深鉢	底部	表裏縄文 円盤形土製品	磁粗無?	I 4	
155	737	RA20	1層	深鉢	底部	原体面周圧痕 斜位沈縄 (大筋なし縄文)	磁粗多い	II B 7	
156	527	RA20	埋土層~扉面	深鉢	口縁	小波状 斜突 羽状縄文 (ループ文)	磁粗混入	II B	
157	733	RA20	1層	深鉢	底部	ループ文	磁粗多い	II B	
158	526	RA20	埋土層~扉面	深鉢	口縁	外にやや折り返す 筋束I筋羽状縄文	磁粗多い	II C 7	
159	530	RA20	埋土層~扉面	深鉢	口縁	内そぎした平口縁 平行沈縄 筋束羽状縄文	磁粗多い	II C 7	
160	735	RA20	埋土下位	深鉢	底部	羽状縄文 区画があるのは前形式の名残か?	磁粗多い	II C 7	
161	736	RA20	2層扉面	深鉢	底部	羽状縄文 変形を成す	磁粗多い	II C 1	
162	528	RA20	埋土層~扉面	深鉢	口縁	I筋部ループ状の原体圧痕 斜縄文L-R	磁粗多い	II D 7	
163	525	RA20	埋土層~扉面	深鉢	口縁	内そぎ 押し引き 斜縄文L-R	磁粗多い	II D 7	
164	732	RA20	2層扉面	深鉢	底部	帯引文 沈縄文	磁粗多い	II D エ	
165	389	RA20	埋土	深鉢	口縁	折り返し口縁 多能竹管?による山形沈縄		IV 2 B	
166	474	RA21	埋土	深鉢	底部	表裏縄文 R-L筋位	磁粗?	I 4	
167	471	RA21	埋土	深鉢	口縁	ややキャリバー 原体面周圧痕	磁粗?	II B 7	
168	465	RA21	埋土	深鉢	口縁	斜縄文 L-R筋位	磁粗多い	II D 7	
169	469	RA21	埋土	深鉢	底部	不整然糸文		II 2 A	
170	470	RA21	埋土	深鉢	底部	不整然糸文		II 2 A	
171	467	RA21	埋土	深鉢	口縁	連続押し引き文 沈縄文		IV 2 D	
172	466	RA21	埋土	深鉢	底部	尖底?	磁粗多い	II C	
173	477	RA22	埋土	深鉢	口縁	平口縁 短沈縄 原体面周圧痕	磁粗少	II B 7	
174	481	RA22	埋土	深鉢	口縁	キャリバー 外そぎ 原体面周圧痕	磁粗?	II B 7	
175	480	RA22	埋土	深鉢	底部	筋の大きい非結束の羽状縄文	磁粗混入	II D	
176	479	RA22	埋土	深鉢	底部	結束羽状縄文	磁粗混入	II C 7	
177	482	RA22	埋土	深鉢	底部	ビッチリ縄文 類似羽状縄文?	磁粗混入	II D 7	
178	478	RA22	埋土	深鉢	底部	複雑斜縄文 L-R	磁粗多い	II D 1	
179	488	RA23	埋土下位	深鉢	底部	筋の大きい非結束の羽状縄文		II D	
180	497	RA23	埋土下位	深鉢	口縁	波状口縁 不整然糸文	磁粗混入	II A	
181	500	RA23	埋土下位	深鉢	口縁	I筋部筋み ボタン状突起 羽状縄文	磁粗混入	II C 7	
182	490	RA23	埋土下位	深鉢	底部	羽状縄文 底部筋文 平底	磁粗混入	II C 7	
183	496	RA23	埋土下位	深鉢	底部	縦結回転文?	磁粗少	II D エ	
184	486	RA23	埋土下位	深鉢	口縁	斜縄文 L-R	磁粗少	II D 7	
185	498	RA23	埋土下位	深鉢	口縁	絞絡文が正装化する		II 2 B	
186	502	RA24	埋土	深鉢	体上部	ビッチリ縄文 R-L	磁粗多い	II D 7	
187	505	RA24	埋土	深鉢	底部	ビッチリ縄文? R-L	磁粗多い	II D 7	
188	510	RA24	埋土下位	深鉢	底部	体中央部での字状に屈曲するか	磁粗?	II D 7	
189	504	RA24	埋土	深鉢	底部	斜縄文 R-L	磁粗混入	II D 7	
190	508	RA24	埋土下位	深鉢	口縁	太い粘土粘附付 口縁部から粘土粒に原体圧痕 R-L筋位		IV 4 D	
191	512	RA25	埋土下位	深鉢	底部	熟糸文 丸	磁粗?	II A	
192	851	RA25	埋土下位	深鉢	底部	表 縄文 裏 糸状文		I 4	
193	514	RA26	埋土下位	深鉢	口縁	非結束の羽状縄文	磁粗混入	II C 7	
194	518	RA26	埋土下位	深鉢	口縁	波状 折り返し口縁 熟糸もしくは竹管による斜突	磁粗多い	II D 7	
195	513	RA26	埋土下位	深鉢	口縁	やや外反 L-R 内環		II 2 D 7	
196	517	RA26	埋土下位	深鉢	口縁	熟糸もしくは斜位の原体圧痕		II 2 D 7?	
197	31	RD01	埋土	深鉢	口縁	波状口縁 羽状縄文	磁粗多い	II C 7	
198	32	RD01	埋土	深鉢	底部	羽状縄文 ひし形文様?	磁粗多い	II C 7	
199	28	RD10	墓域 扉面	深鉢	口縁~底部	小波状口縁 口縁上部不整然糸 底部羽状縄文 変形の文様	磁粗多い	II A	
200	29	RD10	墓域 埋土中	深鉢	底部	小波状口縁山形突起の先期を帯びた 結束部圧痕	磁粗少	II D 7	

縄文土器観察表 5

番号	調査地点	層位	器種	部位	観察	胎土	分類	備考
201	580	RD13	埴土中	深鉢 底部	非結実の羽状縄文		縦線多い	Ⅱ 4
202	582	RD14	埴土	深鉢 底部	部の大きい羽状縄文		縦線多い	Ⅱ 4
203	547	RD14	埴土	深鉢 口縁	やや外反 節引文? 内環			Ⅱ
204	546	RD14	埴土(上位)	深鉢 体上部	斜縄文			Ⅱ
205	583	RD14	埴土(上位)	深鉢 底部	斜縄文L-R			Ⅱ
206	550	RD16	埴土	深鉢 体上部	厚体側面圧痕 押し引き文 羽状縄文		縦線混入	Ⅱ B 7
207	584	RD16	埴土	深鉢 底部	部の大きい羽状縄文		縦線多い	Ⅱ D
208	548	RD16	埴土	深鉢 口縁	斜縄文 厚体の大きいR-L		縦線?	Ⅱ 1 Dウ
209	549	RD16	埴土下位	深鉢 口縁	内そぎ 斜縄文 L-R		縦線混入	Ⅱ 1 Dウ
210	590	RD17	埴土中	深鉢 底部	厚体側面圧痕 羽状縄文		縦線混入	Ⅱ B 7
211	562	RD17	埴土中	深鉢 口縁	斜縄文R-L(ループ文?)		縦線多い	Ⅱ 1 B
212	537	RD17	埴土中	深鉢 口縁	不整の熟赤文		縦線?	Ⅱ 2 A
213	591	RD17	埴土中	深鉢 底部	木目状熟赤文			Ⅱ 2 B
214	556	RD17	埴土中	深鉢 口縁	口唇部造伏工具による圧痕 R-L		縦線?	Ⅱ 2 D 7
215	554	RD17	埴土中	浅鉢 口縁	流紋 一本流線による円形の文様 窓の可能性もあり			Ⅱ 1 A
216	592	RD17	埴土中	深鉢 底部	キャリバー 斜位の一本流線			Ⅱ 1 C
217	535	RD17	埴土上位	深鉢 口縁	やや外反 半農竹管による流紋比線 S字状突起			Ⅱ 2 A
218	551	RD17	埴土中	深鉢 口縁	やや外反する 折り返し L-R			Ⅱ 4 D
219	597	RD18	埴土下位	深鉢 底部	部の大きい羽状縄文		縦線多い	Ⅱ D
220	563	RD18	埴土	深鉢 口縁	不整の熟赤文			Ⅱ 2 A
221	564	RD18	2層	深鉢 口縁	不整の熟赤文 口唇部研突			Ⅱ 2 A
222	599	RD18	埴土上位	深鉢 底部	線給文 L-R			Ⅱ 2 B
223	598	RD18	埴土下位	深鉢 底部	縦線短文?			Ⅱ 2 D 5
224	600	RD21	埴土中	深鉢 底部	羽状縄文		縦線少	Ⅱ 1 C 7
225	601	RD21	埴土中	深鉢 底部	複雑斜縄文(ピッチリ?) R-L-R		縦線少	Ⅱ 1 D 1
226	602	RD22	埴土中	深鉢 底部	斜縄文		縦線少	Ⅱ 1 C 7
227	603	RD26	埴土中	深鉢 底部	細い結上結貼付(流紋)			Ⅱ 4 B
228	566	RD26	埴土中	深鉢 口縁	口唇部研突 短流線			Ⅱ 5 C
229	610	RD30	埴土上段(下)	深鉢 不定形	交互流線節引痕による小流紋口縁 厚体圧痕? L-R			Ⅱ 5 C
230	569	RD30	埴土上位	深鉢 口縁	厚体側面圧痕 押し引き文 羽状縄文		縦線?	Ⅱ B 7
231	567	RD30	埴土上位	深鉢 口縁	ループ文?		縦線多い	Ⅱ 1 A
232	570	RD30	埴土上位	深鉢 口縁	口唇部造伏工具による押し引き R-L			Ⅱ 2 D 1
233	568	RD30	埴土上位	深鉢 口縁	山形の一本流線		縦線?	Ⅱ 1 C
234	572	RD31	埴土	深鉢 口縁	山形口縁 熟赤文			Ⅱ 2 A 1
235	574	RD31	埴土	深鉢 口縁	折り返し 斜縄文			Ⅱ 2 Dウ
236	604	RD31	3層	深鉢 底部	熟赤文			Ⅱ 2 Aウ
237	571	RD31	埴土	深鉢 口縁	山形口縁 無文			Ⅱ 2 Dウ
238	606	RD32	埴土下位	深鉢 底部	ループ文?		縦線混入	Ⅱ 1 B
239	605	RD32	埴土下位	深鉢 底部	羽状縄文もしくはループ文		縦線?	Ⅱ 1 C 7
240	610	RD33	埴土上位	深鉢 底部	羽状縄文(部の大きい、0段多線)		縦線多い	Ⅱ D
241	607	RD33	埴土上位	深鉢 底部	斜縄文 L-R斜位		縦線多い	Ⅱ 1 Dウ
242	611	RD33	埴土上位	深鉢 底部	斜縄文? 底部給文		縦線多い	Ⅱ 1 Dウ
243	608	RD33	埴土	深鉢 底部	熟赤文(木目状もしくは短曲)		縦線?	Ⅱ 2 B
244	612	RD34	埴土	深鉢 底部	斜縄文 R-L		縦線混入	Ⅱ 1 Dウ
245	613	RD39	埴土下位	深鉢 底部	腹位の木目状熟赤文			Ⅱ 2 B
246	643	RD39	埴土下位	深鉢 底部	正整な線給文			Ⅱ 2 B
247	844	RD39	埴土下位	深鉢 体下部	正整な線給文 246と同か			Ⅱ 2 B
248	576	RD39	埴土下位	深鉢 口縁	口唇部 造伏工具での押し引き文 斜縄文 L-R			Ⅱ 2 D 1
249	577	RD39	埴土下位	深鉢 口縁-底部	小形深鉢 山形口縁 斜縄文 L-R 内環			Ⅱ 2 Dウ
250	578	RD39	埴土下位	深鉢 口縁	S字状突起 斜縄文L-R			Ⅱ 2 Dウ

縄文土器観察表 6

番号	出土地点	層位	器種	部位	観察	出土	分類	備考	
251	579	RD39	埋土下位	深鉢	口縁	縦状圧痕による11唇部の施文	竹管文?		
252	680	RD39	埋土上位(括)	深鉢	底部	太い粘土糊貼付	縦状圧痕	#4 D	
253	847	RD41	埋土	深鉢	底部	表裏縄文	表 L-R 内部	I 4	
254	619	RD41	埋土下位	深鉢	底部	斜縄文	平成産らしい	縦線多? #	
255	630	RD41	埋土下位	深鉢	底部	斜縄文	平成産らしい	縦線多? #	
256	621	RD42	埋土下位	深鉢	底部	斜縄文?		縦線混入 #1 C 7	
257	532	RD45	集石埋土	深鉢	口縁	表裏縄文	11唇部原形圧痕	縦線多? I 4	
258	531	RD45	集石埋土	深鉢	底部	表裏縄文	表 斜状縄文	表 斜縄文	縦線多? I 4
259	738	RD47	埋土	深鉢	底部	絞縄文	L-R	#2 B	
260	741	RD47	埋土	深鉢	口縁	11唇部指頭圧痕	斜縄文	#2 D 7	
261	740	RD47	埋土	深鉢	口縁	無文		#2 D 2	
262	742	RD47	埋土	深鉢	口縁	細い粘土糊貼付		#4 B	
263	744	RD48	埋土	深鉢	口縁	斜縄文		#2 D 2	
264	745	RD48	埋土	深鉢	底部	無文		#2 D 2	
265	251	包含層1	耳瓶	深鉢	体~底部	3次 肩下無文 肩上沈線文	L1縁頭V字(7~8本の沈線)を肩口(横)	縦線少石 I 1 A	
266	272	包含層1	耳瓶	深鉢	口縁	やや内そぎした11唇 6~7の斜状沈線	口蓋の平行? 沈線に横位の沈線	縦線少 I 1 A	
267	264	包含層1	皿~耳瓶	深鉢	底部	V字形の沈線 (5~6本)	縦位の沈線	小石多い I 1 A	
268	269	包含層1	耳瓶	深鉢	底部	横位の沈線にV字線を充填		縦線少 I 1 A	
269	48	包含層1	耳瓶	深鉢	口縁	平口縁	口唇部に口縁の爪形状文	横位と斜位の平行沈線によるV字文様	縦線少 I 1 A
270	47	包含層1	皿層下	深鉢	口縁	沈線文	14唇内横位の短い斜引文	縦線少 I 1 B	
271	43	ⅣA1F	検出面	深鉢	底部	沈線によって描かれた四角形状の区画		小石混入 I 1 B	
272	51	包含層1	耳瓶	深鉢	口縁	山形口縁	具設復縁圧痕による平行文	縦位の連続圧痕	沈線 孔
273	45	ⅣA1F	Ⅳ層	深鉢	口縁	沈線による円形もしくは渦巻き状の文様	区画内具設復縁文	縦線少 I 2 A	
274	54	包含層1	皿~耳瓶	深鉢	口縁?	縦位の具設復縁連続圧痕文		縦線少 I 2 A	
275	42	ⅣA1F	検出面	深鉢	底部	沈線内に14唇内された具設復縁文		縦線少 I 2 A	
276	44	ⅣA1F	検出面	深鉢	底部	沈線によって描かれた区画内に具設復縁文		I 2 A	
277	55	包含層1	耳瓶	深鉢	口縁	具設横位斜状復縁圧痕文		縦線少 I 2 B	
278	50	包含層1	耳瓶	深鉢	底部	横位の具設復縁圧痕文		縦線少 I 2 B	
279	622	ⅣA6d	検出面	深鉢	体上部	沈線	具設背圧文	縦線少 I 2 C	
280	46	ⅣA1F	耳瓶	深鉢	底部	沈線内の発帯に刻み	具設背圧文	縦線少 I 2 C	
281	58	包含層1	耳瓶上	深鉢	口縁	外そぎ状	端目照赤文	11唇部の具設背圧痕と爪形の斜突	縦線少 I 2 C
282	194	包含層1	耳瓶	深鉢	口縁	斜位の条状文		縦線少 I 3	
283	625	ⅣA10f	耳瓶	深鉢	底部	条状・条痕		縦線少 I 3	
284	623	ⅣA1d	検出面	深鉢	口縁	表裏縄文	11唇部から表 R-L順位	裏横位	原形同じ
285	624	ⅣA2d	検出面	深鉢	口縁	表裏縄文	11唇部から表 R-L順位	裏斜位	
286	628	ⅣA10f	耳瓶	深鉢	底部	表裏縄文	表 唇の大きいR-L斜位	裏原形同じ?	縦線多い I 4
287	848	ⅣA2d	耳瓶下	深鉢	口縁	表裏縄文	表 L-R (原形の大きい)	外縁	縦線多? I 4
288	850	V A2d	耳瓶下	深鉢	口縁	表裏縄文	折り返し状	口唇部原形圧痕	R-L
289	330	包含層2	耳瓶	深鉢	底部	表裏縄文	表 斜状縄文	裏 斜縄文	縦線多い I 4
290	852	包含層2	耳瓶	深鉢	底部	表裏縄文	表L-R斜位	裏 L-R順	縦線多? I 4
291	84	包含層1	耳瓶	深鉢	底部	表裏縄文	表L-R横	裏L-R順?	縦線多い I 4
292	265	包含層1	耳瓶	深鉢	底部	条状文?	裏 条痕文		小石多い I 5 A
293	62	ⅣA5d	耳瓶	深鉢	底部	押しがた文?	裏に条痕?		縦線少 I 5 A
294	365	包含層2	耳瓶	深鉢	底部	斜位のせんだり文	平行沈線文	爪形斜状突文	縦線少 I 5 A
295	267	包含層1	耳瓶	深鉢	底部	縦位の連続沈線			縦線少 I 5 B
296	282	包含層1	耳瓶	深鉢	体下部	沈線	内面に十字	写真大地道	縦線少 I 5 B
297	268	包含層1	耳瓶	深鉢	底部	縦位の短沈線			縦線少 I 5 B
298	65	包含層1	耳瓶	深鉢	口縁~唇部	小底状	2本の平行沈線間に斜位の連続斜突	唇部凸出圧痕	非線形斜状文
299	66	包含層1	耳瓶	深鉢	口縁~唇部	11唇部うちそぎ風	唇部凸出圧痕文	斜状工具による押し引き	斜状縄文
300	67	包含層1	耳瓶	深鉢	口縁	外内そぎの11唇部	輪帯帯圧痕文		縦線少 I 5 B

縄文土器観察表7

番号	表土地点	層位	器種	部位	観察	胎土	分類	備考
301	634	ⅢA3d	検出面	深井 口縁	原形側面圧痕 (四の角い正痕で何故?) 沈線	繊維多い	ⅡBア	
302	637	ⅢA4c	検出面	深井 口縁	原形側面圧痕 沈線	繊維少	ⅡBア	
303	707	ⅢA7d	Ⅱ層	深井 口縁	原形側面圧痕 斜線沈線	繊維少	ⅡBア	
304	632	ⅢA1f	Ⅱ層	深井 口縁	原形側面圧痕 やや長めの沈線	繊維少	ⅡBア	
305	640	ⅢA4b	Ⅱ層	深井 口縁	原形側面圧痕 斜線沈線が簡略化される	繊維多い	ⅡBア	
306	639	ⅢA10f	検出面	深井 口縁	原形側面圧痕 正痕により隆起体を作る	繊維少	ⅡBイ	
307	633	ⅢA4c	検出面	深井 口縁	やや外そご 原形側面圧痕 正痕により隆起体を作る	繊維少	ⅡBイ	
308	636	ⅢA4e	Ⅱ層	深井 口縁	やや外そご 原形側面圧痕 正痕により隆起体を作る	繊維少	ⅡBイ	
309	710	ⅢA7d	Ⅱ層	深井 口縁	口唇部の押し引き文以外はすべて原形正痕で施文される。	繊維混入	ⅡBウ	
310	630	ⅢA7f	Ⅱ層	深井 口縁	液状のキャリバー 原手状正痕文 円形の胎土塊 羽状縄文	繊維多い	ⅡC	
311	68	包含層Ⅰ	Ⅱ層	深井 口縁	原手状正痕文	繊維少	ⅡC	
312	638	ⅢA2d	検出面	深井 口縁	大柄な原手状正痕文が3枚以上施文される。	繊維少	ⅡC	
313	631	ⅢA2g	Ⅱ層	深井 口縁	原手状正痕文	繊維多い	ⅡC	
314	217	包含層Ⅰ	中層下	深井 口縁	原形正痕に小さな跡み目 羽状縄文	繊維	ⅡD	
315	271	包含層Ⅰ	Ⅱ層	深井 口縁	羽状縄文 (結末1枚)	繊維含む	ⅡD	
316	70	包含層Ⅰ	Ⅱ層	深井 体部	羽状縄文 同一原形 L-R	繊維多い	ⅡD	
317	71	包含層Ⅰ	層位不明	深井 体部	羽状縄文 結末なし	繊維少	ⅡD	
318	649	ⅢA10f	Ⅱ層	深井 口縁	不整熟赤文 L-R斜位 (羽状縄文?)	繊維混入	ⅡA	
319	39	ⅢA1f	Ⅱ層	小壺口縁	小波状 上部 不整熟赤文 下部 L-Rの斜縄文	繊維多い	ⅡA	
320	38	ⅢA1f	Ⅱ層	深井 口縁-体部	上部 Lの不整熟赤文 下部L-Rの斜縄文	繊維多い	ⅡA	
321	105	包含層Ⅰ	Ⅱ層	深井 口縁	ループ文	繊維混入	ⅡB	
322	643	ⅢA1f	Ⅱ層	深井 口縁	ループ文もしくは絞繰り文	繊維少	ⅡB	
323	614	ⅢA1f	Ⅱ層	深井 口縁	口唇部押し引き文 ループ文	繊維多い	ⅡB	
324	106	包含層Ⅰ	中層下	深井 口縁	平線 うすめで焼成よし 結末羽状縄文	繊維混入	ⅡCア	
325	654	ⅢA2d	検出面	深井 口縁	糸状斜文 結末羽状縄文	繊維?	ⅡCア	
326	660	ⅢA5d	Ⅱ層下	深井 口縁	竹管での押し引き文 羽状縄文?	繊維?	ⅡCア	
327	641	ⅢA4b	Ⅱ層下	深井 口縁	キャリバーに屈曲する 内そご 羽状縄文	繊維多い	ⅡCア	
328	72	包含層Ⅰ	Ⅱ層	深井 体部	羽状縄文 結末あり	繊維少	ⅡCア	
329	655	ⅢA2c	Ⅰ層	深井 口縁	結末羽状縄文 変形文様	繊維多い	ⅡCイ	
330	73	包含層Ⅰ	Ⅱ層	深井 体部	羽状縄文 結末あり 変形の形状?	繊維少	ⅡCイ	
331	75	包含層Ⅰ	Ⅱ層	深井 体部	変位の羽状縄文 結末あり 変形の形状?	繊維少	ⅡCイ	
332	291	包含層Ⅰ	Ⅱ層	深井 口縁-体部	板張 (ビッチリ縄文)	繊維多い	ⅡDア	
333	206	包含層Ⅰ	Ⅱ層	深井 口縁	ビッチリ縄文 口唇部まで 腹節斜縄文L-R-L	繊維多い	ⅡDア	
334	657	ⅢA9c	検出面	深井 口縁	口唇部から腹 腹節斜縄文L-R-L (ビッチリ?)	繊維多い	ⅡDア	
335	661	ⅢA4c	検出面	深井 口縁	口唇部正痕 腹節斜縄文 L-R-L	繊維多い	ⅡDイ	
336	664	ⅢA10f	Ⅱ層下	深井 口縁	口唇部正痕 腹節斜縄文 L-R-L	繊維多い	ⅡDイ	
337	714	包含層Ⅰ	Ⅱ層	深井 体部	口唇部指節正痕 腹節斜縄文L-R-L	繊維多い	ⅡDイ	
338	289	包含層Ⅰ	Ⅱ層下	深井 口縁-体部	平口縁 単節斜縄文L-R 厚手で非常に焼成よし	繊維多い	ⅡDウ	
339	658	ⅢA4e	Ⅱ層	深井 口縁	やや外内 内そご 口唇部原形正痕 斜縄文L-R	繊維多い	ⅡDウ	
340	656	ⅢA5e	Ⅱ層下	深井 口縁	口唇部原形正痕 斜縄文L-R	繊維多い	ⅡDウ	
341	218	包含層Ⅰ	Ⅱ層	深井 体部	指節正痕文 斜縄文?	繊維含む	ⅡDウ	1層の可 能性あり
342	202	包含層Ⅰ	Ⅱ層	深井 体部	LR (欠く) 正痕風に磨耗させる	繊維多い	ⅡDウ	
343	207	包含層Ⅰ	Ⅱ層	深井 体部	6本組紐による?	繊維多い	ⅡDエ	
344	672	ⅢA1d	検出面	深井 口縁	波打つ口縁 (小波状) 不整熟赤文		ⅡEア	
345	648	ⅢA3g	Ⅱ層	深井 口縁	波状 不整熟赤文 腹節斜縄文L-R-L 孔	繊維少	ⅡEア	
346	88	包含層Ⅰ	中層下	深井 口縁	小波状口縁 口唇部に跡み目 不整熟赤文		ⅡEア	
347	677	ⅢA7d	Ⅰ層	深井 口縁	山形口縁 口唇部竹管による沈線 熟赤文		ⅡEイ	
348	646	ⅢA5b	検出面	深井 口縁	山形口縁 不整熟赤文 孔	繊維?	ⅡEイ	
349	178	包含層Ⅰ	Ⅱ層	変形 口縁-体部	外縁 口縁-頸熟赤文 体部 R-L羽状?	繊維?	ⅡEウ	
350	322	包含層Ⅰ	Ⅱ層	深井 口縁	山形口縁 口唇部斜位の跡み	小石多い	ⅡEウ	

縄文土器観察表 8

番号	図番	出土地点	層位	器種	部位	観察	胎土	分類	備考
351	645	ⅡA10d	Ⅲ～Ⅳ層	深鉢	口縁	不整熟赤文?		Ⅱ2Aウ	
352	647	ⅤA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁	やや折り返し 不整赤熟赤文 本目状熟赤文の横位?	横位?	Ⅱ2Aウ	
353	181	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁～体部	やや外反 羽状縄文間に熟赤痕文	横位少?	Ⅱ2Aウ	
354	187	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁～体部	口唇部にへら状工具による刻目 不整熟赤文		Ⅱ2Aウ	
355	196	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁～体部	S字状道頭沈文 不整熟赤文		Ⅱ2Aウ	
356	230	ⅡA5d	Ⅱ層	深鉢	体部	熟赤文(横位→斜位)		Ⅱ2Aウ	
357	314	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁	小波状 割目状熟赤文		Ⅱ2Bア	
358	330	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁	割目状熟赤文	小石多い	Ⅱ2Bア	
359	229	ⅡA5d	Ⅱ層	深鉢	口縁	小型 割目状熟赤文		Ⅱ2Bア	
360	285	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁～体部	割目状熟赤文		Ⅱ2Bア	
361	302	ⅡA6h	Ⅱ～Ⅲ層	深鉢	口縁～体部	粘土質 割目 割目状熟赤		Ⅱ2Bア	
362	305	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁	口縁外縁 口唇部割(爪形?) 割目 割目状熟赤		Ⅱ2Bア	
363	791	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁	やや外反する口縁 横位 熟赤文 地文 若い割縄文		Ⅱ2Bイ	
364	792	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁	やや外反する口縁 外そぎ 横位(筋文)		Ⅱ2Bイ	
365	797	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁	端みのある山形突起 口唇部取付圧痕 斜位の連続沈線 横位		Ⅱ2Bイ	
366	796	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁	ボタン状突起 筋頭交互片痕 横位		Ⅱ2Bイ	
367	675	ⅡA2d	Ⅱ層	深鉢	口縁	小さく外反 間隔の広がる横位		Ⅱ2Bイ	
368	260	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁～体部	平行に展開する横位 R-L		Ⅱ2Bイ	
369	263	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁～体部	外反 縦位の横位(筋文)が2重ずつ平行化 横位がややぐらされる形か?		Ⅱ2Bイ	
370	198	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	体部	横位が間隔を取って平行に		Ⅱ2Bイ	
371	208	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	体部	横位と割目状熟赤文		Ⅱ2Bイ	
372	327	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁	口縁部 不整熟赤文 体部本目状熟赤もしくは羽状縄文		Ⅱ2Bウ	
373	92	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	体部	縦位の横位の本目状熟赤文	横位?	Ⅱ2Bウ	
374	199	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	体部	本目状熟赤文(縦) 厚手		Ⅱ2Bウ	
375	104	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁～体部	口縁 背瓦状突起 横位筋文		Ⅱ2Bエ	
376	188	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁	大きく外反する 口唇部割み S字状道頭沈文?		Ⅱ2C	
377	674	ⅤA5g	Ⅱ層	深鉢	体部	S字状道頭沈文 連続押し引き文		Ⅱ2C	
378	84	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁	やや波状に波打つ口縁 外反する	横位?	Ⅱ2Dア	
379	193	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁	小波状口縁? 原体の通うR-L斜位	横位?	Ⅱ2Dア	
380	670	ⅤA5g	Ⅱ層	深鉢	口縁	山形口縁(波状) 腹縁斜縄文 R-L		Ⅱ2Dア	
381	185	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁～体部	やや外反 口唇部に斜位の割み 口唇部折り筋		Ⅱ2Dイ	
382	666	ⅡA6c	Ⅱ層	深鉢	口縁	口唇部 承状斜突 R-L横位と斜位		Ⅱ2Dウ	
383	702	ⅡA7d	Ⅱ層	深鉢	口縁	やや外反 口唇部斜突		Ⅱ2Dイ	
384	828	ⅡA1d	Ⅱ層	深鉢	口縁	やや外反する 斜縄文R-L		Ⅱ2Dウ	
385	787	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁～体部	ほぼ直立的にあがる 口の詰まった斜縄文R-L	横位?	Ⅱ2Dウ	
386	209	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	体部	斜行同位筋		Ⅱ2Dエ	
387	836	ⅡA1d	Ⅱ層	深鉢	体部	縦位のR-L R-L間に開通する割		Ⅱ2Dエ	
388	629	ⅡA7d	Ⅱ層	深鉢	体部	原形同位筋の連続もしくは口の空いた斜縄文	小石多い	Ⅱ2Dエ	目録の可 能性有り
389	292	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁～体部	やや外反 口唇部にボタン状突起と波状突起 羽状縄文と変形横位 内直		Ⅱ2E	
390	279	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁	一本沈線による円形 楕円形 R-L	横位少?	Ⅱ1A	
391	108	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁	山形口縁 一本沈線 円形 方形		Ⅱ1A	
392	692	ⅡA1d	Ⅱ層	深鉢	口縁	一本沈線による円形沈線とつながる2本の沈線		Ⅱ1A	
393	689	ⅡA2g	Ⅱ層	深鉢	体部	キャリパーに展開する 円形沈線		Ⅱ1A	
394	111	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁	竹管文の下に口縁を巡る1本の横位沈線 その下に縦位の縦位		Ⅱ1A	
395	107	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁	一本沈線 横位 短い縦位 内直す		Ⅱ1B	
396	424	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁	短沈線風な胎土状沈線での連続斜突文(例直文)		Ⅱ1B	
397	191	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁～体部	横位の1本沈線 やや外反する	横位?	Ⅱ1C	
398	711	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁	2本の一本沈線による山形沈線	横位?	Ⅱ1D	
399	133	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁	竹管による扇状の一本沈線		Ⅱ1D	
400	134	ⅡA6h	Ⅱ層	深鉢	口縁	竹管による山形状の一本沈線		Ⅱ1D	

縄文土器観察表 9

番号	図名	出土地点	層位	器種	部位	観察	胎土	分類	備考
401	81	包含層1	中層下	深鉢	口縁	へら状工具による平行2本の沈線 横位の歯状沈線 6枚巻かし	織組?	N 1 D	
402	809	包含層1	層層	深鉢	口縁	円形の竹管文を2本の沈線でつなぐ		N 2 A	
403	110	包含層1	中層上	深鉢	口縁	竹管文(円形) 歯状沈線?		N 2 A	
404	363	包含層2	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	底部	流状口縁 竹管文		N 2 A	
405	691	ⅡA10d	Ⅱ層	深鉢	底部	竹管による連続的刺突文		N 2 A	
406	303	包含層1	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	口縁-底部	小流状口縁 口唇部竹管による円形の刺突文 割目状凹凸		N 2 A	
407	130	包含層1	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	口縁	小流状口縁 竹管による沈線 沈線間を連続刺突文で埋める		N 2 A	
408	129	包含層1	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	口縁部	半農竹管の裏を使った2本の沈線 2条の押し引き文		N 2 A	
409	316	包含層2	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	口縁	背面の半農竹管による平行沈線と連続刺突文		N 2 A	
410	131	包含層1	Ⅱ層	深鉢	口縁部-底部	キャリバー状の彫形か? 唇に2条の半農竹管による連続刺突文 長巻文(横)		N 2 A	
411	128	包含層1	中層下	小型深鉢	口縁	口唇部歯状口縁 竹管による連続刺突文		N 2 A	
412	701	ⅡA3e	検出面	深鉢	底部	連続的爪状刺突文		N 2 B	
413	705	ⅡA6c	検出面	深鉢	口縁	連続的流状刺突文		N 2 B	
414	706	ⅡA3f	Ⅱ層	深鉢	口縁	連続刺突文と押し引き文		N 2 B	
415	77	包含層1	中層下	深鉢	口縁	平行凹のくぼみ 竹管による割みをつけた平行沈線 縦位の流状沈線		N 2 C	
416	126	包含層1	Ⅱ層	深鉢	口縁	やや外反する 頸部に2条の半農竹管による押し引き文		N 2 C	
417	696	ⅡA1c	Ⅱ層	深鉢	口縁	一本沈線による沈線と半農竹管による押し引き		N 2 C	
418	358	包含層2	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	底部	半農竹管による円形の押し引き刺突文		N 2 C	
419	667	ⅡA4b	検出面	深鉢	口縁	匙状工具で2回引いて連続押し引き文を作り出す	織組?	N 2 C	
420	909	包含層1	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	底部	半農竹管による縦位の沈線 押し引き風なものとうでないものを交互に配列		N 2 C	
421	211	包含層1	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	底部	半農竹管による縦位の沈線 X字状沈線		N 2 C	
422	125	包含層1	Ⅱ層	深鉢	口縁	巻き紐の輪(上) 1匝 3条以上		N 2 D	
423	197	包含層1	Ⅱ層	深鉢	底部	半農竹管による縦位の平行・流状沈線		N 3 A	
424	360	包含層2	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	底部	半農竹管による流状沈線と横位の沈線		N 3 A	
425	101	包含層1	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	口縁	半農竹管横位の山形と縦位の平行沈線		N 3 B	
426	136	包含層1	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	口縁	外反 歯状口の沈線2条		N 3 B	
427	132	包含層1	Ⅱ層	深鉢	口縁部-底部	多巻? 竹管による歯状沈線の沈線		N 3 B	
428	694	ⅡA1f	検出面	深鉢	口縁	半農竹管による縦位の山形沈線と縦位の沈線		N 3 B	
429	329	包含層2	Ⅱ層	深鉢	口縁	半農竹管による縦位の沈線と横位の山形沈線		N 3 B	
430	94	包含層1	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	口縁	流状口縁 やや外反 半農竹管による2条の山形沈線が歯状沈線に変わる		N 3 B	
431	137	包含層1	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	口縁	半農竹管による変形文様 下部に円文		N 3 C	
432	324	包含層2	Ⅱ層	深鉢	口縁	小流状 ボタン状跡付付け痕 X字文様の沈線		N 3 C	
433	138	包含層1	Ⅱ層	深鉢	口縁	やや外反 竹管による変形文様 縦位		N 3 C	
434	78	包含層1	中層下	深鉢	口縁	外反する 頸部に平行沈線 口縁R-L 底部R-R		N 3 C	
435	695	ⅡA1f	検出面	深鉢	口縁	半農竹管による縦位の沈線と横位の沈線		N 3 C	
436	220	包含層1	Ⅱ層	深鉢	口縁	平行沈線(幅広い) 山形沈線	小石多い	N 3 C	▽裏の破いあり
437	76	包含層1	中層下	深鉢	口縁	半農竹管による2本の平行沈線 割みのある細い粘土結核付が縦位と円形		N 4 A	
438	827	ⅡA2c	検出面一括	浅鉢?	口縁	キャリバー 刺突された細い粘土結核を渦巻状に突出する		N 4 A	
439	102	包含層1	Ⅱ層	深鉢	口縁	竹管による平行沈線と割みのある細い粘土結核付		N 4 A	
440	122	包含層1	Ⅱ層	深鉢	底部	細い爪による割み目を施した細い粘土結核付		N 4 A	
441	146	包含層1	層位不明	深鉢	口縁部	沈線で充填された縦位のS字の粘土結核 周囲に細い粘土結核付(列み)		N 4 A	
442	139	包含層1	Ⅱ層	深鉢	口縁?	粘土結核(割み目) 竹管による変形文様 縦位		N 4 A	
443	124	包含層1	中層上	小型深鉢	口縁	半農竹管による縦位の山形沈線 割みのある細い粘土結核付		N 4 A	
444	687	ⅡA5d	Ⅱ層	深鉢	口縁	割みのある細い粘土結核付 沈線 刺突		N 4 A	
445	79	包含層1	中層下	深鉢	口縁	粘土結核付に割み 半農竹管による平行沈線 沈線内割み		N 4 A	
446	148	包含層1	Ⅱ層	深鉢	口縁	小さく外反する 口唇部 口縁部に粘土結核付 ちぎらずに折り曲げる		N 4 B	
447	788	包含層2	Ⅱ層	深鉢	口縁	大きく外反する 太い粘土結核と細い粘土結核(流状)		N 4 B	
448	794	包含層2	中層上	深鉢	口縁	縦位口縁 ほぼ垂直に外反 粘土結核付		N 4 B	
449	332	包含層2	Ⅱ層	深鉢	口縁	大きく外反 太い粘土結核と口唇部に 裏 細い粘土結核を山形に貼付		N 4 B	
450	150	包含層1	Ⅱ層	深鉢	口縁	外反する 口縁下部に山形 口縁部に流状の粘土結核貼付		N 4 B	

縄文土器観察表10

番号	数量	出土地点	層位	器種	部位	観察	胎土	分類	備考
451	349	包含層2	Ⅲ層	深鉢	口縁	大きく外反し外反 裏 ハート型の細い粘土糊貼付		Ⅳ4 B	
452	351	包含層2	Ⅲ層	深鉢	口縁	大きく外反 裏 太い粘土糊 裏 細い粘土糊をハート型に貼付	縦線文	Ⅳ4 B	
453	262	包含層1	Ⅲ層下	深鉢	口縁-唇部	大きく外反 細い粘土糊貼付(波状)	縦線文	Ⅳ4 B	
451	832	ⅢA2c	I層	深鉢	唇部	3本の波状の粘土糊貼付		Ⅳ4 B	
455	152	包含層1	Ⅲ層	浅鉢?	口縁	キャリバー状に内湾する 粘土糊貼付		Ⅳ4 B	
456	353	包含層2	Ⅲ層	深鉢	唇部	細い粘土糊を波状に貼り付ける し、R	縦線?	Ⅳ4 B	
457	151	包含層1	Ⅲ層	深鉢	口縁	口縁下部に山形の粘土糊貼付 ボタン状貼付		Ⅳ4 B	
458	830	ⅢA2d	検出面	深鉢	口縁	大きく外反する 細い粘土糊を波状に貼り付ける		Ⅳ4 B	
459	154	包含層1	Ⅲ層上	深鉢	口縁部-唇部	大きく外反する 波状の粘土糊貼付		Ⅳ4 B	
460	300	包含層1	Ⅲ層上	深鉢	唇部	小形深鉢 細い粘土糊貼付 太い原形を利用した斜縄文 し、R?		Ⅳ4 B	写真撮片
461	158	包含層1	Ⅲ層	深鉢	口縁	キャリバー状に内湾し外湾する はしご状		Ⅳ4 B	
462	158	包含層1	Ⅲ層上	深鉢	口縁	波状口縁 粘土糊貼付 はしご状		Ⅳ4 B	
463	160	包含層1	Ⅲ層上層	深鉢	口縁	渦巻き状突起 口唇部粘土糊(波状) はしご状 ×状		Ⅳ4 B	
464	842	包含層2	Ⅲ層	深鉢	口縁	内湾突起 波状口縁 粘土糊貼付 はしご状 唇子部も多数の貼付		Ⅳ4 D	
465	153	包含層1	Ⅲ層	深鉢	口縁?	渦巻き状の貼付		Ⅳ4 B	
466	157	包含層1	Ⅲ層	深鉢	口縁	粘土糊 ハート形 ×状		Ⅳ4 B	
467	147	包含層1	Ⅲ層上	深鉢	唇部	細い粘土糊貼付 J字や円形 内部突の上がった棒状工具巻き貝頂で削突		Ⅳ4 C	
468	219	包含層1	Ⅲ層上	深鉢	口縁	粘土糊を巻き貝状の工具で削み目		Ⅳ4 C	
469	795	包含層2	Ⅲ層上	深鉢	口縁	やや外反 口唇部突起押し引き 太い粘土糊貼付 竹管による削突		Ⅳ4 D	
470	103	包含層1	Ⅲ層	深鉢	口縁-腹面	頸部に粘土糊貼付(太い) 円形の削突 手袋竹管による沈積?		Ⅳ4 D	
471	338	包含層2	Ⅲ層-Ⅳ層	深鉢	口縁	やや外反 太い粘土糊貼付 円形の削突		Ⅳ4 D	
472	119	包含層1	Ⅲ層	深鉢	口縁	鹿状工具による削み入りの粘土糊貼付		Ⅳ4 D	
473	117	包含層1	Ⅲ層下	深鉢	口縁	口唇部に爪形 頸位の連続爪形文と突起工具で削まれた太い粘土糊貼付		Ⅳ4 D	
474	115	包含層1	Ⅲ層上層	深鉢	口縁	大きく外反し腹上部に最大径をもつ器形か? 鹿状工具で削みつけた粘土糊		Ⅳ4 D	
475	118	包含層1	Ⅲ層上層	深鉢	口縁	小波状口縁 鹿状工具で削まれた粘土糊貼付		Ⅳ4 D	
476	841	ⅢA1d	検出面	深鉢	口縁	口唇部部 斜位の削みのある粘土糊貼付		Ⅳ4 D	
477	311	包含層2	Ⅲ層	深鉢	口縁	やや外反 頸部圧痕された太い粘土糊貼付 鹿状工具による削突		Ⅳ4 D	
478	95	包含層1	Ⅲ層下層	深鉢	口縁	斜位の手袋竹管による削み沈積 頸位の削み目のある粘土糊貼付		Ⅳ4 D	
479	89	包含層1	Ⅲ層下	深鉢	口縁	多数竹管による平行沈積 頸位の太い粘土糊貼付	小石多い	Ⅳ4 D	
480	116	包含層1	Ⅲ層上層	深鉢	口縁	頸部にくびれ 頸位の連続押し引き 押し引きのある太い粘土糊貼付		Ⅳ4 D	
481	347	包含層2	Ⅲ層	深鉢	口縁	竹管による削突のはいた太い粘土糊貼付 山形沈積		Ⅳ4 D	
482	120	包含層1	Ⅲ層	深鉢	口縁	棒状工具で削突された2本のやや太い粘土糊貼付		Ⅳ4 D	
483	143	包含層1	Ⅲ層	深鉢	口縁	口唇部円形の連続削突文 内湾の口縁部 頸部圧痕 縄文充填?		Ⅳ4 D	
484	276	包含層1	Ⅲ層	深鉢	口縁	大柄の粘土糊貼付 波状ハート形 口縁部 小波状?		Ⅳ4 E	
485	337	包含層2	Ⅲ層	深鉢	口縁	外さざ 大柄の太い粘土糊を渦巻き状に貼り付ける		Ⅳ4 E	
486	156	包含層1	Ⅲ層上	深鉢	口縁	山形突起 やや太い粘土糊2本の横位 頸位の波状		Ⅳ4 E	
487	789	包含層2	Ⅲ層	深鉢	口縁-唇部	金魚鉢形 裏手 突起 太い粘土糊 渦巻き 菱形 4単位		Ⅳ4 E	
488	355	包含層2	Ⅲ層	深鉢	唇部	沈積の引かれた太い粘土糊貼付(渦巻き)		Ⅳ4 E	
489	155	包含層1	Ⅲ層	深鉢	唇部	沈積の引かれた太い粘土糊貼付(S字状)		Ⅳ4 E	写真石炭
490	829	ⅢA2c	I層	深鉢	口縁	S字状突起 ボタン状突起につながる縄文の充填された粘土糊貼付		Ⅳ4 F	
491	686	ⅢA2d	検出面	深鉢?	口縁	縄文の充填された粘土糊貼付(方形?)		Ⅳ4 F	
492	85	包含層1	Ⅲ層下	深鉢	口縁	棒状工具で削突された菱形の太い粘土糊貼付		Ⅳ4 G	
493	339	包含層2	Ⅲ層下層	深鉢	口縁	円形の削突のついた太い粘土糊貼付(菱形) ドーナツ状突起(意有り) 削突		Ⅳ5 A	
494	167	包含層1	Ⅲ層	深鉢	口縁	突起部(突起) ドーナツ状(意有り, 削突)		Ⅳ5 A	
495	319	包含層2	Ⅲ層上	深鉢	口縁	外反する 口唇部に粘土糊貼付(波状から渦巻)		Ⅳ5 A	
496	342	包含層2	Ⅲ層	深鉢	口縁	外反 渦巻きに粘土糊を貼り付ける(突起状)		Ⅳ5 A	
497	169	包含層1	Ⅲ層下	深鉢	口縁	突起部(突起) ドーナツ状 口唇部 波状に粘土糊塗らせる		Ⅳ5 A	
498	688	ⅢA1d	検出面	深鉢	口縁	突起部(突起) 削突の有るS字状		Ⅳ5 A	
499	82	包含層1	Ⅲ層下	深鉢	口縁	突起部(突起) 削突の有るS字状		Ⅳ5 A	
500	165	包含層1	Ⅲ層	深鉢	口縁	突起部(突起) 沈積の引かれたハート形		Ⅳ5 A	

縄文土器観察表11

番号	表裏	南北方位	層位	器種	部位	観察	胎土	分類	備考
501	163	包含層I	Ⅲ上層	深鉢	口縁	裝飾体(突起) 変形の渦巻状 がX字状に展開するか		N5A	
502	166	包含層I	Ⅲ層	深鉢	口縁	裝飾体(突起) 円形(ボタン状?)		N5A	
503	164	包含層I	Ⅲ層	深鉢	口縁-唇部	裝飾体(突起) 平皿状		N5B	
504	164	包含層I	中層上	深鉢	口縁	裝飾体(突起) S字状 内部巻貝頂による刺突		N5B	
505	335	包含層2	Ⅲ~Ⅳ層	深鉢	口縁	外反 裝飾体(突起) S字状		N5B	
506	162	包含層I	Ⅲ層	深鉢	口縁	裝飾体(突起) 波状 R-L		N5B	
507	182	包含層I	Ⅲ層	深鉢	口縁-唇部	筋み目で作られた楕円形の裝飾帯		N5C	
508	334	包含層2	Ⅳ層	深鉢	唇部	楕円形のボタン状突起 裏 粘土粒貼付痕		N5C	
509	310	包含層2	Ⅳ層	深鉢	口縁	ハート形粘土粒貼付 中に竹管による刺突文		N5C	
510	275	包含層I	Ⅲ層	深鉢	唇部	粘土粒貼付 ハート形?		N5C	
511	113	包含層I	Ⅲ層	深鉢	口縁	小波状口縁 円形の粘土粒付の中を指頭圧痕で潰す		N5C	
512	87	包含層I	中層下	深鉢	口縁	波状口縁 へら状工具による押し引き文 唇部に粘土粒貼付 樹小石多い		N5C	
513	235	包含層I	Ⅲ層	深鉢	唇部	ボタン状突起とU字窓突起 指頭圧痕(連続) L-R		N6	
514	232	包含層I	Ⅲ上層	深鉢	口縁-突起部	口唇部へら状工具での筋み目 口縁部 へら筋		N6	小石多い
515	253	包含層I	Ⅲ上層	深鉢	半定形	口唇部に筋み目 口縁部外にして外沿 唇部に最大径を持つ 不整断面		N6	
516	179	包含層I	Ⅲ層	深鉢	口縁-唇部	波状口縁 山形状突起をへら状工具で削む		N6	
517	177	包含層I	Ⅲ層	深鉢	口縁-唇部	口縁部 突起 山形状 筋系帯圧痕 R-L		N6	
518	288	包含層I	Ⅲ上層	深鉢	口縁	口縁部 ボタン状突起 X字状の沈痂 半農竹管による波状沈痂 粘土粒貼付文		VA	
519	289	包含層I	Ⅲ層下	深鉢	口縁-唇部	肥厚 口唇部爪形の筋み目 口縁部位の連続型沈痂 R-L		VA	
520	85	包含層I	中層下	深鉢	口縁	肥厚口縁? やや外反 一歩沈痂による腹位の短沈痂 裏面沈痂 削まれた唇上縁		VA	
521	171	包含層I	Ⅲ層	深鉢	口縁	肥厚させた口縁部をへら状工具で押し引き突起を作る 縦歯状沈痂		VA	
522	146	包含層2	中層上	深鉢	口縁	外反 折り返し口縁 口唇部筋み 筋みのある太い粘土粒貼付		VA	
523	175	包含層I	Ⅲ上層	深鉢	口縁	内厚の口縁部を腹位の縦歯状沈痂		VA	
524	140	包含層I	Ⅲ層	深鉢	口縁	内厚な口縁上に斜位の筋を削い平行沈痂		VA	
525	223	ⅡA5d 層位不明	深鉢	口縁	口縁部肥厚 押し引き 波状沈痂 平行沈痂		VA		
526	142	包含層I	Ⅲ~Ⅳ層	深鉢	口縁	やや外反 折り返し口縁 V字形の平行沈痂		VA	
527	216	包含層I	Ⅲ層	深鉢	口縁	肥厚した口縁 沈痂		VA	
528	170	包含層I	Ⅲ上層	深鉢	口唇	平行な2本の沈痂と2巻の山形沈痂		VB	
529	173	包含層I	Ⅲ層	深鉢	口唇部	半農竹管背面による腹位の縦歯状沈痂 連続される		VB	
530	172	包含層I	Ⅲ上層	深鉢	唇部	半農竹管による腹位の縦歯状沈痂		VB	
531	174	包含層I	Ⅲ層	深鉢	口縁	半農竹管による腹位の縦歯状沈痂		VB	唇部の可能性あり
532	224	ⅡA5d 層位不明	浅鉢?	口縁	渦巻状沈痂 縦歯状沈痂		VB		
533	225	ⅡA5d 層位不明	浅鉢?	口縁	キャリバーする器形 唇部に竹管の連続刺突 渦巻状沈痂		VB		
534	315	包含層2	Ⅳ層	深鉢	口縁	山形口縁 口唇部斜位の筋み 半農竹管による風輪状沈痂		VB	
535	327	包含層2	Ⅳ層	深鉢	口縁	沈痂で削まれた楕円形(舟形)の粘土粒貼付 押し引き刺突文 山形沈痂		VB	
536	335	包含層2	Ⅳ層?	深鉢	口縁	細い棒状工具での腹位の不整な沈痂		VB	
537	661	ⅡA5g 層位不明	浅鉢	口縁	薄手 幅のない熱り赤文 刺突文 L-R 円筒系上器?		VI1	縦横混入	
538	660	ⅡA5h 層位不明	浅鉢	口縁	薄手 幅のない熱り赤文 刺突文 L-R 円筒系上器?		VI1	縦横混入	
539	221	包含層I	Ⅲ層	浅鉢	口縁	口縁くの字状に溝彫 口唇部に溝彫文 丸 沈痂部に爪形突起 雲霧状沈痂		VI2	
540	121	包含層I	Ⅲ上層	深鉢	口唇部?	十字状の粘土粒貼付 大型円形刺突 連続式?		VI2	輪郭取付可能性あり
541	226	ⅡA5d 層位不明	深鉢	口縁	沈痂による隆帯文 大木?		Ⅶ		
542	697	ⅡA2c 層位不明	深鉢	口縁	キャリバー 沈痂 大木?		Ⅶ		
543	698	ⅡA6c 層位不明	深鉢	口縁	キャリバー 隆帯 刺突 大木?		Ⅶ		
544	699	ⅡA6c 層位不明	深鉢	口縁	磨り削し 刺突 隆帯 大木?		Ⅶ		
545	215	包含層I	Ⅲ層	深鉢	口縁	沈痂 渦巻状		Ⅶ	
546	700	ⅡA6c 層位不明	浅鉢?	口縁	沈痂 刺突 隆帯 後期?		Ⅶ		
547	343	包含層2	Ⅳ層	深鉢	口縁	沈痂 刺突 隆帯 後期		Ⅶ	
548	53	包含層I	Ⅲ層	深鉢	唇部	平行波状沈痂部に4列の小さい連続刺突 早期?		Ⅶ	細砂
549	52	包含層I	Ⅲ層	深鉢	唇部	小波状口縁 4列の平行な小さい連続刺突 5&8と同.? 早期?		Ⅶ	細砂
550	627	ⅡA1c 層位不明	深鉢	唇部	刺突文もしくは原形圧痕 貝殻背圧文 前期初頭の可能性大		Ⅶ	縦横混入	

縄文土器観察表12

番号(表背)	出土地点	層位	器種	部位	観察	胎土	分類	備考
551 144	包含層1	Ⅲ層	深鉢	口縁	小波状口縁 折り返された口縁部に縄文光沢LR 前期初期か 出流式		Ⅲ	
552 192	包含層1	Ⅲ層	深鉢	口縁	やや外反 口縁部に3本以上の原体圧痕文 前期の土器	小石多い	Ⅲ	
553 190	包含層1	Ⅲ層	深鉢	口縁-体部	外反する 口縁を内反する LR順 小型深鉢もしくは片 前期前期か	繊維?	Ⅲ	
554 189	包含層1	Ⅲ層	深鉢	口縁-体部	0段多縄 1)の斜位 縦割痕		Ⅲ	
555 312	包含層2	Ⅳ層	深鉢	口縁	多輪縁赤帯		Ⅲ	
556 228	ⅡA5d	Ⅲ層下	深鉢	口縁	波状口縁 0段多縄		Ⅲ	
557 283	包含層1	Ⅲ層	深鉢	口縁	小型 やや体部が膨らむ 縦形?		Ⅲ	
558 201	包含層1	Ⅲ層	細鉢	体部	格子目文(沈線)		Ⅲ	
559 222	包含層1	中層上	浅鉢	底面	キャリバー 粘土縁胎付 原体圧痕文 LR順不整胎赤文	繊維混入	Ⅲ	
560 837	ⅡA2c	横出面	深鉢	体部-底面	少し張り出しなだらかに立ち上がる 単筋斜縄文LR		ⅢA	
561 796	包含層2	Ⅲ層	深鉢	底面	縦位の斜縄文 本素直?		ⅢA	
562 258	包含層1	中層上	深鉢	体-底面	下部においてくびれ 滑き 底面やや張り出すか? LR順横		ⅢA	
563 845	包含層2	Ⅲ層	深鉢	底面	なだらかに立ち上がる 内面付着 底面縄文なし		ⅢA	
564 242	包含層1	Ⅲ層	深鉢	底面	張り出しほとんどなし ほとんど直立する		ⅢA	
565 250	包含層1	Ⅲ-Ⅳ層	深鉢	底面	張り出し無くほぼ直立する 底面横LR		ⅢA	
566 231	ⅡA5d	Ⅲ層	深鉢	底面	外傾して立ち上がる 最下部まで縄文 斜行状胎赤文	繊維混入	ⅢA	
567 243	包含層1	Ⅲ層	深鉢	底面	張り出し少なくほぼ横やかに外傾して立ち上がる LR		ⅢB	
568 257	包含層1	Ⅲ層	深鉢	底面	底面 張り出し 原体圧痕 LR		ⅢB	
569 238	包含層1	Ⅲ層	深鉢	底面	張り出し小さい 底は垂直にはる		ⅢB	
570 241	包含層1	Ⅲ-Ⅳ層	深鉢	底面	底面の上位縄文すり出し 底面原体圧痕	繊維少	ⅢB	
571 239	包含層1	Ⅲ層下	深鉢	底面	張り出し小さいが大きく内曲して立ち上がる 底面縄文 LR順	繊維混入	ⅢB	
572 636	V A4f	Ⅲ層	深鉢	底面	乳頭状 縄文縄文		ⅢC	
573 232	包含層1	Ⅲ層	深鉢	底面	尖底(平底風) 縦やかに外傾	繊維混入	ⅢC	
574 233	包含層1	中層下	深鉢	底面	尖底 直線的に外傾	繊維混入	ⅢC	
575 234	V A4f	Ⅲ層	深鉢	底面	尖底 縦やかに外傾する	繊維混入	ⅢC	

石器調査表1

番号	発番	器種	出土地点	層位	形態	長さ	幅	厚さ	高さ	材質	備考
576	F11	スクレーパー	RA02	埋土中	削器	5.2	(4.7)	0.7	18.23	頁岩(奥羽山脈)	
577	A1	石鏝	RA03	埋土中	円基	3.0	1.5	0.5	1.69	頁岩(奥羽山脈)	
578	A9	石鏝	RA07	埋土2層	円基	26.7	16.8	3.6	1.0	頁岩(奥羽山脈)	
579	B26	石鏝	RA07	埋土下位	楕形	48.3	18.0	10.9	8.6	頁岩(奥羽山脈)	石鏝?
580	E28	スクレーパー	RA07	埋土下位	二次加工削片	63.1	27.5	13.2	13.6	頁岩(奥羽山脈)	
581	E19	スクレーパー	RA07	埋土下位	石器断片	28.8	33.2	9.6	8.2	頁岩(奥羽山脈)	
582	E46	スクレーパー	RA07	埋土下位	削器					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
583	E45	スクレーパー	RA07	床面	削器					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
584	E27	スクレーパー	RA07	埋土下位	削器					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
585	H37	磨石器	RA07	埋土下位	磨石					ホルンフェルス(北上山地)	
586	M9	石製品	RA07	床面上	石棒?					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
587	M11	石製品	RA07	埋土下位	石棒?					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
588	E30	スクレーパー	RA08	埋土中	削器	27.4	22.2	7.1	4.5	頁岩(奥羽山脈)	
589	A11	石鏝	RA09	P3埋土	円基	24.5	16.0	4.1	1.2	頁岩(奥羽山脈)	
590	A13	石鏝	RA09	埋土2層	円基	27.9	15.5	3.9	1.2	頁岩(奥羽山脈)	
591	A10	石鏝	RA09	埋土2層	円基	33.1	13.2	2.7	0.8	頁岩(奥羽山脈)	
592	B38	石鏝	RA09	埋土2層	楕形	105.2	19.2	9.5	13.2	頁岩(奥羽山脈)	
593	B31	石鏝	RA09	埋土2層	楕形	68.6	31.2	11.6	16.1	頁岩(奥羽山脈)	
594	B32	石鏝	RA09	埋土1層	楕形	51.0	27.7	10.2	10.4	頁岩(奥羽山脈)	
595	B27	石鏝	RA09	P1埋土	楕形	33.4	51.2	8.1	8.5	頁岩(奥羽山脈)	
596	D58	石鏝	RA09	埋土2層	楕形					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
597	E17	スクレーパー	RA09	埋土下位	削器	62.2	38.4	12.9	13.3	頁岩(奥羽山脈)	石鏝?
598	E37	スクレーパー	RA09	埋土中	削器					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
599	E43	スクレーパー	RA09	埋土下位	石器断片	25.0	24.5	6.1	2.7	頁岩(奥羽山脈)	
600	E54	スクレーパー	RA09	埋土3層	石器断片	37.3	20.5	6.7	2.7	頁岩(奥羽山脈)	
601	E56	スクレーパー	RA09	埋土2層	削器					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
602	H40	磨石器	RA09	床面	磨石					閃緑岩(北上山地)	写真のみ
603	H41	磨石器	RA09	床面	磨石					閃緑岩(北上山地)	
604	H44	磨石器	RA09	床面	磨石					閃緑岩(北上山地)	写真のみ
605	H28	磨石器	RA09	床面	磨石					閃緑岩(北上山地)	
606	H33	磨石器	RA09	床面	磨石					花崗閃緑岩(北上山地)	写真のみ
607	H38	磨石器	RA09	床面	磨石					ひん岩(北上山地)	
608	H42	磨石器	RA09	床面	磨石					閃緑岩(北上山地)	
609	H43	磨石器	RA09	床面	磨石					凝灰岩(北上山地)	写真のみ
610	B29	石鏝	RA10	埋土下位	楕形	58.8	29.2	9.1	9.1	頁岩(奥羽山脈)	
611	B33	石鏝	RA16	埋土	楕形	62.3	22.0	13.3	12.3	頁岩(奥羽山脈)	
612	B34	石鏝	RA16	埋土	楕形	70.2	22.3	10.3	14.8	頁岩(奥羽山脈)	
613	B35	石鏝	RA16	埋土	楕形	60.8	22.3	11.4	11.8	頁岩(奥羽山脈)	
614	A14	石鏝	RA19	埋土2層	円基	19.0	13.5	3.9	0.7	頁岩(奥羽山脈)	
615	A15	石鏝	RA19	埋土2層	円基	22.0	13.0	4.1	0.7	頁岩(奥羽山脈)	
616	B36	石鏝	RA19	埋土1層	楕形	38.5	17.0	7.0	2.7	頁岩(奥羽山脈)	
617	B36	石鏝	RA19	埋土2層	楕形	49.2	31.7	8.5	10.3	頁岩(奥羽山脈)	
618	B37	石鏝	RA19	埋土2層	楕形	70.4	23.8	6.7	10.2	頁岩(奥羽山脈)	
619	H35	磨石器	RA19	埋土下位	磨石					砂岩(北上山地)	写真のみ
620	A16	石鏝	RA20	埋土1層	円基	38.6	14.4	4.0	1.4	頁岩(奥羽山脈)	
621	A17	石鏝	RA20	床面	円基	29.3	17.7	4.0	1.3	頁岩(奥羽山脈)	
622	A18	石鏝	RA20	床面	未製品?	31.1	16.6	6.6	2.4	頁岩(奥羽山脈)	
623	B49	石鏝	RA20	埋土1層	楕形	52.9	21.9	8.4	8.8	頁岩(奥羽山脈)	
624	B50	石鏝	RA20	埋土下	楕形	50.1	15.1	7.0	3.9	頁岩(奥羽山脈)	
625	B48	石鏝	RA20	埋土1層	楕形	34.7	50.7	10.6	11.8	頁岩(奥羽山脈)	

石巻観察表 2

番号	記号	器種	出土地点	層位	形態	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
626	E32	スクレーパー	RA20	床面上	削器	60.7	37.3	10.7	20.4	頁岩(奥羽山脈)	
627	E31	スクレーパー	RA20	床面上	削器					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
628	E36	スクレーパー	RA20	床面上	削器					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
629	E33	スクレーパー	RA20	埋土1層	削器	38.0	29.8	11.3	10.4	頁岩(奥羽山脈)	
630	B51	石匙	RA22	埋土	楕円形	51.6	25.7	8.6	7.7	頁岩(奥羽山脈)	
631	B32	石匙	RA24	埋土下位	楕円形	56.8	17.8	9.0	6.0	頁岩(奥羽山脈)	
632	B33	石匙	RA26	埋土下位	楕円形	63.4	28.4	12.6	13.3	頁岩(奥羽山脈)	
633	M10	石製品	RD14	埋土下位	石棒					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
634	A19	石鏝	RD16	埋土	平基	23.2	11.6	3.7	0.6	頁岩(奥羽山脈)	
635	A20	石鏝	RD17	埋土中	円形木製品	23.4	15.9	3.9	0.9	頁岩(奥羽山脈)	
636	A21	石鏝	RD17	埋土中	平基	19.2	15.7	3.1	0.7	頁岩(奥羽山脈)	
637	J2	矢頭器	RD17	埋土中	欠損	103.5	31.4	16.8	51.8	頁岩(奥羽山脈)	
638	J3	矢頭器	RD17	埋土中		145.2	35.0	15.7	73.8	頁岩(奥羽山脈)	
639	I31	礫石器	RD17	埋土3層	礫石					閃緑岩(北上山地)	写真のみ
640	B69	石匙	RD21	埋土	楕円形	86.8	18.3	12.2	14.9	頁岩(奥羽山脈)	
641	A22	石鏝	RD25	埋土中	欠損	22.1	12.3	4.1	1.0	黒曜石(赤井川)	
642	A03	石鏝	包含層1	中層下	柳葉形	3.8	1.0	0.3	1.14	頁岩(奥羽山脈)	
643	A02	石鏝	包含層1	Ⅱ層	円形	3.3	2.1	0.5	2.38	頁岩(奥羽山脈)	
644	A05	石鏝	包含層1	中層上	円形	3.1	1.65	0.45	1.97	凝灰岩(奥羽山脈)	
645	A26	石鏝	包含層2	Ⅱ層	円形	32.9	17.6	5.1	1.6	頁岩(奥羽山脈)	
646	A30	石鏝	ⅡA9-10c	Ⅱ層	円形	34.6	16.6	7.3	3.0	頁岩(奥羽山脈)	
647	A06	石鏝	ⅡA6-7b	Ⅱ層	円形	(3.2)	1.85	0.45	2.41	砂岩(北上山地)	
648	A29	石鏝	包含層2	Ⅱ層	円形	32.8	18.5	5.0	1.6	頁岩(奥羽山脈)	
649	A31	石鏝	ⅡA3d	Ⅱ～Ⅲ層	円形	30.7	19.7	4.8	1.7	頁岩(奥羽山脈)	
650	A24	石鏝	包含層2	Ⅱ層	円形	27.7	19.6	4.5	1.5	頁岩(奥羽山脈)	
651	A27	石鏝	包含層2	Ⅱ層	円形	28.6	17.4	4.8	2.2	頁岩(奥羽山脈)	
652	A07	石鏝	不明	不明	円形	2.5	1.6	0.6	1.81	頁岩(奥羽山脈)	
653	A28	石鏝	包含層2	Ⅱ～Ⅲ層	円形	25.9	17.2	5.0	1.3	頁岩(奥羽山脈)	
654	A25	石鏝	包含層2	Ⅱ層	平基	30.2	20.5	5.8	2.7	頁岩(奥羽山脈)	
655	A12	石鏝	ⅡA10d	検出面	平基	25.5	17.6	5.6	1.7	頁岩(奥羽山脈)	
656	A23	石鏝	包含層2	Ⅱ層	円形	37.0	17.1	4.0	1.5	頁岩(奥羽山脈)	
657	A08	石鏝	包含層1	中層下	円形	(2.2)	1.9	0.5	2.01	頁岩(奥羽山脈)	
658	A04	石鏝	包含層1	層位不明	円形	(1.9)	(1.4)	0.3	0.73	頁岩(奥羽山脈)	
659	B08	石匙	包含層1	Ⅱ～Ⅲ層	楕円形	7.7	2.3	0.8	9.30	頁岩(奥羽山脈)	
660	B47	石匙	包含層2	Ⅱ層	楕円形	61.1	23.4	11.9	10.8	頁岩(奥羽山脈)	
661	B55	石匙	ⅡA3f	Ⅱ層	楕円形	61.8	12.9	6.9	4.5	頁岩(奥羽山脈)	
662	B16	石匙	ⅡA	検出面	楕円形	6.1	1.6	0.7	5.71	頁岩(奥羽山脈)	
663	B54	石匙	包含層2	Ⅱ層	楕円形	61.5	19.5	6.8	6.0	頁岩(奥羽山脈)	
664	B11	石匙	ⅡA1c	Ⅱ層下	楕円形	56.9	21.7	8.1	8.3	頁岩(奥羽山脈)	
665	B37	石匙	ⅡA9f	Ⅱ層	楕円形	43.5	13.2	7.8	3.1	頁岩(奥羽山脈)	
666	B02	石匙	包含層1	Ⅱ層	楕円形	5.5	2.25	0.6	5.98	頁岩(奥羽山脈)	
667	B24	石匙	包含層1	Ⅱ層	楕円形	7.3	1.8	0.8	10.10	頁岩(奥羽山脈)	
668	B30	石匙	ⅡA10d	Ⅱ層下	楕円形	66.8	21.8	8.2	7.8	頁岩(奥羽山脈)	
669	B38	石匙	ⅡA	掘土	楕円形	59.0	21.1	8.7	8.6	頁岩(奥羽山脈)	
670	B45	石匙	ⅡA3-g	Ⅱ層	楕円形	71.0	24.7	12.4	13.0	頁岩(奥羽山脈)	
671	B09	石匙	包含層1	Ⅱ層	楕円形	7.0	3.6	0.8	13.83	頁岩(奥羽山脈)	
672	B14	石匙	包含層1	Ⅱ～Ⅲ層	楕円形	4.8	2.4	0.65	5.28	頁岩(奥羽山脈)	
673	B12	石匙	包含層1	Ⅱ層	楕円形	4.9	2.1	0.6	5.58	頁岩(奥羽山脈)	
674	B01	石匙	包含層1	Ⅱ層	楕円形	7.5	3.2	1.0	20.27	頁岩(奥羽山脈)	
675	B07	石匙	包含層1	Ⅱ～Ⅲ層	楕円形	9.6	3.4	1.4	31.17	頁岩(奥羽山脈)	

石群観察表 3

番号	仮番	器種	出土地点	層位	形態	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
676	B25	石匙	包含層1	IV-VI層	板形	8.5	2.5	0.9	18.72	頁岩(奥羽山脈)	
677	B06	石匙	包含層1	II層	板形	(6.6)	2.6	1.2	12.67	頁岩(奥羽山脈)	
678	B11	石匙	包含層1	中層F	板形	7.6	2.7	0.8	14.34	頁岩(奥羽山脈)	
679	B23	石匙	II A8-9d	II層	板形	4.9	6.0	1.1	25.65	頁岩(奥羽山脈)	
680	B15	石匙	包含層1	II層	板形	6.1	4.2	0.9	18.05	頁岩(奥羽山脈)	
681	B40	石匙	II A9c	II層下	板形	71.5	41.1	9.4	16.6	頁岩(奥羽山脈)	
682	B20	石匙	包含層1	II層	楕形	5.3	8.1	1.7	46.75	頁岩(奥羽山脈)	
683	B43	石匙	II A2f-g	検出面	板形	24.8	14.8	6.2	1.5	赤色頁岩(奥羽山脈)	
684	B13	石匙	包含層1	II層	板形	3.4	2.0	0.7	4.18	赤色頁岩(奥羽山脈)	
685	B21	石匙	包含層1	II層	楕形	2.5	2.65	0.7	2.98	頁岩(奥羽山脈)	
686	B42	石匙	II A8d-e	II層	板形	67.9	13.2	10.6	5.5	頁岩(奥羽山脈)	石群?
687	B10	石匙	包含層1	II層	板形	6.2	2.8	1.0	7.26	頁岩(奥羽山脈)	
688	B39	石匙	II A9-Bd	II層	楕形	29.8	42.9	9.6	7.6	頁岩(奥羽山脈)	
689	B18	石匙	包含層1	II層	楕形	1.8	4.0	0.55	2.34	頁岩(奥羽山脈)	
690	B44	石匙	II A4c	検出面	楕形	25.7	34.8	7.0	4.9	頁岩(奥羽山脈)	
691	B05	石匙	VA6h	検出面	楕形	3.3	4.7	0.6	6.20	頁岩(奥羽山脈)	
692	B17	石匙	包含層1	II層	楕形	3.5	4.8	0.8	9.36	頁岩(奥羽山脈)	
693	B04	石匙	包含層1	中層下	楕形	2.6	3.6	0.7	5.92	頁岩(奥羽山脈)	
694	B19	石匙	包含層1	II層	楕形	3.1	3.7	0.9	7.41	頁岩(奥羽山脈)	
695	B03	石匙	包含層1	II層	楕形	3.4	4.4	0.7	9.10	頁岩(奥羽山脈)	
696	B46	石匙	VA1e	II層	楕形	30.1	58.2	10.0	12.0	頁岩(奥羽山脈)	
697	B22	石匙	包含層1	II層	楕形	3.75	5.0	1.0	10.56	頁岩(奥羽山脈)	
698	C02	石匙	包含層1	II層	楕形	6.7	1.7	0.7	6.91	頁岩(奥羽山脈)	
699	C01	石匙	包含層1	II層	楕形	(8.0)	1.8	1.1	13.93	頁岩(奥羽山脈)	
700	C05	石匙	包含層1	II層	ほぼ菱形	(6.9)	1.95	0.85	9.17	頁岩(奥羽山脈)	
701	C10	石匙	II A3d	I層	板形	86.0	20.7	11.2	18.1	頁岩(奥羽山脈)	
702	C11	石匙	II A3a	I層	板形	86.0	18.3	9.6	16.3	頁岩(奥羽山脈)	
703	C09	石匙	II A6d	I層	板形	67.9	19.1	7.8	9.4	頁岩(奥羽山脈)	
704	C08	石匙	包含層1	中層面上	やや扁平	10.1	2.2	0.8	17.22	頁岩(奥羽山脈)	
705	C04	石匙	包含層1	中層面上	板形	(8.9)	2.15	1.0	16.72	頁岩(奥羽山脈)	
706	C06	石匙	II A8-9d	II層下	やや扁平	10.3	2.4	1.1	25.54	頁岩(奥羽山脈)	
707	C08	石匙	包含層2	II層	板形	80.9	20.3	9.6	14.1	頁岩(奥羽山脈)	
708	C07	石匙	包含層1	II層下	板形	(3.9)	2.25	0.95	7.69	頁岩(奥羽山脈)	
709	D2	塊状石群	包含層1	II層		6.2	2.9	1.2	19.92	頁岩(奥羽山脈)	
710	D1	石群?	包含層1	中層下		4.75	2.3	0.9	8.62	頁岩(奥羽山脈)	
711	D4	石群	包含層1	中層上		4.6	2.4	1.0	8.75	頁岩(奥羽山脈)	
712	D5	石群	包含層2	VI層		43.3	33.4	10.0	9.2	頁岩(奥羽山脈)	石群?製品?
713	D6	石群	包含層2	II層		46.2	26.6	10.5	12.6	頁岩(奥羽山脈)	尖頭器?
714	D7	石群	包含層2	II層		60.3	34.9	12.4	24.5	頁岩(奥羽山脈)	
715	J1	尖頭器	包含層1	II層	本家型-両面	7.6	1.8	1.0	13.90	頁岩(奥羽山脈)	
716	J6	尖頭器	VA2g	I層						頁岩(奥羽山脈)	
717	J4	尖頭器	近世上段	埋土中						頁岩(奥羽山脈)	
718	J5	尖頭器	VA2g	II層						頁岩(奥羽山脈)	
719	E06	スチレバー	包含層1	II層	楕形	7.0	7.5	1.5	60.01	頁岩(奥羽山脈)	
720	E01	スチレバー	包含層1	中層下	楕形	6.7	6.7	1.2	49.63	頁岩(奥羽山脈)	
721	E05	スチレバー	包含層1	II層	楕形	6.0	4.8	1.3	25.59	頁岩(奥羽山脈)	
722	E09	スチレバー	包含層1	II層	楕形	6.6	3.9	1.6	35.63	頁岩(奥羽山脈)	
723	E34	スチレバー	包含層2	中層下	鋸歯状側器	74.8	50.7	12.6	32.5	頁岩(奥羽山脈)	
724	E20	スチレバー	包含層2	VI層	側器					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
725	E11	スチレバー	包含層1	VI層	側器	4.1	5.0	0.8	16.83	頁岩(奥羽山脈)	

石鏡観察表 4

番号	観音	器 種	出土地点	層 位	形 態	長さ	幅	厚さ	重さ	石 質	備 考
726	E13	スクレーパー	包含層1	Ⅱ層	削器	5.6	4.0	1.3	22.00	頁岩(奥羽山脈)	
727	E14	スクレーパー	包含層1	Ⅱ層	削器	5.0	4.5	1.2	19.69	頁岩(奥羽山脈)	
728	E32	スクレーパー	ⅡA4c	Ⅱ層	削器	67.9	36.6	16.5	21.6	凝灰岩(奥羽山脈)	
729	E26	スクレーパー	ⅡA7c	Ⅱ層	削器					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
730	E24	スクレーパー	ⅡA3c	Ⅱ層	使用痕跡片	57.2	44.3	17.5	29.8	頁岩(奥羽山脈)	
731	F42	スクレーパー	ⅡA8d-e	Ⅰ層	使用痕跡片	55.9	50.1	12.9	31.0	頁岩(奥羽山脈)	
732	E47	スクレーパー	ⅡA9c	検出図	使用痕跡片	40.7	45.5	10.5	15.6	頁岩(奥羽山脈)	
733	E35	スクレーパー	ⅡA7c	層位不明	線形	50.6	36.3	11.5	12.4	頁岩(奥羽山脈)	
734	E08	スクレーパー	包含層1	Ⅲ層	線器	4.1	3.7	0.7	13.63	頁岩(奥羽山脈)	
735	E38	スクレーパー	V A5b	Ⅱ層	削器	29.9	43.7	8.5	8.2	頁岩(奥羽山脈)	
736	E41	スクレーパー	V A1f-g	Ⅱ層	線器	47.5	32.8	7.3	8.5	頁岩(奥羽山脈)	石匙?
737	E29	スクレーパー	包含層2	V層	使用痕跡片	52.4	26.0	12.1	12.2	頁岩(奥羽山脈)	
738	E16	スクレーパー	ⅡA1b-c	Ⅰ層	削器	67.1	26.6	14.7	22.2	頁岩(奥羽山脈)	
739	E25	スクレーパー	包含層2	Ⅲ層	削器					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
740	E44	スクレーパー	ⅡA8d-e	Ⅰ層	使用痕跡片	28.3	29.4	9.8	5.6	頁岩(奥羽山脈)	
741	E04	スクレーパー	包含層1	Ⅲ層	削器	3.0	2.9	0.9	7.84	頁岩(奥羽山脈)	
742	E07	スクレーパー	ⅡA8-9d	Ⅱ-Ⅳ	削器	3.9	2.7	0.5	6.09	頁岩(奥羽山脈)	
743	E40	スクレーパー	ⅡA2d	Ⅰ層	削器					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
744	E48	スクレーパー	カクラン	土中	削器					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
745	E15	スクレーパー	包含層2	V層	石器断片	37.5	32.1	9.0	9.7	頁岩(奥羽山脈)	
746	E31	スクレーパー	ⅡA3c	検出図	線器	25.2	26.9	8.4	5.0	頁岩(奥羽山脈)	線形石匙?
747	E33	スクレーパー	包含層2	V層	削器					建築頁岩(北上)	写真のみ
748	E28	スクレーパー	ⅡA1g	Ⅰ層	削器					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
749	F39	スクレーパー	ⅡA10f	Ⅱ層	削器					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
750	E57	スクレーパー	ⅡA1b	検出図	削器					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
751	E23	スクレーパー	ⅡA2b-c	Ⅰ層	削器					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
752	E21	スクレーパー	ⅡA10g	Ⅱ層	削器					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
753	E22	スクレーパー	ⅡA3c-d	Ⅰ層	削器					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
754	E49	スクレーパー	ⅡA7c	検出図	削器					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
755	E50	スクレーパー	ⅡA7c	検出図	削器					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
756	E18	スクレーパー	ⅡA9-10f	Ⅱ層	削器					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
757	F01	スクレーパー	包含層1	Ⅱ層	削器	4.3	(2.0)	0.6	4.86	頁岩(奥羽山脈)	
758	F07	スクレーパー	包含層1	中層下	削器	4.85	3.2	1.1	16.78	頁岩(奥羽山脈)	
759	F09	スクレーパー	包含層1	Ⅰ層下	削器	2.9	3.7	0.5	7.52	頁岩(奥羽山脈)	
760	F15	スクレーパー	包含層1	Ⅳ層下	削器	4.4	2.9	0.9	8.32	頁岩(奥羽山脈)	
761	F16	スクレーパー	包含層1	Ⅱ	掃帚?	3.0	5.7	0.7	15.38	頁岩(奥羽山脈)	石匙?
762	F17	スクレーパー	包含層1	Ⅱ	削器	4.6	5.2	1.2	20.23	頁岩(奥羽山脈)	
763	G3	磨製石斧	包含層1	中層下	刃部欠損	(4.2)	4.1	2.6	62.27	頁岩(奥羽山脈?)	
764	G2	磨製石斧	包含層1	Ⅲ層	片刃小型	(4.7)	3.7	0.8	20.53	砂岩(北上山地)	
765	G6	磨製石斧	ⅡA9c	Ⅱ層	刃部欠損					頁岩(奥羽山脈)	
766	G4	磨製石斧	包含層1	中層上	刃部欠損	(6.3)	4.7	3.4	146.60	不明	
767	G5	磨製石斧	包含層2	V層	両刃大型					頁岩(奥羽山脈)	
768	H01	礫石器	包含層1	Ⅲ層	凹石	19.05	5.3	3.2	341.60	凝灰岩(奥羽山脈)	
769	H19	礫石器	包含層1	Ⅲ層	凹石	7.6	4.4	2.8	103.80	凝灰岩(奥羽山脈)	
770	H14	礫石器	包含層1	Ⅲ層	凹石	9.0	5.1	3.49	192.30	花園門緑岩(北上山地)	
771	H17	礫石器	包含層1	Ⅲ層	凹石	13.7	5.4	3.8	397.00	砂岩(北上山地)	
772	H05	礫石器	包含層1	Ⅲ層	凹石	(7.3)	4.4	2.8	142.00	凝灰岩(北上山地)	
773	H03	礫石器	包含層1	Ⅲ層	凹石	13.2	5.4	3.1	258.90	凝灰岩(奥羽山脈)	
774	H11	礫石器	包含層1	不明	凹石	15.0	7.4	4.7	1011.20	花園門緑岩(北上山地)	
775	H02	礫石器	包含層1	Ⅲ層	凹石	9.8	7.0	5.4	534.80	門緑岩(北上山地)	

石器観察表 5

番号	番号	器種	出土地点	層位	形態	長さ	幅	厚さ	高さ	石質	備考
776	H15	磨石器	包含層1	Ⅲ層	磨石	12.5	(3.7)	(2.5)	155.5	門緑岩(北上山地)	
777	H09	磨石器	包含層1	Ⅲ	磨石	(10.0)	5.4	3.4	279.40	花岡門緑岩(北上山地)	
778	H10	磨石器	包含層1	Ⅲ	磨石?	10.5	3.8	3.0	150.20	花岡門緑岩(北上山地)	
779	H06	磨石器	包含層1	Ⅲ層	磨石	(11.5)	8.4	(7.0)	914.70	花岡岩(北上山地)	
780	H39	磨石器	包含層2	Ⅲ～Ⅳ層	砥石					凝灰岩(北上山地)	写真のみ
781	H07	磨石器	包含層1	Ⅲ層	磨石	5.9	5.6	2.2	101.00	花岡門緑岩(北上山地)	
782	H13	磨石器	ⅡA8d	Ⅲ層	磨石	10.3	10.5	6.6	1818.20	せん炭 掘野	
783	H25	磨石器	ⅡA8d	Ⅲ層	磨石	12.5	5.0	2.5	192.30	フツ(北上山地)	
784	H27	磨石器	ⅡA2d	検出面	磨石					阿波谷(北上山地)	
785	H36	磨石器	V A5h	Ⅲ層下	磨石					花崗岩(北上山地)	写真のみ
786	H32	磨石器	ⅢA3c	I層	磨石					砂岩(北上山地)	写真のみ
787	H1	石杖?	ⅡA1c	埴土	剥片	37.1	51.5	14.2	26.8	加硫石(産地不明)	
788	H30	磨石器	V A	I層	磨石斧					ホルンフェルス(北上山地)	写真のみ
789	H29	磨石器	ⅡA8d	検出面	磨石斧					砂岩(北上山地)	写真のみ
790	M08	石製品	包含層1	Ⅲ	挾状耳飾	(3.0)	(2.8)	0.6	5.34	不明	
791	M06	石製品	包含層1	Ⅲ層下	挾状耳飾	3.35	(2.2)	0.7	5.47	滑石(北上山地)	
792	M01	石製品	ⅡA8d	Ⅲ層	首飾り	23.5	3.5	1.2	138.90	粘板岩(北上山地)	
793	M04	石製品	V A区	Ⅲ層下	石棒	(8.7)	(1.75)	1.4	29.49	粘板岩(北上山地)	
794	M05	石製品	包含層1	Ⅲ層	石棒	(9.05)	2.6	1.2	48.83	粘板岩(北上山地)	
795	M12	石製品	V A3c	Ⅲ層	石棒?					頁岩(奥羽山脈)	写真のみ
796	M07	石製品	包含層1	Ⅵ	環状石斧?	(4.9)	(4.5)	(0.75)	13.54	砂岩(北上山地)	
797	M13	石製品	包含層2	Ⅲ～Ⅳ層	ペンダント					輝石(奥羽山脈)	
798	N3	土製品	ⅡA7-8g	検出面	ヒョウ土器	—	2.8	3.2	7.28		
799	N1	土製品	包含層1	Ⅲ層	円盤状	6.9	7.3	1.5	35.18		
800	N2	土製品	包含層1	Ⅲ層	円盤状	5.8	6.2	1.3	38.17		

(6) 小結

沢田2遺跡における縄文時代の遺構・出土遺物を概観してきたが、ここでは壑穴住居跡と土坑の時期区分をし、背景についての考察を含めて小結としたい。出土遺物についてはVでまとめる。

① 壑穴住居跡の変遷

今回発掘調査された区域で検出された壑穴住居跡は27棟、土坑は50基である。検出された遺構のうち出土遺物が明確でなかったものは本文では不明としたが、ここでは積極的に時期を推測し集落の変遷を考えていきたい。土坑は主なものを取り上げる。

時期は1期：早期中葉 2期：早期末葉から前期初頭 3期：前期前葉 4期：前期前葉後半期～中葉 5期：前期中葉～後葉 6期：後葉以降として順にまとめる。

1期：早期において中葉に属すると思われるRA04は調査区の南端にある。周囲に他の住居跡は検出されない。当期に属する土器を出土させる土坑はない。当期の土器は包含層1の下層から出土するが、出土層は北側の県道下に延びると考えている。北と南の共通点は調査区の標高の低い区域だということで、早期中葉において川沿いに居住区があった可能性を指摘できる。

2期：早期末葉期の住居跡は定かではないが、調査区の中央区RA20の下位から検出されたRA27と近接するRA25が当期に属するか。平面形は楕円形を呈する。調査区に限れば、他の早期土器の出土頻度と比較して表裏縄文土器は多く出土する。早期末葉から集落としての形成が始まり、前期中葉期の隆盛につながったのかもしれない。前期初頭の住居跡は長方形で長軸5m前後の3?棟(RA18?20・23)と、楕円形の3～4m程の小型住居跡8棟(RA06・08・09・11・16・19・22・24)を検出した。前者のうちRA20からは地床炉を確認している。2つの方形の住居跡は遺跡中央部に土坑を伴ってまとまっているが、小型のものは調査区全体に広がりを見せる。この小型のものは柱穴がはっきりせず、簡易的な(キャンプ地的な)印象を受ける。季節的な居住地であろうか。

土坑は主なものでは、RA20と23に挟まれて検出された3基(RD40・41・45)がある。RD41は貯蔵穴、RD45は墓坑の可能性がある。この集石土坑は3期にも出現する。

3期：いわゆる大木1式から2a式を出土させる遺構である。調査区中央区のやや南端で4棟?の壑穴住居跡を検出した。埋土状況などから古い順にRA01・03・04?02である。隅丸の方形で主軸方位はほぼ南～北となる。壁柱穴状の小穴が壁面を巡る特色があるが、主柱穴は判然としない。規模はもっとも新しいRA02で、4m前後と小さい。その配置には規則性は感じられない。

当期に伴う土坑にはRD01・04・06・10があり、埋土に際を含む特色がある。RD06はRA01とRD10はRA03と南で隣接する。そのうちRD10とRA03の出土土器が接合する。2期で検出した集石土坑も隣接する住居跡出土の土器と同じ時期である。この事から住居跡と墓坑が隣り合う例は、前期初頭(早期末葉)から前期前葉へと受け継がれてきたに違いない。

また、前期初頭を含めた土器を出土させる土坑は4期の住居跡が集中する区域にも検出される。これら土坑は、4期の壑穴住居跡造成の際に人為的に埋められた?可能性を考えている。

4期：大木2b式から3式の土器を出土させる遺構である。大型の住居跡RA09やRA12が当期に当たる。ここでは傾平を受けているRA13や15も当期として考える。規模はRA09でみると長軸7m前後、平面形は楕円形を呈し、主軸方位はほぼ北西から南東に延びる。この傾向はRA12にも当てはまる。配置で考えるとRA13と15を含めて遺跡北よりのやや標高の高い区域に集中しており、旧河川の南側の住居跡が集中する区

域にはない。これらの事実は規則性を持つ「ムラ」の出現を想定させる。

土坑は住居跡に関連して検出されることが多い。R A09とR A07に挟まれて前葉の土坑があるが、この上位にR A15があったと推定している。また、幕状のR D16もR A13に埋まった可能性を考えている。このような土坑を埋めて住居跡を作り上げる例は次の5期にも見える。

5期：大木4・5式を主体とした土器を出土させる遺構である。並列に2棟？（R A07・14？）検出した。R A07は大型の壁穴住居跡で、長軸9mを計り、2基の地床が備えることからロングハウスとして差し支えないかもしれない。主軸方位は4期と同軸となり系統性が伺える。土坑を埋めて住居跡を建築することも4期と同様である。しかし床面が礫に覆われていることや2基ある地床が焼成悪く、出土する礫石器も少ないという相違点もある。また、土器が大型の礫に漬されているかのように出土している。これらから推測すれば作業場としての機能を果たすために、必要最低限の機能を持てばいいという考えがあったのではないか。使われなくなった土器を廃棄する場所を兼ねていたのではないかとということである。当期の居住地は近隣の地区に広がっていると思われる。

6期：後葉以降を推測する。大木6式や7式の土器は、包含層1の上位層に出土するが、田の広がる調査区中央部からは少量しか出土しない。（削平されたとも考えられるが）この事から後葉以降は、遺跡北東方向に広がる可能性を指摘できる。また、調査区の北東側には沢田1遺跡があり、中期から後期の土器を出土させることから、中期以降は5期より標高の高い区域に「ムラ」が存在したと予測する。

② まとめ（背景からの考察）

以上のように変遷してきたであろう沢田2遺跡（沢田1を含めて）の時代背景を考えてみたい。まずは自然環境からみると、遺跡は旧河川に横切られている。これは縄住居川の流路の変更と思われるが、その礫層中にも縄文時代の遺構は存在する。ただし、早期の住居跡が旧河川近くに存在することから、少なくとも早期中葉期には縄住居川は現在の状況にあったのではないかと推測する。よってその礫を取り除いて住居跡を構築したことにはなんらかの意味を持たねばなるまい。それはおそらく縄文時代早期末葉から前期初頭前後に起こったことであろう。そこに集落としての始源があったのではないかと推測する。また、中葉期頃から居住区が標高の高い位置に移ることの背景には、縄文時代の前期前半の縄文海進と「ムラ」の発生、または人口の増加がこのような変遷を引き起こしたと考えられる。というのはこの遺跡が遠方との関わりを強く想定させるからである。次に人的背景から沢田2遺跡の特色について考えたい。

出土遺物でみると、縄文時代前期前葉から中葉に、北との関わりが強い遺物が確認された。前期初頭から前葉の土器を出土させた土坑（R D25）から、北海道赤井川原産と思われる黒曜石製の石鏃が出土している。また円筒下層b式と思われる土器片（537・538）も出土する。中葉期の土器に体部を網目状摺糸文や木目状摺糸文で施文するのは北の影響であろう。一方で前期中葉から後葉期になると関東諸磯系の土器が出現する。539は諸磯b式の緑孔土器であるが、そのほかにも影響を受けたと思われる内湾する浅鉢が多く存在する。（24・62など）沢田2遺跡が古くから遠方との関わりを見せ、中葉期において北と南の交流がもっとも盛んになったと思われ、そこに「ムラ」の発生と人口増加を仮定する。

地理的背景からみると三方を高い山で囲まれ、隔離されている感じを持つ。しかし、東に海がある。縄文時代の沢田2遺跡を支えていたのは豊富な海の資源と川の恵みであったに違いない。魚骨などの遺物は出土していないが、遠方との交流が盛んだったことをみれば、当然のことのように思える。

沢田2遺跡は、縄文時代早期から前期全般の生活を解明する充分な資料を提示しているが、沢田1遺跡を含めれば、それは中期から後期もしくは弥生さらに近世へと続く資料となる可能性を秘めている。

2 近世の遺構と遺物

(1) 鍛冶場跡 第81図 写真図版34

VA-3~6・f~iグリット内から鍛冶の作業場跡と思われる焼土が5カ所、鍛造剥片や炭を含む炭化物の固まりが5カ所検出された。正確な規模は調査区外まで遺構が伸びており把握できないが、検出面であれば東西に7m・南北に11mの範囲内にある。また、1~3号焼土と3~6号炭化物の並びは、峠道に対して直角方向（北東の方向）を向いている。

その他、焼土下や炭化物の下から鍛造炉跡と思われる土坑を4基検出している。鍛造施設に関連したと思われる柱穴も多数検出しているが、位置関係は確認できていない。

出土遺物は2号焼土から羽口片（31・32）、鉄滓（19等）及び釘等の鉄製品（1~5・11）、3号焼土から鉄滓（20）及び鉄製品（13）、2号炭化物の北側柱穴PP120から羽口片（33）及び鉄滓が数点出土している。羽口片には鉄が熔着しているものもある。炉跡は検出していないが、たたら製鉄が行われていた可能性もある。周辺覆土からは釘などの鉄製品（7~10）や、江戸末期のものと思われる陶磁器片が数点（51・52等）出土している。また、6号炭化物跡下位のRD58土坑南側10mからは、鹿の角が出土しているが時期は特定できていない。

各土坑の規模及び形態は下表の通りである。

近世焼土・炭化物下土坑（RD）一覧

単位：cm

N	径	深	形 態	埋 土	備 考
57	110×94	72	不整な円形	大型の礫を多量に含む。	6号炭化物の下
58	82×68	60	角丸の方形	大型の礫を多量に含む。	6号炭化物の下
59	128×92	70	不整な楕円形	3層に分かれる。	1号焼跡土下。1層目に鉄滓IV灰を含む。
60	118×98	56	角丸の長方形	大型の礫を多量に含む。	5号焼土の下

*深さは地山面を基準としている。

(2) 土坑群 第82図 写真図版35・36

VA-9~10・e~gグリット内から、9基の土坑を検出している。規模・平面形については次表に示す。39号土坑以外の埋土は黒色シルトを下層に含み、前述の鍛冶場跡と同時期に造られた土坑と思われる。

32号土坑からは鑄の羽口片（279・280）や炉破片（278）、鉄滓（1000等）がまとまって出土した。また、RD36からも鉄滓（25~28）や鉄製品（6）が出土している。この二つの土坑は鍛冶に関係したものと考えられるが、それ以外の土坑についてその性質は不明である。

周辺の覆土からは江戸時代末の頃のと思われる陶磁器片が数点（P-12・13等）出土している。

(3) 遺物 第84図 写真図版69・70・71

上記以外の区域からも、近世の陶磁器や鉄製品、鉄滓等の遺物が出土している。

①陶磁器

近世土坑群より北側のVA-3~8・d区域のII層から、近世の陶磁器片が数点（P-4~11等）出土している。

②鉄製品、鉄滓及びその他

遺構以外では、やはりVA-3~8・d区域から釘などの鉄製品や鉄滓が出土している。

この区域からは近世の遺構は検出されていないが、出土品の数から言うと同様の遺構より多く、施設や住居があったことが予想される。

Ⅲグリット地区からも陶磁器片や鉄製品（7等）、鉄滓、古銭（37）といったものが出土しているがⅣ・Ⅴグリット地区に比べるとその数は少ない。

（4）小結

郷土史に、江戸時代の終わり頃から明治の初期にかけて鍛冶屋が栄えたことが載っていたが、そのことを裏付けるように焼土・炭化物が検出された。この時期は、大島高任が鴨住居川上流の橋野地区に洋式高炉を建設した頃と重複する。出土した羽I片に鉄が附着しており、流動滓らしきものも出土していることから、たたら製鉄が行われていた可能性はあるが、鍛冶の鋼材がこの洋式高炉で精錬したものなのか、古来の製鉄法によるものなのかは今後調べてみるつもりである。

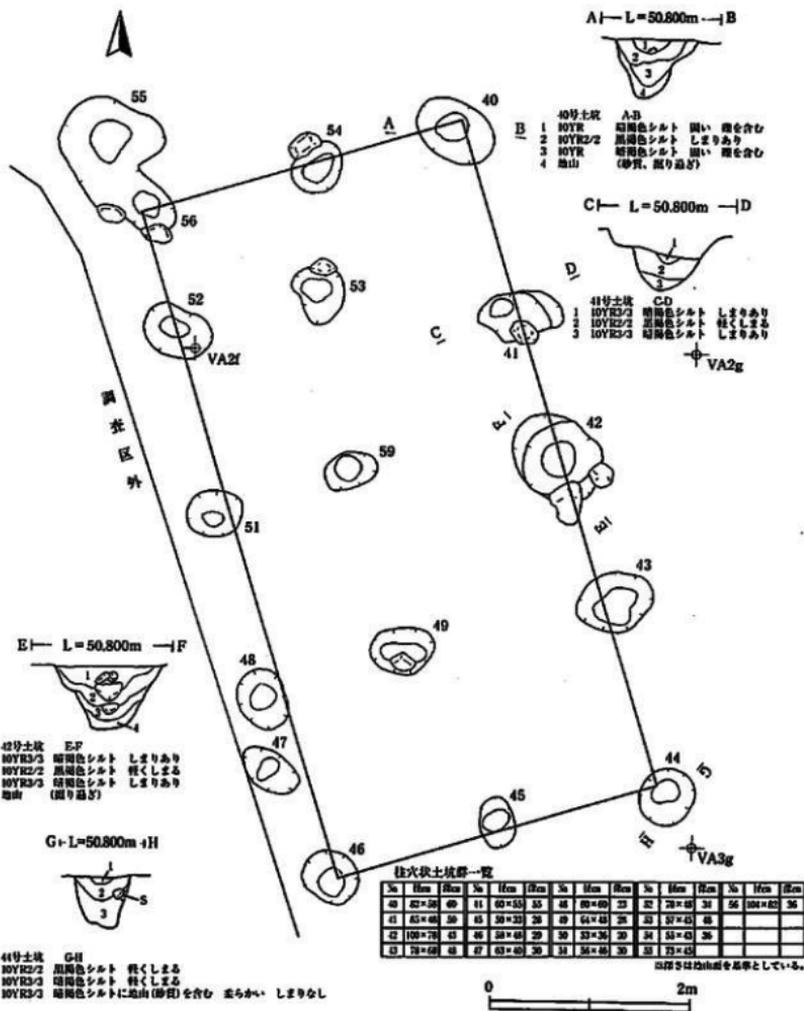
また、三浦命助氏の一揆があったのも同じ頃にあたり、この地区の調査は岩手県近世の産業経済・生活等の詳細を知る上で欠かせないと考える。

3 時代不明の柱穴状土坑群 第83図 写真図版36

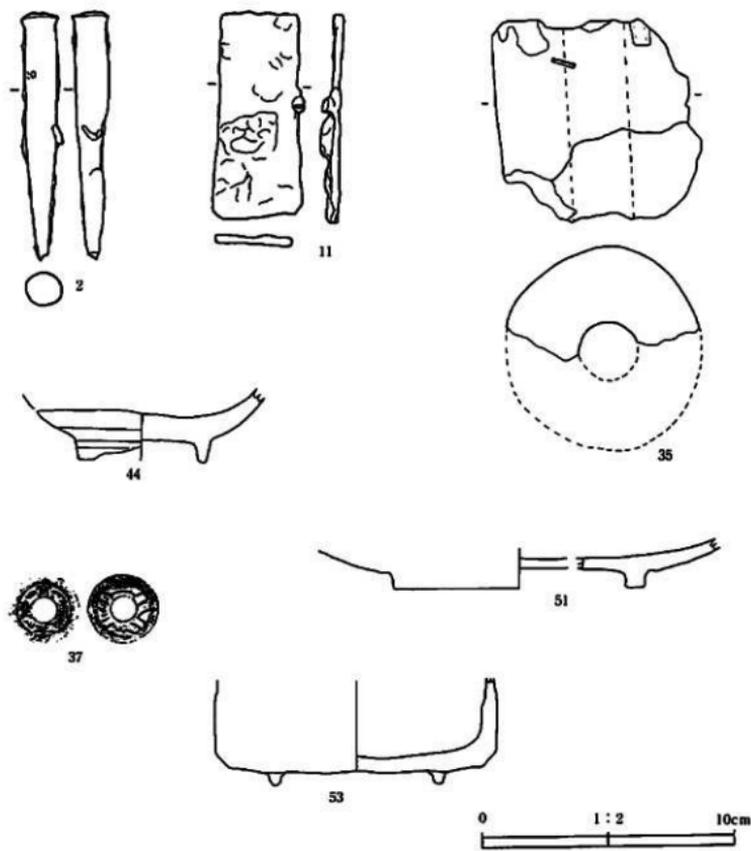
ⅤA-1～3・Ⅰグリットから柱穴状土坑群を検出している。調査区外（県道側）まで広がる可能性があり正確な広さは不明であるが、検出面の規模は南北に8m、東西に6.5mの範囲内にある。東西・南北にある土坑の列はほぼ直線上に位置し、中間の土坑はやや不規則に並んでいる。また、それぞれの間隔は1.5～1.8mほどで若干の開きがある。各土坑の規模・平面の形態については図表に示す。

埋土の状態は、いずれも黒褐色シルトもしくは表土に似た暗褐色シルトを下層に含み、自然堆積と思われる層状を呈している。土坑内からは鉄滓等遺物は出土していないが、周囲の覆土からは鉄滓と江戸末期のものと思われる陶磁器片（55）が出土している。

若干不規則に並んでいるが、一区画にほぼ同じ大きさのものが検出されており、建物に伴う柱穴の可能性が高い。軸線や間隔が不規則なのは、何度か建て替えがあったものと考えられる。また、前述の焼土・炭化物と東西の並びが一致するが、鍛冶場と関連したものか不明である。



第83図 時代不明の掘立て柱礎物跡



第94図 近世の出土遺物

表5 近世の鉄製品その他観察表

番号	仮番	器種	出土地点	層位	備考	番号	仮番	器種	出土地点	層位	備考
1	O2	釘?	2号近世焼土	埋土		21	O21	鉄滓	32号土坑	埋土	
2	O3	釘?	2号近世焼土	埋土		22	O22	鉄滓	32号土坑	埋土	
3	O4	釘?	2号近世焼土	埋土		23	O23	鉄滓	32号土坑	埋土	
4	O5	釘?	2号近世焼土	埋土		24	O24	鉄滓	32号土坑	埋土	
5	O6	釘?	2号近世焼土	埋土		25	O25	鉄滓	32号土坑	埋土	
6	O32	釘?	36号土坑	埋土		26	O26	鉄滓	32号土坑	埋土	
7	O20	釘?	ⅢA2b	I層		27	O27	鉄滓	32号土坑	埋土	
8	O11	釘?	ⅢA7b	II層		28	O28	鉄滓	32号土坑	埋土	
9	O13	釘?	ⅢA7b	II層		29	O33	鉄滓	36号土坑	埋土	
10	O14	釘?	V A1f	II層		30	O34	鉄滓	36号土坑	埋土	
11	O1	板状鉄	2号近世焼土	埋土		31	O35	羽口片	2号近世焼土	埋土	
12	O12	板状鉄	ⅢA7b	II層		32	O36	羽口片	2号近世焼土	埋土	
13	O38	小刀	2号近世焼土	埋土		33	O30	棒状鉄	32号土坑	埋土	
14	O31	板状鉄	32号土坑	埋土		34	O46	羽口片	6号近世焼土	埋土	
15	O16	鉄滓	V A1f	II層		35	O42	羽口片	6号近世焼土	埋土	
16	O17	鉄滓	V A5e・f	II層		36	O43	羽口片	3号近世焼土	埋土	
17	O18	鉄滓	V A5e・f	II層		37	O40	古銭	3号近世焼土	埋土	寛永通寶
18	O19	鉄滓	V A5e・f	II層		38	N6	泥のんこ	ⅣA4d	II層	
19	O39	鉄滓	2号近世焼土	埋土		39	H26	磁石	ⅣA7c	II層下	砂岩(北上山地)
20	O41	鉄滓	3号近世焼土	埋土		40	Z1	鉄滓	57号土坑	埋土	

表5 近世の陶磁器観察表

番号	写番	種別	出土地点	層位	器種	製作地	製作年代	文様等
41	256	陶器	ⅣA 8 f	II層	鉢皿	瀬戸	15c	
42	259	磁器	V A 1 g	II層	碗	中国	15c後半	青磁 縁起蓮弁文付
43	248	磁器	ⅢA 4 d	II層	碗	肥前	18c	染付
44	257	磁器	ⅣA 3 d	I層	碗	肥前	18c	染付 コンニャク印
45	254	磁器	ⅣA 5	II層	碗	肥前	18c	染付
46	249	陶器	ⅣA 6 d	II層	小杯		18c	
47	250	陶器	ⅣA 6 d	II層	小杯		18c	
48	261	陶器	ⅣA 6 d	II層	小杯		18c	
49	253	陶器	ⅣA 6 d	II層	鉢		18c	
50	247	陶器	ⅣA 7 c	II層下	皿		18c	
51	252	陶器	ⅣA 9 d	II層	皿	唐津	18c	
52	255	陶器	ⅣA 9 d	II層	皿	瀬戸	18c	刷縁胎 見込刺ぎ
53	251	陶器	V A 3 g	3層下	香炉	唐津	18c	
54	263	磁器	V A 6 e	II層	香炉	有田	18c	青磁
55	262	陶器	ⅣA 5 f	II層	碗		江戸～明治	

V まとめと考察

縄文時代の遺構についてはⅣ1(6)、近世の遺構と遺物についてはⅣ2の小結をもってまとめたい。ここでは縄文時代の遺物についてⅣ1(5・6)の修正を含めて考察したい。

2度の発掘調査で得た縄文時代の遺物は大きなコンテナで35箱に及ぶ。しかし掲載は合わせて800点でしかない。遺跡を知る上で充分とは言えないが、限られたページ数と時間の中で、多くの資料を提示することが沢田2遺跡の調査担当者の責務と考え、可能な限り掲載するように努めた。よって本文中で誤った記述や説明不十分な箇所があったと思われる。

① 縄文土器

I群：早期の土器である。沈線文土器から表裏縄文まで出土するが、I群1類のいわゆる水戸式土器(265～268)は大新町遺跡出土に似る。また爪形刺突の269はやや下る白浜式となろうか。2類は物見台式だが、281は東北北部の吹切沢式またはムシリI式の特色を持つ。4類表裏縄文土器のうち裏に条痕文のある192は赤山上層式もしくは御赤空式に類するもの、また縦線のないRA20出土土器は薄く焼きが固いなどの特色から御赤空式に近い時期を与えられる。他の縦線を多く含む表裏縄文土器は早稲田5類に比定される。

Ⅱ群：上川名Ⅱ式土器である。ウについて補足するが、これら土器の胎土の特色から遺構内のRA20出土の155や上記の300が蹠手状圧痕状となる可能性を指摘できる。当群は東南北半で見ると宮城県厚田遺跡第Ⅱ群土器(1986：村田)に類似する。この土器を、相原淳一氏は「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器総年」(1990：相原)の論考の中で東北北半の長七谷地Ⅲ群と併行とした。一方、宮古市千鳥遺跡では出土土器が北の影響を持つ岩手色の強い土器として千鳥Ⅰ式を設定し、長七谷地Ⅲ群や上川名Ⅱ式に併行するとしている。(1989：高橋)沢田2遺跡出土土器は千鳥Ⅰ式の要素を持つが、口縁部は東南北半の影響が強いように見え、花積下層式類似の岩手色強い上川名Ⅱ式土器群としておく。

Ⅲ群：大木1・2式土器である。1類Aは大木2a式、Bは1式として差し支えないであろう。Cのうち非結束を1式、結束羽状縄文を2a式とするが、菱形文様となるものは1式の名残であろうか。D・A・イは1式、ウは1・2a式もしくは前群の上川名Ⅱ式に属するものが混在する可能性がある。組紐回転文の施文される183や343は大木1式に比定できると考えられる。またRD10出土の200は縦線少量ながら大木2a式としてよいと思う。また竹管による刺突や沈線文などの土器は2a式となるのか。

2類のうち大木2b式に属すると考えられる土器は、縦線文や不整然系文が間隔をとって平行化するもの、指頭正直などが施文される隆帯を持つもの、S字状連環沈文となるものである。よってAでは349や354・355、Bでは361や361～371、Cのすべてとなる。

Ⅳ群：大木3式から5式に相当する。類ごとに考察する。1類は大木3式に比定できるが396はⅤ群となるのか。2類は竹管文の施文されるものを集めたが、407～411は大木6式か大木7a式(Ⅴ群)となり、409は五領ヶ台式球胴深鉢の可能性が高い。他は大木3式となるか。3類は436を除き3式から4式に比定できる。そのうち弱い液状沈線のもの(425など)や一本沈線状に筆書きする431～433は大木3式の施文に似る。4類Aは大木3式に見られる特色であるが、×状に沈線が描かれるもの(442)は6式に属する可能性がある。Bは扇筒状の粘土貼付となるもの(454)を除き4式に属するであろう。Cはいわゆる隆帯で便宜的にⅣ群に入れたが、隆帯を施す土器は大木2b～7式まであり、詳細は不明である。4類Dと5類は4～5式に属するが、ドーナツ状の突起やボタン状の貼付は5式か。6類はRA07出土に似ることから当類としたが、514はやや古いⅢ群に属する可能性を持つ。

V群：口唇部を肥庄するものや縦位の鋸歯状沈線になるものは6式に属するか。また、7a式と思われるのは遺構外525・535とIV群4類Dに入れた隆帯を施す土器に一部含むと考えている。

その他：389はⅢ群に入れている。特色はⅣ4（4）で触れたが、大木2b～4式に属する。旧群の559は、繊維を多く含むことや体部の施文方法は前期初頭から前業に見える。しかし内湾する浅鉢で、粘土紐貼付をふまれば前期中業になる。形式で言えば上川名Ⅱ式から大木4式に属することになる。どちらも4式と捉えればよいのかもしれないが、特に後者には前期初頭という時期型が与えられそうではない。これらの例から沢田2遺跡は北と南の文化を吸収しながらも独自性に富んだ遺跡という印象を強く受ける。

② 石器・石製品・土製品

沢田2遺跡出土の石器や石製品の特色をまとめる。○石鏃は基部の挟りが弱い凹基や平基のものが多い。○石匙では縦形が卓越し、両面剥離しているものが出土する。○石鏃と比較して石匙の出土数が多い。○礫石器は遺構内を除けば少なく、石皿など大型のものはない。○石製品には挾状耳飾りや石剣状の穴のあいたアクセサリーがある。これらの特色は陸前高田市牧田貝塚、盛岡市上八木田遺跡にも見え、縄文時代前期前業から中業頃の特徴であろうか。軽石製の石製品に付いては類例を探せなかったのだが、当時期に属すると言っていると思う。

終わりに

沢田2遺跡は岩手県であり調査例のない縄文時代早期から前期にかけての集落跡である。このような貴重な遺跡を調査させていただいたにもかかわらず、不十分な調査報告書を発刊せざるを得ないことを非常に心苦しく思う。しかし貴重な遺跡であり、今後の発掘調査や遺物研究に参考にしていただければ幸いである。

最後に、調査作業員及び室内整理作業員のみなさんに感謝するとともに、多くの便宜を図っていただいた釜石地方振興局・釜石市教育委員会には、厚く御礼申し上げます。

参考・引用文献

- 芹沢 長介 林 謙作 1963 『岩手県史王制編』 石器時代 №7
興野 義一 1967～1973 『大木式土器理解のためにI～VI』 考古学ジャーナル
大館町教育委員会 1973 『崎山弁天遺跡』 大館町教育委員会
岩槻文 1983 『小幡内1遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第52集
北上市教育委員会 1983 『岡ノ上遺跡』 北上市文化財調査報告書第33集
宮城県教育委員会 1985 『今熊野遺跡』 宮城県文化財調査報告書第104集
八戸市教育委員会 1987 『田面水平遺跡(1)』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第20集
青森県教育委員会 1988 『衣館遺跡Ⅲ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第120集
宮古市教育委員会 1989 『千鶴遺跡発掘調査報告書』 宮古市埋蔵文化財調査報告書第16集
相原 淳・1990 『東北地方における縄文時代早期後業から前期前業にかけての上層層の考察』 考古学雑誌76巻1号
山理文 1994 『松原遺跡』 山形県埋蔵文化財センター・第11集
岩槻文 1995 『上八木田1遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第227集
岩槻文 1996 『牧田貝塚発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第241集
岩槻文 1997 『沢田2遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第268集
岩槻文 2001 『清水ヶ野遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第351集
平凡社 1998 『古伊万里』 日本のこころ63 別冊太陽

写 真 图 版



東側上空から



真上から

写真図版1 航空写真



BVA区 調査前風景



包含層 I 調査前風景



IIIA区 発掘状況



IVA~VA区 調査中



IIA区 検出炭灰マ (昭和30年代)



IA区 層序



IA区 (平成11年A III区) 層序



VI区 層序

写真図版 2 基本土層 その他



平面 (南から)



西面 (N-S)



断面 (E-W)



P1断面

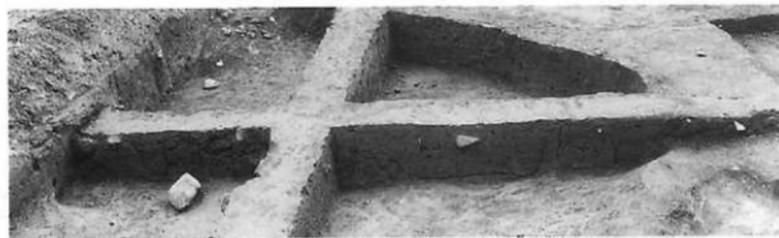
写真図版3 RA01



平面（北から）



断面（N-S）



断面（W-E）

写真図版4 RA02



平面 (南から)



断面 (S-N)



断面 (W-E)

写真図版 5 RA03



平面（北から）



断面（E-W）



断面（N-S）

写真図版6 RA04



RA05 平面 (南から)



RA05 断面 (E-W)



RA06 平面 (南西から)



RA06 断面 (N-S)

写真図版7 RA05・RA06



平面（西から）



断面（N-S）



1号伊跡 平面



断面

写真図版B RA07



RA07床面遺物出土



A



B



壁面出土



床面北出土

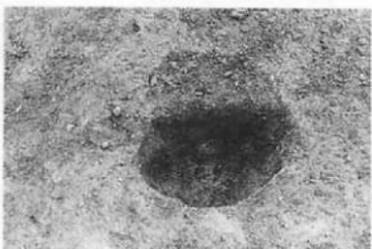
写真図版9 RA07遺物出土状況



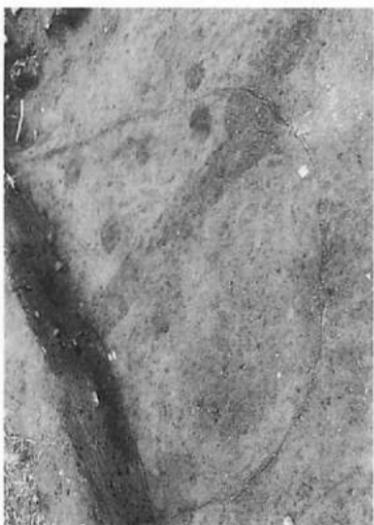
RA08平面 ←北西



断面 (E-W)



P1断面 (W→)



RA10平面 ←北西



断面 (E-W)



P1断面

写真図版10 RA08・RA10



平面 (南西から)



断面 (W-E)



炉跡平面



遺物出土状況



RA11 平面 ←北西



断面 (W-E)



P1断面



RA12 平面 ←北西

写真図版12 RA11・12



RA13 平面 (完張) ←北西



断面 (N-S)



PP10 断面



RA14平面 (北西から)

写真図版13 RA13 RA14



RA15 近隣の土坑と平面 西から



RA16 平面完備 ←北東



断面 (N-S)



焼土 断面



土器出土状況

写真図版14 RA15・16



RA17 平面 実測 (西から)



断面 (N-S)



RA18 平面 実測 (東から)



断面 (N-S)



RA19 平面 (北東から)



断面 ①



断面 ②

写真図版15 RA17・18・19



平面（北から）



断面（N-S）



伊勢平面



P10断面

写真図版16 RA20



平面（北から）



断面（S-N）

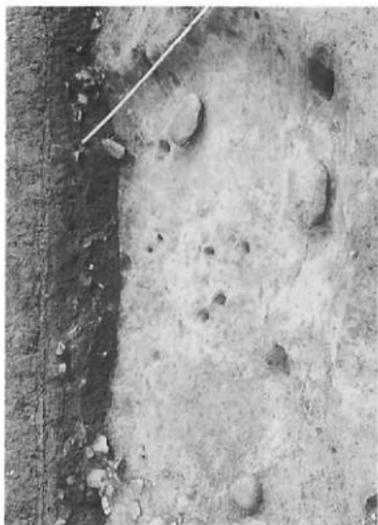


断面（E-W）



壁溝断面

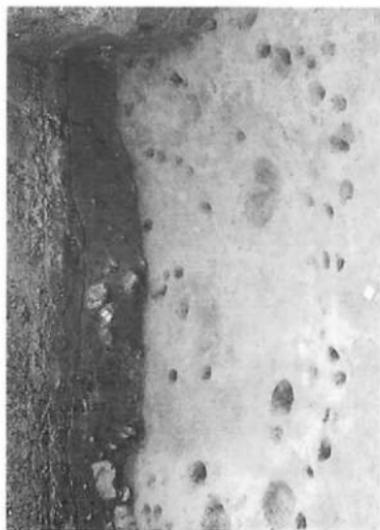
写真図版17 RA21



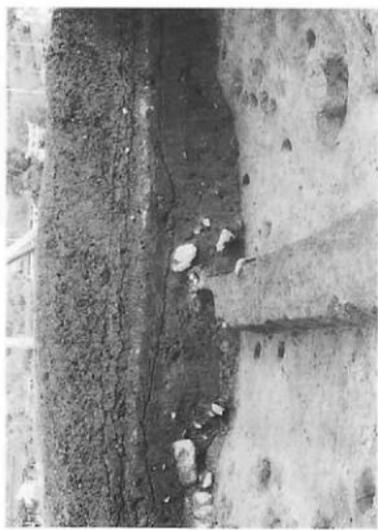
RA22 平面 ←西



断面 (W-E) ←南



RA24 平面 ←西



断面 (N-S) ←西

写真図版18 RA22・24



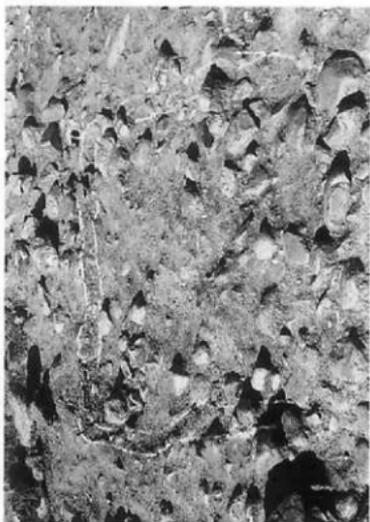
RA23 平面 (北から)



断面 (N-S)



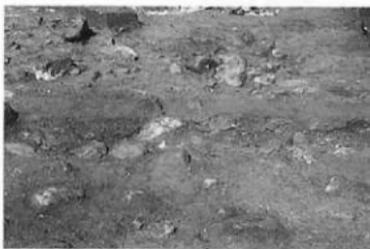
断面 (W-E)



RA25 平面 ←東



断面 (N-S)



断面 (左側の黒色土)



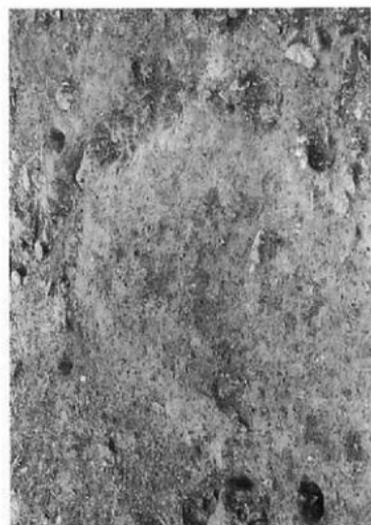
RA26 平面 ←西



断面 (N-S)



P1 断面



RA27 平面 ←南東



断面 (北西側の壁)



壁溝? 断面



RD01 平面



断面



RD02 平面



断面



RD04 平面



断面



RD06 平面

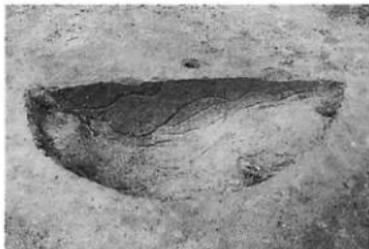


断面

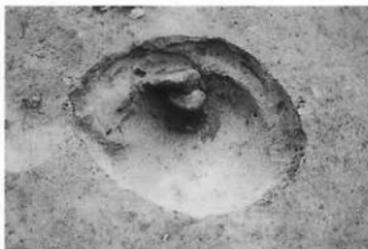
写真図版21 RD01・02・04・06



RD07 平面



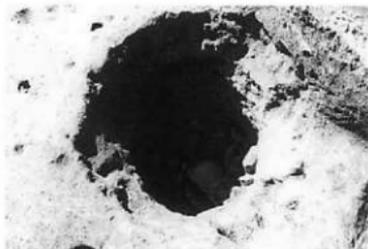
断面



RD08 平面



断面



RD10 完形



RD10 土器出土状況



断面

写真図版22 RD07・08・10



RD13 平面



断面



RD14 平面



断面



RD15 平面



断面



RD15・16 平面

写真図版23 RD13~16



RD17 平面



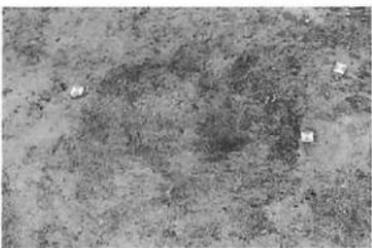
断面



RD18 平面



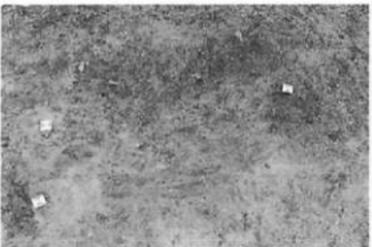
断面



RD19 平面



断面



RD20 平面



断面

写真図版24 RD17~20



RD21 平面



断面



RD22 平面



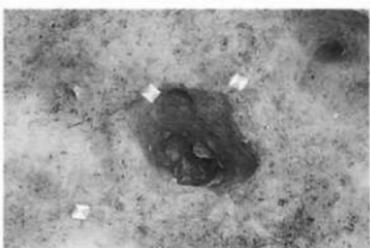
断面



RD23 平面



断面

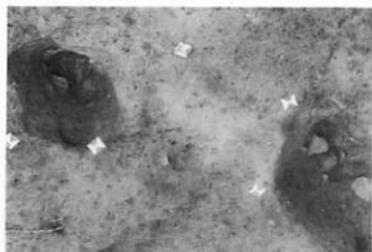


RD24 平面



断面

写真図版25 RD21~24



RD25 平面



断面



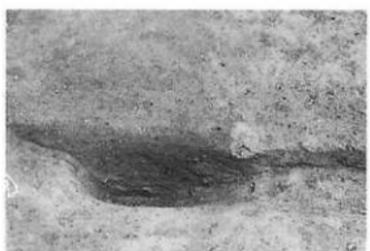
RD26 平面



断面



RD27 平面



断面

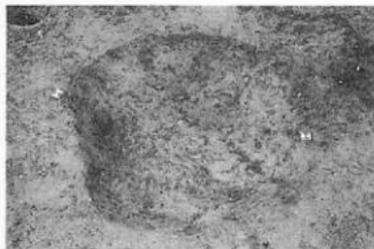


RD28 平面



断面

写真図版26 RD25~28



R D29 平面



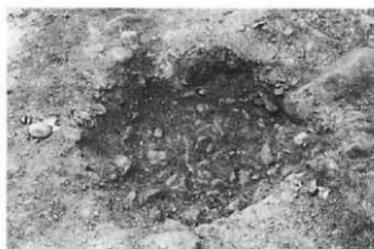
西面



R D30 平面



断面



R D31 平面



断面



R D32 平面



断面

写真图版27 R D29~32



RD33 平面



断面



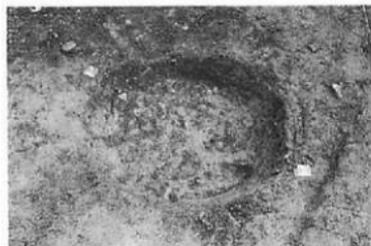
RD34 平面



断面



RD35 断面



RD36 平面

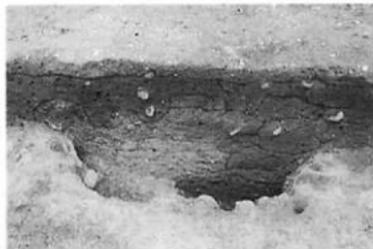


断面

写真図版28 RD33~36



RD38 平面



断面



RA09・RD38~39の断面



RD39 平面



RD40 平面



断面

写真図版29 RD38~40 (RD37はなし)



RD41 平面



断面



RD42 平面



断面



RD43 平面



断面



RD44 平面



断面

写真図版30 RD41~44



RD45 礎 検出1



RD45 礎 検出2



RD46 平面



断面



RD47~50 平面



RD47 断面



包含層1 完掘状況



断面 (W-S)



断面 (W-E)



土器出土状況



土器出土状況

写真図版32 遺物包含層1



包含層 2 完掘状況



断面 (W-Eの南)



断面 (W-Eの北)



土器出土状況



土器出土状況



近世の焼土（鍋沼）と炭化物



1号焼土



2号焼土と5号炭化物



5号焼土

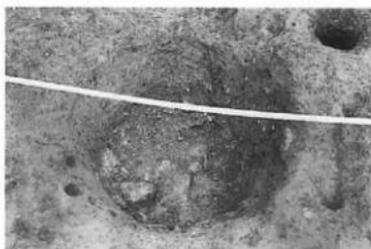


断面

写真図版34 近世の焼土



57-59号土坑



5号掘土下土坑



36号土坑



断面



37号土坑



断面

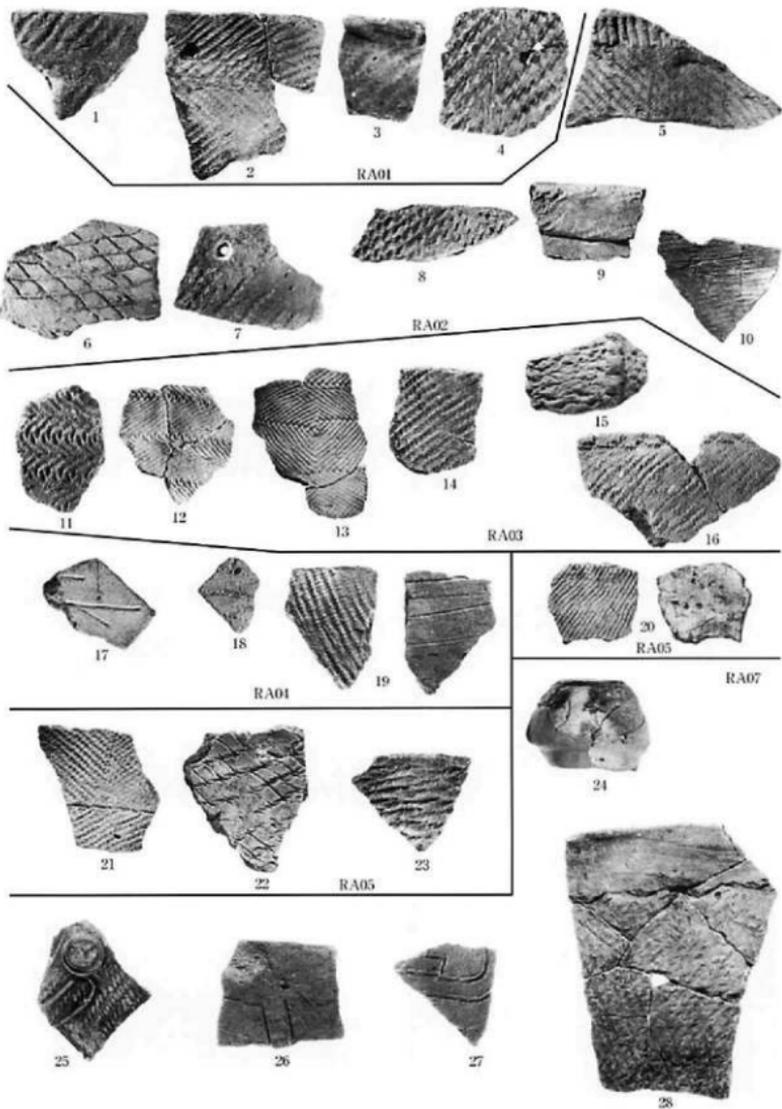


時代不明の掘立柱建物跡



40号土坑断面

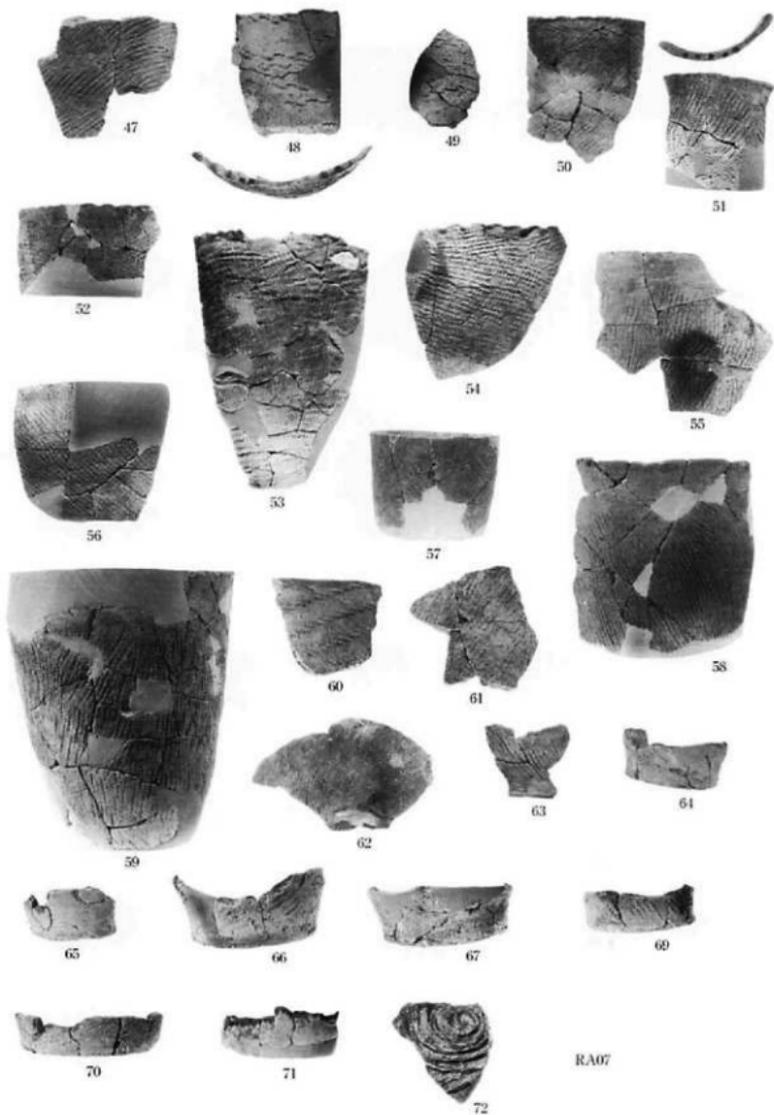
写真図版35 近世の土坑 掘立柱建物跡



写真図版36 出土遺物（縄文土器 1）



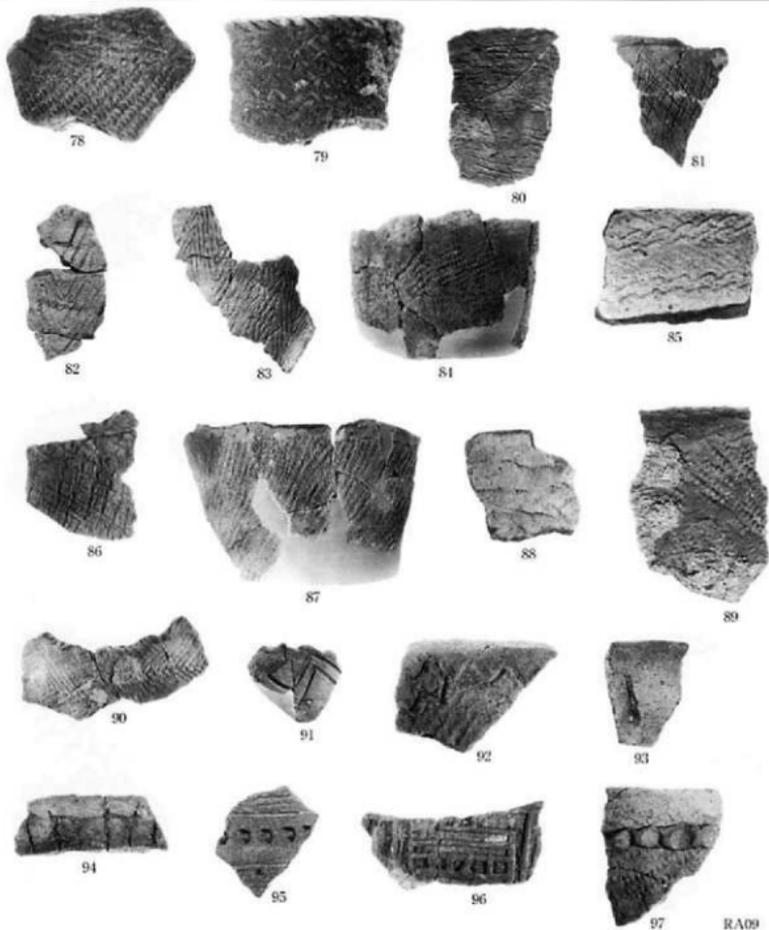
写真図版37 出土遺物（縄文土器 2）



写真図版38 出土遺物（縄文土器 3）

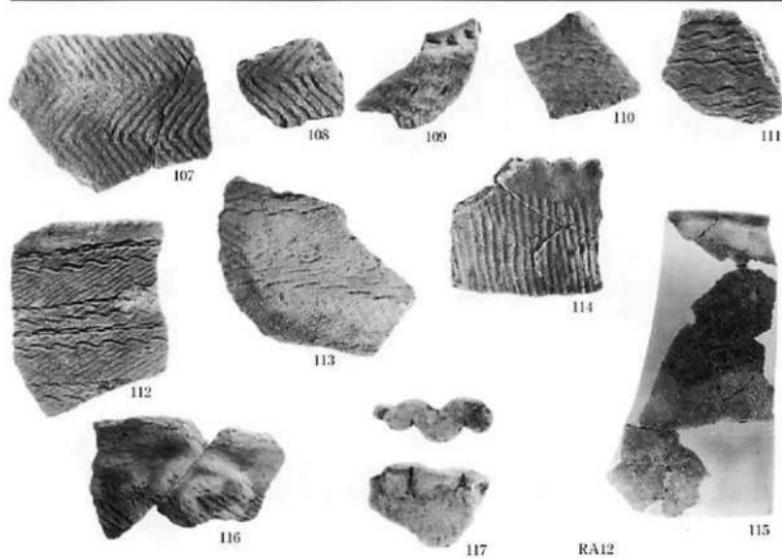
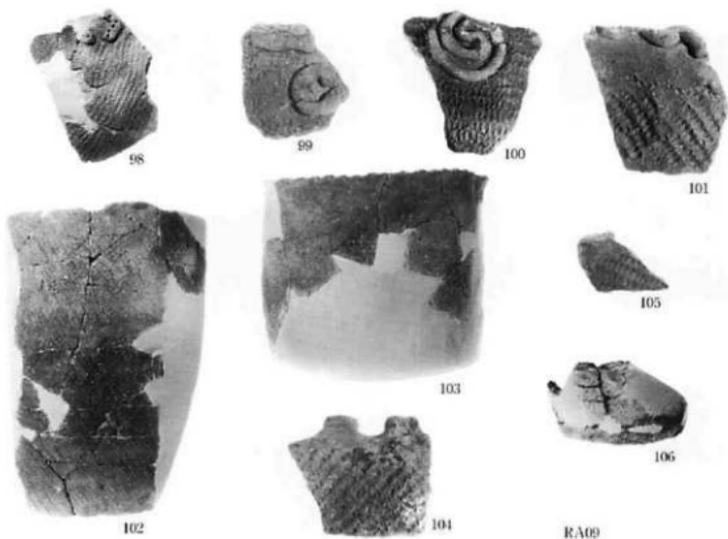


RA08

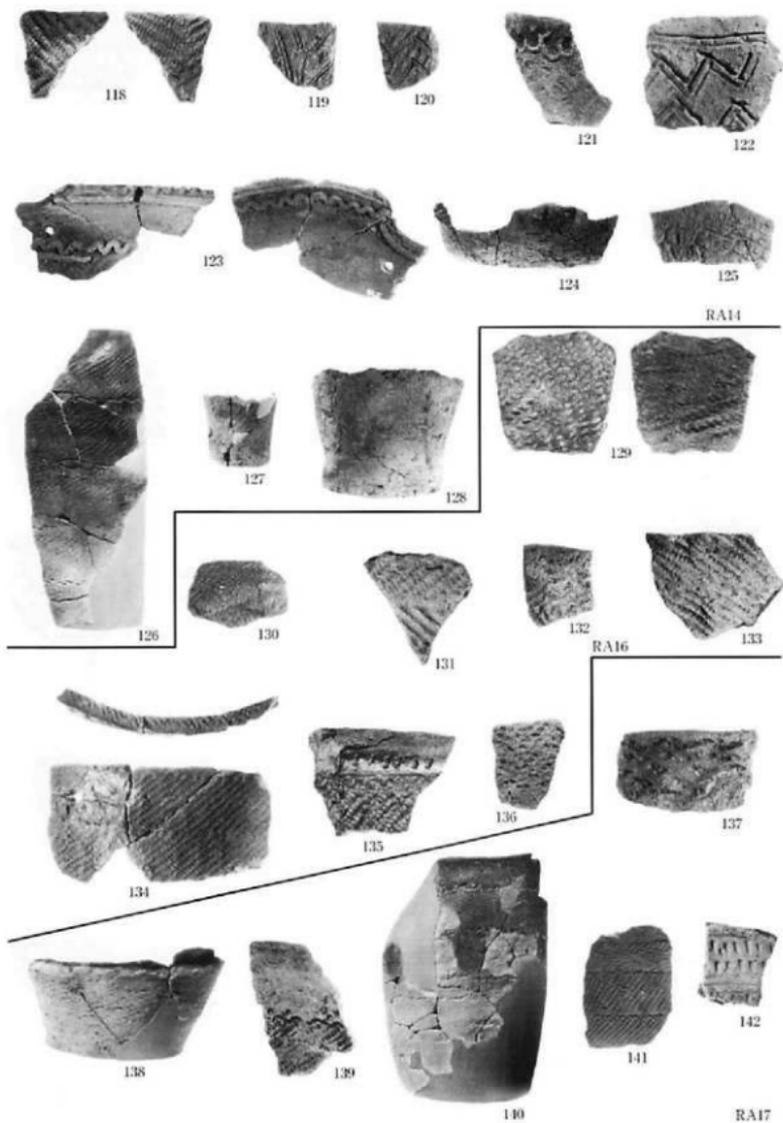


RA09

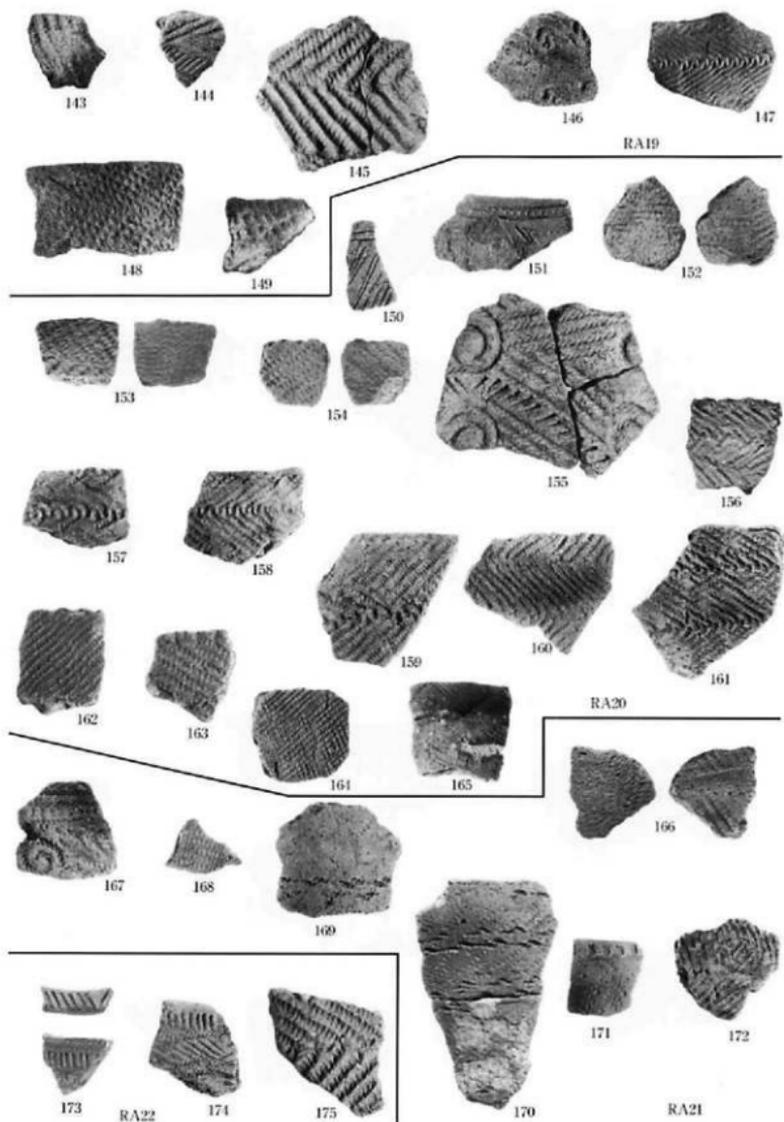
写真図版39 出土遺物（縄文土器 4）



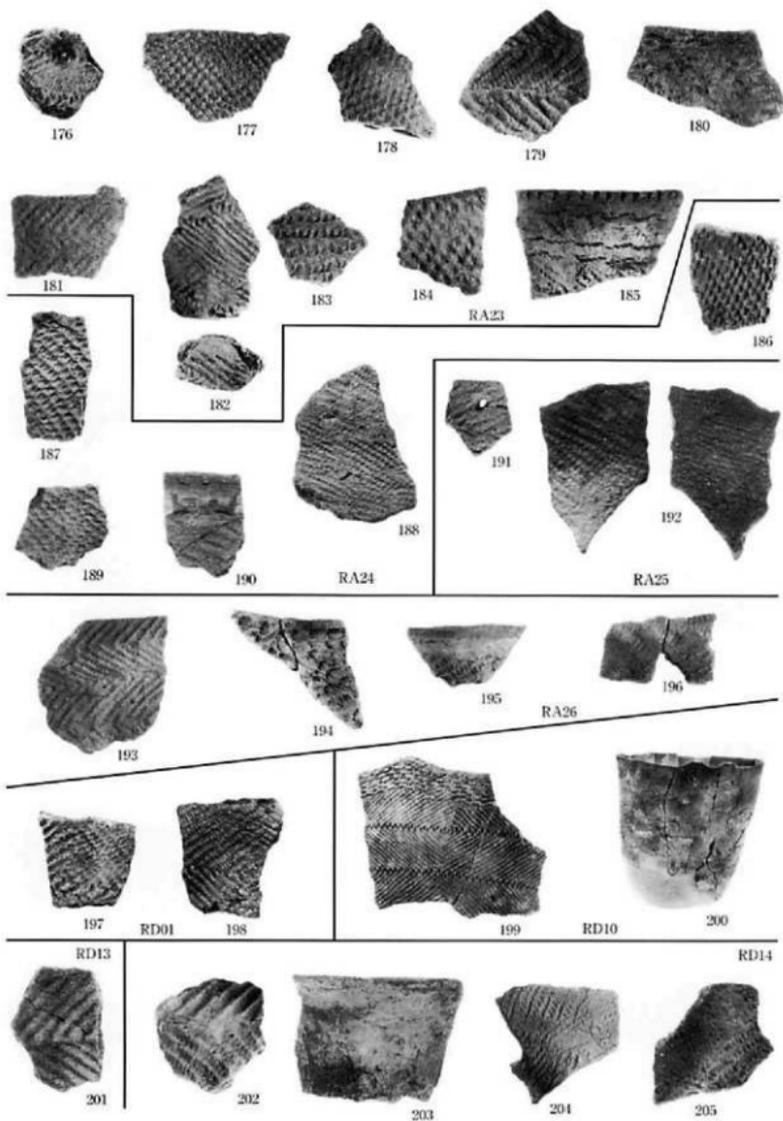
写真図版40 出土遺物（縄文土器 5）



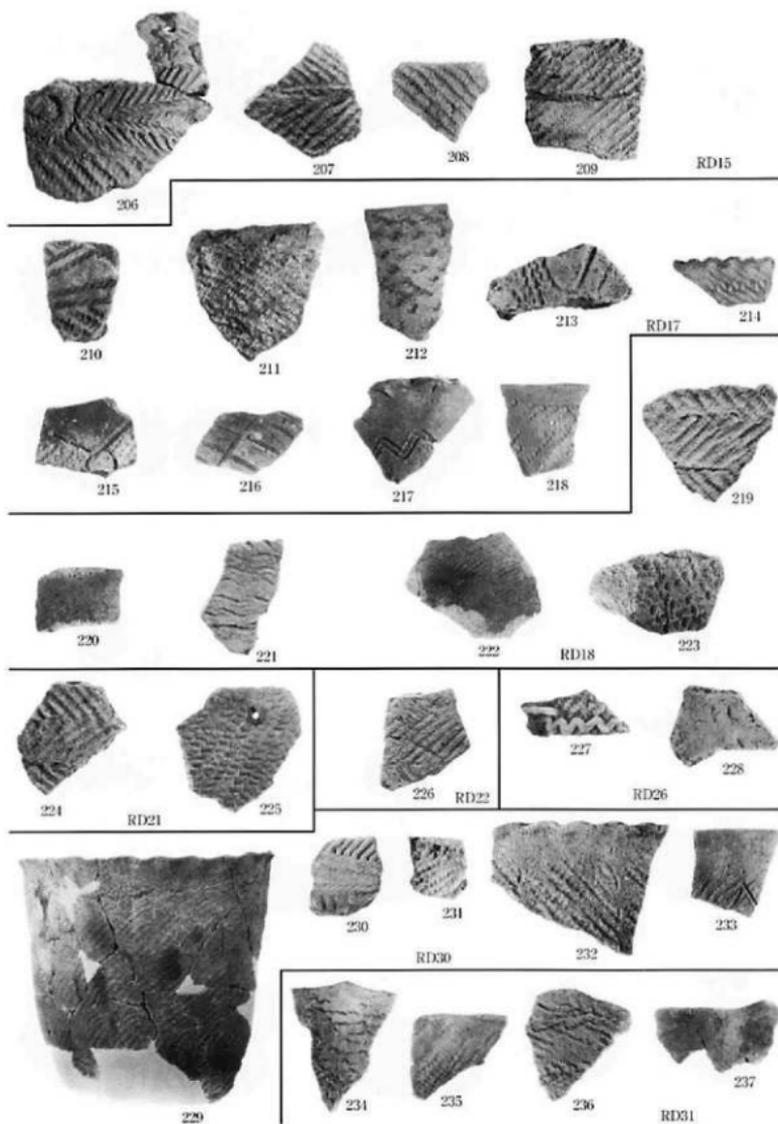
写真図版41 出土遺物（縄文土器 6）



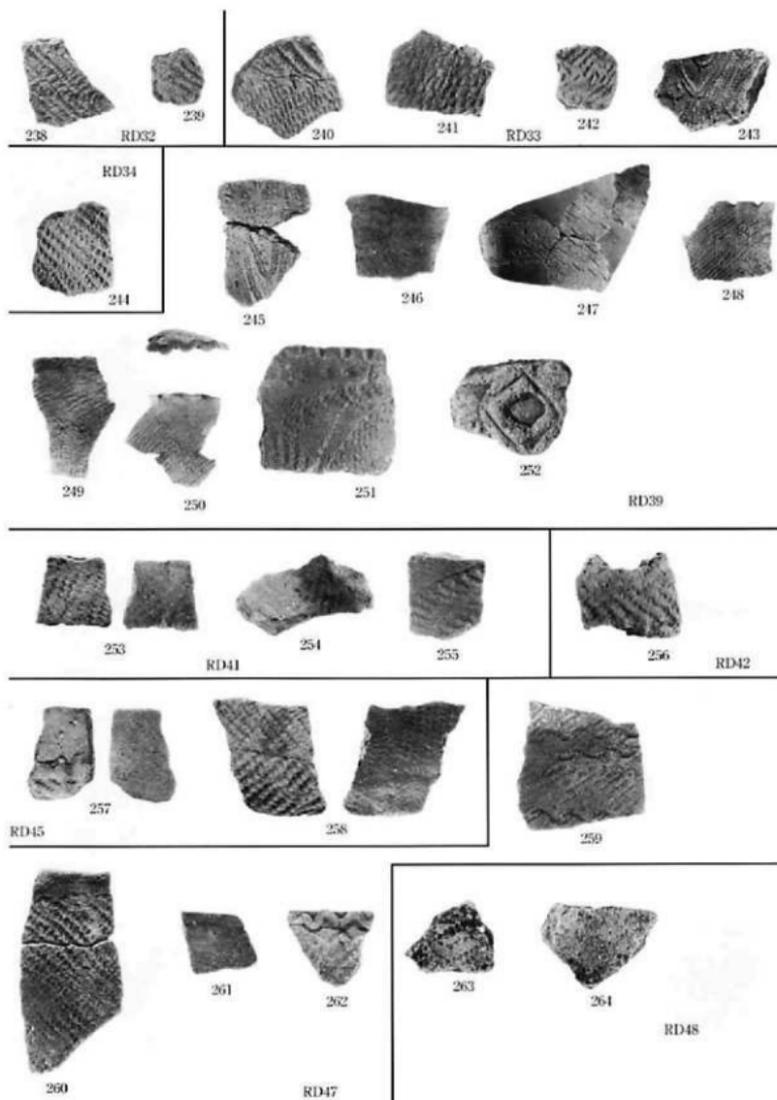
写真図版42 出土遺物（縄文土器 7）



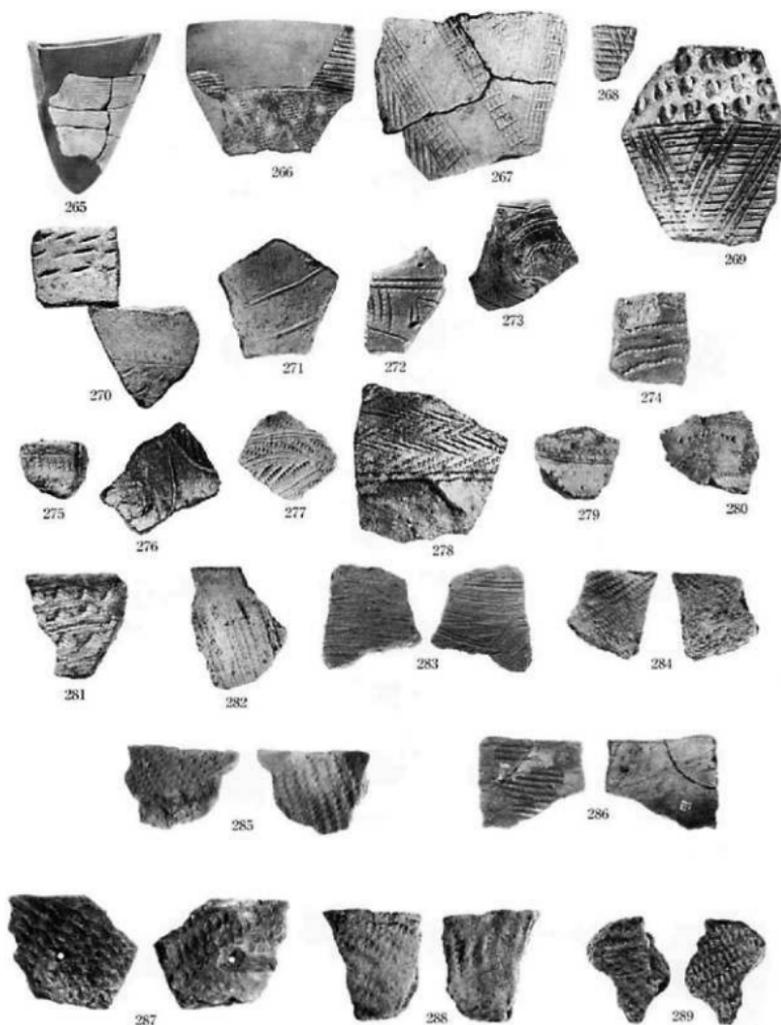
写真図版43 出土遺物（縄文土器 B）



写真図版44 出土遺物（縄文土器 9）



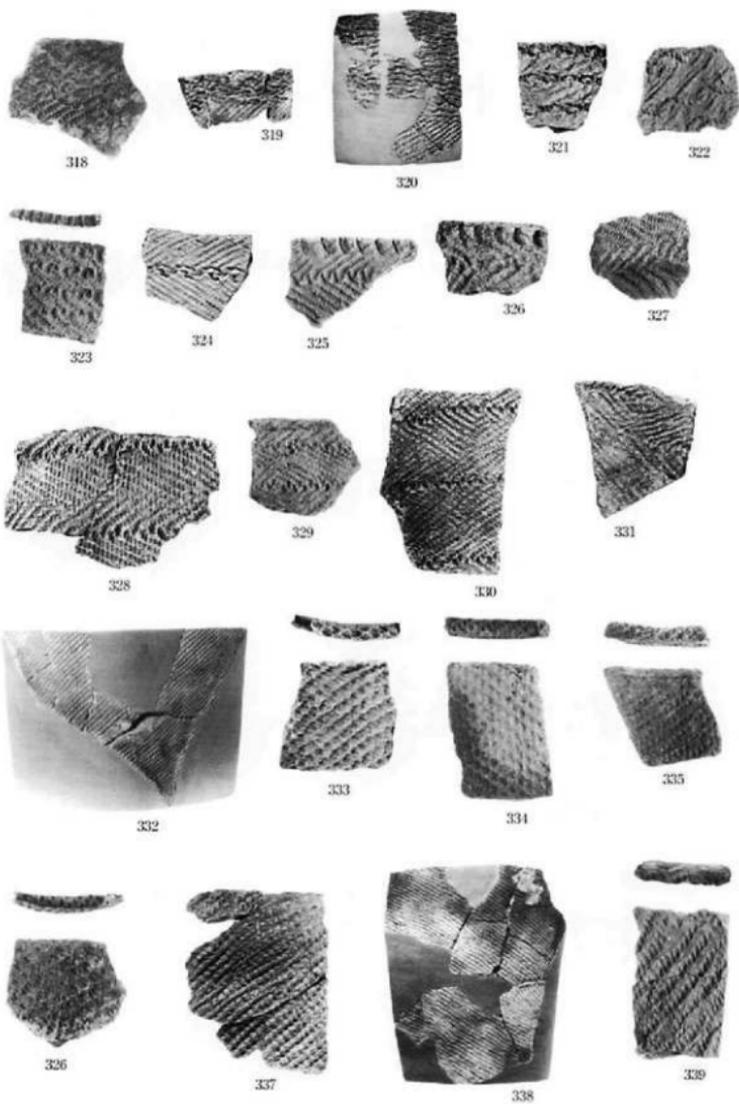
写真図版45 出土遺物（縄文土器 10）



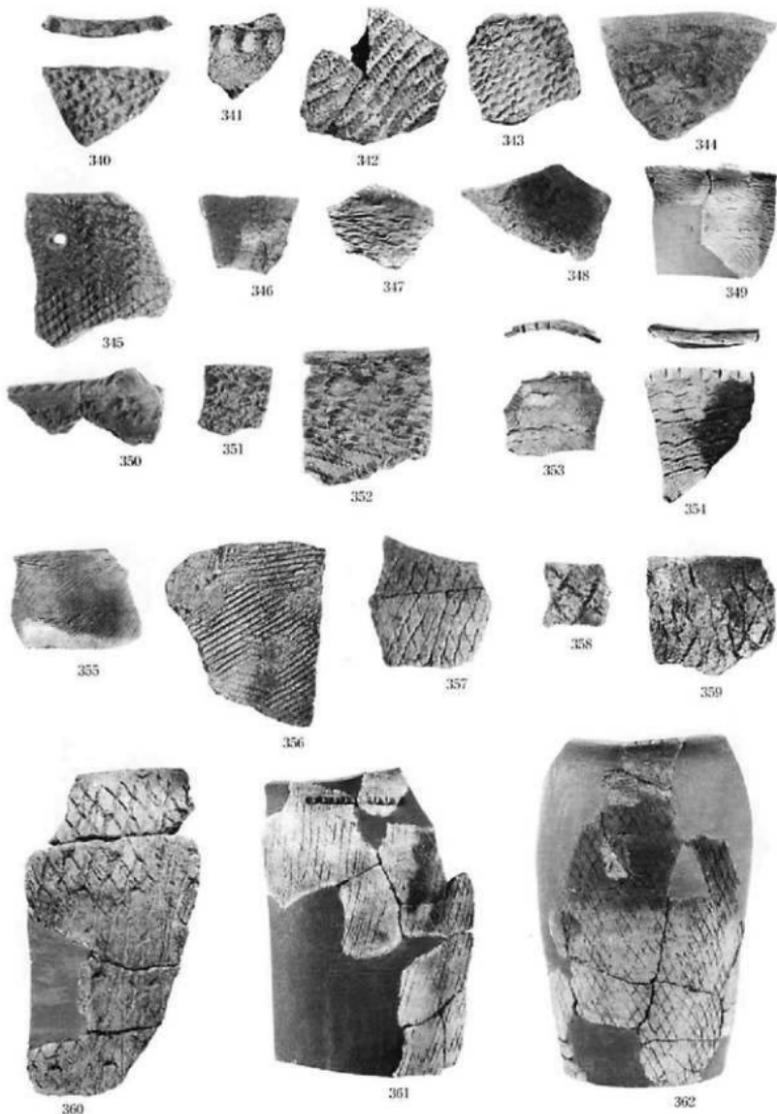
写真図版46 出土遺物（縄文土器 11）



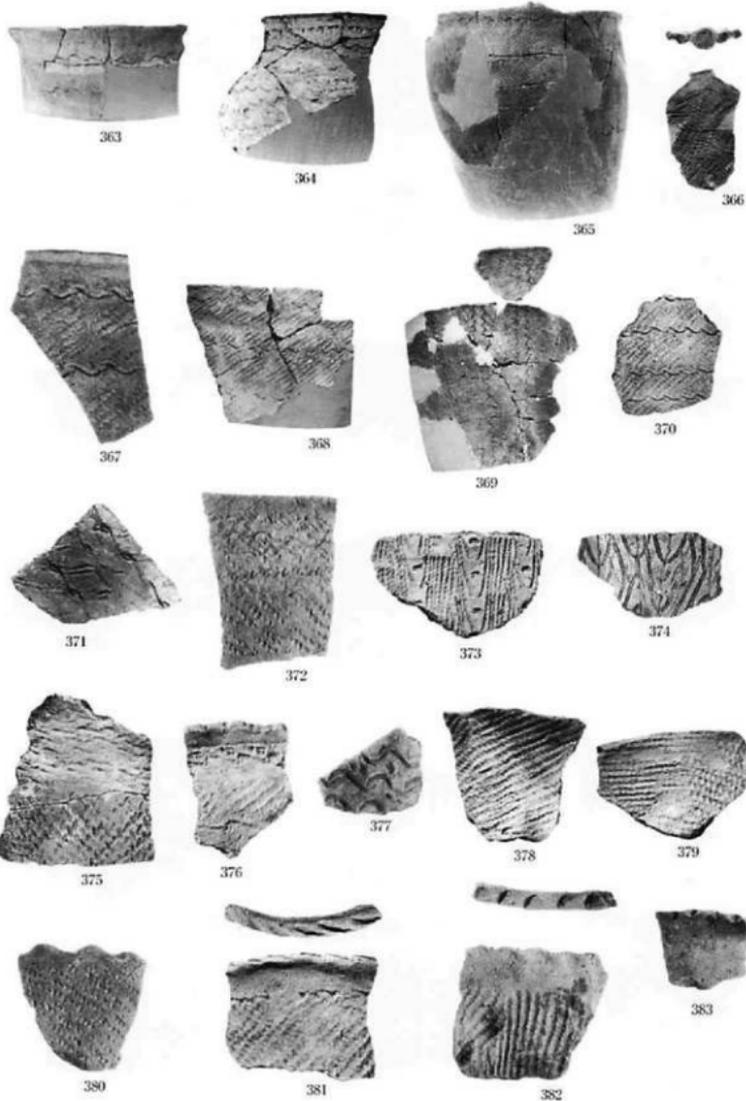
写真图版47 出土遺物 (縄文土器 12)



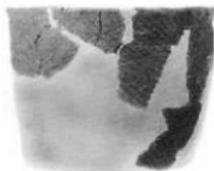
写真图版48 出土遺物（縄文土器 13）



写真図版49 出土遺物（縄文土器 14）



写真图版50 出土遺物（縄文土器 15）



381



385



386



387



388



389



390



391



392



393



394



395



396



397



398



399



400



401



402



403

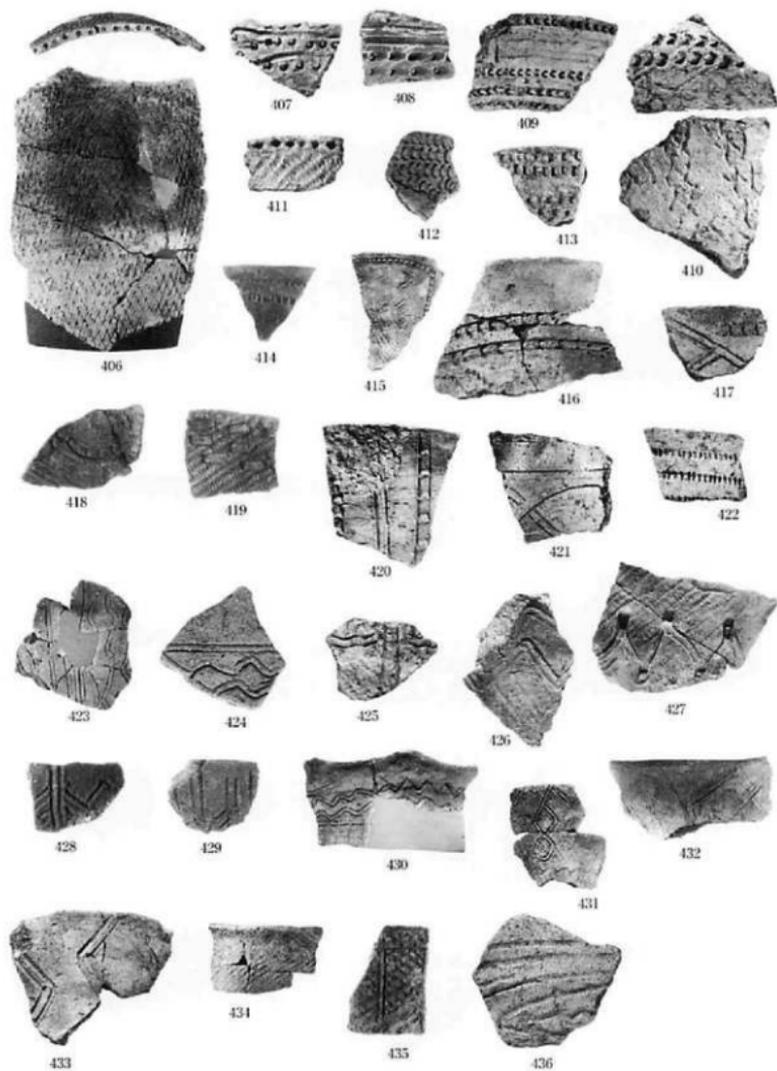


404

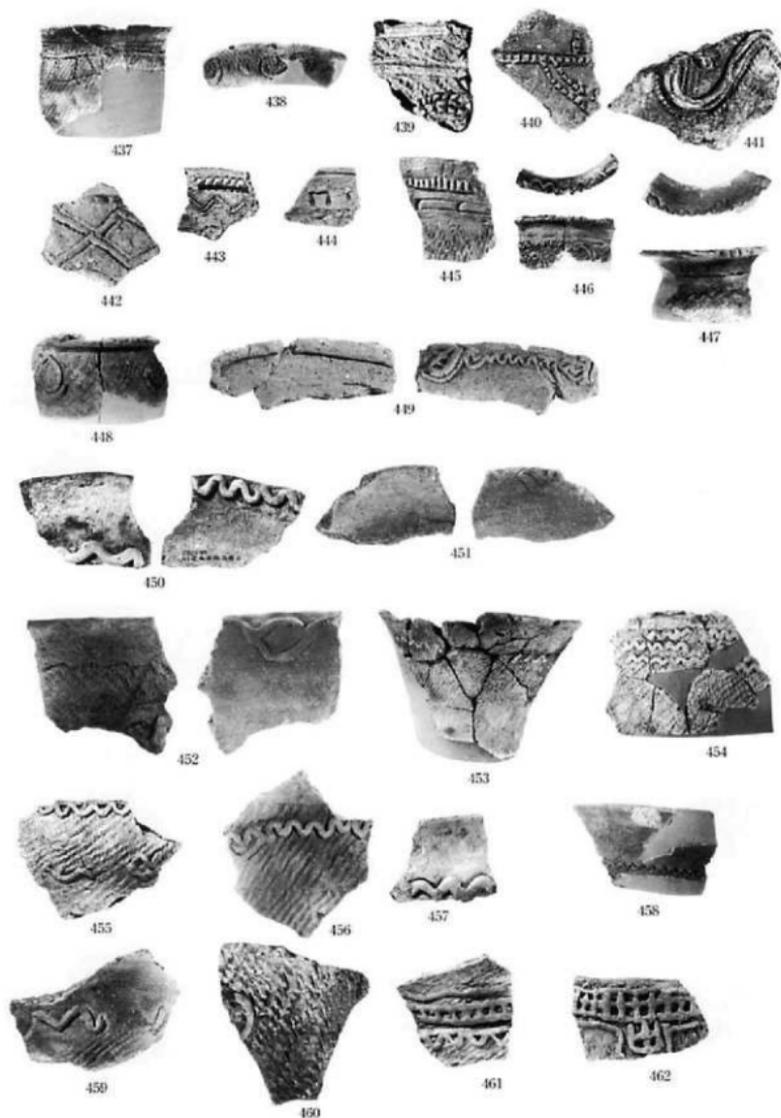


405

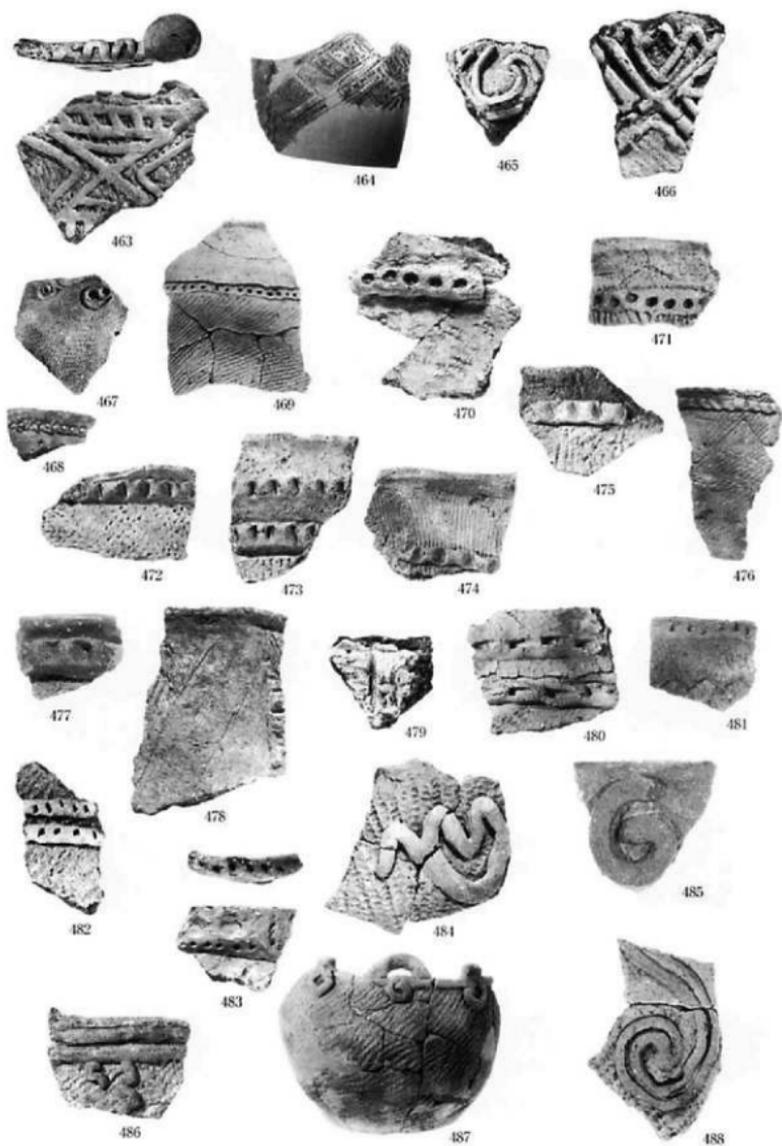
写真図版51 出土遺物 (縄文土器 16)



写真図版52 出土遺物（縄文土器 17）



写真図版53 出土遺物（縄文土器 18）



写真图版54 出土遗物（縄文土器 19）



写真图版55 出土遗物 (縄文土器 20)



513



514



515



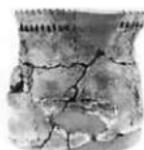
516



517



518



519



520



521



522



523



524



525



526



527



528



529



530



531



532



533



534



535



536

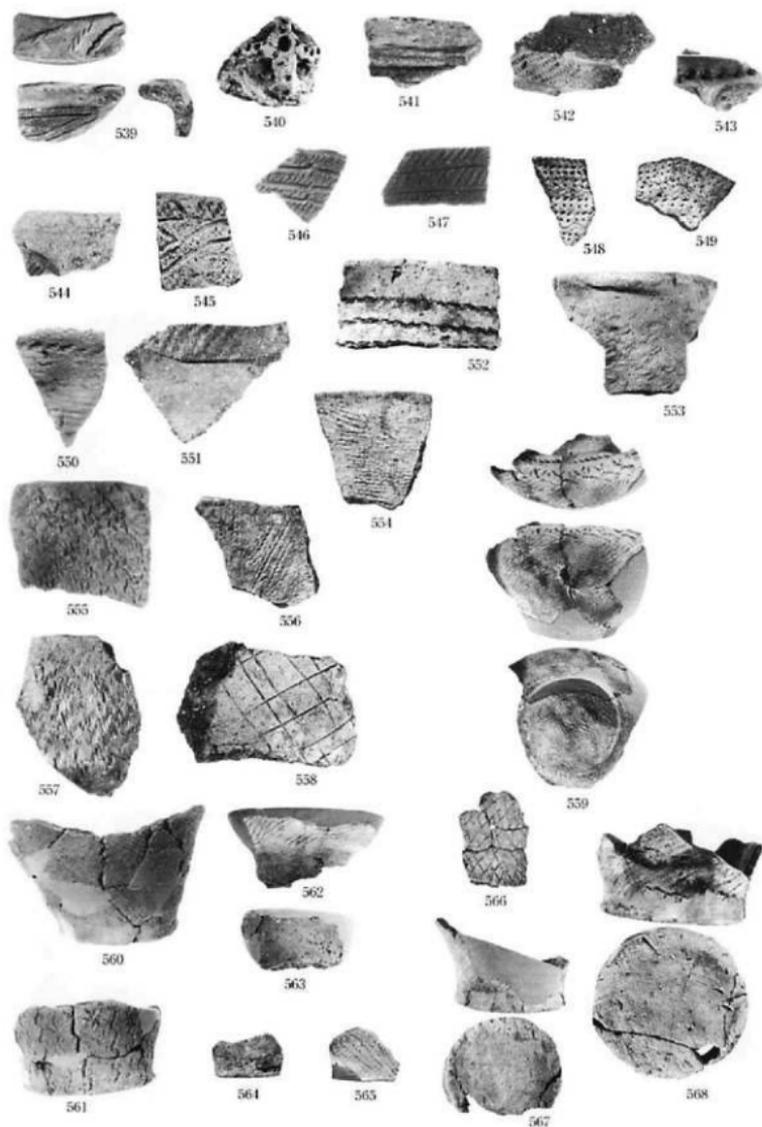


537

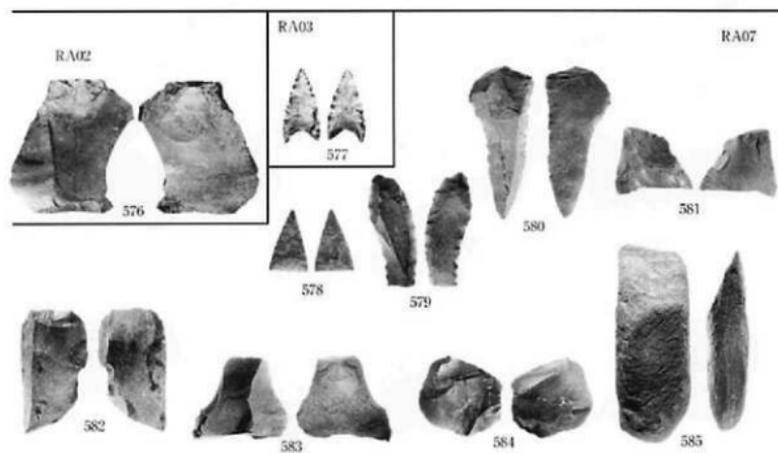
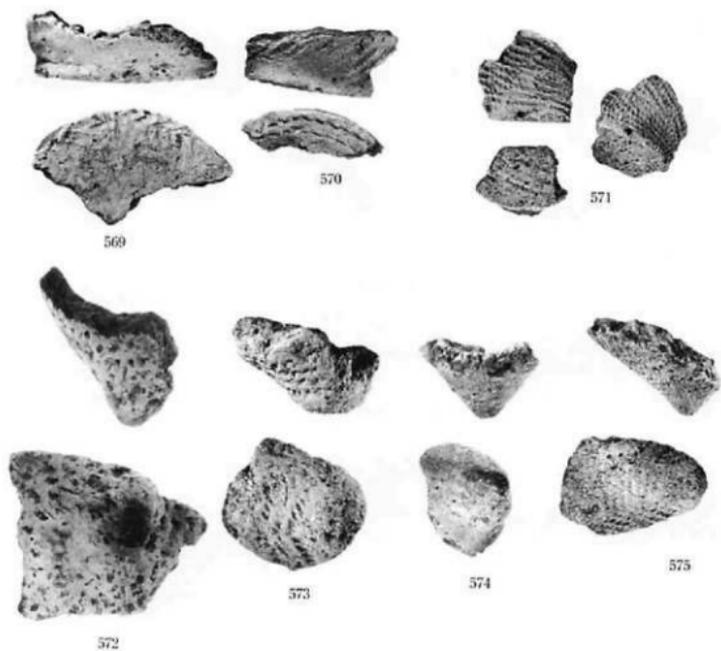


538

写真図版56 出土遺物（縄文土器 21）



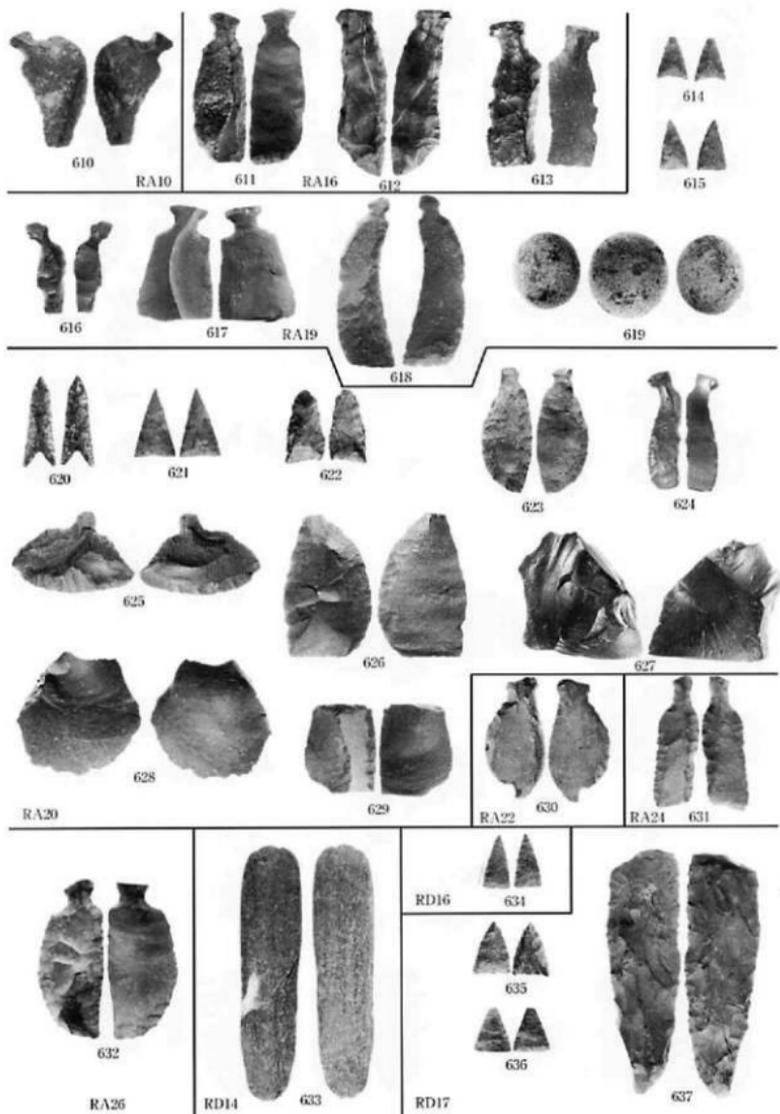
写真図版57 出土遺物 (縄文土器 22)



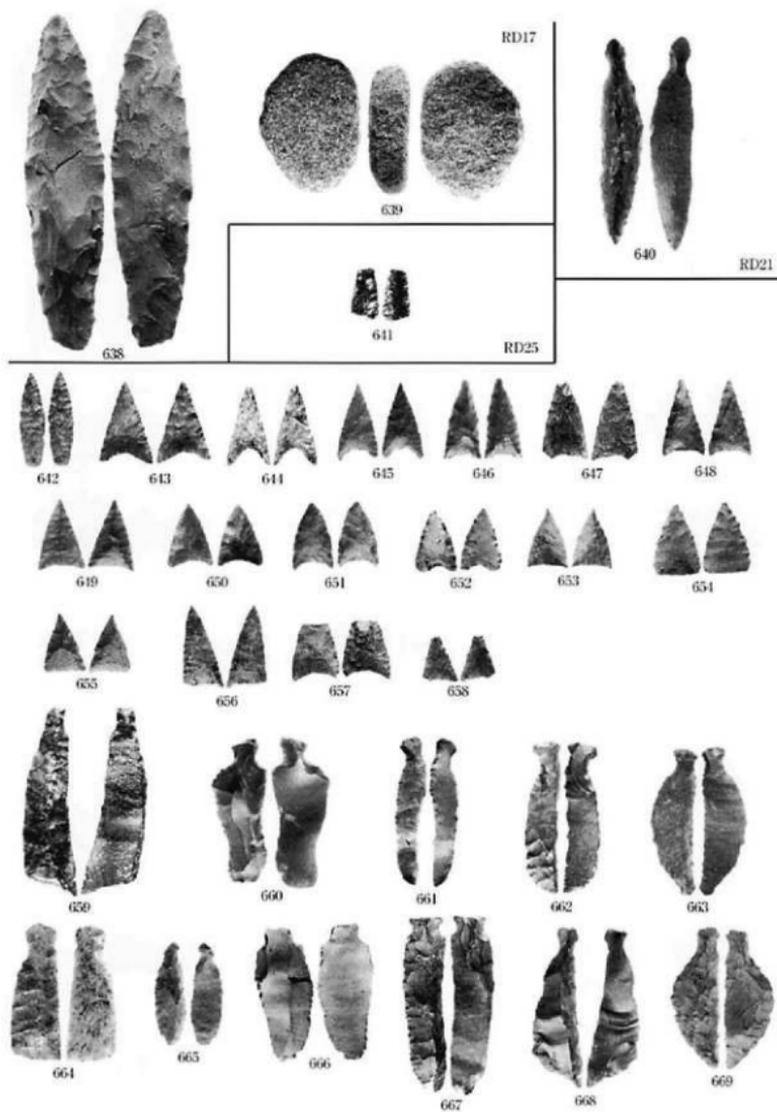
写真図版58 出土遺物（縄文土器 23・石器 1）



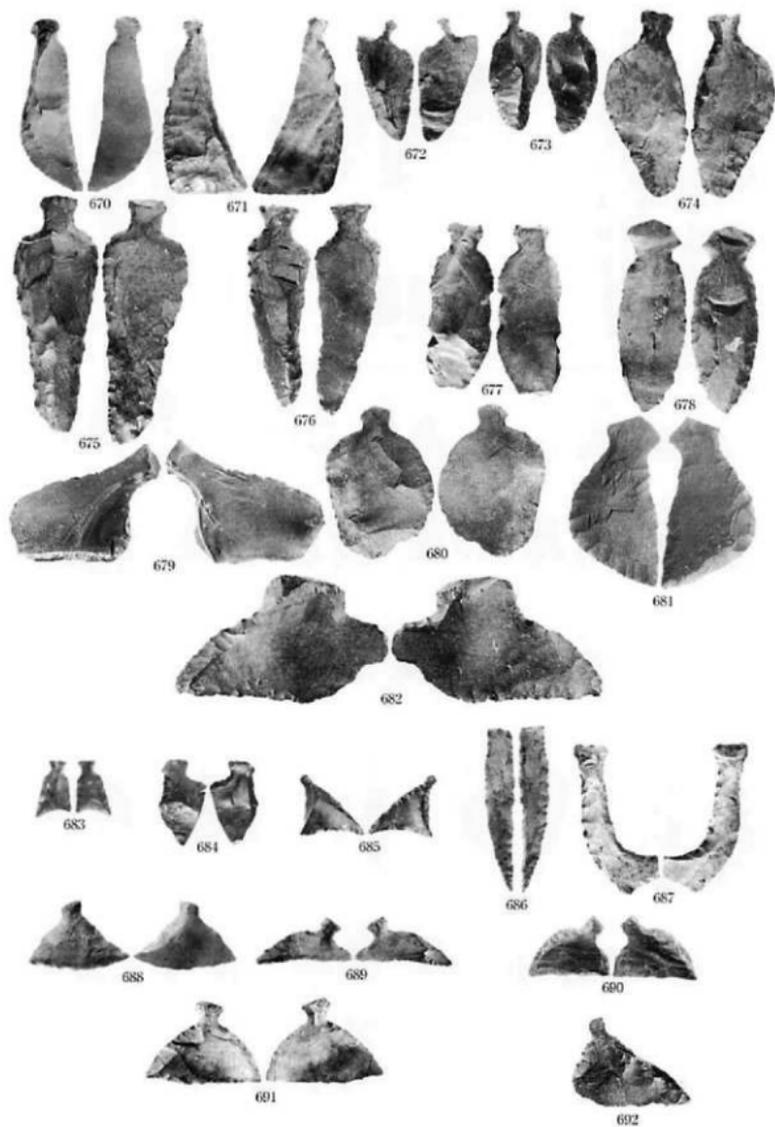
写真図版59 出土遺物 (石器 2)



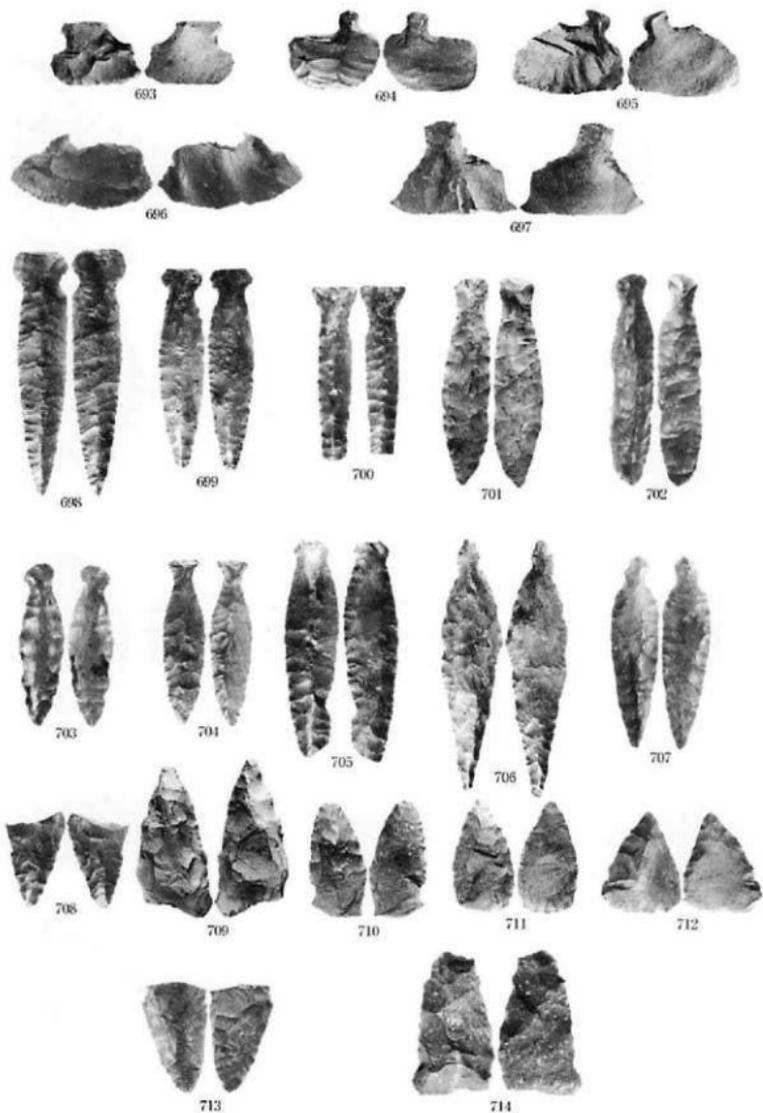
写真図版60 出土遺物(石器3)



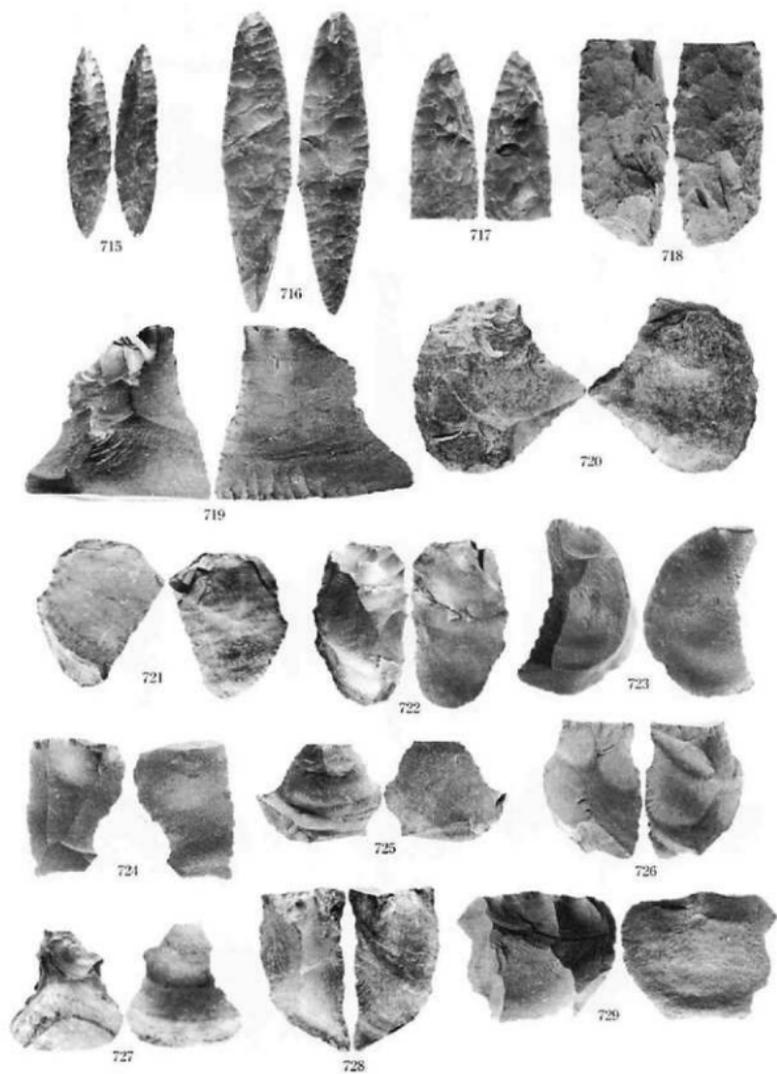
写真図版61 出土遺物（石器4）



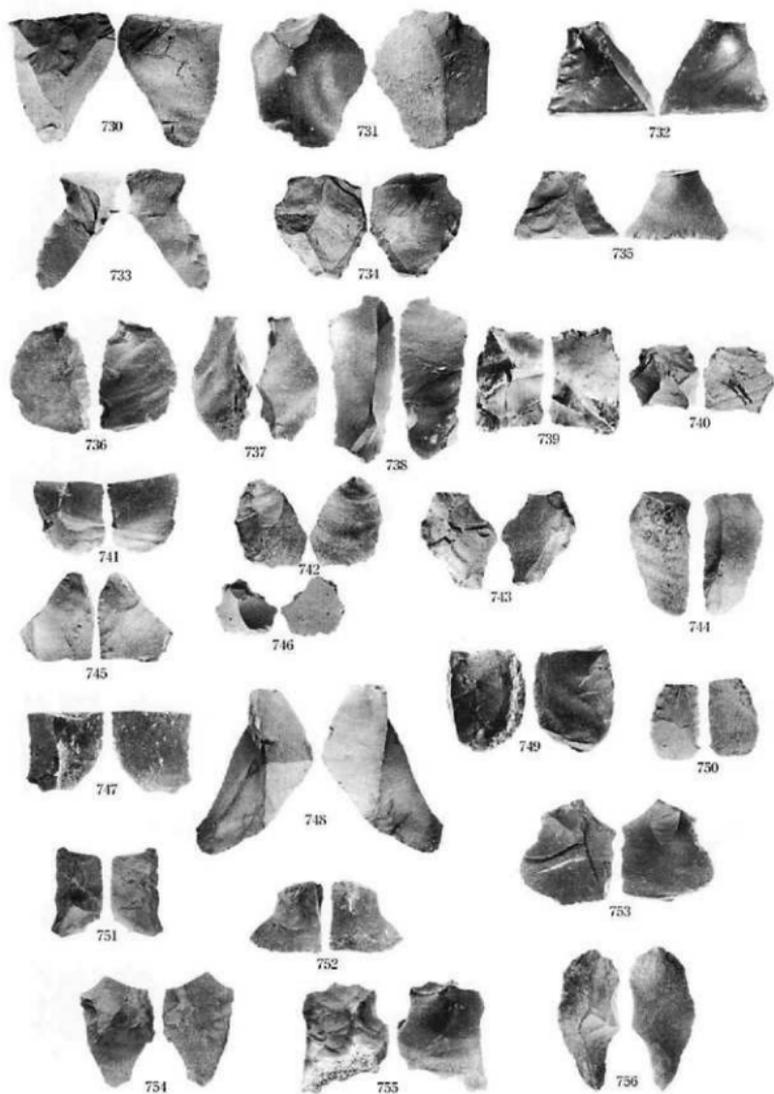
写真图版62 出土遗物 (石器 5)



写真图版63 出土遺物（石器6）



写真図版64 出土遺物（石器 7）



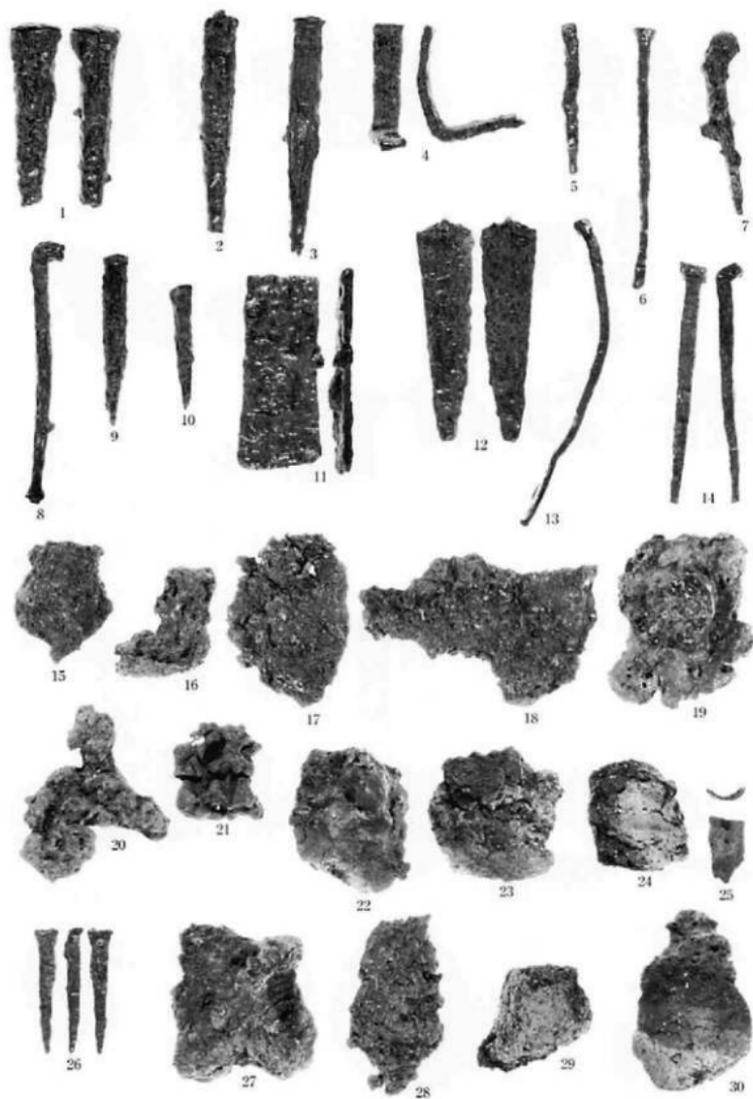
写真図版65 出土遺物（石器8）



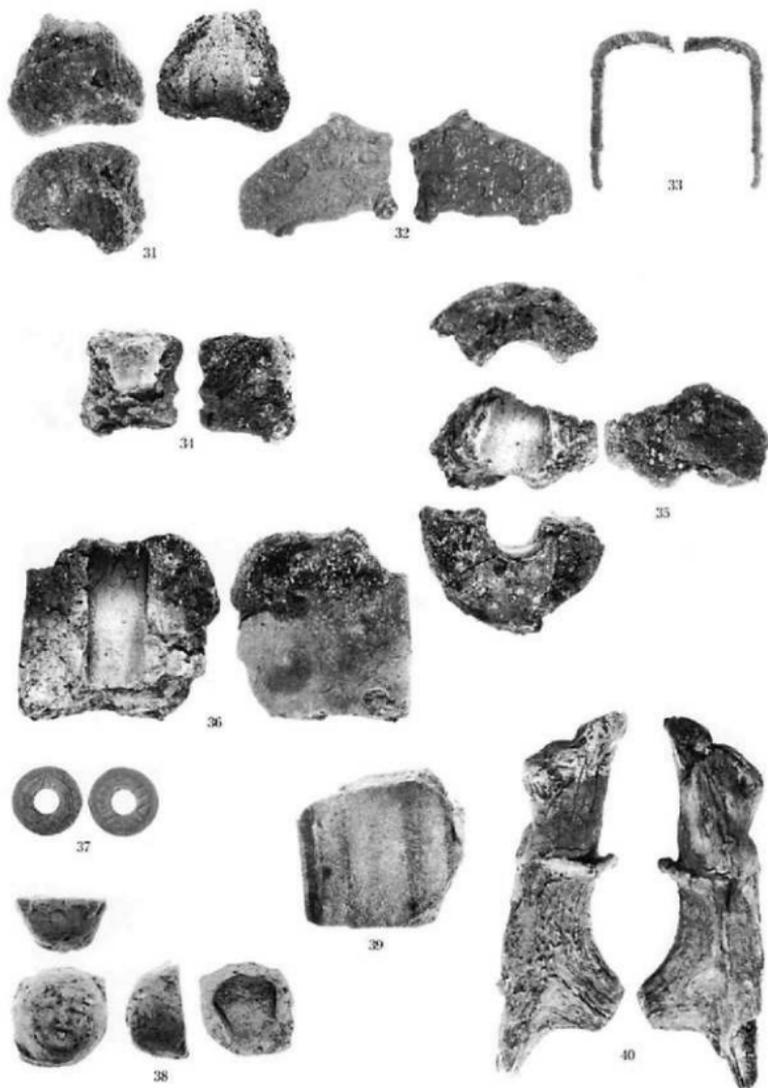
写真図版66 出土遺物（石器9）



写真図版67 出土遺物 (石器10・石製品・土製品)



写真図版68 出土遺物 (近世 1)



写真図版69 出土遺物（近世2）



写真図版70 出土遺物（近世3）

報告書抄録

ふりがな	さわだにいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	沢田2遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第396集							
編集者名	鳥居 達人 亀 大二郎							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001							
発行年月日	2002年3月15日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
沢田2遺跡	岩手県釜石市 栗林町第11地 区1番地1ほか	03211	MG31 - 2270	39度 21分 05秒	141度 49分 47秒	19990816～ 19991030 20010806～ 20011114	1999年 1,460㎡ 2001年 2,116㎡	主要地方道 釜石遠野線 沢田地区緊急 地方整備事 業の施行に伴 う緊急発掘調 査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
沢田2遺跡	集落跡	縄文時代 前期前葉 から中近 世	竪穴住居跡 土 坑 遺物包含層	27棟 47基 1カ所	縄文時代中期中葉から前 期後葉にかけての土器 以波沈繪文土器 表裏縄文土器 上川名Ⅱ式土器 大木Ⅰ～Ⅵ式土器 石器・石製品・土製品 尖頭器 石織 石造 装飾品 円盤形土製品など		窪みを壁にする前期 中葉の大型の竪穴住 居跡 前期前葉の集石土坑	
		鍛冶跡	近世	鍛冶炉 土 坑	6基 9基	鉄製品・陶磁器 釘・寛永通寶など		鉦土器Ⅱ式土器 諸磯式土器 黒曜石
	時代不明		掘立柱建物跡	2基				

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書396集

沢田2遺跡発掘調査報告書

一般県道釜石遠野線沢田地区緊急整備事業

印刷 平成14年3月8日

発行 平成14年3月15日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185

TEL (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印刷 河北印刷株式会社

〒020-0015 岩手県盛岡市本町通2丁目8-7

TEL (019) 623-4256

FAX (019) 623-0976

